# 名桜大学20年史

公立大学法人化５周年記念

公立大学法人 名桜大学



MEIO UNIVERSITY
20th 1994-2014 Anniversary

# 名桜大学20年史

## 公立大学法人化５周年記念

# 巻頭言

記念誌部会長 住江　淳司

名桜大学は、沖縄県北部地域に在住する青少年の育成を担う高等教育機関として、1994（平成６）年に、北部12市町村と沖縄県の出資による公設民営型の大学として誕生しました。

開学当初からの教育理念は、「国際舞台で活躍できる人材の育成」であり、その実現のために、沖縄をはじめ、日本本土、アメリカ、東南アジア、アフリカなど世界各地から、文部省の審査を通った教員が、ここヤンバルの地に赴任してまいりました。初代学長の東江康治先生が、開学準備のために半年前に就任した教員７名を「７人の侍」と称され、開学時に赴任された47名の教員を「赤穂浪士の四十七士」と呼ばれたことを、懐かしく思い出します。

古来、沖縄の人々には進取の気質があり、小さな船で外海に乗り出して東南アジア地域まで進出しています。また、南米、ハワイ、北米地域へ多くの人々が海外移民として雄飛していった史実が、これを物語っています。

明治の頃より日本は、外国との貿易を通じて国を豊かにすることを目指してきました。それには、外国の言語を駆使し、外国の文化を理解する国際人の養成が焦眉の急でした。そして、グローバル時代を迎えた21世紀における日本の若者にとって、国際性は欠かせない資質となっています。

こうした時代のニーズに応じた人材を育成し、世に送り出しているのが本学です。本学は、環太平洋地域を中心に、数多くの大学と交流協定を結んでまいりましたが、今後は、この交流の絆を深めていくことが求められています。そこで、山里勝己学長がリーダーシップを執り、現在、この地域の大学間でコンソーシアムを構築する計画を進めています。そして、琉球大学、パシフィコ大学（ペルー）、名桜大学との間で、この計画の核となる覚書協定を、開学20周年・公立大学法人化５周年を迎える記念の年に締結することができました。

本学は2010（平成22）年に公立大学法人に移行して以降、従来にも増して地域との連携を図ってまいりました。特に、開学後に設置された人間健康学部は、地域住民の健康増進やスポーツ振興に取り組みながら、文字通り地域と一体となって成長してきたと自負しております。

地域で活躍する人材が、同時に世界で活躍する人材であると思います。本誌の中に、そのための資質を身につけて、活躍していくことが期待できる名桜大学生の姿を垣間見ていただくことができれば、うれしく思います。

結びに、本誌を上梓できたことは、真に喜びに堪えません。これは一重に、名桜大学開学20周年・公立大学法人化５周年記念事業に賛意を示し、インタビューに応じてお話しいただいたみなさま、玉稿をお寄せいただいた関係機関ならびに教職員のみなさまのご協力のおかげです。また、記念誌部会委員の８名の先生方ならびに同事務局のスタッフが、真摯に編纂に取り組んでくれたおかげであります。この場をお借りして、関係各位のみなさまに、衷心より感謝申し上げます。

# 式　辞



北部広域市町村圏事務組合理事長
**稲嶺　進**

名桜大学は1994（平成６）年４月に「平和･自由･進歩」を建学の精神として掲げ、沖縄県及び北部12市町村によって、沖縄県唯一の公設民営の大学としてこのやんばるの地に誕生いたしました。

その歴史を振り返りますと、1980（昭和55）年の大学誘致委員会の発足に始まった大学設置の気運は大きな潮流となり、1991（平成３）年には学校法人名護総合学園設立準備委員会が発足し、それと同時に設立準備事務局も設置され、大学設置に向け本格始動いたしました。設置申請に際しましては、現在の文部科学省に毎週、毎日のように事務局の職員が通い詰め、事前協議を重ねておりました。さらには、北部12市町村の熱い思いと強力な後押しがあり、財政事情の苦しいなかでも設置資金を集めていただき、1992（平成４）年の設置申請に至った経緯がございます。

様々な困難を乗り越えて、1994（平成６）年に北部12市町村の悲願であった名桜大学が開学いたしました。そしてこのやんばるの地で学んだ名桜大生たちが1998（平成10）年の第１期卒業を皮切りに、続々と社会へ羽ばたいております。

しかしながら、すべてが順風満帆とはいきません。社会情勢の変化という大きなうねりが大学にも降りかかってまいります。少子化による18歳人口の減少、大学乱立に伴う全入時代の到来や、また、長いデフレ経済による家庭経済の疲弊により、志願者数が開学当初の1,823人から2009（平成21）年度の547人まで大幅に落ち込みました。その間、国際学群の改組や看護学科の設置等、多様化する社会や学生のニーズに応えるべく改革を続け、2010（平成22）年



度には公立大学法人化を成し遂げました。それに伴い志願者も大幅に回復することとなりました。幾多の荒波にも耐え、大学改革を推し進めた教職員の方々の熱意とご努力、また地域の皆様の温かいご支援があってこその公立大学法人化であったと認識しております。

学習環境に関しましては、開学以降、学生生活のより一層の充実化と地域貢献の推進を図るべく、留学生センター、多目的ホール、北部生涯学習推進センター（現在、エクステンションセンターに整理統合）、看護学科棟、総合研究所と五つの施設が整備されてまいりましたが、加えて、この度、開学20周年・公立大学法人化５周年記念事業の一環で計画されておりました、学生会館SAKURAUMが完成いたしました。このことにより、学生の自主的、主体的学習を支援する環境と地域に開かれた大学としての風格も備わってきたと実感するものであります。

地域貢献に関しても、名桜大学はめざましい活躍をみせております。健康面では名護市をはじめ、本部町、東村、伊是名村での健康増進活動や食育活動を、学習面では伊平屋村での学習支援ボランティアや名護市学習支援教室「ぴゅあ」の開設、地域活性化としては、名護市営市場でのあけみおフェスタの開催や学生による空き店舗を利用したカフェの経営等、多方面で多くの学生が積極的に地域で活動しております。その喜びの声を地域の方々から聞くことは、設立団体としても誇りであり、今後も大きく期待するところであります。

結びに、今日まで名桜大学を支えてくださいました北部12市町村のご関係者様、地域住民の皆様、企業の皆様に深く感謝の意を表しますとともに、多くの大学関係者のご尽力に心より敬意を表します。

今後とも皆様の変わらぬご支援・ご協力を賜りますようお願いするとともに、名桜大学の益々の発展を祈念いたしまして、開学20周年・公立大学法人化５周年記念の式辞とさせていただきます。

2014（平成26）年12月21日





# 刊行によせて



理事長　比　嘉　良　雄

名桜大学開学20周年・公立大学法人化５周年にあたり、記念誌を刊行できることを心からうれしく思います。

名桜大学は、1994（平成６）年４月に「平和」「自由」「進歩」を建学の精神として、日本列島を基軸とした環太平洋地域を結ぶ国際的な高等教育の場を創設することを目指して開学しました。爾来、「国際社会で活躍できる人材の育成」を目標として歩一歩と確かな足どりで前進を続け、2010（平成22）年４月には、建学の精神をそのまま継承し「公設民営の私立大学」から「公立大学」として生まれ変わりました。

名桜大学が立地する県北部地域（ヤンバル）になぜ大学が設置されたのか、歴史を辿ると明治時代に国頭農学校、大正時代に国頭高等女学校が地域の人々の熱意によって設立されたことに遡ります。それは、「学問が人材を育て、地域を良くする」という考えに基づいています。ヤンバル地域は、産業が乏しく農業・漁業・林業を中心とした経済的に恵まれない地域でした。しかし貧しい生活をしながらでも「子弟の教育」に対する情熱は根強いものがありました。その熱意は終戦後も途絶えることなく「大学をつくり、地域経済の振興を図り、人材を地域社会や国際社会に輩出する」という高等教育を希求する先人方の思いから本学は誕生したものであります。大学の創設当時を振り返りますと、その道のりは苦難の連続でありました。名護市に大学を誘致しようと「大学誘致懇話会」が発足したのは





1979（昭和54）年です。以来15年の紆余曲折を経て、国際学部の一期生384人が一歩を踏み出したのは1994（平成６）年でした。

本学は設置後も新たな取り組みを推進してきました。2001（平成13）年には、大学院国際文化研究科を設置、2005（平成17）年には、人間健康学部にスポーツ健康学科、2007（平成19）年には看護学科を増設するとともに、国際学部を国際学群に改組しました。さらに、2011（平成23）年には大学院看護学研究科を設置しました。現在は開学20周年・公立大学法人化５周年記念事業の一環として、キャンパスに屹立する６階建て学生会館「サクラウム」の建設が進められております。これは学生が能動的に学習するための支援施設ですが、居場所空間としてラウンジやカフェテリアなどを適切に配置しております。これらは改修後の食堂・売店と併せて学生の満足度向上に大いに貢献するものと思います。

現在、学生は2,095人が在籍しています。学部学生2,063人中1,056人（51.1％）、大学院生32人中17人（53.1％）は県外出身者が占めるようになりました。学生は北海道から鹿児島までの46都道府県と外国から入学しており、キャンパスは活気に満ち溢れています。全国には86の公立大学が設置されております。本学はその中でも中規模大学として、ヤンバル地域からも沖縄、日本、アジア、世界へ有為な人材を送り出す「知の拠点」としてますます存在感を高めつつあります。これまで学部学生5,939人、大学院生123人が卒業又は修了して学び舎を巣立ち、社会の各分野で活躍しています。

本学はこれまで幼年期・少年期でありましたが、これから青年期を迎えます。役員・教員・職員・学生・地域住民が一丸となってその歴史を築いてきたことを誇りに新たな前進を目指し続けます。今後とも、ご協力とご支援を賜りますようお願い申しあげます。





# 名桜大学開学20周年の節目にあたって



学長 山 里 勝 己

2004（平成16）年刊行の『名桜大学10年史』には、開学から10年をふりかえり、未来への飛躍を語る言葉が溢れています。沖縄北部に初めて創設された名桜大学の最初の10年は苦難に満ちたものでありましたが、本学は2010（平成22）年に公立大学法人へとあらたな出発をし、本年2014（平成26）年に開学20周年と公立大学法人化５周年を迎えることになりました。

20年の歴史をふりかえってみますと、大学創設にあたった地域と教職員の方々のねばり強い情熱にささえられて、本学は幾多の困難を切り抜け、「地域貢献」と「国際的人材の養成」という開学のヴィジョンを具現化する体制を整えてきました。12月の式典に間にあわせて竣工した学生会館「SAKURAUM」（サクラウム）は、まさに名桜大学の特色ある教育のシンボルとして、また沖縄北部の〈知の象徴〉として、本学20年の発展の節目を刻むものとなりました。学生数は2000名を超え、本学は全国86の公立大学の中でも中堅の大学として成長し、学生のほぼ半数は県外出身となっています。また、国際交流の拡大にともない留学生も増加し、本学のキャンパスは刺激的な学びの場となっています。このような大学は、地域社会にもインパクトのある存在となり、地域の活性化にさまざま領域で貢献するようになりました。

公立大学としての名桜大学に課された使命を考えますと、⑴大学の教育と研究の成果を地域に伝えひろめること、⑵グローバル化する21世紀に対応できる国際教養人の育成、⑶普遍的な知の伝統の最先端であらたな知を創造することであろうかと考えています。本学にはすでにエクステンションセンターが開設され、地域のニーズに対して



大学のシーズでもって貢献・協働するという体制ができています。また、本学はグローバル化する世界で活躍できる人材を輩出するために、リベラルアーツ教育の推進を目的として、「言語学習センター」、「数理学習センター」、「ライティングセンター」（仮称、2015年度４月設置予定）など、大学教育の質保証を支援する体制を整備しています。知の創造という使命については、総合研究所を中心に特色ある研究プロジェクトを推進し、20周年を契機として大学の知をひろく社会に伝える『名桜叢書』全３巻の刊行も開始しました。

本学は、多様な分野を幅広く自由かつ柔軟に学習し、同時にさまざまな事象や情報を注意深く複数の視点から分析することを基本とする教養教育を推進しています。これは、リベラルアーツ教育の基本です。また、これは、卒業してからも、さまざまなことがらについてみずから考え、発言し、文章に表現できるという、「学士力」の養成をめざす教育でもあります。大学４年間で学んだことは世界の学問の進展の中ですぐに古びていきます。しかし、リベラルアーツ教育で養成されたリベラルかつクリティカルに思考する力は、学生の人生を支える基盤となることでしょう。このような教養教育と専門教育を有機的に接続することで、名桜大学は、グローバルな視点を有しながら、同時にみずからが立っている地域について深い理解を有する人材を養成し、地域と国際社会に貢献していきたいと願っています。

人間に喩えますと、20周年は華やかな「成人式」を迎えるということになりますが、「成人」したエネルギッシュな人間の前には長い研鑽の道が延びているということもわたしたちは知っています。「成人式」を迎えた本学も、課された使命を深く理解し、教職員一同研鑽をかさね、学部と大学院の教育と研究をさらに魅力あるものにするためにたゆみない努力を続けたいと考えています。

名桜大学は、躍動感溢れる高等教育機関として発展していきたいと願っています。これまで支えていただいた設立団体、地域の皆様、同窓会、後援会、協力会、そして沖縄県にあらためて心よりの感謝を申し上げるとともに、今後とも本学の発展にご協力とご支援をお願い申し上げます。





# 名桜大学開学20周年
# 公立大学法人化5周年を迎えて



副学長　金城やす子

名桜大学が開学して20年が経過するこの期に、記念誌が発行されることに大きな意義を感じております。これまで北部地域に高等教育を提供されてきました先達の方々、また現在までその任に当たってこられた多くの皆さまと大学を支えていただいた多くの皆さまの努力の賜物と感謝申し上げます。この20周年記念誌が、これからの名桜大学を創り、さらに支える基盤作りになることを期待しております。

2014（平成26）年４月から副学長を拝命しております金城やす子です。大学の教学部分における重要な役割と責任を仰せつかり、少しでも学生主体の教育ができることを念頭に、日々の業務にあたっています。副学長の責務は学長の教育方針を受け、学長のリーダーシップが最大限に発揮できるための環境整備をすることだと考えています。対外的にも、学内においても繁忙を極める学長がリーダーシップを発揮するためにも、副学長の役割は重要です。まだまだ十分な働きができていませんが、教職員の皆さまの力を借りて、私に課せられた役目を果たしていきたいと思います。

私自身、名桜大学に赴任して８年目になります。沖縄北部に看護学科が設置されたことにともない、地域の看護師育成に少しでも貢献できればと考え、赴任しました。赴任





直後、大学職員が「自分の子どもを入学させたい大学にしたい」と、話していたことを鮮明に覚えています。当時は私学であり、定員割れが起きた危機的状況の中で、教職員一人一人がどのように危機を脱していくのか、模索している最中でした。学群制度の導入や看護学科の開設など、新たな取り組みに期待する一方、個々の教員に大学教育のあり方を検討することが課せられた厳しい状況も見られました。そのような中で、公立大学法人に移行し、学生の定員も充足されるようになりました。しかし、社会の状況を見ればわかるとおり、決して安泰な大学運営が開けたのではなく、社会のニーズを受け、教職員自身が変革していくことが求められています。文部科学省が大学教育のあり方について答申され数年が経過し、学生教育についてはずいぶん改革されてきています。しかし、教員の意識が十分に追いついていない状況もまた感じています。教授法では、単に知識の伝達に終わるのではなく、学生と教員との関わりをとおして学生自身が学びを深めることができるような教育の提供が必要です。そのためには常に学び、成長する教員像が求められます。

大学も20年が経過し、青年期から成人期に移行しました。幼少期のように庇護される環境はなくなります。どうしたら自立できるか、自立するためには何をしなければいけないのかを考え、行動していかなければなりません。一人一人が名桜大学の組織の一人として大学運営を考え、かつ組織人として成長していくことが重要です。この記念誌が新たな大学創造の基盤になることを期待します。







沖縄県知事 翁長　雄志

# 祝　辞

公立大学法人名桜大学が開学20周年・公立大学法人化５周年を迎えられたことを心からお慶び申し上げます。

名桜大学は1994（平成６）年に沖縄県と名護市をはじめとする北部12市町村の資金の拠出により公設民営の私立大学として開学しましたが、2010（平成22）年４月には北部広域市町村圏事務組合を設立団体とする公立大学法人へと移行しました。建学の理念は「平和」「自由」「進歩」を掲げ、時代の変化や世界のグローバル化を見据え、国際舞台で活躍し社会の福祉に貢献する人材を育成する大学として教育研究に取り組んで来られました。これまで、名桜大学の卒業生や修了生は、沖縄県の経済、産業、文化の発展に重要な役割を担い、多大な貢献をしてきました。今後さらに、沖縄県が抱える様々な課題を解決するために、大きな力となってくれるものと確信しております。

沖縄県北部ヤンバル地域は、昔から教育環境が十分ではありませんでした。そのため戦前・戦後を通して、地域の皆様が教育は大きな財産であると考え、ヤンバルに「高等教育機関の設置が必要である」との声を上げたのは必然的なことであり、大学の設置は住民の悲願となりました。名桜大学の開学は、先達の御尽力と関係者の皆様の並々ならぬ御努力の賜物であり、心から敬意を表します。

沖縄県は、2010（平成22）年３月に「沖縄21世紀ビジョン」を策定し“時代を切り拓き、世界と交流し、ともに支えあう平和で豊かな「美ら島」おきなわ”を創造することを県政運営の基本的な指針としております。これは名桜大学の「国際舞台で活躍できる人材育成」という教育目標に合致するものでもあります。沖縄県としましても、名桜大学との連携をさらに深め、公立大学の重要性を深く認識し個性あふれる人材育成を促進するなど、特色ある大学作りの支援に努めてまいります。

開学20周年にあたり、比嘉良雄理事長、山里勝己学長をはじめ歴代の役員、教職員並びに関係者の皆様の熱意に支えられ、名桜大学のますますの御発展を祈念申し上げ、お祝いの言葉と致します。





# 祝　辞



一般社団法人公立大学協会長
（静岡県立大学長）
**木苗　直秀**

公立大学法人名桜大学の開学20周年・公立大学法人化５周年を迎えられますことを心よりお祝い申し上げます。

沖縄県北部地域に「平和」、「自由」、「進歩」を建学の理念に掲げ「公設民営」の大学として1994（平成６）年に開学した貴学は、2007（平成19）年４月には国際学部の改組により全国的にも数少ない学群制に移行されました。「地域社会及び国際社会で活躍できる人材」の育成を目的とする国際学群、建学の理念に基づいた幅広い教養と調和のとれた和・徳・体を備えた、健康支援人材を育成することを目的とした人間健康学部が配置されております。全国的に類を見ない独創性を有する大学として注目を集めております。2010（平成22）年４月には学校法人名護総合学園名桜大学から北部広域市町村圏事務組合を設置者とする公立大学法人名桜大学として、公立大学法人へ移行されました。めまぐるしく変化する時代や社会の要請に応えるべく、グローバルな視点に立った実践的な教育体制を実現させる上で幾多の困難があったことは容易に推察することができます。

地方独立行政法人法（平成15年７月成立）において、各地方公共団体等における「大学改革」への取り組みとして「公立大学法人制度」が創設（平成16年４月１日施行）され、地方公共団体が直接運営する公立大学が公立大学法人となる趨勢は進んでおります。地域の活性化、高等教育の充実を目的に設立された公設民営の大学も地方独立行政法人の趣旨に合致することから、設置団体となる地方自治体との緊密な連携のもと、地域から世界へ躍動する公立大学法人として新たな発展が期待されており、全国各地の公設民営方式で設置された大学が公立大学法人化の検討を進めております。

大学の運営は国公私立大学のいずれも、18歳人口の減少、大学進学者の減少、進学希望者数と大学定員数がほぼ一致する全入時代にはいりました。さらに地方の人口減少、雇用の減少等を背景に多くの公立大学が将来に亘って厳しい運営環境におかれることが予測されております。そのような状況の中、地域の高等教育機関として人材育成だけではなく、設置者である地方公共団体との緊密な連携による地域産業の創出や文化的な貢献を通して地方創生の核としての公立大学の役割がこれまで以上に増していくことが十分に推察されます。

公立大学協会においては、公立大学の振興と我が国の高等教育、学術研究の水準の向上及び均衡ある発展に寄与するべく、国や地方自治体の高等教育政策のもと、さらに将来の公立大学のあり方を検討し、情報収集及び情報提供を行い全国86校の公立大学の発展に寄与していく所存です。

結びに、名桜大学様と、そこに係わるすべての方々が、これまでの輝かしい成果を踏まえて、さらなる発展を遂げられますよう、期待を申し上げ、名桜大学開学20周年・公立大学法人化５周年記念にあたっての、お祝いの言葉とさせて頂きます。



# CONTENTS


巻 頭 言 ……記念誌部会長 住江 淳司 1
式 辞 ……北部広域市町村圏事務組合理事長 稲嶺 進 2
刊行によせて ……理事長 比嘉 良雄 4
名桜大学開学20周年の節目にあたって ……学長 山里 勝己 6
名桜大学開学20周年公立大学法人化5周年を迎えて ……副学長 金城やす子 8
祝 辞 ……沖縄県知事 翁長 雄志 10
祝 辞 ……一般社団法人公立大学協会長（静岡県立大学長） 木苗 直秀 11

## 序章 設立から10周年まで 1994~2004

やんばるに大学を造ろう …… 18

## 1章 10年のあゆみ 2004~2014

2005年 人間健康学部設置前史 ……スポーツ健康学科教授 平識 善盛 26
2007年 看護学科の開設 ……看護学科教授 金城 祥教 29
2007年 国際学群国際学類の開設 ……初代国際学群長 内間 直仁 33
COLUMN 学術の研究でもう一度 ……名誉教授 吉川 安一 36
2010年 公設民営の私立大学から公立大学へ ……事務局長 金城 正英 37
COLUMN 公立大学法人移行の取り組み ……第4代学長 瀬名波榮喜 41

## 2章 大学紹介

リベラルアーツとは知性と感性の調和 ……第4代学長 瀬名波榮喜 44

### 国際学群

国際学群 ……国際学群長 佐久本功達 46
国際文化教育研究学系 ……国際文化教育研究学系長 伊藤 孝行・小番 達 48
経営情報教育研究学系 ……経営情報教育研究学系長 アリ, ファテヘルアリム F 50
観光産業教育研究学系 ……観光産業教育研究学系長 大谷健太郎 52

### 人間健康学部

人間健康学部 ……人間健康学部長 稲垣 絹代 54
スポーツ健康学科 ……スポーツ健康学科長 高瀬 幸一 56
看護学科 ……看護学科長 鈴木 啓子 58

### 大学院

国際文化研究科 ……国際文化研究科長 新垣 裕治 60
看護学研究科 ……看護学研究科長 小西 清美 61

### 図書館

名桜大学附属図書館 ……図書課参与 又吉 純 63

### 教養教育センター

教養教育センター ……教養教育センター長 木村 堅一 66
言語学習センター（LLC） ……言語学習センター長 渡慶次正則 68

数理学習センター（MSLC）……数理学習センター長 高安美智子 70

研究所

名桜大学総合研究所 ……総合研究所長 田邊 勝義 71

附設センター

健康・長寿サポートセンター …… 健康・長寿サポートセンター長 高瀬 幸一 73
教員養成支援センター……教員養成支援センター長 嘉納 英明 74
看護実践教育研究センター……看護実践教育研究センター長 金城 祥教 75
メディアネットワークセンター ……メディアネットワークセンター長 天願 健 76
エクステンションセンター…… エクステンションセンター長 平識 善盛 78
保健センター ……保健センター長 前川美紀子 79

3章 地域に開かれた大学

名護の伝統文化 村踊りによるイベント創出事業 ……名誉教授 宮里 捷 82
食の大切さを子どもたちへ伝える学生オリジナルの食育劇
スポーツ健康学科上級准教授 前川美紀子 86
名桜大学の地域貢献活動 …… 89

4章 国際交流

海外学術交流協定校一覧 …… 100

中南米

ロンドリーナ州立総合大学……国際文化教育研究学系教授 住江 淳司 102
産業社会科学大学（UCES）・パシフィコ大学
ガブリエル・レネ・モレノ国立自治大学・メキシコ国立自治大学

東アジア

大仁科技大学 ……学生課主幹 中山 登偉 108
湖南農業大学・北京聯合大学旅遊学院大学
開南大学・中州科技大学 ……国際文化教育研究学系上級准教授 菅野 敦志 110
啓明大学・国立済州大学・明知大学 ……観光産業教育研究学系上級准教授 許 点淑 112

東南アジア

ベトナム国家大学ホーチミン市人文社会科学大学 …国際文化教育研究学系教授 山田 均 116
メーファールワン大学・サイアム大学
マラヤ大学・ハサヌディン大学 経営情報教育研究学系教授 アリ,ファテヘルアリム F 118

英語圏

学術交流協定と英語圏留学について ……国際文化教育研究学系教授 渡慶次正則 121
ウーロンゴン大学・サウスイーストミズリー州立大学
ハワイ大学ヒロ校・ブロック大学・ナイアガラ大学
スプリングフィールド大学……スポーツ健康学科准教授 石橋 千征 127
セントラルランカシャー大学 ……国際文化教育研究学系教授 与那覇恵子 129
英語圏の交換留学 …… 名誉教授 レイサム,キャロラインC 131

海外スタディ・ツアー

看護学科 海外スタディ・ツアー ……看護学科教授 横川裕美子 133

## 5章 キャリア教育・就職支援・各種実習


**インターンシップ**

国際学群・インターンシップ ……経営情報教育研究学系上級准教授 林　優子 138

観光産業専攻・インターンシップ ……観光産業教育研究学系上級准教授 宮城　敏郎 140

観光産業教育研究学系上級准教授 大谷健太郎

海外インターンシップ ……観光産業教育研究学系教授 新垣　裕治 144

観光産業教育研究学系上級准教授 許　点淑

スポーツ健康学科・インターンシップ……スポーツ健康学科助教 仲田　好邦 148

**企業説明会**

就職の翼・学内合同企業説明会……学生部長 渡具知　伸 150

キャリア支援課長 上原　康成

**現地実習**

現地実習・中南米コース ……国際文化教育研究学系教授 住江　淳司 152

現地実習・アジアコース ……国際文化教育研究学系教授 山田　均 155

現地実習・オーストラリア……国際文化教育研究学系教授 渡慶次正則 158

現地実習・沖縄コース ……国際文化教育研究学系上級准教授 照屋　理 160

現地実習・日本コース ……国際文化教育研究学系准教授 屋良健一郎 162

現地実習・国際協力コース……国際文化教育研究学系上級准教授 高嶺　司 164

**臨地実習**

看護学科・臨地実習 ……看護学科上級准教授 松下　聖子 166


## 6章 インタビュー・寄稿

### インタビュー


名護の大学構想……初代理事長・初代学長 東江　康治 178

COLUMN 東江康治学長もうひとつの顔…… 国際文化教育研究学系教授 住江　淳司 179

ヤンバルに資源はないが、人材をもって資源となす……第２代理事長 比嘉　鉄也 180

留学生への奨学資金について ……勝山病院理事長 島袋　茂照 183

地域に開かれた名桜大学 ……名護市長 稲嶺　進 184

山紫水明だった「ヤンバルはひとつ」……㈱東開発代表取締役会長 仲泊　弘次 187

名桜大学と地域の架け橋として ……名桜大学後援会会長 荻堂　盛秀 190

岸本建男「逆風張帆」のあゆみ …… 元名護市長岸本建男夫人・名桜大学理事 岸本　能子 192

名桜大学と共に20年 ……ザ・テラスホテルズ㈱特別顧問 比嘉　幹郎 194

旧友・岸本建男氏からの依頼 ……昭和化学工業㈱代表取締役社長 比嘉　克己 196

公立大学法人化はキラリと光るプロジェクト ……沖縄県副知事 川上　好久 198

天地人 …… 開学20周年・公立大学法人設立５周年事業実施本部財務部会長 屋嘉　義和 200

公立大学法人化・行政の取り組み ……名護市産業部参事 比嘉　克宏 204

名護市企画部企画調整課課長 金城　秀郎

名護市総務部財産管理課課長 仲井間　修

## 寄稿・活躍する卒業生

### 国際学群


私の人生の宝 …… 宮城ジェラルド 208
日本語を学び、日本に学ぶ …… ユオン・バン・ビン 208
ウェルナビの思い出 …… 伊差川　章 209
受け継がれた鶏飯店に感謝 …… 松　　輝明 209
幸運な学生生活 …… 棚原　健太 210
すばらしい出会いに感謝 …… 仲里留美子 210
アリ先生との出会い …… 安次嶺直樹 211
名桜での武器で地域貢献 …… 島　　康貴 211
20周年へのメッセージ …… 石澤　正祥 212
充実していた学生生活 …… 照屋由里子 212
活躍する卒業生 …… 大谷健太郎 213
学生時代が現在の礎 …… 渡慶次　潤 213


### 人間健康学部


名桜時代は、大きな財産 …… 宮國　康弘 214
チャレンジ精神を育む …… 佐藤　浩輔 214
気になったらレスポンス …… 高宮城　悠 215
学生時代が今の私を形成 …… 照屋　光希 215


### 大学院


開学20周年へのメッセージ …… 山崎 ヴケリッチ 久 216
新崎康博先生に感謝を込めて …… 坂田ロスナエニ 216
有意義だった学生生活 …… 鬼頭　和子 217
３年間の研究が今の礎 …… 柴山　順子 217


## 7章 研究活動

### 受賞


研究活動と学会活動 …… 沖縄美ら島財団総合研究センター 西平　守孝 220
「2010年LOIS功労賞」受賞とシニア会員を拝受
経営情報教育研究学系情報システムズ専攻教授 田邊　勝義 221
第33回「発展途上国研究奨励賞」
国際文化教育研究学系国際文化専攻上級准教授 菅野　敦志 222
第12回日本キリスト教文学会賞受賞について
国際文化教育研究学系語学教育専攻上級准教授 小嶋　洋輔 223


### 在職中の学位取得


子どもが“子どもらしい生活”を維持するための研究
副学長・人間健康学部看護学科教授 金城やす子 224
博士号を取得するまで …… 観光産業教育研究学系観光産業専攻教授 新垣　裕治 225
タンマユット派の研究 …… 国際文化教育研究学系国際文化専攻教授 山田　　均 226
カヌードスの乱 ―その全体像の構築―
国際文化教育研究学系国際文化専攻教授 住江　淳司 227

明治期の小・中学校体操科教授細目に関する研究
スポーツ健康学科教授 向山　貴仁 228
これまでの研究活動と今後の抱負
観光産業教育研究学系教養教育センター准教授 山里　絹子 230
他国や歴史に学ぶ英語教育……国際文化教育研究学系語学教育専攻教授 与那覇恵子 231
**研究紹介**
日本ルーラルナーシング学会第２回学術集会を開催して
看護学科元教授 吉川千恵子 232
比較統語論：文の構造と意味解釈の相関関係
国際文化教育研究学系語学教育専攻教授 中村浩一郎 234
海外交流活動のふりかえり ―国際交流という視点から―
看護学科上級准教授 金城　壽子 235

**8章 資　料**

公立大学法人名桜大学組織図 …… 238
教員名簿 …… 240
職員名簿 …… 242
平成26年度役員 …… 244
名誉学長・名誉客員教授・名誉教授・客員教授…… 244
歴代役員 …… 245
後援会歴代役員…… 255
同窓会歴代役員…… 255
入学志願状況 …… 256
在籍状況 …… 260
卒業者数 …… 262
卒業者就職内定状況 …… 263
開学20周年・公立大学法人化５周年記念事業　記念イベント…… 264
開学20周年・公立大学法人化５周年記念募金　寄附者一覧 …… 268
教育研究奨励基金、その他特定・一般寄附金　寄附者一覧 …… 274
年　表…… 276
編集後記 …… 278

# 序章

## 設立から10周年まで

1994~2004













1

2 | 3 | 4

1 中央に見えるのが建設中の研究棟＝1994.1.31
2 中央に見える白い部分が造成中の名桜大学の敷地＝1993.7.6
3 敷地造成の現場＝1993.7.6
4 講義棟建設現場＝1993.8.26

# やんばるに大学を造ろう

## 復帰後の北部地域の現状

1972（昭和47）年５月15日、27年間米国の施政権下にあった沖縄が日本の施政権下に復帰すると、政府は本土との格差是正と自立的発展を推し進めるため沖縄開発庁を設置し、第１次沖縄振興開発計画を開始しました。道路や港湾、教育施設などのインフラの整備に取り組んでいます。しかし、広大な米軍基地は返還されず、今日でも日本にある米軍基地の74%が沖縄に集中し改善されていません。

沖縄県の本土復帰記念事業「沖縄国際海洋博覧会」が1975（昭和50）年に本部町で開催されることが決定すると、許田・石川間の沖縄自動車道が建設され、北部地域のインフラも急速に整備されました。しかし、子どもがいる家庭の中には、わが子によい教育を受けさせるために、中南部に引っ越す人たちもいました。北部地域の高校を卒業した優秀な若者たちも北部に大学がないため、中南部や県外の大学に進学していきました。また、地元での就職を希望する若者も北部では受け皿が少ないため、やむなくその多くが中南部や県外に就職していきました。次第に北部の町や村は過疎化が進み、高齢者ばかりが目立つようになったのです。











## 大学設立への取り組み

1979（昭和54）年、若者の流出に危機感を抱いた名護市は大学誘致懇話会を設置し、大学誘致の検討を開始しました。翌年設置された誘致委員会は、北部広域市町村に対し、一致団結して大学誘致を目指そうと提案しました。しかし、少子化の時代を迎え、大学設立は厳しいだろうというのが専門家の見方でした。

1985（昭和60）年、北部広域圏市町村協議会は、誘致委員会の提案に対し大学誘致は困難だと判断し、キャンパスを持たない市民大学を提案しました。こうして大学誘致という夢が消えようとしていた1986（昭和61）年、名護市長選挙に出馬した比嘉鉄也氏は「大学誘致がだめなら自分たちの力で造ろう」と選挙公約に掲げ当選しました。1989（平成元）年、比嘉市長は東江康治琉球大学学長と外間守善法政大学教授を名護市内の旅館に招き、大学設置構想について話をしています。学園紛争を体感していた東江・外間の両氏は、常々暴力のない自由な学園を造りたいと思っていたので、比嘉市長の提案に賛同、「一緒にいい大学を造りましょう」と意気投合しました。３氏は大学設置に向け幾度となく協議を重ねて、大学用地選定や創設資金の準備は名護市が担当し、学部学科と教員の選定などは東江氏と外間氏が担当することを決めました。東江氏は名護の郷里に自由

| | | |
|---|---|---|
| 5 | | |
| 6 | 7 | 8 |

5 文部省による現地調査で説明資料に目を通す外間守善氏、東江康治氏、瀬名波榮喜氏（右より）＝1993.9.29
6 大学設立準備室は琉球新報北部支社の２階にあった＝1993.5.15
7 上原康助国土庁長官（左より４人目）に校舎建設進捗状況を説明する東江氏＝1993.10.6
8 名桜大学校舎起工式で談笑する大田昌秀沖縄県知事、比嘉鉄也名護市長、東江氏（左より）＝1993.7.8



東江　康治
初代理事長・初代学長

学園を造るため、1990（平成２）年５月、1984（昭和59）年から６年間務めていた琉球大学学長の任期を終えると退職しました。また同年、比嘉市長は、大学用地選定と資金準備担当に岸本建男名護市企画部長（のちの名護市長）を任命し、全権委譲し取り組ませました。岸本部長は資金集めと用地選定に目を輝かせながら奔走しました。1991（平成３）年３月、名護市議会は名護総合学園（大学）設立に関する決議を行い、同年４月、大学設立準備室を発足させ、室長に砂川栄右元琉球大学事務官が選任されました。

７月５日、名護総合学園設立審議会が発足し、会長に山里将晃琉球大学教授、副会長に吉元嘉正名護市助役が選ばれました。同月14日に発足した設立準備委員会は、委員長に東江康治氏、副会長に外間守善氏、委員には琉球大学の瀬名波榮喜教授・山里清教授・屋比久浩教授、崎間晃県銀行協会会長、稲嶺惠一県経営者協会会長、比嘉幹郎ブセナリゾート㈱代表取締役社長、阿部充夫放送大学学園理事長、比嘉茂政北部市町村会長、安里進名護市議会議長、比嘉鉄也名護市長ら大学、政財界のそうそうたるメンバーが選任され、文部省への大学設立申請の最終的な総まとめに取り組んだのです。

## 公設民営の私立大学設立

名桜大学は創設経費を名護市と北部11町村及び沖縄県が負担し、民間が運営していく公設民営の私立大学としました。創設経費（建設費・設備購入費の全額と開学から1997年までの運営費の一部）66億2,935万７千円の内訳は、名護市が52億9,905万７千円、北部11町村が３億30万円、沖縄県が10億３千万円です。また用地23万9,803.55㎡については、名護市が９万9,397.57㎡を無償譲渡とし、残りの14万405.98㎡は無償貸与で提供しています。

1992（平成４）年４月30日、設立準備委員会は文部省の大学設置・学校法人審議会に学校法人名護総合学園・名桜大学設立基本構想を提出、申請書には大学設置の趣旨、１学部３学科の概要と建築物など大学設立に関するすべてが克明に記載されていました。この基本構想は提出と同時に受理されました。同年５月20日、文部省の大学設置・学校法人分科会によるヒアリングが始まりました。分科会では、スペイン語やポルトガル語など、英語以外の外国語教育が必要かと指摘されました。設立準備委員会委員長の東江氏は、中南米には沖縄からの移民が多いこと、また沖縄は日本とアジアを結ぶ中心に位置していることからアジアと交流も深いことなどを説明し、理解を求めました。その結果、７月に第一次審査をパスし、これを受けて北部12市町村の議会で、大学設立の全面的バックアップが次々と議決されました。

第二次申請は1993（平成５）年６月30日、教員の定数や財源問題を追加修正し提出、同日受理されました。そのとき、東京都内のホテルで15人のスタッフの陣頭指揮を執ったのが設立準備事務局の砂川栄右局長でした。

1993（平成５）年７月８日、念願の校舎建設工事の起工式が行われました。

そして同年12月21日、文部大臣から学校法人名護総合学園設立認可及

**「名桜大学」の名称の由来**

「名桜大学」という名称は、大学設立委員や各方面から寄せられたものを５～６案に絞り、高校生にとったアンケートを参考にして決定されました。アンケートの結果、「名桜大学」を支持する学生が圧倒的に多く、これと「名桜文化大学」の二つの名称で、全体の８割の支持を得ました。申請書には命名の理由として、「沖縄本島北部は、全国で一番早く桜前線が出発する所で、桜で有名な土地柄であるため『名桜大学』と名付けた」と記されています。



中央に見えるのが多目的ホール

び名桜大学設置の認可証が交付されました。

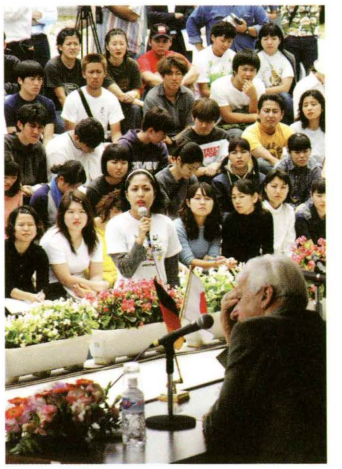
名桜大学は1994（平成６）年４月１日、「平和・自由・進歩」を建学の精神として掲げ、環太平洋地域を結ぶ国際性豊かな人材の育成を行う公設民営の１学部３学科を擁する大学として開学することになったのです。開学初年度の入学者選抜試験は２月11日に行われ、志願者1,823人に対し384人が入学しています。学科別に見ると国際文化学科127人、経営情報学科128人、観光産業学科129人となっています。入学者の内訳は県内が344人、県外28人、外国11人、大学検定合格者１人。

最初の入学式は名護市民会館で行われました。1979（昭和54）年の大学誘致懇話会発足から数えて15年目に、名桜大学はその第一歩を踏み出したのです。

## 開学・やんばるの地に自由学園を―東江康治学長

1994（平成６）年の開学時点で完成していた施設は、講義棟、研究棟、図書館、福利厚生施設の食堂、売店だけでした。教職員の体制は、教員約20人、事務職員約30人でスタートしています。当初予定の教職員100人体制が整ったのは、２年後の1996（平成８）年４月でした。同年に本部棟、また1999（平成11）年に多目的ホールと留学生センターが竣工しました。

1999（平成11）年４月16日、ワイツゼッカー元ドイツ大統領が本学を訪問し、多目的ホールの野外ステージを会場に「沖縄の未来」をテーマにしたティーチインを開き、多くの学生と市民が参加しました。同年７月17日には多目的ホールと留学センター落成の記念式典が催されました。記念式典に先立ち、多目的ホール前に設置された彫刻家フリオ・ゴヤのモニュメント「未来への絆」の除幕と多目的ホールのテープカットが行われました。式典は多目的ホール大ホールで挙行、稲嶺惠一県知事（比嘉茂政出納長代読）、上間博安北部12市町村会長（今帰仁村長）が祝辞を述べました。その後の祝賀会はホテルゆがふいんおきなわで開かれ、岸本建男名護市長と荻堂盛秀名桜大学後援会長が祝辞を述べ、比嘉鉄也前名護市長が乾杯の



ワイツゼッカー元ドイツ大統領とのティーチイン



東江　平之
第２代学長

音頭をとりました。

多目的ホールは、451席の大ホールとマルチメディア講義室、衛星通信設備なども備えているため、他大学とのネットワーク授業が可能となり、また市民公開講座などにも活用できるようになっています。

2000（平成12）年３月、東江康治初代学長・理事長は２期６年間の任期を終えました。

## 創造と共生ー東江平之学長

開学７年目の2000（平成12）年、初代学長の弟で心理学が専門の東江平之教授が第２代学長に選出されました。東江氏は学長就任にあたり、開学理念のほかに「創造」と「共生」のビジョンを掲げ大学運営に取り組む決意を述べました。

しかし、1998（平成10）年を境に志願者は激減し、就任当初から、一部学科が入学定員を充足できない状況が続いていったのです。このような状況の中で、名桜大学の設置母体である学校法人名護総合学園理事会は、「志願者の激減は経営上看過できない、学部･学科の見直しを行うように」との要請文を教授会に提出しました。要請を受けた教授会は学長のもと国際学部改組検討委員会、新学部学科設置検討委員会、大学改革検討委員会、名桜大学緊急対策会議などを設置し、一丸となって大学改革に向け取り組みました。

大学改革の第一弾として学生の便宜を図るため、入学金免除や奨学金（特待奨学金･一般奨学金･スポーツ奨学金･学資支援奨学金）など、勉学やスポーツなどで他の学生の模範となる学生に対する支援体制を確立しました。

2001（平成13）年４月には大学院国際文化研究科（修士課程）を開設しています。本研究科は、言語文化、社会制度政策、経営情報、観光環境









| 1 | 2 | | 5 |
|---|---|---|---|
| | 3 | 4 | 6 |

1　アルゼンチン産業社会科学大学（UCES）学長来学
2　大学院修士論文中間発表
3　名誉学長称号授与式
4　１年次教育宿泊研修
5　リカレント講座
6　生涯学習まちづくり研究会

の４教育研究領域をもって編成されました。また、社会人や留学生の就学環境も考慮し、昼夜開講制やセメスター（学期）制を採用しています。当初、定員は６人の予定でしたが、30人が入学しています。名桜大学からは11人が本学大学院１期生になりました。

同年６月にIT関連の人材育成、情報発信の北部地域の拠点を目指すことを目的に、多目的ホール内にMNC（メディアネットワークセンター）が開設されました。

2002（平成14）年８月２日、名桜大学の情報発信と地域との交流の場として「名桜大学地域交流プラザ」を名護十字路の山内ビル１階にオープンさせました。同年、東江康治初代学長が、沖縄県の教育の発展に貢献した一人として、琉球新報賞と沖縄県功労者表彰を受賞しています。



安田　晃次
第３代学長

## 学力・活力のある人材づくり－安田晃次学長

2003（平成15）年４月１日、観光産業学科の安田晃次教授が第３代学長に就任しました。安田学長が目標として掲げたのは、学力・活力を備えて社会に貢献できる人材づくりでした。そのために取り組む課題として、英語教育の見直し、教育COE（Center of Excellence：中核的研究拠点形成プログラム）への積極的取り組み、教職員の意識改革、教育評価の徹底、資格取得の充実、就職指導の充実など教育の質を高めて、教育資源を活性化し、地域社会と連携していくことを掲げました。同年10月に学生と学長の意見交換会が行われ、学生から授業の改善や教職員の質の問題、施設の充実、専門書の充実など忌憚のない意見が出されました。学生の要望は改革にも反映されましたが、それでも志願者の減少は改善されませんでした。2005（平成17）年４月、人間健康学部スポーツ健康学科が開設されますが、以前として大学運営は厳しさを増すばかりでした。





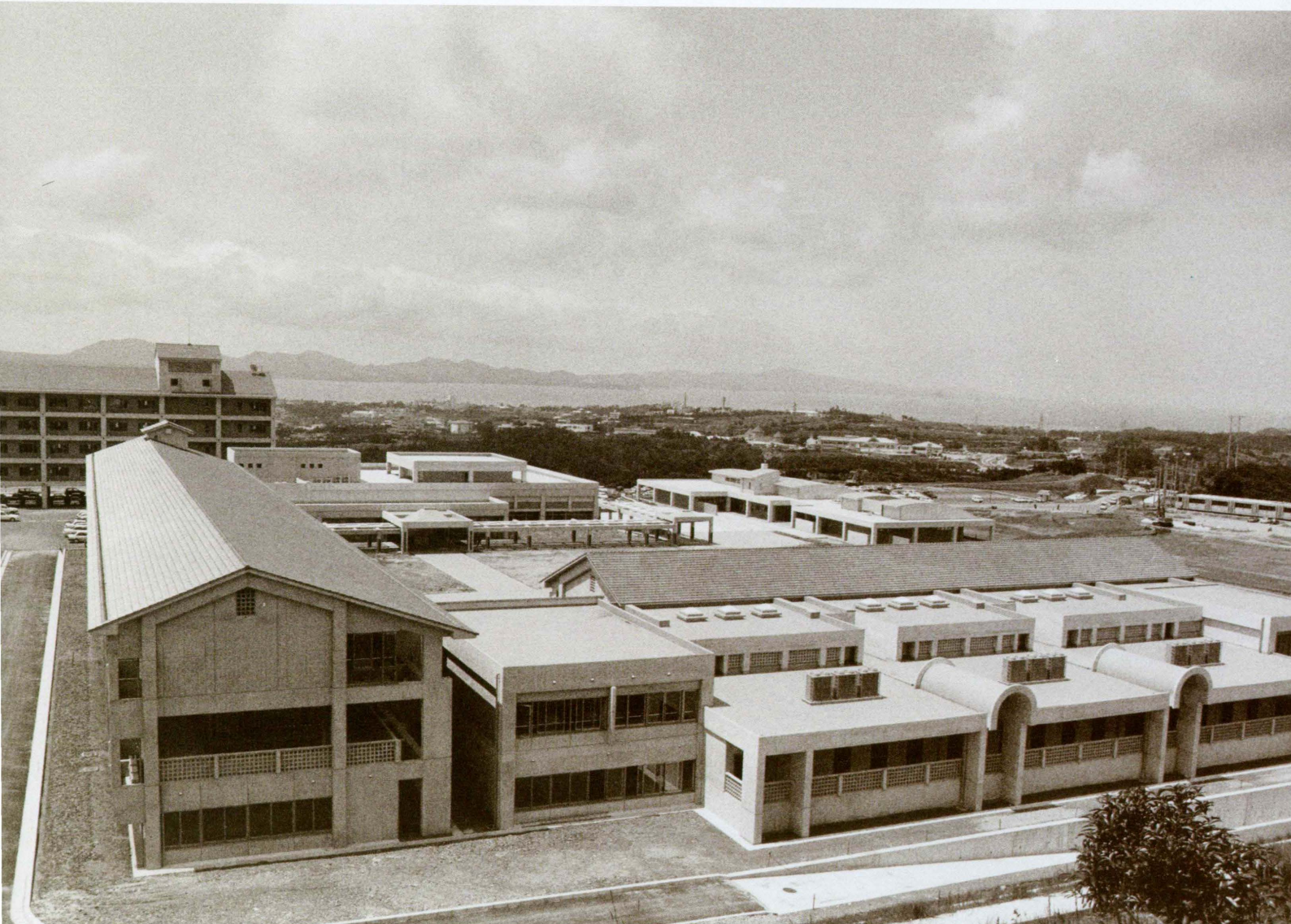



MEIO
平和
自由
進歩

# 1章

## 10年のあゆみ
### 2004~2014

人間健康学部の開設　2005
看護学科の開設　2007
国際学群の開設　2007
公立大学法人化　2010



2005
平成17

# 人間健康学部設置前史

## きっかけはウェルネス研修

私は1994（平成６）年、当時の国際学部観光産業学科に保健体育（保健衛生学）の助教授として赴任しました。名桜大学では2000（平成12）年以降、志願者の激減により、一部学科において入学定員を充足できない状況に陥っていました。

観光産業学科は、115名の定員をかろうじて満たしていましたが、学生を集めるためになんとかしなければ、という雰囲気になっていました。

ちょうどその頃、偶然、新聞で「ウェルネスリーダー研修会（2001年２月19日～21日）」の案内記事を見ました。「ウェルネス（Wellness）」とは、運動を適宜日常生活に取り入れながら、健康的に日々の暮らしを送ろうという主旨で提唱された概念で、「健康（health）」よりさらに一歩踏み込んだ、広範囲な視点から見た健康観です。

私は、この３日間で行われた研修会に参加して、ウェルネスリーダーの資格を取りました。そうするとこの研修会の関係者から、ウェルネスプロフェッサーという、ウェルネスリーダーより上位の資格が取れる研修会が３月末に開催されるので、その資格を取得することを勧められました。しかし、日程が合わなかったため、８月に山梨県清里で開催された研修会に参加してその資格を取りました。

2001（平成13）年は、健康づくりやスポーツ大会などが、観光客を呼び込む商品として注目され始めた頃でもあり、「ウェルネスは近い将来、観光産業の切り札の一つになりうる。観光産業学科の学生がウェルネスの理論を学ぶことは、非常に有意義である」ということで、2002（平成14）年、観光産業学科にスポーツウェルネスコースを新設しました。ウェルネス概論、健康長寿学、スキューバダイビング、ゴルフなどの科目を置いたほか、学生を募集するために、ウェルネスデザイナーの資格が取れるようにカリキュラムを整えました。しかし、期待とは裏腹に、学生はそれほど集まりませんでした。





平識　善盛
スポーツ健康学科 教授

## 保健体育コース申請へ

入学志願者低迷への打開策を見出せない中、2003（平成15）年、当時の生見（ぬくみ）哲郎副学長から、「名桜大学でウェルネスコースをステップにして保健体育教員の免許が取れるようにしたい。その申請に努力してくれないか」という話がありました。観光産業学科では、さすがにそれは無理だろうという考えが大多数でしたので、「その申請はだめかもしれません」と答えると、「だめでもともとだから、金城正英教務課長（現・事務局長）と協力して、その実現に向けて努力してほしい」と言われました。それで、文科省への申請に向けて動くことになりました。申請に必要な書類の作成など、準備のほとんどは金城課長が行ってくれました。

文科省では、「観光産業学科で保健体育の教員免許が取れるようにしたい」と言うと、「どうして観光産業で保健体育免許なのか」と言われました。こうした指摘を受けることは予測できていましたので、われわれは、「現在、沖縄県内で、保健体育の免許が取れるのは琉球大学の教育学部だけで、わずか十数名に限られています。ですから、沖縄県内の生徒たちは保健体育の教員を目指す場合、ほとんどが県外に進学しなければなりません」と述べて、こうした側面から、申請の必要性をアピールしました。

文科省の方も最初は否定的な態度でしたが、われわれの熱意で、ついに相談に乗ってくれました。「～が通るためには、このような文言を……」など、内容の修正をアドバイスしてくれました。こうして、翌2004（平成16）年には申請が認められました。2004年度は、一般入試の学生募集には間に合いませんでしたが、保健体育教員免許の設置を公言していましたので、日程が合ったAO入試で募集を実施し、優秀な学生を確保しました。

初年度（2004年度）は、観光産業学科の定員115名に対して、200名以上の志願者がありました。そのうちの約半分が本来の観光産業志望で、残りの半分が保健体育免許を取得したいという保健体育コースを志望する生徒でした。

コースの設置条件には、「最低３人の保健体育専任教員」という規定がありました。私のほか、琉球舞踊が専門の花城洋子先生と、琉球大学を定年退官された平良勉先生の３人が専任教員に就く予定でしたので、それぞれのゼミで30人ずつで、90人を合格させよう、ということになりました。こうして2004（平成16）年４月より、ウェルネスコースに認定された保健体育コースがスタートしました。

## スポーツ健康学科開設

こうした状況の中、再び生見副学長に呼ばれ、今度は、「保健体育コースは需要が多いので、早急にスポーツ系の学科をつくってほしい」という話がありました。保健体育コースを、学科の中の１コースという位置づけではなく、学科として独立させようというのです。しかも翌年（2005年）の学生募集に間に合わせたいという注文です。

そこで、新学部・学科設置の委員会が立ち上がり、検討が始まりました。当初、空手や琉球舞踊など、沖縄のものに特化した伝統芸能スポーツ学部にしようという意見もありました。しかし、高校現場の体育科の先生方の見方は、「体育、スポーツ、健康などが付く名称じゃないと、生徒は送れない」という意見が大多数でした。

「人間健康」というものなら、スポーツだけでなく、栄養、看護などの分野も入れることができるということで、「人間健康学部スポーツ健康学科」の新設を申請することに決まりました。

文科省への申請には、金城正英新学部学科新設準備室長と石川清治教授（学部長候補）の二人が行きました。観光産業学科保健体育コースの設置から約８ヵ月後でしたので、受付窓口の担当者の方は「また今度は何の申

請ですか？」というような印象だったようです。しかし申請は問題なく通り、2005（平成17）年、人間健康学部スポーツ健康学科を開設し、第１期生を受け入れることができました。

しかし、またひとつ問題が生じました。スポーツ健康学科ができたのに、「観光産業学科の保健体育コースはそのままでいいのか」というものです。大学側は、「観光産業学科の保健体育コースは観光の関連分野としてできたものだから、このコースもそのまま残しましょう」という方針を出しました。しかし学生募集が進むにつれて、高校現場の方から、「両方にあるのは違和感があって生徒を送りにくい。一元化するべきではないか」という声が出てきました。その結果、将来スポーツ健康学科に一元化することが決まりました。ただし、当時、観光産業学科の保健体育コースに在籍している学生（１年生）が卒業するまでは完全な統廃合はできないので、経過措置として、一部の講義科目と実技系の授業を合同で行うという形をとってしばらくは乗り切りました。

スポーツ健康学科の初年度の入学定員は95人でしたが、102人が入学しました。これに、観光産業学科の保健体育コースの90人の学生もいますから、最初の頃の授業はどうにか工夫して行いました。

その後、観光産業学科の最後の学生が卒業する前年に、同学科の保健体育コースの取り下げ申請を行いました。以上が、保健体育コースおよびスポーツ健康学科開設にいたるまでの経緯です。





ゴルフの講義風景

# 看護学科の開設

2007
平成19

## 看護学科設置の協力要請について

2006（平成18）年の２月頃、沖縄県立看護大学の嘉手苅英子先生から、名桜大学に看護学科をつくりたいので、協力してくれないか、という電話がありました。当時私は、筑波大学に勤めていました。そのため、名桜大学内で看護学科設置の取り組みがどのように始まったのか、詳しくは知りませんでしたが、看護学科設置の方針は2005（平成17）年11月の理事会で承認されたようです。

私が当初、看護学科開設の話を聞いたときの率直な感想、一番の関心事は、どういうメンバーでスタートを切るのだろうか、本当に設置できるのだろうか、というものでした。

その後、３月下旬に、屋嘉義和総務企画部長、金城正英新学部設置準備室長、人間健康学部の石川清治学部長（いずれも当時）が筑波大学に直接お見えになりましたが、そのときはまだ、お話をおうかがいするという感じで、意思決定をしていませんでした。

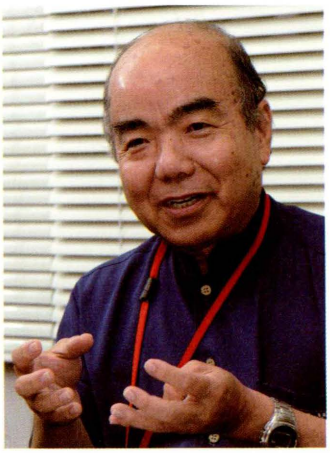
しかし、４月に沖縄に行く用事があり、名桜大学の方から再びお話をうかがって、看護学科設置に向けて具体的に話が進んでいるということがわかりました。また、このときに瀬名波榮喜学長（当時）とお話しさせていただき、大学あげての要請だと受け取り、そのとき私も腹をくくりました。60歳を前にして、まだ余力のある今、郷土のために恩返ししたいという想いがあり、これが最終的な決断となりました。

## 設置申請まで

そこからは、２週間に１回のペースで名桜大学に通い、文科省への申請の準備に取り組みました。おおかたの作業は事務局の方が行ってくれました。

私自身が苦労したことを申し上げるとしたら、教員集めです。文科省申請に必要な書類のひとつに、就任予定の先生方の捺印入りの「就任承諾書」というのがあり、これをそろえるため、先生方を一人一人訪ねてまわらなければなりませんでした。

広島の先生のところに捺印してもらいに行ったときには、自宅に印鑑を忘れてしまったということで、新幹線に乗って三原まで行き、そこからタクシーに乗り換えて自宅まで行って捺印してもらいました。そして再び新幹線に乗って別の先生の待つ岡山へ行き、次の新幹線が来るまでの５分の間に構内で捺印してもらって、次の新幹線に飛び乗って、飛行機に乗り換えるため神戸まで向かいました。そして羽田空港に着き、待機している事務職員に書類を渡して私は筑波に戻っていくという、文字通りドラマ的なこともやりました。ぎりぎりで作業を進め、なんとか申請までこぎつけたという実感です。



金城　祥教
看護学科 教授

## 教員との運命的な出会い

最初、看護学科設置の話を聞いたときに、「どういうメンバーでスタートを切るのか」が関心事であったと申し上げましたが、どういう人と一緒に仕事をするか、というのは極めて重要です。私自身は、新設する名桜大学の看護学科は、これまで実践的に取り組んできた「参画型教育」という看板を掲げてやっていきたいという思いがありましたので、呼びかけたところ、そうした志に共鳴する先生が何人か集まってきました。学生参画型教育という、いわゆる学生が主人公となる学び舎づくりに賛同する人でないと、新学科完成にいたるまでの大変な難儀もできないわけです。

11月下旬、文科省より看護学科設置の認可が下りました。申請が通るか通らないかというのは大変重要なところですが、教員採用予定の先生方は、その前に、在籍している職場に退職願を出していますので、通らなければ大変です。県外からご家族で沖縄移住を考えている先生もいらっしゃいましたので、認可が下りるまでは、そういう先生方の生活を全部背負っている、という責任感が非常に強かったです。12月24日、比嘉鉄也理事長（当時）にお願いして、就任予定の先生方が集まる機会をつくってもらいました。名桜大学の学食で食事会を持ち、また翌日も時間をつくって、どういう教育をやっていくか、話し合いました。一人一人に、自分のやりたい教育やどんな看護師を養成したいかなどをカードに書いてもらい、それをまとめていく、カードメソッドという参画型教育の技法で、新設される看護学科の教育目標をまとめていきました。このときのカード図解は、今も大事にとってあります。



## カリキュラム作成、「参画型教育」について

看護教育には、看護師養成のための指定規則というものがあり、看護師国家試験の受験資格を得るためのカリキュラムはだいたい決まっています。名桜大学看護学科のカリキュラム作成にあたっては、大学の教養教育も含めてのカリキュラムですのでおおかたは決まっていましたが、その中でも特色を打ち出していきたいと考えていました。当時、新卒看護師の早期離職が社会問題になっていました。国家試験に合格して病院に就職した新人看護師の9.2％が、就職からわずか１年以内で離職してしまうという状況でした。そこで、離職しない粘り強さを持った看護師の養成が、教育現場に求められていました。また、私自身、静岡県立大学、筑波大学と看護学科の開設に携わってきたこともあり、看護教育についてはいろいろと実践的に試行錯誤してきました。そうした経験を経て、名桜大学で再び看護学科開設に携わることになったわけです。カリキュラム作成にあたっては、今まで自分がやってきた看護教育を集大成し、時代の要請にあった看護師を世に送り出したい、という姿勢で臨んでいました。

「参画型」という看板を掲げたのは、市民参画社会に向かう社会全体の大きな流れを見据えて、医療の現場においても患者さんや市民が参加する参画型の看護の時代が来ると。そういう時代を生きていく職業人を育てて

いくために、参画型の教育について検討を始めたわけです。

参画型教育というのは、対話・参画する力（コミットメント能力）の育成を重視する教育です。われわれは、カードメソッドという技法を採り入れ、患者さんが主人公となる医療の場を目指す看護師を養成するための体系的な教育課程を、大学としては初めて採用したことになります。その中で、自己との対話、他者との対話、地域社会との対話という三つの対話が重視されています。「自己との対話」は、自分自身を内省する力、「他者との対話」は、仲間や先生、職員との対話を通して、自分の考え方がひとりよがりのものではないかを確かめる力、「地域社会との対話」は、地域でのボランティア活動や病院での看護実習において、看護（技術）を学びながら、同時に、看護職として地域にどのように貢献していくかを学び取る力です。そして最終的に、三つの対話能力を統合して、自己教育力を育てていくことが、非常に大切だと考えていました。





上・１期生が理事長室でユニホームをお披露目
下・最初の基礎看護学実習１（沖縄病院）

## 開設当時の様子

2007（平成19）年４月、看護学科が開設されました。しかし、看護学科専用の校舎はまだなかったので、学内の代替施設に長テーブルを用意し、そこに電話やパソコンを置いて、職員室のような部屋も作り、スタートしました。教員は、毎朝８時半には出勤して、１日のスケジュールを話し合ってから、個々の業務に取り組んでいました。結果的に、こうして毎朝、すべての教員と顔を合わせて話し合えたことは、とても良かったと思っています。看護学科専用の校舎は、開設から３年目にようやく完成しました。

このように設備は貧しかったのですが、先生方が非常に熱心に学生に向き合うということで、学生の満足度は非常に高かったです。開設時から今日にいたるまで、看護学科では教員と学生の関係が密で、学生を大事にする教育を行ってきました。こうした教育実践が医学書院のジャーナル「看護教育」で特集として2009（平成21）年、2010（平成22）年と連続して取り上げられ世の中に周知されてきて、さらに公立大学になったことで、ますます学生が全国から集まってきています。学科開設から今日にいたるまで関わってくださったすべての皆様には心から感謝を申し上げたいです。

## 開設後の取り組み

北部地域における看護系人材の養成というのは、名桜大学に課せられた使命でもありました。瀬名波前学長は当初から看護学科だけでなく、大学院をつくるという方針を掲げていました。そして１期生を送り出した2011（平成23）年に、大学院看護学研究科が設置されました。当研究科は、他の学科と異なり、学科を卒業してすぐに大学院に進む学生はほとんどいませんでした。高度専門職業人養成を目標とし、臨床経験を積んだ現場の方々を迎え入れてきました。

しかし、大学院だけでは、受け入れ人数が限られています。そこで、より多くの現場の看護師が研鑽できるように、看護実践教育研究センター

を、2013（平成25）年に開設しました。臨床現場の方々の教育と研究支援、また、生活援助技術やケア技術を現場の方々に修得してもらって、看護の質、ケアの質を高めていくことも名桜大学にとって大変重要な役割となっています。特にやんばるのお年寄りたちは、子どもたちが中南部で生活していることが多く、年をとって一人で生活することが難しくなると、ふるさとを離れて子どもたちのところに行く（老人福祉施設へ入所する）ことが多いようです。家族と離れていても生活の質を保持して、この地域で最期まで過ごすことができるように地域の看護力をつけることが、看護実践教育研究センターのもう一つの重要な課題となっております。

参画型看護教育の一つの特徴は、学生が地域に入っていき、地域住民もまた看護教育に参画するというシステムです。大宜味村、国頭村、東村、今帰仁村、本部町には毎年学生がフィールドワークに出かけていきますが、住民の方から声をかけてもらうことも多く、いろいろ教えていただいています。学生が名護市宮里区の朝市で行っている健康相談活動もそうですが、地域の人々に名桜大学の看護教育に協力し、参画していただいています。このように広大なやんばるが、名桜大学のキャンパスとなっているのです。

## 今後の展望について

名桜大学の20年後のことを考えますと、人間健康学部看護学科がこのやんばるの地で誕生したことは、次の点で大変重要な意味を持っております。比嘉鉄也元理事長からは次のようなお話をうかがい、導かれて参りました。「資源の乏しいこのやんばるの地で、先人たちは、自分の子どもの未来のため、この地域の未来のために、『教育』を最も重視した。人材をもって資源となす。教育こそが未来を開き、地域を豊かにし、人々に幸せをもたらす。そこで、自分たちの手で学校―国頭農学校（のちに北部農林学校）や名護英語学校―を創ってきた」と。そしてこのような先人たちの思いが脈々と受け継がれて、やがては名桜大学をこの地に誕生させたと聞いております。名桜大学の創設の理念には、東江康治初代学長、瀬名波前学長の「平和・自由・進歩」の精神がありますが、第二次世界大戦のとき、鉄血勤皇隊として地上戦で九死に一生を得た者のみが語れる「人類の平和と進歩を希求する」崇高な理念だと思います。このような歴史的な経過を踏まえると、地下水脈のように100年にわたりやんばるの人々のこころに受け継がれてきた精神は「自立」であると言えます。名桜大学看護学科では多くの教員が入れ替わり立ち替わり看護教育に従事してきましたが、それは全国で看護系大学が毎年10校ずつも増えてきたことが理由かと思われます。こうした状況はしばらく続くかと思われますが、未来を見据えた自立した教育が求められていることは、先に見てきたように地域の人々が名桜大学に寄せる変わらぬ思いであろうと思います。このやんばるの地で、人々のチムグクルあふれるケアリング文化の中で育まれた名桜ナースたちは、沖縄はもとより、世界に羽ばたき、グローバルに活躍することが期待されております。

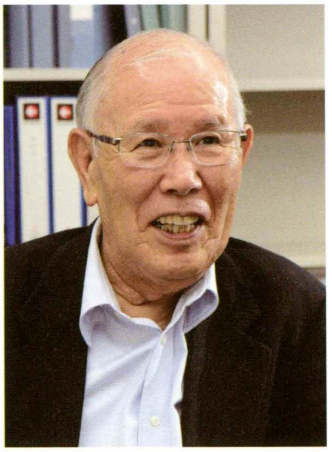
# 国際学群国際学類の開設

2007
平成19

## 開設の経緯

私は30年間勤めていた千葉大学から琉球大学に移り2004（平成16）年に名桜大学へ赴任しました。2006（平成18）年２月17日、瀬名波榮喜先生が第４代学長に就任されたとき、瀬名波先生は私に、「君が国際学部長をやらないのはおかしい」と話されました。瀬名波先生は私より10歳も年上の大先輩ですから、しぶしぶですが承諾したのが運の尽きでした。すると国際学部を早急に改組してくれと比嘉鉄也理事長と瀬名波学長が言われたのです。あの頃は国際学部（国際文化学科、経営情報学科、観光産業学科）、人間健康学部スポーツ健康学科、大学院国際文化研究科の２学部４学科と１研究科を擁する大学でしたが、国際学部の志願者は減ってきていたのです。私はこれまで大学行政に興味はありませんでしたから大学のビジョンなど考えたことはなかったのですが、事務方に優秀な人が付けばどうにかなるだろうと考えていました。数日後、金城正英新学部設置準備室長が訪ねてきました。彼は私が引き受ける以前から国際学部改組のため色々と情報を収集し精査していたのでしょう。本学が提携を結んでいる桜美林大学が学群制度を取り入れて成功しているので名桜大学もその制度を取り入れませんか？と提案したのです。事務方の企画としてはすごく良くまとめられていました。学群制度はもともと筑波大学がやっていましたが政府直属の大学なので教授会はありません。私は千葉大学にいたときに私立の桜美林大学は知っていましたから、桜美林大学がうまくいっているからといって、なぜ名桜大学は取り入れようとするのか疑問がありましたが、何はともあれ学長と金城さん３名で桜美林大学の視察に向かいました。そして、桜美林大学の成功を目の当たりにして、本学もその制度を取り入れようと考えました。帰校後すぐ学内に改組委員会を立ち上げ、メンバーに国際学部各学科からそれぞれ２名の教員を選出し職員側からは屋嘉義和総務企画部長、垣花勝行学務部長、又吉純入試広報部長、事務局は金城正英さん、上江洲安幸さんの12名でした。理事長から文部科学省に７月末に届け出るので、６月までに国際学群設置の申請書を作成するようにとの指示がありました。いくらなんでも早急過ぎるとは思いましたが、本学を救うためにはやらなければならない。委員の皆さんにも腰を据えて取り組んでもらうため、週２回のペースで会議を招集しました。会議は午後10時までででしたが、深夜まで及ぶことがたびたびありました。時々、理事長から秘書の山川そのみさんを通してサンドウィッチの差し入れもありましたね。

３学科の中で観光産業学科だけは現体制でもうまく運営されていましたので、定員割れを起こしていた国際文化学科と経営情報学科と意見の相違があって当然で、第１回目の会議から荒れました。改組はすごいエネルギーを使うものです。住み慣れた家をそのままで良いという人とここを変えたいという人の議論はなかなか噛み合うことはありません。私は途中、確か



内間　直仁
初代国際学群長

に挫折しそうになり「改組委員会を解散しようか？」と言って金城さんに怒られたこともありました。

金城さんは教員に気分良く仕事をしてもらって会議がスムーズに運営できるよう、でしゃばらずに気配りすることに長けていました。最も感心したのは、会議の中でそれぞれの教員が発言した内容に真摯に耳を傾け、全員の発言をまとめて次回の会議に提出していたことです。おかげで喧々諤々と議論しながらも、投げ出すことなく７月末日に届け出ることができたと思っています。

その後、文科省の認可を受け、2007（平成19）年４月、改組された国際学部が、国際学群に生まれ変わりスタートしました。余談ですが、あのとき、改組委員を務めていた住江淳司先生（図書館長）、渡慶次正則先生（国際交流委員長）、木村堅一先生（教養教育センター長）、佐久本功達先生（国際学群長）、朴在徳先生、宮城敏郎先生（学群教務委員長）の６名は、現在、名桜大学の中枢を担う人材として活躍しています。

### 国際学群の教育理念

国際学群は、本学の建学の精神「平和・自由・進歩」を踏まえ、21世紀に向けて自立的発展をしていくための柔軟な発想を持つ国際性豊かな専門的人材を育成します。そして多様なニーズに対応できる人材を育て、国際社会、地域社会に貢献する人材の輩出を目指します。



### 学群・学類専攻の名称

国際学部３学科の教育組織を国際学群・国際学類とし、従来の専門的教育科目を積極的に統合し、教育組織の名称を国際文化専攻、語学教育専攻、システムマネジメント専攻（現在は経営専攻）、情報システムズ専攻、観光産業専攻の五つにしました（現在は診療情報管理専攻を加え６専攻）。改組では、５専攻を立てていますが固定的ではありません。学生のニーズや社会のニーズによって専攻を改廃できるようにしています。

需要のあるものは残し、志願者が少ない専攻は淘汰することができるのです。学群制度は学生が自由に専攻を選ぶことができるため、専攻を持続させるためには教員も日々、より良い教育をするための研鑽が求められます。

## ５専攻の特色

### Ⅰ　国際文化専攻

沖縄県は、古琉球以来、東南アジアや東アジア、さらに中南米地域と貿易や移民を通して密接な関係があります。特に20世紀初頭からは、中南米地域やハワイ諸島などには多くの移民が在住しており、人的・文化的繋がりができています。このような沖縄県の持つ地理的、文化的条件から、環太平洋地域で活躍する人材の育成が必要になっています。

そこで、本専攻では、沖縄・日本コース、東南アジアコース、中南米コースの３コースを設け、これらの地域における国際文化の発展と国際貢献を担う人材の輩出を教育目標として掲げています。３コースに共通するコンセプトは、地域研究を中心とした座学に加え、現地実習により一次情報を得られることです。この現地実習から帰国した学生は、人生の価値観が変化するほどの異文化体験をしたことによって、これまで以上に学習意欲が向上し、本学の開学の理念である「国際舞台で活躍しうる人材」が輩出されてきています。

## II　語学教育専攻

本専攻は、「国際社会で活躍しうる人材の育成」そして「地域に貢献できる人材の育成」を目指し、国際語としての英語、国語としての日本語、それぞれの専門力を身につけることで自己のアイデンティティを確立し、国際社会および地域社会に貢献できる専門家を育成します。英語コースでは、英語を通して他国の文化・社会を理解し、自身を世界へと発信できる人材、また、教育者としての使命感を持ち、幅広い教養と教科等に関する専門的知識をそなえた教員を養成します。日本語コースでは、日本の言語・文化についての知識を深め、他者を理解し、自身を的確に表現できる人材を養成します。

## III　システムマネジメント（経営）専攻

本専攻は、本学の教育理念である「創造性豊かな人材の育成」と「地方の適切な要望、時代のニーズ」に応えるために、変化の激しい現代社会で、企業経営、地域行政、教育、医療などの組織に関するマネジメントに必要な専門的知識と技術を習得した人材を育成します。また組織リーダーの育成を目指しています。

## IV　情報システムズ専攻

国際化に伴う情報化の浸透で民間企業、国や地方公共団体のあらゆる分野で、情報活用能力とシステム思考能力、問題解決能力、国際的視野と感覚を備えた人材が必要とされています。情報システムズ専攻では、情報技術による地域経済の活性化と地域産業の振興を支える担い手として、組織内や複数の連携組織間でも協働・調整しながら決断・行動できる自律した人材を育てることを目指しています。また、本専攻に診療情報管理士養成課程を設置し、医療現場において、診療情報を管理・構築するＩＴスキルをもったプロフェッショナルを育成しています。この診療情報管理士養成課程は、2009（平成21）年に情報システムズ専攻から分離独立して診療情報管理専攻となっています。

## V　観光産業専攻

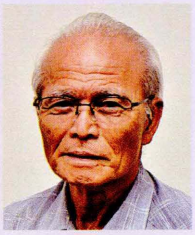
沖縄県では、観光立県として数多くのリゾート開発プロジェクトが県全

域において計画され、運営されています。当専攻では観光政策・ビジネス、スポーツ・ウェルネス、環境・エコツーリズム、観光文化ガイドの四つのコースを設け、沖縄県の基幹産業である観光産業を担う地域のリーダーの養成と観光の方向性を戦略的にコーディネートする国際観光を視野に入れたスペシャリストの育成を目指しています。

国際学群では、国際社会で活躍できる創造的思考を養うことを目指し、幅広い好奇心、柔軟な感性と思考力を持った探究心旺盛な人材を育成しています。

COLUMN

## 学術の研究でもう一度



名誉教授 吉川　安一

公立大学法人名桜大学　名誉教授　内間直仁先生が、2014年（平成26年）8月18日に逝去されました（享年76）。謹んで 哀悼の意を表します。

内間直仁先生の御芳名は、小生と同郷で内間先生と言語学分野の道を歩んでこられた先輩から以前より知らされておりました。また内間先生は、沖縄、本土の大学で言語学の教授として教育活動をしておられることの情報も得ておりました。特に言語学博士として国語辞典の監修の重責を担っておられることも知り、敬服するとともに何時か好日にお会いしたいと念じていました。それから本部町の瀬底島出身ということにも親近感を抱いておりました。小生も本部町で10数年間、中学校や高等学校で教育活動や学校経営を実践しておりましたので、内間先生のような学者や博士を、本部町からも輩出することを夢見ていました。

特任の身分で、小生は名桜大学で内間先生とご一緒に教授活動を行う機会に恵まれました。内間先生の専門分野は「言語学」で小生の分野は「文学」と「国語科教師の育成」だったので、専門的学問体系での会合や研修に同席する機会は限られていました。が、ゼミ学生の言語学分野は、内間先生の指導助言を仰ぎました。ゼミ生の卒業論文で疑問や問題が生じた場合は、小生も内間先生の研究室を訪ねました。千葉大学や琉球大学で教授活動の成果を蓄積された先生から、指導を賜ることがありました。研究室で二人で対話するとき「吉川先生、わたくしはコーヒーが大好きでね」と一言。コーヒーを御馳走になったこともありました。それから、喫煙を慎んでおられることを披瀝されていました。対話の中で小生と同様に聴覚機能が少しばかり衰えていることも、にじませておられました。

本項の内間先生のインタビューにもありますように、公立大学法人名桜大学の基盤を構築された内間初代国際学群長の功績は、20年の歩みの中で賞賛されるべきだと考えております。小生も国際学部改組の最後の教授会で、特任の身分ながら、内間委員長を中心とした改組委員会の高い識見と委員会が論議を重ねてきた成果を確認し、大学の将来を真剣に考え、国際学群国際学類の開設に賛成意見を述べたことが未だに記憶に残っております。教授会の議事進行の任を担っておられた、内間学群長の真剣な姿も、印象深いです。

内間先生は、黄泉の大学でも言語学の教授活動を続けておられると思います。ご冥福をお祈りいたします。合掌

2014年8月30日

# 公設民営の私立大学から公立大学へ

2010
平成22

## 背景～学生募集状況の悪化

名桜大学は18歳人口が減少期に入った1994（平成６）年に開学しました。そのため、当初から厳しい大学運営が予測されていました。1998（平成10）年を境に志願者が激減し、2000（平成12）年以降、一部学科において入学定員を充足できない状況が続きました。

このような中、名桜大学の設置母体である学校法人名護総合学園理事会から、「志願者の減少は経営上看過できない、学部・学科の見直しを行うように」と要請文が教授会に提出されました。これを受けて、「国際学部改組検討委員会」、「新学部学科設置検討委員会」を設置し、大学改革に向けた取り組みが推進されました。

その結果、2005（平成17）年度に人間健康学部スポーツ健康学科を新設し、2007年（平成19）年には同学部に看護学科を増設、国際学部を国際学群に改組しました。このような改革が実現すれば、学生に選ばれる大学になると予測しました。しかし、学部学科増設により大学全体の収容定員は増加し、志願者数は2005（平成17）年に一時増加したものの、次年度以降減少しました。

人間健康学部は入学定員を満たしていましたが、国際学群は入学定員345名に対し定員充足率は、2007（平成19）年度78.8％、2008（平成20）年度65.5％、2009（平成21）年度47.8％でした（※2009年度については実情に即して入学定員を65名削減して280名としたため、実質の定員充足率は58.9％）。

こうした危機的状況に直面して、さらなる大学改革を進めるため、「名桜大学改革委員会」、「名桜大学緊急対策会議」が設置され、直面する経営、教育研究に対応する緊急対策方針が定められました。その内容は、教職員・非常勤講師の削減や勤務体系の見直しによる人件費の削減、学生募集の見直し、低迷する国際学群の改組及び入学定員削減などでした。これらの取り組みはネガティブで、教職員の士気を鼓舞するものではなく、大学再生の特効薬とはなりませんでした。すなわち、名桜大学が将来にわたって持続的に発展し経営基盤が安定する内容ではなく、新たな改革案の必要性を示唆するものでした。

## 公立大学法人化を模索

2004（平成16）年４月に施行された「公立大学法人制度」は、地方公共団体における「大学改革」への取り組みの一環として、「地方独立行政法人法」（以下、地独法という）の中に定められており、行政による直営から、民間的手法を取り入れながら、自律的、弾力的、効率的な運営に転換する制度です。言い換えれば、公設民営の私立大学が公立大学法人化した場合、国の支援（地方交付税）が新たに受けられるという制度ですが、



金城　正英
事務局長

その当時、行政による直営の公立大学が公立大学法人化する事例はたくさんありましたが、公設民営の私立大学から公立大学法人へ移行した大学は皆無でした。2008（平成20）年10月、屋嘉義和法人事務部長と私・金城正英総務部長は高知工科大学を訪問しました。高知工科大学は高知県と連携し、2009（平成21）年４月をめどに公立大学法人化を目指していました。訪問の結果、名桜大学は高知工科大学と同様に設置形態が公設民営であるという共通点から、公立大学法人に移行できるという確かな手応えを得ました。

その後、私たちは、公立大学法人へ移行できるという昂ぶる気持ちで沖縄県総務部総務私学課へ相談に行きましたが、事務室に入ることもなく廊下で「対応窓口ではないが、一応資料は預かります」との対応でした。そのまま帰ることもできず、企画部市町村課を訪ねましたが、同様の対応でまさに、暗中模索の状態でした。

沖縄県の対応窓口が定まらないならばと、総務省に直接電話することにしました。しかし総務省の担当者の答えは「公立大学設置に関する協議については、設置団体である地方自治体と行うことであり、大学と直に相談するものではない」というものでした。だからといって、手をこまねくわけにはいきません。約２ヵ月間、「沖縄県の対応窓口ができるまで」と電話と電子メールで相談し事前調整を続けることにしました。

2008（平成20）年12月、総務省自治財政局の担当者から面談可能との連絡があり、大学の沿革、土地・建物に係る創設経費等について説明を行いました。公設民営の私立大学が公立大学に移行できるのかが重要なポイントとなりましたが、地独法が定める「地方独立行政法人の定義」に合致していることや業務に必要な土地・建物などの「財産的基礎」を有していることから公立大学に移行できるという確信を得ました。

私たちは望外の結果を得ることができ、天にも昇る気持ちで沖縄への帰途につきました。この結果を比嘉鉄也理事長、瀬名波榮喜学長に報告すると、なんと無謀にも「2010（平成22年）４月に公立大学法人化を実現してほしい」と強く要望されたのです。１年後の2010（平成22）年４月に公立大学法人化を実現するには、体制を整え『スピード違反』を覚悟して作業に挑まなければなりませんでした。

2009（平成21）年１月、理事会において「公立大学法人化準備室」と「学内公立大学法人化検討委員会」の設置が了承され、学内における公立大学法人化の作業が始まりました。

## 学内の組織体制

「学内公立大学法人化検討委員会」には委員長に瀬名波榮喜学長、委員に西平守孝国際学群長、柳敏晴人間健康学部長、仲地清国際学群教授、平識善盛人間健康学部教授、知念一郎事務局長、屋嘉義和法人事務部長の７名が比嘉鉄也理事長から任命されました（2009年４月、西平守孝氏の退任により清水則之国際学群長、知念一郎氏の退任により屋嘉法人事務部長

は事務局長に変更)。

同委員会は、設立団体に予定されていた、北部広域市町村圏事務組合と連携、協議するため、①法人組織・運営、②評価制度、③中期目標・中期計画・年度計画、④人事・労務及び財務・予算、⑤財産管理、⑥その他公立大学法人の設置に関すること、以上六つのことの検討を任務としました。

さらに、同委員会の審議をサポートする作業部会として、部課長で構成する「事務作業部会」、事務職員と教員で構成する「管理運営作業部会」及び「教育研究作業部会」を設置し、毎週１回の定例日を設けて作業を進めました。

また、同時期に学校教育法に定められた７年毎に行われる、大学認証評価機関（財団法人日本高等教育評価機構）による第三者評価を受審することになっていました。公立大学への移行を目指している本学としては、評価機関の「適格」の判定は大学評価基準を満たしていることを社会にアピールする絶好の機会でした。教員・事務職員は理事長・学長のリーダーシップのもと一体となり、夜を日に継ぐ業務を推進していきました。

## 公立大学法人設立団体・北部広域市町村圏事務組合

学内においては、委員会などを中心に公立大学法人化へ向けた作業は順調に進められていましたが、それを実現させるためには二つの課題をクリアする必要がありました。一つ目は設立団体を決定することであり、二つ目は沖縄県に公立大学法人に係る対応窓口の設置を求めることでした。



地独法上は、公立大学法人設立を検討する場合、地方公共団体である沖縄県、名護市または特別地方公共団体である一部事務組合（北部広域市町村圏事務組合）のいずれかが設立団体となって設立業務を推進する必要がありました。

北部広域市町村圏事務組合は、名護市、国頭村、大宜味村、東村、今帰仁村、本部町、恩納村、金武町、宜野座村、伊江村、伊平屋村及び伊是名村の１市２町９村で組織されています。同事務組合が設立団体として大学の運営を行うためには「北部広域市町村圏事務組合規約」の共同処理する事務の中に、地独法で定める「大学の設置及び管理を行うこと」の業務を追加することが不可欠でした。

まず一つ目の課題を解決するため、比嘉理事長、瀬名波学長、屋嘉事務局長、公立大学法人化準備室長の私は、北部12市町村議会の承認を求め、各市町村を３回訪問しました。さらに、名護市議会議員の各会派、名護市部長会、沖縄県北部選出の県議会議員、事務組合理事（北部12市町村長で構成）及び事務組合議会議員（北部12市町村議会議長で構成）への説明会を行いました。

説明会では、北部12市町村の新たな財政負担はないこと、事務組合規約の一部変更を行うために北部12市町村議会の議決が必要になることの２点を強調し協力をお願いしました。

一方、二つ目の課題である沖縄県の対応窓口は未だに決まっていません

でした。その打開を図るため、2009（平成21）年８月、屋嘉事務局長の学友である川上好久企画部長（のちの副知事）を訪問しました。「ヤンバルから近くにきたので寄りたい」と偶然を装っての突然の訪問でした。しばらくの間、学友同士の歓談が続いた後、私立大学を公立大学に移行したい」と訪問の理由を告げると、すぐさま持参した資料に目を通しました。そしてあまりにも性急な計画に困惑した様子ではありましたが、「北部地域には公立の高等教育機関は必要だ」と賛意を表し市町村課の課長と係長に実現に向けて取り組むよう指示が出されました。

事務組合が設立団体となる事務組合規約の一部改正は、11月16日の伊江村臨時議会を皮切りに、11月25日の名護市臨時議会、最後の12月７日に金武町臨時議会で可決され、12月８日に事務組合から沖縄県に申請し、認可されたのは12月９日でした。名桜大学創設の経緯から、北部12市町村で構成する事務組合が設立団体となるのは自然の成り行きでした。

地独法においては、地方公共団体（設立団体）の理事会・議会の議決を経て、定款を定め、沖縄県知事の認可を受けることになっておりますが、その事務処理の中心となってこれを取りまとめたのは、事務組合の比嘉克宏北部振興対策室長（現名護市産業部参事）でした。また、名護市の金城秀郎課長（現企画部企画調整課長）、仲井間修係長（現総務部財産管理課長）は、公立大学法人化の窓口として市議会での答弁や文部科学省の認可の要件とされた、名護市の５指定管理施設（①多目的ホール、②北部生涯学習推進センター、③総合研究所、④留学生センター、⑤看護学科棟）が公立大学法人化後も継続して使用できるよう対応しました。併せて文部科学省、総務省、沖縄県、名護市、事務組合理事会・議会から求められた種々の課題を解決していきました。



## 「公立大学法人名桜大学」設置申請

2009（平成21）年12月21日付けで地独法に則り、「公立大学法人名桜大学設置認可申請書」が沖縄県に提出されました。さらに私立学校法に則り「学校法人名護総合学園設置者変更及び解散に係る認可申請書」を、学校教育法に則り「名桜大学設置者変更申請書」が文部科学省に提出されました。2010（平成22）年３月19日、文部科学省と沖縄県から同時に認可され、４月１日、公立大学法人名桜大学は誕生し、学校法人名護総合学園は解散したのです。また、併行して取り組んでいた第三者評価では「適格」の判定を受け、名桜大学は満を持して新たなスタートを切ることができました。

名桜大学は公共性の高い公設民営の私立大学として誕生し、北部12市町村長や財界人で構成される外部の理事と評議員などによる人的つながりにより運営されてきましたが、北部12市町村とは公式な関係がありませんでした。しかし、公立大学法人へ移行したことにより、財源となる国からの公費は、設立団体である事務組合を通して交付される公的な関係が構築されました。具体的には総務省から沖縄県を経由して名護市の基準財政需要額（大学分）が事務組合へ負担金として支出され、それが大学へ運営

交付金として交付されることになったのです。

名桜大学の20年を顧みるとき、大学のみならず北部12市町村住民が一丸となってその歴史を築いてきたことを誇りに思います。また、公立大学法人化という大プロジェクトを１年間で達成できたのは、島袋吉和前事務組合理事長をはじめとする当時の事務組合理事・議会議員の英断と、併せて沖縄県、名護市、北部広域市町村圏事務組合、名桜大学の４者が密に連携したからです。さらには適切なご指導をいただいた高知工科大学事務局の方々のお力添えにあらためて敬意を表するとともに感謝の念に堪えません。

COLUMN

## 公立大学法人移行の取り組み

第４代学長 **瀬名波榮喜**

名桜大学は1998（平成10）年を境に志願者数が激減し、学生募集で苦労していました。打開策として2005（平成17）年に人間健康学部スポーツ健康学科、2007（平成19）年に看護学科を増設し、同年国際学部を国際学群に改組しましたが、それでも志願者の激減を食い止めることはできませんでした。小手先だけの改革では限界があり、比嘉鉄也理事長と私は、抜本的な改革案を模索していました。

2008（平成20）年10月、2004（平成16）年７月に成立した地方独立行政法人法に基づき公設民営大学が公立大学法人に移行する道を探るため、2009（平成21）年に公立大学法人化を目指している高知工科大学に屋嘉義和法人事務部長と金城正英総務部長を調査のため派遣しました。彼らは名桜大学も公立大学法人への移行は可能だという手応えを持って帰ってきました。翌年の１月には、学内理事会で公立大学法人化に向けた取り組みを決議し、２月６日には学内公立大学法人化検討委員会を立ち上げ、理事長はじめ教職員が一丸となり公立大学法人への移行に取り組みました。当時は会議の連続で、深夜まで議論することもたびたびありました。

公立大学法人の設立母体は、北部12市町村でなければなりませんでした。しかし私たちが北部12市町村に働きかけたとき、大きな壁として立ちはだかったのも北部12市町村でした。理由として、公立大学に移行して運営が厳しくなったらまた金を出させるのか？地域の子どもたちが今以上に進学できるのか？我々にメリットはあるのか？など様々な声が議会から投げかけられました。確かに名桜大学の創設費66億円のうち、名護市が53億円、北部11町村が３億円、県が10億円を負担していますからね。

私たちはそれらの発言を真摯に受け止め、比嘉鉄也理事長、学長の私、事務局の屋嘉義和事務局長、金城正英事務局次長、比嘉克宏北部振興対策室長（北部広域市町村圏事務組合）などと12市町村長を訪ね協力を依頼し、議会議長と各議会、北部選出県議会議員４氏へも説明会を開催し、組合規約変更可決をいただくまで延々と説得に努めました。2009（平成21）年11月、名護市は臨時議会で組合規約変更を可決しましたが、それは当時の島袋吉和市長のご尽力によるものでした。

大事業を１年という短期間で達成できたのは、英断を下してくれた北部12市町村と理事長はじめ名桜大学教職員の結束力のたまものです。


MEIO

# 2章

# 大学紹介



# リベラルアーツとは知性と感性の調和

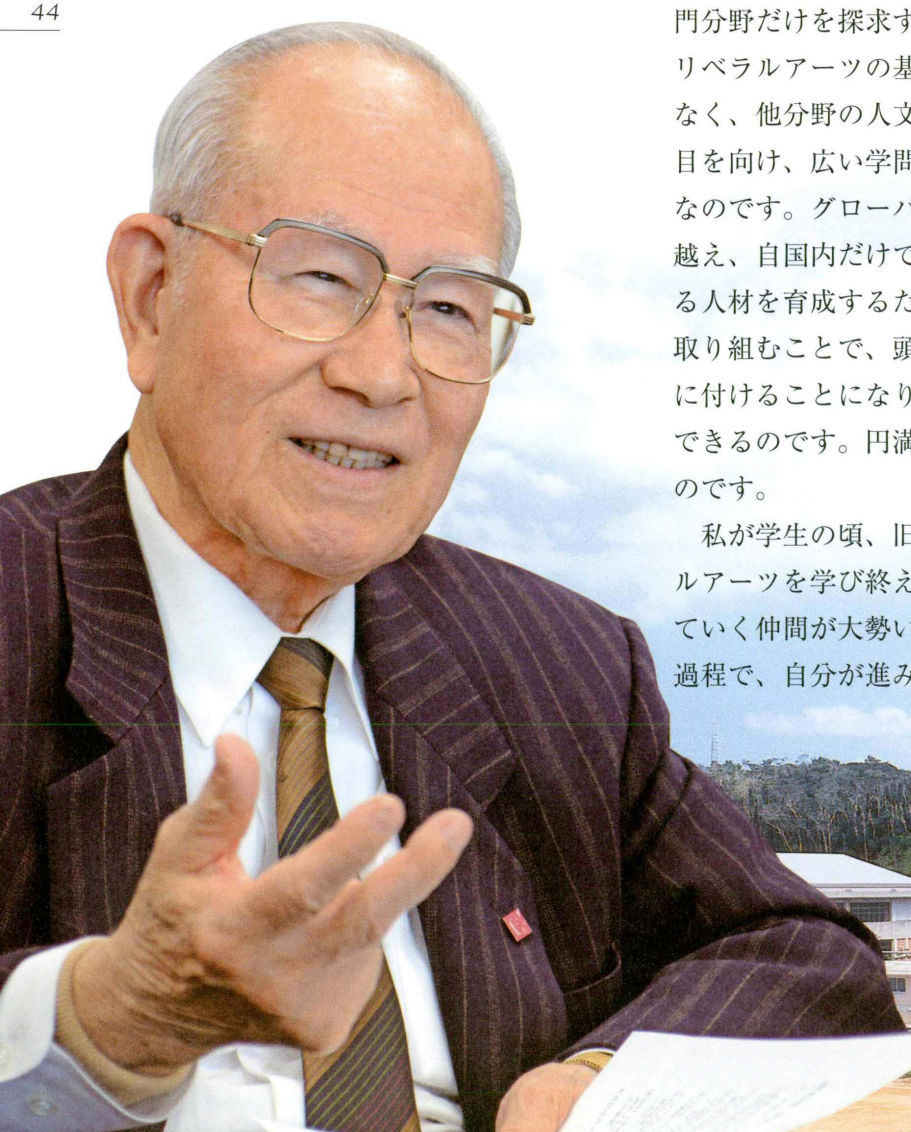
第４代学長 **瀬名波榮喜**

私は、アメリカの大学で学部から博士課程まで修了しました。その過程でアメリカの大学におけるリベラル教育を直に学んできました。しかし、日本の大学にも一般教育は必修科目としてあるものの、現実は深く専門の学芸を教授する専門的教育を行うことが要請されていました。しだいに義務化されていた一般教育を必修科目から外し、専門分野だけを充実させる教育方法が取られるようになりました。

私が名桜大学の学長に就任した2006（平成18）年当時、毎年７月に催される国公私立大学の学長会議の中でたびたび教養教育がテーマに上がりましたが、学長たちも日本の大学と大学院で学んだ方々なのでリベラルアーツに対する認識が十分ではありませんでした。そこで私は、アメリカの大学で学んだ人間形成に最も重要なリベラルアーツを名桜大学にも取り入れようと思い立ったのです。

リベラルアーツ（liberal arts）のリベラルとは自由という意味ですが、重要なのは心を解放するということです。自分の専門分野だけを探求するのは、心を開いているとはいえません。リベラルアーツの基本理念は専門分野だけに目を向けるのではなく、他分野の人文科学、社会科学、自然科学などの分野にも目を向け、広い学問的視野と開かれた世界観を学んでいくことなのです。グローバル化時代の今日、さまざまな情報が国境を越え、自国内だけでは生きていけません。国際社会で活躍できる人材を育成するためにもリベラルアーツの基本理念を理解し取り組むことで、頭が柔軟になり自由な思考と人間的教養を身に付けることになり、将来自分にあった「専門的適性」も発見できるのです。円満な人格形成こそリベラルアーツの目指すものです。

私が学生の頃、旧友の中には同じ英文学専攻で４年間リベラルアーツを学び終えると、医学や工学、その他の分野に進学していく仲間が大勢いました。彼らはリベラルアーツを実践する過程で、自分が進みたい道を見極め、自分にあった分野を再発



見したといえます。

私の母校カンザス大学には、世界的にも有名なネイ・スミス教授がいました。彼の功績を称え、ネイ・スミスホールと呼ばれる建物もあります。彼はリベラルアーツの理念を身に付けた人で、医師であり、牧師でもあり、教育者でもありました。その三つの分野で何が人類にもっとも貢献できるのかと考え、選んだのが教育でした。後に彼は、冬に体を温めるスポーツとして野球とアメリカンフットボールを組み合わせた新たな室内競技、バスケットボールを創り出したのです。リベラルアーツを実践していたからこそできた偉業だと思います。スミス教授は、スプリングフィールド大学に転出し、そちらには彼を称える殿堂が立っています。

日本人にもリベラルアーツを身に付けた人がいます。皇太子妃雅子さまの尊父小和田恆（ひさし）さんがその人です。彼は外交官でありますが、国際的教養人としても有名な方です。名桜大学の客員教授として来沖した小和田さんをお迎えして、那覇から名護に向かう道中、彼が車内で話されたのは、政治や経済の話だけではなく、英文学の話が主でした。それがまた、私がハラハラするぐらい濃密な話でした。世界では日本の外交官は教養がなく話ができないとよく聞きますが、小和田さんはケンブリッジ大学に４年間在籍しリベラルアーツを学んでいるのです。私はアメリカ滞在中ホームステイでお世話になりましたが、家族全員が集まる食卓では、いつも英文学や歴史、農業などの話をするのです。アメリカでは日常的な家庭生活でもリベラルアーツが浸透しています。自然と私も食卓の話題についていけるよう専門外の分野にも目を向けるようになりました。

リベラル・エデュケーションのリベラルとは心を自由にする。エデュケーション（教育）は、自分の専門分野だけでなく他の分野にも目を向けることなので一生涯取り組まなければならない作業です。

リベラルアーツの基本は知性と感性の調和です。

人間らしく生きるためには、考える知性だけではなく他人の気持ちになれる感性が重要です。感性を研ぎ澄ますには、文学、歴史、哲学などに目を向けることが大切であり、また同時に論理的思考が身に付いていきます。

名桜大学の桜のロゴマークですが、菱形の中の五つの花びらは、真・善・美・聖・健を表し、菱形のその４辺は四海、世界同胞の結束を表現していると私は解釈しています。



## 国際学群

国際学群は、本学最初の学部として設置された国際学部の３学科、国際文化学科、経営情報学科、観光産業学科を全面改組して誕生した教育研究組織です。国際学群は、多様化する学生のニーズに対応するために、2007（平成19）年４月、国際文化専攻、語学教育専攻、システムマネジメント専攻、情報システムズ専攻、観光産業専攻の５専攻の教育プログラムでスタートしました。その後、情報システムズ専攻内のコースであった診療情報管理士課程が、2009（平成21）年４月に診療情報管理専攻として昇格・新設され、同年４月にシステムマネジメント専攻を経営専攻に名称変更し、現在、国際学群は６専攻の教育プログラムを運営しています。

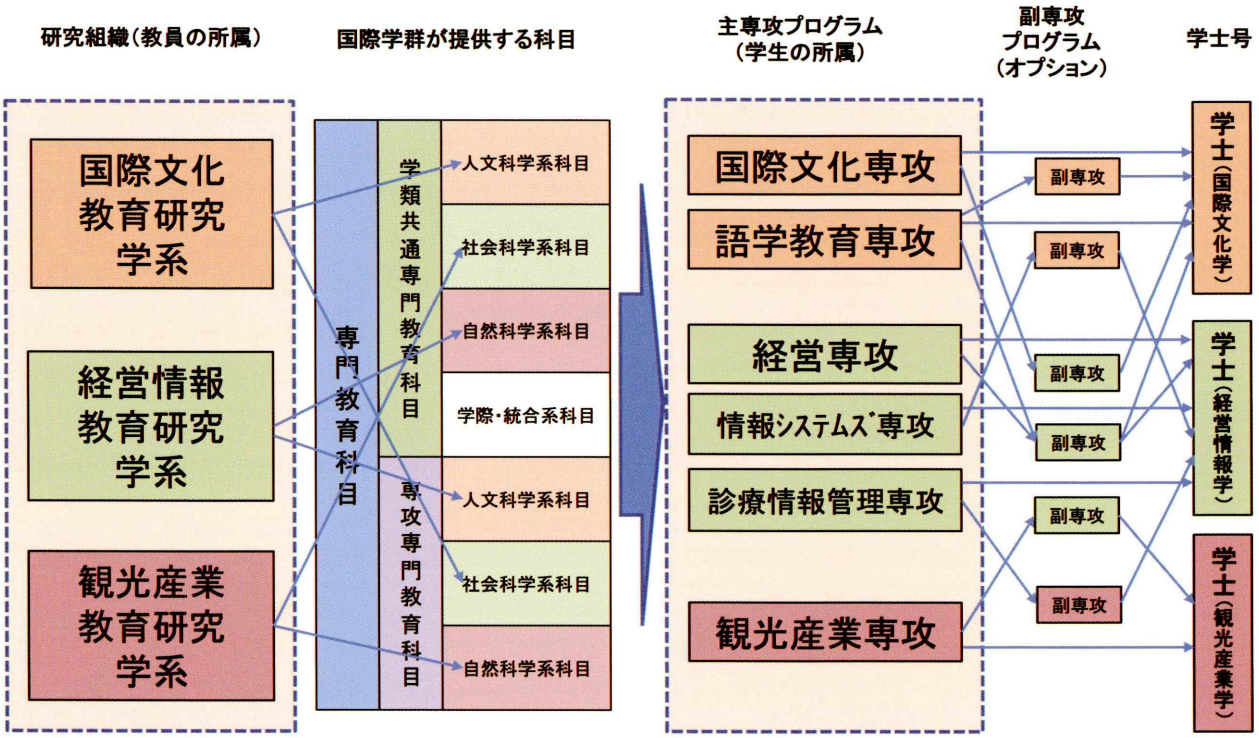
国際学群は教員の所属と学生の所属の概念が異なります。教員の所属は研究組織として、国際文化教育研究学系、経営情報教育研究学系、観光産業教育研究学系の３学系で構成されます。学生については、現在履修している教育プログラムが所属名となります。すなわち、１・２年次は「国際学群国際学類」であり、２年次修了までに専攻に所属する条件（60単位以上修得）を満たすことにより、３・４年次に主専攻プログラムに所属することになります。たとえば、「国際学群国際学類国際文化専攻」というようになります（図１参照）。

国際学群の母体となった国際学部の開学当初の設置理由に、「国家間のボーダーレス化が地球規模で進み、社会が高度に情報化して行く今日、異文化を深く理解し、国際語を操り高度なメディアを使いこなしながら世界を舞台に活躍する日本人像が強く求められている」、「沖縄県が21世紀に向けて自立的発展をしていくためには、どんな分野で活躍するにしても、堪能な語学力と国際文化についての深い理解、そしてこれからますます進むであろう情報化に対応できる人材が必要である」という記述があります。これは、細かな表現は異なりますが、開学から20年経過した現在の国際



講義棟

図１　学群制のイメージ図




学群のディプロマ・ポリシー（diploma policy；卒業認定及び学位授与に関する方針）と一致するものであります。

国際学群のディプロマ・ポリシーは、「国際的視点から問題を捉え、解決できるような地域・国際社会に貢献できる人材を育成する」となっています。さらに、これを実現させるためのカリキュラム・ポリシー（curriculum policy；教育課程の編成方針）には、「国際学群の教育目標は21世紀地球市民として『地域社会及び国際社会で活躍できる人材』を育成することである。この目的のため、全ての教養教育科目を基礎とする」とあります。このカリキュラム・ポリシーに従い、国際学群に入学した学生は、まずコンピュータやレポートライティング等のスキル科目と外国語・ライフデザイン・沖縄理解・思想と論理に関する基礎科目を学びます。次に人文科学・社会科学・自然科学の多彩な教養科目を選択受講して視野を広げます。その後、２年次に提供される各専攻の基礎演習を受けて、自身の興味関心と将来計画に合致する専攻を選び、３年次から専門分野の学習と研究に打ち込んでいきます。主専攻を決めた後も、他専攻の専門科目を体系的に修得することで「副専攻」という第２の専門性を獲得することができます。また、正課外カリキュラムとして、多くの国際交流協定大学（14ヵ国及び１地域、28大学）への留学プログラムを用意しています。

名桜大学国際学群の門をくぐった学生諸君には、これらの教育プログラムを通して広く世界に目を向け、多様な文化や価値観についての理解を積極的に深めて、本学卒業後においても「地域社会及び国際社会で活躍できる人材」へ限りなく成長し続けることを願ってやみません。

（国際学群長・佐久本功達）

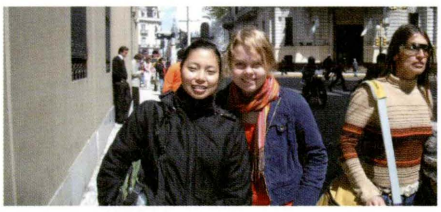
## 国際文化教育研究学系

国際文化教育研究学系を構成する国際文化専攻および語学教育専攻について紹介します。初めに国際文化専攻について、次に語学教育専攻について紹介します。

まず、国際文化専攻は2014（平成26）年４月現在、９名の専任教員と複数の非常勤講師で構成されています。ユニークな教員が多く、型にはまらない自由さを特徴としています。本専攻では国際理解、特に太平洋を取りまく日本・沖縄を含む東アジア、東南アジア、オセアニア、中南米地域について、文化、歴史、言語、社会、政治、環境など総合的な理解をめざしています。現地語の高い運用能力とともに、豊かな国際性と強い精神的支柱を持った、日本でも世界でも、自身の場で自身の力を十分に発揮して活躍できるグローバル人材を育成しています。

本専攻での教育は次の四つの特徴をもっています。第一に、３年次の夏期休暇を利用して「現地実習」が行われます。現地体験の豊富な教員とともに、「中南米」、「東アジア」、「東南アジア」、「沖縄」、「日本」、「国際協力」の六つのコースに分かれ現地での生活や大学での講義を体験します。終了後は６コースの参加学生が一堂に会して、実習の成果を報告会で発表します。

報告会では、現地実習で得られたことや失敗したことが披露され、それぞれの経験を全体で共有できる場ともなっています。第二に、個々の専門として学ぶ地域について、単に体験するというだけでなく、比較芸術論や国際関係論など、理論として整理・理解できるような講義が多く用意されています。第三に、外国語の習得にも力を入れています。英語はもちろんのこと、スペイン語、ポルトガル語、タイ語、韓国語を含む８ヵ国の言語の学びを用意しています。国際社会で活躍するために必須のツールを、恵まれた環境で手に入れることができます。第四に、鍛えた外国語の実力を現地でより磨きあげるため、協定大学との間での交換留学が盛んです。留学中に得た友人や社会とのネットワーク、初めてづくしの異文化体験は、かけがえのない一生の財産となっています。







1
2
3
4

1 アルゼンチン留学
2 アメリカ留学。アメリカンフットボール見学
3 語学教育専攻・与那覇恵子教授（左）
4 国際文化専攻・山田均教授の講義風景

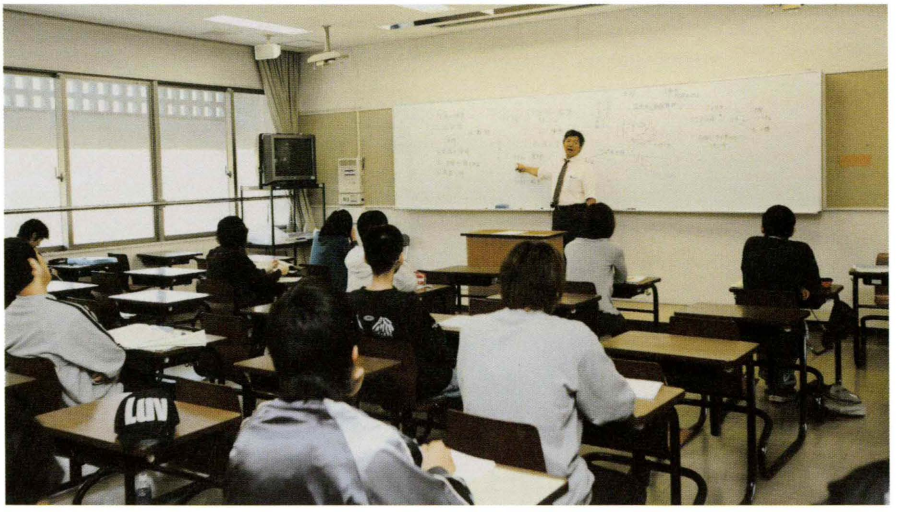
次に、語学教育専攻は2014（平成26）年４月現在、９名の専任教員と複数の非常勤講師で構成されています。国語としての日本語、国際語としての英語、それぞれの専門力を養成することによって自己のアイデンティティを確立し、国際人として活躍できる人材や地域社会および国際社会に貢献できる各分野の専門家を育成しています。

英語コースでは、その視野を国際社会へと広げ、世界の共通語としての英語を通して他国の文化・社会を理解し、自身を世界へと発信できる力を養成しています。日本語コースでは、日本の言語・文化についての知識を深めると同時に他者を理解し、自身を的確に表現できる力を養成しています。英語コースにおいては、英語４技能やコミュニケーションを習得する科目、言語的知識を学習する科目、文学を学習する科目、また、英語圏諸国の文化・社会を学習する科目などがあります。日本語コースにおいては、日本語４技能を習得するための科目、言語的知識を学習する科目群、文学を学習する科目、さらに、日本の文化・社会を学習する科目などがあります。実践的科目では、アメリカやオーストラリアでの現地体験学習を重視した３週間の「英語圏現地実習」と教育現場での実習活動としての「教育支援実習」（名護市内にある小学校・中学校・高等学校での教育支援、沖縄県内にある日本語学校での教育支援）が単位化されています。英語圏現地実習では、語学学校、ホームステイ、現地小学生との交流、現地調査などの特色ある取り組みを行っています。また中学校・高等学校英語教員免許や日本語教師の資格取得のための科目も充実しています。

国際文化専攻あるいは語学教育専攻の卒業生は、一般企業をはじめ公務員、中学・高等学校の教諭、国内外のNGO・NPO法人、在外領事館などを含むさまざまなフィールドで活躍しています。国内外の大学院へ進学する学生もいます。

国際文化教育研究学系は今後とも建学の精神を念頭に教育活動・研究活動・地域貢献に取り組む人材を育成していきます。

（国際文化教育研究学系長・伊藤　孝行／小番　達）



# 経営情報教育研究学系

本学系は、沖縄県内にあった既存の経営系あるいは商学系の学部学科との差別化をはかるため、「国際学部経営情報学科」として設置されました。今でこそインターネットの普及により情報という視点は当たり前の世の中になりましたが、開学当時は画期的なカリキュラムをもつ特色溢れる学科としてスタートを切ったのです。2007（平成19）年４月に学生中心の履修を推進するため学群・専攻制度を取り入れましたが、その精神は経営情報教育研究学系となった今でも変わることなく、時代を見据え、社会に役立つ人材育成を心がけて日々努力しています。本学系の特色としては、①経営と情報の融合、②インターンシップの導入、③理論と実践、④社会ニーズを取り入れた学系体系、以上四つを指摘することができます。その四つの特色について、以下で詳しく紹介します。

## ■経営と情報の融合

名桜大学の開学当初、経営学分野で企業といえば、労働力、原材料や商品、そして資本（ヒト、モノ、カネ）でしたが、経営情報学科の名が示す通り、情報を経営資源の一つと考えた学科として産声を上げました。

教育内容は、情報分野のコンピュータサイエンスを単に技術系や工業系としてではなく、経営組織や経営戦略へ与える影響などを考慮したカリキュラム体系を目指しました。今日のクラウドコンピュータやビッグデータの流行は、経営情報学科がいかに先駆的だったかの証左です。

## ■インターンシップの導入

2007（平成19）年度のインターンシップは、1996（平成８）年度に比べ約４倍となる約７割の大学で実施されています。今日ではインターンシップ導入は社会的に認知されてきました。名桜大学の第１期生からインターンシップを必修としていた経営情報学科は、沖縄県で最初にインターンシップを行った大学でした。そのため、モデルとなる先進校もありませんでしたし、また、受け入れ機関側もインターンシップに馴染みが無かったものですから、苦労の連続でした。PDCAサイクルで改善を行い、現在、インターンシップ先は、沖縄県内にとどまらず、沖縄県外、そして、海外まで広がっています。





上・ITスクール＝2014
下・IT津梁まつり出展＝2014

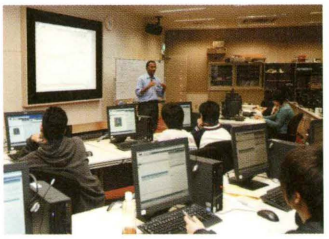





上・ガクPリーグ2013
右・学外店舗経営 café de Meio＝2013

## ■理論と実践

経営、情報に限らず、経営や情報通信技術の進歩は、生き馬の目を抜くような状況といわれるほど、目まぐるしいものがあります。このような激変期に限らず、現実が先で、理論は後、あるいは、理論と実践の乖離がみられます。経営情報教育研究学系では、乖離を少しでも接近させるためのカリキュラムやカリキュラム外で理論と実践の接近を行っています。たとえば、シリコンバレーへの教員や学生の派遣、ベンチャービジネスや最新ビジネス事情では、理論に加え、県内の起業家らを招聘し、企業経営や国内外での活動といったビジネスの現場にて講話をいただきながら、幅広い視野の養成に努めています。また、プロジェクト学習、実践型インターンシップ「ガクPリーグ」（株式会社ファミリーマート主催、2007年度より実施）、経営及び情報システム特別講義（2013年度より実施）、学外店舗経営 café de Meio（2013年度に実施）においては、学生が、実際に企画や運営に携わることで社会組織と座学の関連を体得する実践を行っています。





上・講義風景
下・インターンシップ報告発表会＝2014

## ■社会ニーズを取り入れた学系体系

少子高齢化に伴い、社会保障に占める医療費が年々増加しています。医療費の増加を抑制し、適切な医療処置とリーズナブルな医療価格を提供することは、日本のこれからの社会保障や高齢者福祉に不可欠な社会制度です。そのためには、経営、情報、そして医療に長けた人材の育成が必要です。医療で新たな人材として要請されたのが診療情報管理士です。経営情報教育研究学系では、社会のニーズに応えるため、九州地区の大学で初めて診療情報管理専攻を設立しました。今後とも、経営情報教育研究学系の知的資源が活かせる社会ニーズへの取り組みをさらに進める予定です。

## ■その後の卒業生の活躍

このように先駆的な教育体系と内容によって、経営情報教育研究学系からは幅広い分野へ多くの人材を輩出してきました。今後も地域や国内はもちろんのこと、世界中で活躍できるリーダーを養成していく所存です。

（経営情報教育研究学系長・アリ,ファテヘルアリム F）








上・診療情報管理士認定合格報告＝2013
左・プロジェクト学習最終発表会＝2014

## 観光産業教育研究学系

観光産業の成長は、多くの産業へさまざまな効果を波及させることから、経済発展の原動力として世界的にも期待されています。とくに、観光は沖縄県の基幹産業であり、今後はさらなる質の向上、国際的に通用する観光リゾートの形成などが求められています。

観光産業専攻は、こうした社会のニーズに対応し、観光に必要な理論と現場で求められる実践を同時に学ぶことで、地域社会および国際社会における観光産業の発展に貢献できるスペシャリストを育成します。

### ■産官学連携の中での人材育成

開学以来掲げてきた地域との連携をさらに強化し、産官学連携の中での人材育成に努めています。

### ■地域に貢献できる人材を育成

生きた教材である「やんばる」の森での教育・研究活動を通して、自然・環境に配慮した観光振興や歴史・文化プログラム等、視野の広い観点から地域に貢献できる人材を育成します。

### ■リーダーシップを持ち、国際観光を視野に入れた人材を育成

観光産業等を担う地域のリーダーの養成と、国際観光を視野に入れた観光の方向性を戦略的にコーディネートできる人材を育成します。

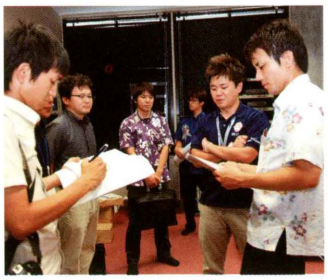
観光産業は歴史、文化、自然、交通、イベント、レジャー、ホスピタリティなど複合的で多岐にわたる産業です。とくに、本学は本島北部地域に位置しています。リゾートホテルや観光施設の集積地であると同時に「やんばる」と呼ばれる国の天然記念物や貴重な固有生物が生息する自然に恵まれた地域です。

そこで、観光産業専攻では、「観光政策ビジネス」、「環境・エコツーリズム」、




海外インターンシップ
（マレーシア）

「観光文化」の三つの研究領域から観光を総合的にとらえることで、観光を取り巻く経済社会に対する洞察力を備えた人材の育成を行っています。



## ■観光政策ビジネスコース

観光行政を含む産業界が一体となった地域振興と保全のあり方について学びます。観光施設などのハード面とホスピタリティやホテルビジネスなどのソフト面を体系的に学び、政策立案の方法について考えます。

【主な専門科目】

●観光政策論　●観光事業論　●観光開発論Ⅰ・Ⅱ　●沖縄観光
●ホテル経営論　●ホテル計画論　●旅行業経営論
●ホスピタリティマーケティング論など

## ■環境・エコツーリズムコース

やんばるの自然環境の中での野外活動や野生生物観察を通し、観光の保全と持続可能な活用方法について考えていきます。また、土壌や水質などの環境要素分析などを行う教科や野外実習を通し、自然環境を理解します。

【主な専門科目】

●エコツーリズムⅠ・Ⅱ　●環境アセスメント論Ⅰ・Ⅱ
●環境調査法　●自然観察指導法　●沖縄の天然記念物など

## ■観光文化コース

やんばるの文化や芸能・歴史に関する幅広い知識を学び、英語・中国語・韓国語など、通訳案内士に必要な外国語能力を身につけます。また、「やんばるの文化の商品化」をキーワードに観光商品について考えます。

【主な専門科目】

●観光文化論　●島嶼文化論　●観光人類学など

（観光産業教育研究学系長・大谷健太郎）



観光政策ビジネスコース講義風景

## 人間健康学部

名桜大学人間健康学部は2005（平成17）年にスポーツ健康学科が開設され、今年10年目を迎えました。また2007（平成19）年には看護学科が開設され、今年８年目を迎えています。まだ歴史の浅い新しい学部ですが、教員の入れ替わりが多くあり、毎年新しい教員を迎えて、脱皮を重ねてきました。両学科とも、創生期を過ぎ、そろそろ落ち着いて次の飛躍を図る時期だと考えています。

教育の一環で両学科の学生が中心となって、地域の健康促進のために貢献していることは、本学部の大きな成果です。しかし、スポーツ健康学科は就職率の向上、看護学科は国家試験の合格率の向上という課題が現在顕在化してきました。そのために、本学部の全学年で学生のジェネリック・スキルを測定するために、2013（平成25）年度よりPROG（Progress Report on Generic Skills）を導入しました。

2008（平成20）年の大学教育審議会答申『学士課程の構築に向けて』（『学士力答申』）は、ジェネリック・スキルを「知的活動でも職業生活や社会生活でも必要」な汎用的技能として提示し、各専攻分野を通じて培う「学士力」（学士課程共通の学習成果）の一部として位置づけています。『学士力答申』が、ジェネリック・スキルとして挙げているのは「コミュニケーション・スキル」「数量的スキル」「情報リテラシー」「論理的思考力」「問題解決力」の五つです。さらに、態度・志向性として「リーダーシップ」「社会的責任」「倫理観」「自己管理力」「生涯学習力」が挙げられています。



人間健康学部実験実習棟

また、経済産業省がうたっている社会人基礎力も「考え抜く力」「チームで働く力」「前に踏みだす力」として同様の能力を求めています。

PROGではジェネリック・スキルとして知識をもとに課題解決に当たる能力＝リテラシー、経験からの行動特性でどんな仕事にも転用できる能力＝コンピテンシーを測定しています。

2014（平成26）年４月に実施した結果、スポ健学科の全学年371人の全体集計では、看護学科の全学年合計355人や他大学の国公私立192校の約11万人の平均値と比べて、リテラシーは低いがコンピテンシーが高いという結果が出ています。学生や教員への解説では、学生の反応も良く、自分の強み、弱みがわかり、結果は納得のいくものでした。来年度まで意識して能力を伸ばしたいと大部分の学生が回答をしていました。

今後は、毎年継続して詳しいデータを分析していく中で、カリキュラム改正、授業改善、学生指導、就職活動、国家試験の受験指導などに役立てていく方針です。

近い将来の構想として本学部の発展のためには、教員の研究室確保のための人間健康学部研究棟、設備の整った多目的グラウンドや体育館、野外活動の施設、実験研究室、看護実習室等が拡充整備されなければなりません。学部の卒業生のために、看護学研究科の充実、スポーツ科学研究科の開設など多くのビジョンがあります。

しかし、本学部は遠い将来必要でしょうか？　それぞれ独立して、スポーツ健康学部と看護学部に分かれていくことを私は希望します。

（人間健康学部長・稲垣　絹代）





看護学科棟

## スポーツ健康学科

人間健康学部スポーツ健康学科は、2005（平成17）年に設置され、大学開学20周年を迎える年と同じくして、2014（平成26）年で開設10周年を迎えます。公立大学としては唯一のスポーツ・健康系の学科であり、その注目度は年々大きくなってきているオンリーワンの学科です。

スポ健学科の教育理念は、沖縄の自然環境を生かした地域社会の中で、スポーツ、健康、ウェルネスを基盤とし、人間の健康を理解した「健康支援人材」を養成することを理念として掲げています。また、教育目標としては、(1) 健全な倫理観と判断力を養うこと。(2) 健康とスポーツに関する基礎・専門的知識を身につけること。(3) 社会生活を営む上で必要な人間理解、社会理解、環境理解ができるコミュニケーションの能力を養うこと。(4) 健康・スポーツ指導および教育に対応した能力を養うこと。この四つを目標としています。

具体的には、学生が主体的に考え行動し、社会人基礎能力や専門的知識を体系的に習得できるよう「教養教育科目」「専門基礎教育科目」「専門教育科目」からなる独自のカリキュラムを編成し、健康支援人材のスペシャリストの養成を行っています。

専門基礎科目は、「スポーツ」「健康」「ウェルネス」を理解する基礎となる科目を設置し、専門教育科目への導入をしています。

専門教育科目は、「健康づくり指導・実践」の高度な専門性を習得することを目的とし、体系的な知識を応用し、実践する能力を養う科目で構成を行っています。また、2011 (平成23) 年度からは「スポーツ領域」と「健康領域」の二つのコースを設定し、より専門性を重視した教育課程の編成を実施しています。「スポーツ領域」は、スポーツパフォーマンスの向上やアスリートの養成、ハイレベルなスポーツ指導者・コーチ、実践的な保健体育教員の養成を目指すために必要なスポーツ科学の理論や実践を学ぶコースとなっています。 また「健康領域」は、ヘルスプロモーション、養護、福祉などを通じて、個々ならびに社会全体のウェルネスを向上させ



るための健康科学の理論や方法論を学ぶコースとなっています。これらのコースの先にあるゴールは、現状にとどまることなく、次なる「NEXT 10 YEAR」に向けた「スポーツ健康学科の教育理念」の実現といえます。

また、学生の社会人基礎力として重要とされるコンピテンシーを伸ばすために、ユニークな主体性教育を行っているのも特徴の一つです。オリエンテーション、オープンキャンパスなどの行事では、学生リーダーが中心となって企画・運営を行い、教員がそれをサポートし「自ら考え行動し、やりきる」ことを実現するための主体性教育を教員・学生が一丸となって行っています。このような取り組みにより、リーダーシップ性の高い学生を多く育成することを目的としています。


室内プール

同学科で取得できる主な資格・免許は、中・高等学校教諭一種免許（保健体育）、養護教諭一種免許、第一種衛生管理者免許、健康運動指導士受験資格、日本トレーニング指導者（JATI）受験資格、日本体育協会公認スポーツ指導者資格、健康運動実践指導者、社会福祉主事任用資格などがあり、カリキュラムと平行しながら健康支援人材のスペシャリストとなるために、それぞれの目標に応じた資格取得が可能です。

学生の多くは、授業はもちろんのことクラブ活動（陸上、硬式野球、ハンドボール、バスケットボール、サッカー、バレーボールなど）やボランティア活動（ヘルスサポート、食育劇、教育支援など）にも積極的に参加し、多くの大会で入賞実績があります。また自治体と協働した健康支援の実現などの成果もあげています。

卒業生は、現役で教員に正式採用された学生をはじめ、多くの学生が保健体育教員や養護教員として活躍しています。また運動増進施設、消防士、警察官だけでなく学科の素養を生かし、一般企業への就職など幅広い分野で活躍し、健康支援人材のスペシャリストとして巣立っています。

最後に、スポーツ健康学科は、次なる「NEXT 10 YEAR」に向け、新たな中・長期的なビジョンから、さらに発展し続ける学科となることを目指していきます。

（スポーツ健康学科長・高瀬　幸一）

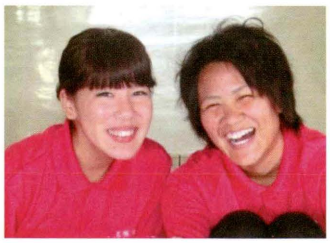

トレーニングルーム

## 看護学科

名桜大学人間健康学部に看護学科が2007（平成19）年に創設され今年で８年目を迎えました。創設時には、全国にこれまでにない参画型看護教育を実施するという意気込みをもち県内外から16名の教員が着任しました。着任の前年度から教員が全国から名桜大学に参集し、事務の皆さんと共に、「どのような学生を育てたいのか」をテーマに、初めてカード図解法によるグループワークを行っています。このとき、教職員一人一人の思いや願いが１枚の模造紙にまとめられ、明確な教育の方向性を確認することができました。それから学科の教育がスタートしたのです。

参画型看護教育とは何を目指すものかの理念を共有し、そのための教育方法の模索を教員たちもしました。これまでの経験をもちより、知恵を絞り、教養演習科目など一つ一つシラバスを組み立て実施し、その振り返りを行い、さらに洗練していくことに取り組みました。教員も試行錯誤をしながら、学生と共に教育内容を整備していったというのが実際のところでしたが、我々教員にとっても他大学では体験できない充実した手応えのある時間でした。「これは参画型看護教育ではない」と学生から指摘を受け、教授方法を見直したこともあり、教員と学生が協働して学科の授業を展開していきました。









設置当初、県外から来た教員の多くが地域の方々とふれあうことで、地域を理解し、また地元の先生方と共に地域に出向き、ボランティア活動を展開しました。これが、現在に続く名護市宮里地区の朝市健康相談活動です。ここに学生たちもボランティアとして参加するようになり、朝市の参加者は徐々に増加し、地元の皆さんとの信頼関係も年々強くなっていきました。「名桜の学生のためなら、何でも協力してあげるよ。私たちはモルモットにでも何でもなるよ。あなたたちに将来りっぱな看護師さんになってもらいたいからね」と婦人会長さんや老人会長さん、区長さんから励ましの言葉をいただいています。こうした取り組みを土台に、授業にも地域の皆さんが参加し、学生の企画するプログラムにも参加していただき、また、その評価をサービスの受け手の側からフィードバックしていただいたりと、現在では専門科目の授業のみならず教養演習のフィールドワークや卒業研究など様々な科目でも協力していただいています。

看護学科の教員や学生による健康相談活動は、名護市内では本学がある為又地区、名護市営市場（ゆんたく健康カフェ）、本部町漁港の市場健康相談活動として展開しています。また北部だけではなく路上生活者の方々のために那覇市の与儀公園内でも不定期ですが、健康相談活動を行っています。これらを含めて名桜大学行事などへのボランティア活動に主体的に参加する学生が多く、上下学年の交流が盛んに行われているのも看護学科の特徴といえます。

また、学生たちは「学生が主人公」となる学びを積み重ねられるように看護学科では、一人一人が自分の目標に向かって歩み、その成果をまとめ

てポートフォリオとして作成し、これを４年間活用しています。就活時の面接試験で利用する学生もいますが、困難な状況を何とか乗り切りここで成長した経験、自分がやり遂げたことなど、一人一人のポートフォリオは将来社会人となったときに大きな自信につながる成果として蓄積されるのです。

看護学科では2013（平成25）年度現在までに336人の卒業生を輩出し、そのほとんどが医療機関において看護師、あるいは地域の行政機関で保健師として勤務しています。また卒業後に助産師養成コースに進み助産師資格を取得したり、あるいは大学院に進学した者もいます。特に今年度は、看護師として臨床経験を積んだ１期生が本学の教員（助手）として着任したことは、私たち看護学科教員にとっては、一つのエポックメイキングといえます。

全国の看護系大学の数は234課程となり養成される大学生の数は19,454人となっています。看護基礎教育の大学化は急速に進み、まだ今しばらくは看護系大学数の増加が見込まれています。このように看護系大学が急増する中で、本学の看護学科における教育の独自性は何なのか、違いは何かが問われることになります。幸いなことに名桜大学看護学科の教育理念に基づき、学生が主体的に様々な活動に参加する仕組み作りと、それをコミットメントする教職員の尽力があったことが、本学看護学科のユニークな看護基礎教育の特徴を生み出しているものと思います。

８年目を迎え開設当初の教員は少なくなり、学生層も公立大学化以降変化してきています。成長するということは自己および他者との対話、地域との対話を通して、時代の要請や変化に向き合い、自分自身に向き合っていくほかありません。本学の看護基礎教育はどうあるべきか、常に変化と前進が求められていると思います。その中でも変わらないものは何か、守るべきものが何かも自覚し歩まなくてはならないと考えます。

これからも地域の皆さまと共に、学生が主人公となる学び舎を目指して看護学科教員一同研鑽してまいりたいと思います。

（看護学科長・鈴木　啓子）

















## 国際文化研究科

名桜大学大学院国際文化研究科（修士課程）は、グローバル化、情報化が進展する中、国内外における諸課題の解決に必要な高度の能力と専攻分野における研究能力を養う人材育成を目的に、(1) 高度の専門職業人の養成、(2) 高度の研究能力を有する教育・研究者の養成、(3) 地域の産業及び社会文化の振興の諸問題に的確かつ柔軟に対応できる人材の養成を掲げています。

国際文化研究科は「言語文化」「社会制度政策」「経営情報」「観光環境」及び「人間健康科学」の５教育研究領域から構成され、目的で掲げた人材の養成に邁進しています。また国内外からの入学生や社会人入学に対応するために昼夜開講制やセメスター制度を採り、柔軟なカリキュラムと講義の提供を行っています。教員も国内外から優秀な人材が参集し国際性豊かな陣営となっています。英語での講義も提供されています。

名桜大学は沖縄県の最北端に位置する公立大学です。これをどう捉えるかは、発想次第だと思います。私は最北端（＝最先端）との捉え方をしています。隣接するボーダーに最も近い場所、境界として様々なインタラクションが起こっている場所です。名桜大学の位置する“やんばる”は、社会が、政治が、文化がドラスティックに変化し、また、社会環境・自然環境においても大きく変化している場所です。“やんばる”がマスコミの話題として取り上げられることは少なくありません。奄美・琉球世界自然遺産の候補地の一地域として“やんばる”（この場合は国頭村・大宜味村・東村の３村を指す）が挙げられています。“やんばる”以外に奄美大島、徳之島、西表島が候補地として挙げられていますが、生物の多様性が最も高く、固有種が最も多い地域が“やんばる”です。一方、環境改変、種の絶滅（固有種を含む）の可能性が最も高い地域でもあります。また、政治の問題としては、辺野古への基地移設は日本の政治が大きく関わる問題です。過疎化や地域の活性化の問題、医療、沖縄観光のあり方など、いろいろなことが現在進行形で変化しています。研究フィールドに近接する本研究科は、学問・研究に没頭する場所としてこれ以上の場所はほかにはないのではないかと思います。

“Think globally, act locally”との表現があります。「世界視野で考え、足元（地域）で行動する」との意味と理解しています。また、この逆で“Think locally, act globally”との表現もあるようです。「足元（地域）で考え、世界を相手に行動する」と理解されていると思います。いずれも、重要な発想であり、“local”足元（地域）で考え・行動をすることが重要だと理解しています。また、このことは、両極端であるように理解されがちなglobalとlocalが表裏一体の関係性にあることも意味しています。“global”な人材には、“local”で考え・行動することが求められます。本研究科は、地域性を活かした様々な課題＝（最先端の課題）に挑戦する環境が内部的にも外部的にも揃っている場所なのです。



（国際文化研究科長・新垣　裕治）

## 看護学研究科

名桜大学大学院看護学研究科（修士課程）は、看護学科（学士課程）の設置完成年度を迎えると同時に、2011（平成23）年４月に設立され今年で４年目を迎えました。

本研究科は、学士課程設置の趣旨である「過疎化がすすむ沖縄県北部の保健・医療・福祉の健康支援人材を養成する。やんばるの健康長寿社会を育んできたケアリングの文化に根ざした看護学教育を行う」を基盤に修士課程が設立されました。このやんばるの地は、豊かな自然と文化に恵まれている一方で、過疎化、山間へき地、離島の多い地域であることや、医療機関や療養施設・医療人材の慢性的な不足、医師不在による産科病棟の閉鎖、妊産婦の低い受診率、山間へき地の孤立した育児環境、生活習慣病の増大、心を病む人の増加、救急医療や在宅療養資源の不足など人々の健康を守るには多くの課題を抱えています。しかしながら、沖縄の歴史の中で「ゆいまーる」という相互扶助の精神が息づいており、恵まれた自然の中で医食同源の生活を送ってきた長寿の人々が多く暮らす地域でもあります。これらの地域における健康問題を解決するために、アドミッションポリシーでは、沖縄のケアリング文化を基盤として、新たな看護実践方法を開発する高度な看護専門職業人の育成と看護学研究者や教育者の育成を目的に、(1) 豊かな人間性と高い倫理観を持っている人、(2) 臨床看護において経験豊かで、自立的に探求する人、(3) 広く社会に貢献し、国際社会の中で活躍する意欲のある人と掲げています。

本研究科では、現職の看護師や保健師等の社会人が仕事を続けながら学修できるように、昼夜開講制の導入、長期履修制度の導入、施設の夜間利用ができるように教育環境を整備しています。本研究科の具体的な専門分野として「高齢者リハビリテーション看護学」「地域・在宅看護学」「精神看護学」「母性看護学」「小児看護学」「基礎看護学」「看護学教育」などがあります。これらの専門分野における看護学の実践理論を探求し、「知」の発見や「創造」の喜びを感じることができるとともに、研究成果が臨床の場や教育の場で活用されることを期待しています。

本研究科に2014（平成26）年度入学された８名は、医療・福祉の現場で管理職に就かれている方や看護学校で教員をされている方、キャリアアップを目指している方など多方面にわたります。本研究科では、基盤科目や専門分野の科目を履修しながら研究計画、調査、修士論文のまとめ、そして最終試験と、相当の探究心と努力・忍耐力を要します。大学院生は、教員から論文指導を何度も受け、論文の書き直しを繰り返し、教員と協働しながら並々ならぬ努力の結果、修士論文を完成させています。修士論文の発表会では、統合失調症の終末期患者を看護する看護師の体験プロセス、認知症ケアの評価、産褥早期の睡眠ケアの効果、新人看護師のチーム参画プロセスとチームワーク・コンピテンシーに関する研究など、新たな看護実践方法の示唆が報告されました。本研究科には社会人の大学院生

が多く、修了後には「わたしたち、よく頑張ったよね」との声が聞かれました。

看護・医療の変化は日進月歩です。つい最近、「特定行為に係る看護師の研修制度」に関する保健師助産師看護師法（37条２）が改正されました。この法改正により、看護の業務拡大による看護系大学院での高度実践看護師教育や高度実践力のある助産師教育が変革されると考えられます。本研究科もその流れに遅れをとらないように教育課程の改定を検討しながら、沖縄県北部の保健・医療・福祉に寄与できる人材を育成していきたいと考えています。

（看護学研究科長・小西　清美）







上・講義風景
下・修士論文発表会

# 名桜大学附属図書館

## ■経緯・概要

かねてから大学附属図書館は大学の心臓部、大学の顔などと形容されてきました。学生や教員は学習、研究のプロセスで多くの資料に関わり、それらを集積している図書館は、教育・研究になくてはならない中枢機関とされているからです。

近年、その図書館が大きく変容しつつあります。それは急速な電子化に伴う変化と革新的な技術の進歩を背景とする社会変化にあります。本学においてもこうした状況変化に適切に対応するために、図書館機能を効果的に発揮できる環境整備を図るとともに、教育・研究支援に積極的に関与していく職員の専門性も併せて求められています。

本学附属図書館は1994（平成６）年の開館にあたり、学習や研究に必要な新規購入図書のほか、篤志家や研究者などの方々から数多くの図書資料の寄贈を受けました。なかでもハワイで郷土沖縄のため活躍された故湧川清栄氏（今帰仁村出身：湧川文庫）からは、和洋書約２万冊の貴重な図書の寄贈をいただきました。さらに開学に必要な様々な機器・備品類を準備したうえで、蔵書数４万6500冊余りの図書資料を基に開館にこぎつけました。

この間、図書館システムの構築をはじめ、OPACの導入、また地域の方々など学外者にも図書館利用サービスとして開放し、ハード、ソフト面ともに時代に対応した準備を進めてきました。さらに、学内無線 LAN を県内他大学に先駆けて敷設し、ホームページへのアクセスの利便性などを高めました。

2005（平成17）年人間健康学部スポーツ健康学科の増設、さらに2007（平成19）年には、同学部に看護学科が設置され、本館に続いて看護学科棟図書室として開館し現在にいたっています（蔵書数8,230冊：2014年３月現在）。本学図書館は、大学院の夜間講義もあることから、平日は夜間10時



図書館

# 図書館

まで開館（本館）しています。また、看護学科棟図書室においては、学生の実習や国家試験などの学習状況に配慮して、平日は夜間12時（県内図書館最長）まで開館しています。また、本館同様、一般の利用者（北部地区医師会看護学校の学生など:一般は夜間10時まで)にも開放しています。

## ■館内の機能・業務など

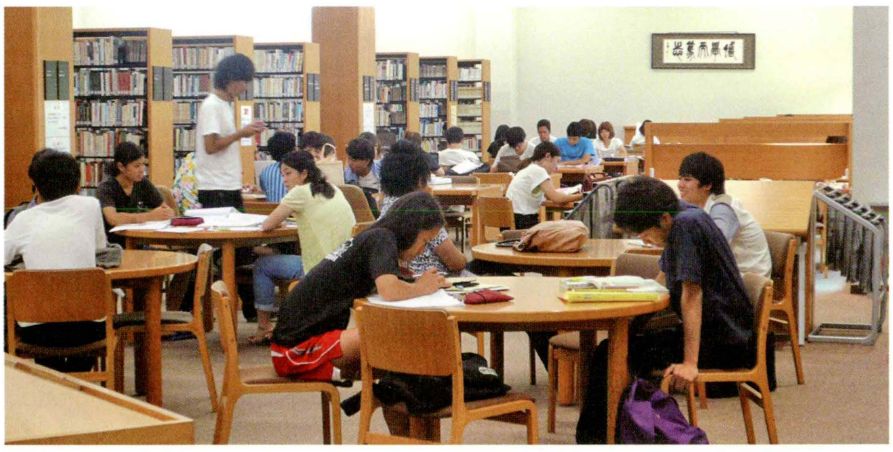
大学図書館の伝統的な業務としては、資料を選択し、収集して組織化（目録作成等）する業務から利用者サービス（貸出、レファレンス、相互貸借：ILL)、情報リテラシー教育（利用案内、文献検索指導)、そのほかに図書館システム及びホームページの管理業務、また、館内の配架・整備、館主催の催事、ミニギャラリーの運営などが挙げられます。

一般図書の蔵書は、全体で約15万５千冊となっています。雑誌は、本館で専門分野を中心に343種（内、外国雑誌97種)、看護学科棟図書室には61種（内、外国紙９種)が配架されています。また新聞は、本館に30種（内、外国紙９種)、看護学科棟図書室に４種が配架されています。

沖縄県内図書館横断検索システムの稼働（2010年～）により、当館のホームページから、沖縄県立図書館のシステムを利用して、当館を含む県内大学図書館、公共図書館などの資料を横断検索できるほか、インターネットで学外からの検索や視聴覚資料の利用、また、18種のデータベース・電子ジャーナルツールを利用して、国内、国外の雑誌・新聞記事などの検索や閲覧ができ、うち16種は図書館のホームページから利用できます。

また、当館恒例の催事の一つとして今年度は、県内在住の高校、大学（短大)、専門学校生また一般の方を対象に、短編小説作品（テーマ自由）を応募していただく「名桜大学懸賞作品コンクール」が第10回を迎える記念すべき年であることから、「10回記念号」を発刊するはこびとなっています。

さらに、このたびの記念事業として、エントランスホールにバジルホール大航海記など約20点余の稀覯書をピックアップして、特別展示会などを開催いたします。なお、当館の稀覯書類は閉架書庫において常時収納されていますので、一部の資料を除き、手続きを経たうえで、館内での閲覧が可能です。



本館閲覧室

## 蔵書数の推移（平成6年～ 25年）

| 年度／区分 | H6 | H7 | H8 | H9 | H10 | H11 | H12 | H13 | H14 | H15 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 和書 | 21,742 | 26,020 | 32,903 | 48,076 | 55,223 | 58,685 | 64,088 | 68,345 | 74,866 | 78,004 |
| 洋書 | 24,780 | 25,552 | 27,243 | 28,742 | 30,921 | 32,785 | 34,790 | 35,372 | 35,969 | 31,187 |
| 合計 | 46,522 | 51,572 | 60,146 | 76,818 | 86,144 | 91,470 | 98,878 | 103,717 | 110,835 | 109,191 |

| 年度／区分 | H16 | H17 | H18 | H19 | H20 | H21 | H22 | H23 | H24 | H25 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 和書 | 79,371 | 85,174 | 93,445 | 96,783 | 100,126 | 102,993 | 105,671 | 108,820 | 111,772 | 115,156 |
| 洋書 | 36,782 | 37,165 | 37,745 | 37,960 | 38,317 | 38,503 | 38,850 | 39,363 | 39,884 | 40,199 |
| 合計 | 116,153 | 122,339 | 131,190 | 134,743 | 138,443 | 141,496 | 144,521 | 148,183 | 151,656 | 155,355 |

## 歴代図書館長

| 歴代館長 | | | |
|---|---|---|---|
| | 初代：伊江　朝章 | 4代：中村　誠司 | 7代：新城　敏男 |
| | 2代：芝野　治郎 | 5代：石川　清治 | 8代：高宮城　繁 |
| | 3代：仲地　　清 | 6代：吉川　安一 | 9代：住江　淳司 |

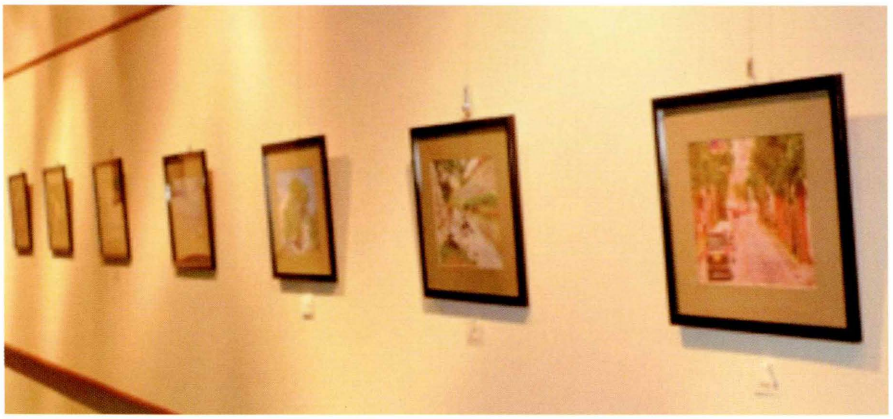
（図書課参与・又吉　純）





広報誌「ひろば」


看護学科棟図書室


本館・ミニギャラリー

# 教養教育センター

## 教養教育センター

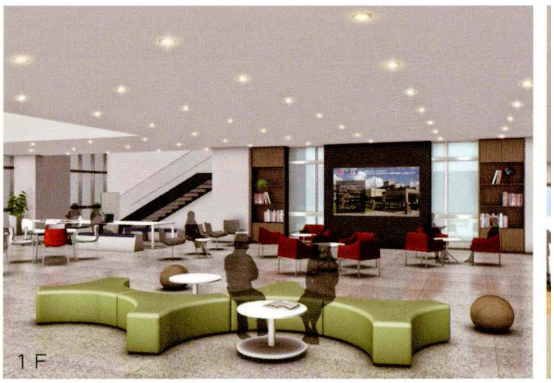
2011（平成23）年４月、名桜大学に全学的な教養教育の企画運営を担う教養教育センターが設置されました。2005（平成17）年４月以降、国際学部（学群）と人間健康学部の２学部体制となったことに加え、学部・学科等がそれぞれ独自に新カリキュラムを編成してしまった結果、開学当時の全学的な教育体系が失われ、あらためて大学独自の教養教育の体系化が求められたことに由来しています。2009（平成21）年４月、瀬名波榮喜学長の提言に基づき、全学教務委員会の下にワーキンググループ及び教養教育センター設置準備委員会が開設され、2011（平成23）年４月、教養教育センターが発足しました。

教養教育センターには、センター長１名、副センター長１名、センター所属の専任教員２名が配置されています。センター長は、教養教育センター運営委員会の審議を経て、教養教育カリキュラムの運用と評価、入学時一斉学力テストの実施、教材や新科目の開発、年次報告書の発行、FD等を他の全学的委員会と連携しつつ推進しています。センター発足以降、本学における教養教育の重要性はいっそう高まり、2014（平成26）年４月以降、教養教育センターを学部等と同等の教育研究組織に位置づけるだけでなく、言語学習センターと数理学習センターを教養教育センター内に再配置し、学生会館SAKURAUM内に教養教育センターを含めた全学教育・学習支援の施設を集約させることで、名桜大学型リベラルアーツ教育を推進する計画が進んでいます。

特色ある教養教育科目として、全ての１年次を対象とした必修科目「教



西側外観






養演習Ⅰ」「教養演習Ⅱ」があり、共通の授業計画の下、オリジナル教材（副教材、学習記録表など）を活用し、先輩学生と協働しながら、グループ学習やフィールドワーク、組織的読書などの活動を通し、生涯学び続けるためのアカデミックスキルの獲得を目指しています。また１年次の学習成果を可視化し、教養教育全体への理解と改革を促進する目的で、教養演習Ⅰポスター展示会（前学期）および教養演習Ⅱ全体発表会（後学期）を全学的に公開しています。さらに新入生を対象とした一斉学力テスト（国語、数学、英語、適性検査）を実施し、各年度の新入生の基礎学力や基本特性の把握を行い、大学教育の点検・評価に対する基礎資料を提供しています。

開学当時の学生便覧（1994年度版）をみると、本学が開学当時からアカデミックスキルを重視していたことがわかります。たとえば「英語Ⅰ」～「英語Ⅷ」８科目（計16単位）が全学必修であったり、第二外国語のすべてにⅠ～Ⅳの４科目が配置されていました。また「言語表現論」（２単位）および情報処理教育科目４科目（８単位）も全学必修となっていました。2016（平成28）年度の新しい教養教育カリキュラムでは、外国語力、数理的能力、文章力を育成できる教育スタッフの確保・育成、そして国際学群および人間健康学部との連携、さらには学生会館SAKURAUMに集約された学生・学習支援組織との連携を推進していくことで、名桜大学型リベラルアーツ教育の目標と方法を具体化させることが課題となっています。

（教養教育センター長・木村　堅一）

**SAKURAUM 命名の由来**

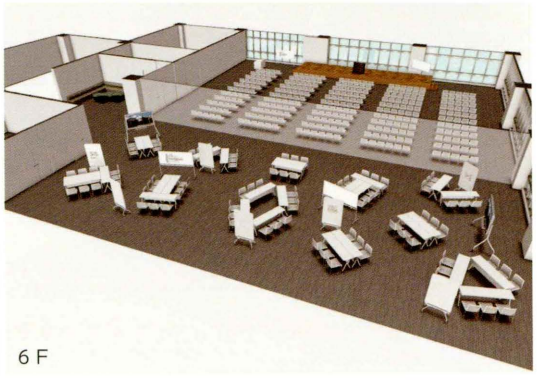
名桜大学の「桜」（サクラ）のイメージと、ドイツ語で空間を意味する「Raum」（ラウム）を合わせた造語。「サクラウム＝桜生む」ということで、この施設で新たな教育の原動力が生まれることが期待されています。

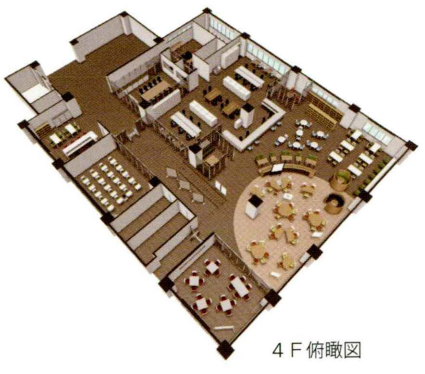



3Ｆ


5Ｆ


4Ｆ


6Ｆ


４Ｆ俯瞰図

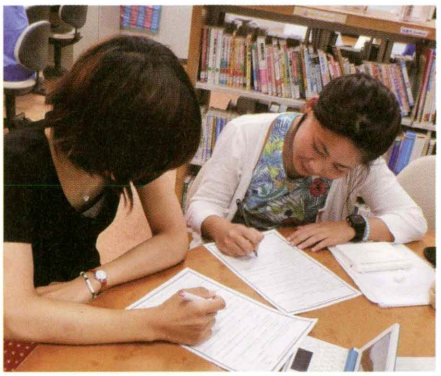
# 言語学習センター（LLC）

## ■設立の経緯と役割

言語学習センター（LLC）は、文部科学省「特色ある教育研究の促進」予算と本学の予算により大西正幸教授とスティーブン・テンプリン助教授（当時の職階）らの尽力により、2001（平成13）年に開設しました。2009（平成21）年から2011（平成23）年まで文部科学省「学生支援推進プログラム」に採択され、言語学習センターは学内の中心的プログラムとして国内大学から数多くの訪問を受けました。その成果は津嘉山淳子氏（現在学生課所属）に負う部分が大きく、現在はレイサム・キャロライン名誉教授らの支援を受けながら、山里絹子准教授にその伝統は引き継がれています。

## ■五つの大きな特色

一つ目に、米国の教育機関から公認されたCRLA（College Reading and Learning Association）チューター資格は日本国内で名桜大学が唯一授与できる教育機関であるという点です。過去12年間でレギュラーチューター114名、アドバンストチューター65名、マスターチューター26名、総計で205名が資格を得ています。チューターは厳しいトレーニングプログラムを修了することにより、各々のチューター資格を得ることができます。








二つ目に、ピアチュータリングという、先輩学生（外国語能力の高い学生）が、同じ学生の外国語学習を支援する学習支援体制です。学生を主体として外国語学習を補完・発展させるユニークな学習支援体制を築いています。

三つ目に、学生チューターによるセンターの自主運営です。チューターは外国語学習の支援のみならず、チュータートレーニングの企画・実践、センター業務の分担、ワークショップ・プロジェクトの企画・実施とセンターにおける自主的な活動が特色です。

四つ目に外国語の授業と連携することにより、センターの利用を増やしています。2013（平成25）年度は、チュータリング、自主学習、教材利用などで延べ6000名以上の学生が利用しました。自主学習のみならず、授業と連携したセンター利用で、利用者数は増加し奏功しています。

最後に、言語学習センターはファミリー的な人間関係を築いている場所でもあります。センターに関わる教員、事務職員、チューターはセンターにおける業務を超えた人間関係であり、長期にわたる家族的な絆を持つ場合が多いのです。特にチューターには外国人留学生が多く、帰国直前のCRLAプロジェクト発表会のときには留学生活の充実と別離に、大きな感動と悲しみを伴うのは風物詩となっています。

言語学習センターは本学の誇る教育施設であり、今後も外国語教育支援と異文化交流、グローバリゼーションの面で先導的な役割を果たし続けていきます。

（言語学習センター長・渡慶次正則）



## 数理学習センター（MSLC）

「数理学習センター」（通称MSLC：Mathematical Science Learning Center）は、2009（平成21）年に学生の数理系基礎学力の向上と教養科目に対する学習支援を目的として設立され、今年度で設立５周年の節目を迎えました。

MSLCは、チューターと呼ばれる学生スタッフが常駐し、教職員と学生が協働で計画的・継続的に学習支援を行っています。現在は、数学や統計学、診療情報科目、コンピュータ概論などの数理系科目において連携授業を行い、受講生は授業の予習・復習や課題などの自主学習の場として活用し、数理系科目を苦手とする学生も主体的に学生チューターに支援を求めて学習を進めていくというシステムです。また、個々のチューターの得意分野を活かして、資格取得のための講座の開設をはじめとする「MSLCプロジェクト」を企画し、学期末には「MSLCプロジェクト」発表会を実施するなど、学習支援とMSLC運営の両方の業務を学生が主体的に分担し活動しています。たとえば、「数学検定対策講座」、「簿記検定対策講座」、「ＩＴパスポート対策講座」などがあります。また、昨年度より地域の高校生の学習支援ボランティア活動も行い、地域との交流や支援にも積極的に関わっています。そのほかにも、地域の退職教員等の優れた人材を講師に招き、やんばるの自然や生き物たちについて学ぶ講座を開設、地域のことを知るという試みも行っています。

MSLCには専任教員と係員が配属され、専任教員は学習面の支援、係員は運営面の支援を主に担当し、双方ともに必要に応じて個々の学生のメンタル面の支援も行っています。また、MSLC内には「談話サロン」があり、そこでは他の教員もオフィスアワーを設け、学習支援や教育相談に応じるという、教職員と学生との交流の場としての活用もあります。

MSLCでは、学生の支援を通して自らの学びや成長を実感できるという双方向の学びのスタイルがあり、チューターにとっても、企画力や運営力を磨く長期的なインターンシップの場にもなっています。

学生チューターがこのような経験を活かして、卒業後は、主体的に地域コミュニティーに参画し、地域の課題の発見や改善に積極的に関わる人材となることを願っています。本学のこのようなシステムは、新しい学びの創造と学習支援の在り方として、他大学からの注目度も高まりつつあり、県外からの視察も度々あります。今後は、新設の学生会館「SAKURAUM」を新しい活動の場として、チューターとともにさらなる活動の輪を広げていきたいと考えています。

（数理学習センター長・高安美智子）



## 名桜大学総合研究所 ―北部地域の学術振興の拠点―

名桜大学総合研究所は、1996（平成８）年に開設されました。総合研究所の主な業務としては、総合研究所に所属する名桜大学教職員の研究支援、文部科学省・日本学術振興会の科学研究費や宇流麻学術研究助成基金等の外部機関の研究助成資金獲得前後への研究者支援とその事務作業、本学総合研究所研究費助成者支援、研究成果報告書としての研究所紀要の編纂や外部共同研究者の受け入れなど多様な業務に対応しています。

また、総合研究所は、沖縄県北部（やんばる）地域の学術振興を行うと共に、視野を世界に広げ、グローバルな展開を目指して総合的な研究を行っています。本学全教員を研究所員とし、「言語文化部門」「経営情報部門」「観光産業部門」「社会政策部門」「健康科学部門」「看護科学部門」の６部門に分かれて、専門的・学際的な研究活動を展開しています。部門シンポジウム、国際シンポジウム、講演会、研究発表会を通じて情報発信を行うと共に、総合研究所の施設である70名収容の大会議室、12名収容の小会議室を地域に開放し、各種研修会や講習会の場として市民に広く利用されています。

所長は田邊勝義、副所長が遠矢英憲で、所員114名と研究活動を親身にサポートしていただいている事務員２名、教育プログラム支援員５名で構成されています。

総合研究所が支援する研究助成には、現在、学際的総合プロジェクト（３年間）と一般研究（１年間）があり、毎年多くの方に応募していただいています。

今年度は新たに「人の移動に関するプロジェクト」を学長配下で学内の教員が横断的に協力して進めています。

さらに今年度は、名桜大学での研究成果の自費出版を助成する名桜大学総合研究所出版助成取扱規定に基づく助成第一号を行うなど、研究者の研究支援にも力を入れています。

今後は、名桜大学の研究の質を向上させることと、研究者、特に若手研究者の研究支援の充実を図りたいと考えております。

| 歴代所長 | | |
|---|---|---|
| | 小谷　達男（'96 ～ '99年度） | 新垣　裕治（'09 ～ '10年度） |
| | 山里　　清（2000 ～ '02年度） | 小川寿美子（'11 ～ '12年度） |
| | 仲地　　清（'03 ～ '04年度） | 金城やす子（'13年度） |
| | 西平　守孝（'05 ～ '07年度） | 田邊　勝義（'14年度～） |
| | 仲地　　清（'08年度） | |






## ■名桜大学総合研究所で近年支援している研究テーマ

| 年度 | 研究テーマ |
|---|---|
| 2012<br>（平成24年度） | 一般研究<br>1．インド―太平洋に産する黒色ナガウニ個体群のDNA分析による系統関係及び新種記載の可能性に関する研究<br>2．素粒子物理学での標準模型を超える New Physics の検証 ～ブレーンワールド（５次元宇宙論）でのデータマター残留密の度計と、観測・実験データとの比較検証～<br>3．沖縄本島北部地域における生活困窮世帯の実態調査研究 －子どもの教育ニーズに着目して－<br>4．ウェイトリフティング選手における安静時の呼吸機能特性と運動開始後の呼吸応答との関係<br>5．統合失調症患者へのハンドマッサージの効果に関する研究<br>6．沖縄県北部地域における災害発生時の地域支援のための基礎的研究 |
| 2013<br>（平成25年度） | 学際的共同プロジェクト研究<br>1．マリンスポーツ安全教室を通じた海洋危険生物による刺咬症に対する安全教育に関する研究<br>2．沖縄北部地域出身の海外沖縄移民に関する総合的研究<br>一般研究<br>1．現代におけるプロスポーツの成立過程 －ウインドサーフィン競技のプロ化及びプロ団体設立の過程に着目して－<br>2．沖縄島における国内外来マングローブ種であるヒルギダマシの群落形成による干潟生態系への影響に関する研究<br>3．一過性の低強度持久的運動が抵抗性運動鍛錬者の安静時及び運動後の動脈スティフネスに及ぼす影響<br>4．沖縄やんばる地域の台風災害と地域防災研究<br>5．医療的ケアを要する在宅療養者とその家族への災害時の支援のための基礎的研究<br>6．沖縄観光産業史に関する研究 ～沖縄国際海洋博覧会開催を境とする前後10年の沖縄観光を中心に～ |
| 2014<br>（平成26年度） | 学際的共同プロジェクト研究<br>1．自律促進型健康支援と健康な町づくり施策は住民の健康度を向上させるか？<br>2．〝やんばる〟地域における外国人観光客受け入れ対応に関する調査研究<br>3．沖縄における貧困と格差に関する学際的研究 －沖縄本島を中心に－<br>一般研究<br>1．英語Can-doリストの作成による大学英語プログラムの構築<br>2．沖縄やんばる地域における台風被害と災害リスクコミュニケーションの研究<br>3．会計基準のグローバル化と会計制度の構築に関する研究 －台湾の会計制度を中心として－<br>4．競泳における選手と指導者の観察内容に関する研究<br>5．健康日本21（第２次）における目標歩数達成者の特徴 －沖縄県北部在住高齢者を対象として－<br>6．沖縄県北部地域の高齢者を取り巻く健康支援に関する研究 －学生と教員と地域の専門職と協働で行う在宅訪問健康支援活動を通して－<br>7．学生生活継続に危機を感じた〝イマドキ〟大学生が教員に求めるサポート －悩みながらも大学生活を継続できるための支援とは－<br>8．リラクセーションを促すフットマッサージの検討 |

（総合研究所長・田邊　勝義）

## 健康・長寿サポートセンター

健康・長寿サポートセンターは、身体活動の健康科学に関する知見を応用し、科学的根拠に基づく健康支援活動を、北部12市町村の人々に提供するための中核として機能・推進する機関になることを目的として開設しました。

健康・長寿として名高い沖縄県ですが、現在ではその長寿にかげりが見え始め、肥満をはじめ多くの深刻な健康問題を抱える不健康県へと変貌しつつあります。

沖縄県で唯一の人間健康学部を有する名桜大学の重要な使命として、もう一度沖縄県が健康・長寿県としての誇りを取り戻すことに貢献していくことが求められます。

『健康・長寿サポートセンターとヘルスサポートの学生、北部12市町村が連携した「健康問題を改善する活動」＋「地域の人と人がつながる」プロジェクトとは？』

これまで名桜大学では地域の健康支援に様々な形で参画してきました。その主な特徴としては、「学生が主役」ということが共通点です。大学で学んだ専門知識を学生が地域に積極的に健康支援という形で還元（展開）し、地域の健康の増進を図るとともに、コミュニティーの活性化を目指しています。この仕組みをサポート・強化するのが健康・長寿サポートセンターです。健康・長寿サポートセンターでは、組織内に看護学科とスポーツ健康学科の学生による健康活動支援団体（ヘルスサポート：ヘルサポ）を設立し、健康・長寿サポートセンター、ヘルサポ、自治体が協働して取り組む地域一体参画型の健康増進プランを実施し、健康・長寿復活に向けたソーシャルキャピタルの醸成を目指しています。

健康・長寿サポートセンターの特徴的な活動の一つに、「踊る！話す！盛りあげる！」をテーマとしたJOYBEATプログラムがあります。JOYBEATプログラムは、若年者から高齢者にいたるまでの幅広い年齢層（世代）に対応した、CGコンテンツを利用した新しいスタイルの運動プログラムです。これにより、最先端の運動プログラムを北部12市町村で展開することが可能となり、地域の健康問題の改善を図ると共にコミュニティーの活性化に貢献しています。さらに、看護学科の学生で組織している朝市健康相談活動を行うボランティアサークルVAGや前川ゼミの学生が活動している食育劇活動等も、健康・長寿サポートセンターの活動として参画し、北部地域の健康支援活動を精力的に実施しています。

終わりに、健康・長寿サポートセンターの様々な健康支援活動が、北部12市町村の健康増進やコミュニティーの活性化、さらにはそれらが沖縄県全体の健康・長寿の復権に“結びついていく”ことを目標として、健康支援活動に取り組んでいきたいと考えます。健康・長寿サポートセンターは皆さんの明るい未来の健康をサポートします。

（健康・長寿サポートセンター長・高瀬　幸一）

# 教員養成支援センター

## ■教職履修生の支援をめざす

名桜大学教員養成支援センターは、2006（平成18）年７月に設立されました。初代センター長は永山寛雄先生、２代目は金城幸信先生、３代目は嘉納が拝命しています。魅力ある優れた教員の養成をめざして、本学の教員養成カリキュラムを構成し、特に、学校現場で必要とされる実践的指導力、教職に対する強い情熱、教育の専門家としての確かな力量、総合的な人間力の育成を図ることを目的としています。現場における実践性を重視して設立された支援センターゆえ、２名の教職担当者も豊かな現場経験者です。

本学は、保健体育、英語、商業、情報、養護教諭の養成課程を持ち、次のような教員養成像をもって展開しています。

①スポーツ・健康・ウェルネスの知識と実践能力を身につけた中高校の保健体育教諭の養成

②語学教師としての幅広い教養とスキル、国際感覚を身につけた英語教諭の養成

③変化する社会経済の情勢を柔軟に取り込み、商業の理論と実践、幅広い教養を教授できる実践力をもった商業教諭の養成

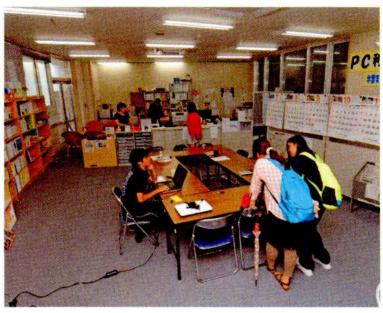
④ＩＴに関する幅広い教養とスキルを身につけ、高度情報社会を生きる人材を育てることのできる情報教諭の養成

⑤子どもの健康課題に取り組み、心とからだの健康を守り育て、発育発達を支援する、「子どもの心とからだの健康を支援できる」養護教諭の養成

支援センターは、教職履修生に対しての履修指導と適切な情報提供を行っています。支援センターの主な業務は、学生に対する履修指導、教職情報の提供、教員採用試験対策講座、漢字検定の実施、名護市を含めた北部地区の学校への学習支援ボランティアの派遣、教職学びの旅（国内外）、教職合宿（伊江島）の実施です。センターの活動の周知を目的に、年２回発行の「支援センター便り」で広報を行っています。

県内外の教員採用試験は、毎年、狭き門であり、非常に高い倍率を示していますが、計画的な受験対策と正確な情報を得ることで、きっと道は開かれることと思います。支援センターは、教職に就きたい学生の希望を実現するべく、全力で支援いたします。

（教員養成支援センター長・嘉納　英明）



# 看護実践教育研究センター

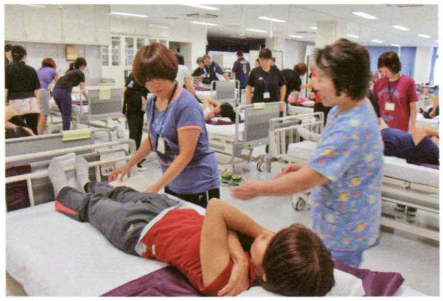
名桜大学をとりまく県北部地域やんばるは高齢化が進んでおり、人々が健康に暮らせる地域づくりは名桜大学の使命のひとつです。人間健康学部看護学科では2007（平成19）年の開設以来、北部地域の住民や看護職を対象として、健康相談活動や、看護系人材育成に係る研修会、講演会などを数多く開催してまいりました。2010（平成22）年に公立大学となり、より地域に貢献できる大学づくりをめざして取り組んできました。この地域における保健・医療・福祉施設の看護系の人的資源や実践能力はこの地域の高齢者や人々が受ける「ケアの質」に大きな影響をもたらします。これらのことから、看護実践教育研究センターでは地域の看護系人材の看護能力（資質）の向上を図り、やんばるの地に根ざしたケアの実践と研究、ならびに地域の人々の健康づくりを継続的に支援していくことを目的に2013（平成25）年４月に名桜大学の附属機関として発足いたしました。

## ■事業概要

看護系職員の実践能力を高めるために、また質の高いケアを実践できるようにするために、新しい看護実践モデルの紹介（紙屋克子先生による生活支援技術セミナー）や、保健師を対象とした事例検討会と講演会、さらに一般看護職を対象に研修会・研究会等の集合教育など、看護職の生涯学習を支援しております。

また、地域住民に対しても最後まで住み慣れた地域で暮らせるように、在宅看護や介護力を高めるための技術支援や健康教育など、持続可能な活動ができるよう地域の人々と協働して学びあい交流するための「場づくり」を企画していきたいと考えております。

（看護実践教育研究センター長・金城　祥教）







## メディアネットワークセンター

メディアネットワークセンターは、情報関連技術を用いて本学の教育・研究に係る情報教育及び情報処理の高度化を推進し、地域社会との連携を深めながら、北部地域の人材育成の拠点としての役割を担うことを目的として、2001（平成13）年６月に設置され、各学部（学科・学系）及び各部署から選出された教職員で構成、運営されています。

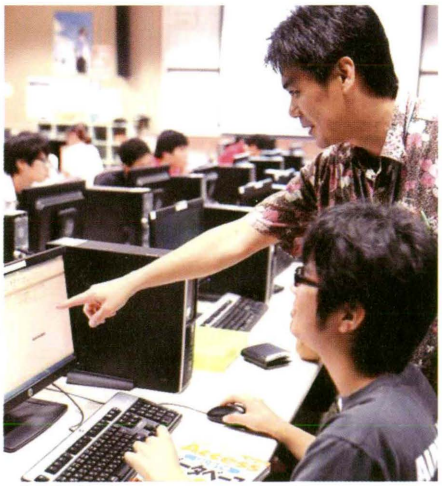
### ■センター業務内容

(1) 本学の情報教育の支援に関すること
(2) 本学におけるネットワーク構築及び管理・運用に関すること
(3) センター開設講座の企画・実施に関すること
(4) 情報関連技術に係る学外との情報交換及び技術協力に関すること
(5) その他、センターの目的を達成するために必要な事項に関すること

### ■委員会の構成

(1) センター長
(2) 副センター長
(3) 国際文化教育研究学系から選出された教員　１名
(4) 経営情報教育研究学系から選出された教員　１名
(5) 観光産業教育研究学系から選出された教員　１名
(6) スポーツ健康学科から選出された教員　１名





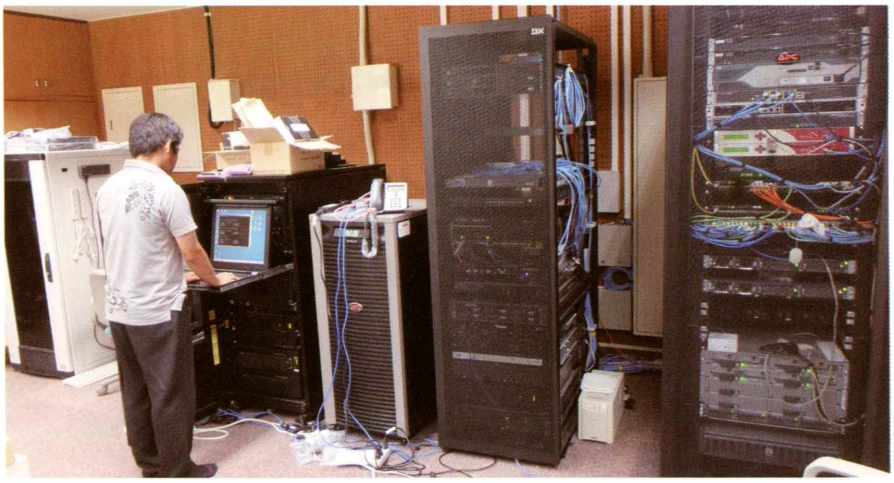
左・ネットワーク運営保守業務
右・情報教育を支援する

⑺　看護学科から選出された教員　　１名
⑻　総務企画部から選出された職員　１名
⑼　財務部から選出された職員　　１名
⑽　教務部から選出された職員　　１名
⑾　学生部から選出された職員　　１名
⑿　附属図書館から選出された職員　１名
⒀　学長が特に必要と認める者　　若干名

2013（平成25）年度より、情報セキュリティポリシーの制定をはじめとし、大学ネットワークの基盤となる有線及び無線LANの更改、情報関連教育に必須であるコンピュータ教室のシステム環境の再構築について、本格的な検討を行っています。その手始めとして、大学ネットワーク及び各種システムの状況把握、システム運用保守、及び障害対応を目的としたネットワーク運用保守体制を仮構築・始動し、今後専任事務職員の配置等により管理体制を強化予定です。さらに、名桜大学開学20周年・公立大学法人化５周年記念事業として建設される、学生会館SAKURAUMのネットワーク環境、IP電話設備、及びデジタルサイネージ（電子掲示板）の配備について、設計段階から学生会館設置委員会と連携し、コア・コンセプト「みえる･つながる･ひろがる」に沿った施設づくりを推進しています。

（メディアネットワークセンター長・天願　健）





ネットワーク監視業務

## エクステンションセンター

公立大学法人名桜大学は、2013（平成25）年４月から新たにエクステンションセンターを設置しました。その目的は、本学がより一層の地域貢献連携を推進するため、本学の設置団体である北部広域市町村圏事務組合との連絡調整を密にすること、また、地域連携に関する外部との窓口、学内各部署との連絡調整役、そして北部生涯学習推進センター施設の管理運営を推進することです。そして、本学の教育・研究の成果が北部12市町村の生活文化の改善にどのように貢献できるか、また、その活動には学生も参画させ、地域との関わりから如何に教育効果をあげることができるかなどが課題になります。

今回、エクステンションセンターに整理統合された北部生涯学習推進センターは、2004（平成16）年10月開設以来、地域住民のためのスキルアップ講座やカルチャー講座、各種資格試験、企業・自治体職員の研修等々、地域のニーズにマッチした生涯学習事業を行ってきました。また、これまで国際学群、総合研究所、言語学習センター、数理学習センター、教員養成支援センター等においても地域貢献事業を実施してきました。人間健康学部では2013（平成25）年新たに健康・長寿サポートセンター、看護実践教育研究センターを立ち上げ地域の実践教育に貢献することが期待されています。

これからは、エクステンションセンターが中心となって、各部署と連携を図りながら、それぞれの地域連携プログラムを統括し、地域貢献連携の総合窓口としての役割を担っていきたいと考えます。

（エクステンションセンター長・平識　善盛）



北部生涯学習推進センター

# 保健センター





上・保健室全景
下・保健室設置機材

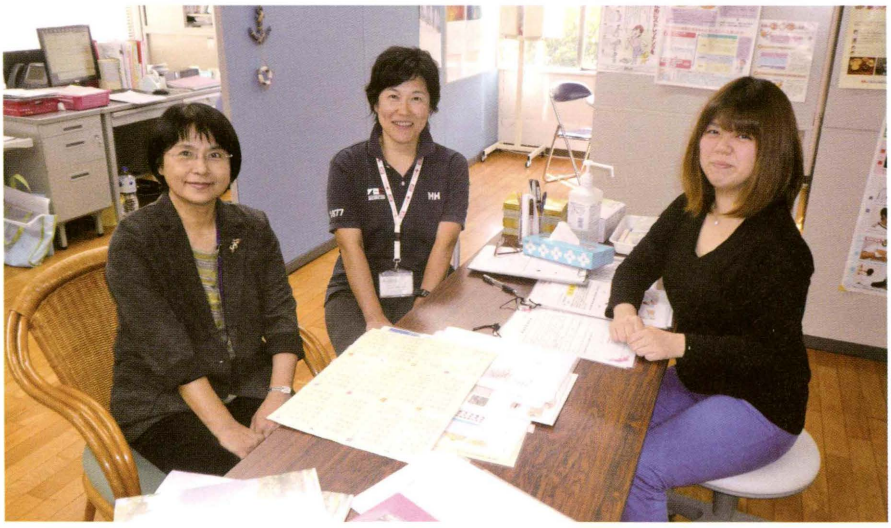
保健センターは、大学の学生および教職員の皆様が、心身共にセルフメディケーションができることを目指して支援しています。保健センターには、保健室とカウンセリング室を設置しております。保健室には、看護師と事務員が週５日体制で勤務し、体組成計や血圧計を設置し、気軽に個人の健康状態チェックや健康相談ができるようにしております。カウンセリング室には、非常勤のカウンセラーが勤務し、相談者と様々な問題を話し合い、具体的な対処・解決方法を見出していく支援をしております。

保健センターの主な活動内容としては、(1)保健管理及び健康支援の実施について企画及び立案に関すること、(2)学生及び教職員の定期及び臨時の健康診断に関すること、(3)健康相談及び救急処置に関すること、(4)メンタルヘルスケア及びカウンセリングに関すること、(5)学内の環境衛生指導に関すること、(6)学内の感染症予防に関すること、(7)保健管理及び健康支援のための教育に関することなどです。

本学では、定期健康診断の結果を学生個々に直接手渡し、健康指導・教育を行うとともに、学校医との連携で異常の早期発見、疾病予防に努めています。日常的な健康に関する啓発活動では、生活温湿度計を構内に設置し、熱中症災害予防やインフルエンザ予防などの注意喚起を行っています。また保健センターだよりを通じて、学生及び教職員へ健康意識を高める働きかけを行っています。

大学生活を充実させるには、健康が資本です。入学時の健診結果より年次が上がるごとに、健診結果が悪くなる傾向があります。学生の皆さんは、からだにやさしい食生活に努め、日頃から体調管理を行い、自己実現に向けて大学生活を充実させてほしいと思います。保健センターでは、学生、教職員の心身の健康づくりにおいて、サポートができるよう鋭意努力を続けたいと考えております。

（保健センター長・前川美紀子）

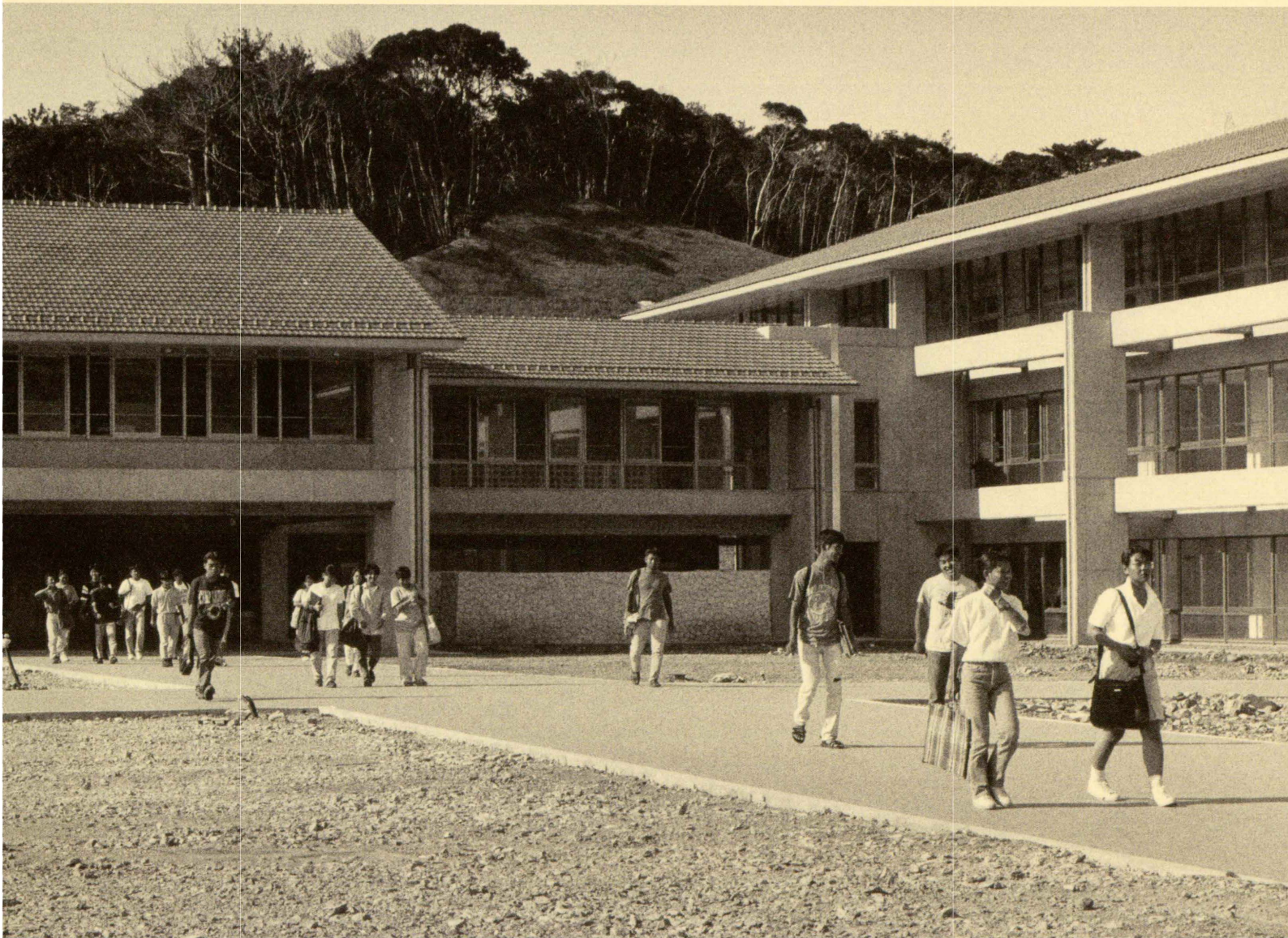


保健センタースタッフ



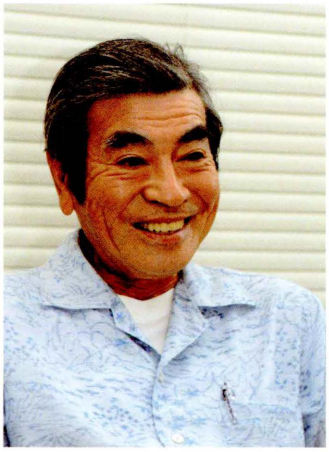
# 3章

## 地域に開かれた大学



# 名護の伝統文化
# 村踊りによるイベント創出事業





宮里　捷
名誉教授

## あけみおフェスタ開催の経緯

私はホテル経営などを指導していますが、経営とは理屈ではなく身につけるもの、活動することが大切だと考えています。宮里ゼミでは、名護市のシャッター街をどうしたら活性化できるかという「名護中心街活性化」を卒業論文のテーマとして取り上げていました。卒業生の論文の中には伝統芸能に関する資料も多く、名護の村踊りを取り上げたものがありました。村踊りは豊年祭で各地区内だけで披露されており、100年以上の伝統を誇っています。

2010（平成22）年度のゼミ生は、30くらいある各字が継承している村踊りが、一般にほとんど知られていないということに着目し、それを街の活性化につなげられないか、というアイデアから「名護の村踊りによるイベント」の企画・実行が卒業課題となりました。ゼミ生16名の“自分たちで行動したい”という強い意志のもと、伝統芸能を市街地で上演しようということになり、2011（平成23）年３月、名護市のキャッチフレーズである「あけみおのまち」をもとに、「第１回あけみおフェスタ」と銘打って実施されました。

## 「第１回あけみおフェスタ2011」開催

### 概要

学生は夏休み返上で、各字の踊りの調査を行いました。おりしも県が主催する、エンターテイメント創出・観光メニュー開発等支援事業「元気プロジェクト」の公募があり、「名護の伝統文化・村踊りによるイベント創出事業」として企画書を提出したところ採択され、イベントを開催する際の費用３分の２が補助されることになりました。資金の目途が立ち、それを機に商工会、市の観光協会などとタイアップした「名護市活性化イベント実行委員会」を立ち上げ、実現に向けて動き出しました。

土・日・祝日を利用して全部で５日間、宇茂佐、中山、安和、宮里、屋部、東江、城（ぐすく）の７地区の村踊りと名桜大学エイサー隊の公演、合わせて９公演が上演されました。再開発された市場のＰＲをかねて名護十字路市場再開発施設で行われ、出演者のほか裏方や地謡の方もいるので１演目100名くらいはおり、参加者総勢700名は軽く超えるイベントとなりました。

### 開催の準備

開催にあたって、一番困難だったのは出演者を集めることでした。各字に参加をよびかけても村（字）から出て街の中で踊る、ということに積極的な方は一人もいませんでした。豊年祭で行っている踊りは村の伝統行事であり、人に見せるためにやっているものではない、という意識があるためです。特に、城の獅子舞などは、獅子は神様のようなもので門外不出であり、村の中でしかお披露目できないということでした。

しかし、屋部地区の区長さんが理解を示してくれたのを皮切りに、学生の熱意によって他の字もだんだんと出演を承諾してくださいました。学生たちは、友達の知り合いや親戚が字の人だと聞くと、その伝手を使って交渉するなどあの手この手で出演者を集め、乗り気でなかった字の人も根負けして、最終的には快諾していただき開催にこぎ着けました。





上・ゼミでの打ち合わせ
下・チラシを配って来場をよびかける

## 「第２回あけみおフェスタ2012」開催

第１回の来場者アンケートで継続希望者が98.4％という結果もあり、次のゼミ生もぜひやりたいということで第２回開催に向かって動き出しましたが、補助金もなく資金の目途が立たない状態でした。

それでも、１日だけでもなんとかやろうということで、大学祭で飲食店を出店したり、市場で募金活動をするなどの資金集めを行いました。結果的には学生の行動力が周りの大人を動かし、大学側からも補助金が出ることになりました。協賛活動も積極的に行い、20以上の企業・団体が協賛してくださいました。

開催にあたり、村踊りについてもっと理解を深めたいということで、地区に通って練習し、開催前の９月末に行われた宇茂佐と屋部の各地区の豊年祭で実際に役をもらって参加した学生もいます。

こうして、第２回あけみおフェスタは資金が少ない中で、2012（平成24）年10月21日、第１回と同じく名護十字路市場再開発施設のパティオにて開催され、昼は宇茂佐地区、夜は屋部地区の村踊りが披露されました。






上演会場となった名護十字路市場再開発施設のパティオ

## 地域の中でゼミ生たちが学んだこと

第２回は第１回が好評だったこともあり、商工会などの協力を得られたのでやりやすかったのですが、第１回のときには、商工会、観光協会、市役所など快諾してくれるところはありませんでした。通常の業務が忙しい中ですので、学生がお願いに行っても、なかなか熱心に耳を貸してもらえなかったと学生から聞いています。思い込みで行動してもうまくいかないということ、いかに新しい提案を受け入れてもらうことが難しいかということを痛烈に感じていたと思います。

大学では、準備事務所としての場所と専用の電話番号を用意してもらいました。事務所にはメディアや企業からの問い合わせもあります。活動がスタートしたばかりの頃、学生たちは運営のノウハウもわかりませんし、社会人としての電話対応の経験がないため、見ていてひやひやしました。しかし、協賛依頼のための企業廻りや、業者とのやりとりなど、社会との関わりが増え、だんだんと運営の進行方法を身につけていきました。

会計、営業、広報などの班をつくって組織的に動き、イベントが近づく頃には、みんな戦友のような感じになりました。今まで内気だったような学生も一体となり、この企画を途中で辞めたいという学生は誰もいませんでした。お金のことや市との交渉の際は私が手助けしましたが、ほとんどのことは学生たちが自分たちで行っていました。無事終了した後ゼミ生たちから、「宮里先生は本当に何もしなかったですね」と笑い話が出るくらい彼らは自主的に動き、たくさんの経験をして成長したと思います。

実際に開催されると初めは渋っていたはずの市の職員や字の方からは、「たいへん良かった」という感想をいただきました。公演を終えて、学生たちは字の方たちと飲み仲間と思えるくらい親しくなり、打ち上げをして楽しい時間を過ごしたようです。

学生たちは、市の職員、メディアや企業の方、出演者の方などと接して、それぞれの立場を尊重することの大切さを知り、大学生として地域社会とのつながり方を学んでいきました。

村踊りの継承者は年々減少の傾向にあり、豊年祭に際して地元を離れている字出身の祭りの経験者を呼び戻して、なんとか継続しているというのが実情です。しかし、このイベントをきっかけに若者が自分たちの土地にある伝統の継承を意識し、今後も取り組む動機づけができたということで字の方々に喜んでもらえました。開催にあたって出演者の方からは、字内の身内だけに披露するのと違って、一般の方々に披露する舞台出演なので、練習に対する意気込みが変わったという声も聞かれました。

第１回のときには出演交渉に追われ、前もって観光客や他地域の人を集める告知までは十分にできず、ほとんど地元の方が観に来られました。第２回は新聞などで告知もしており、県内でも南部から来たという方もいました。

大学と地域の組織とが一緒になって何かをしようとするムードは、この

活動を通じてかなり前進したのではないかと思います。そして、もう一つ大きな意義は、知られていなかった村踊りが見直されたということです。名護の旅行代理店では、このイベントを参考に本場の豊年祭を観覧できる「村踊りツアー」というツアーを行っています。村踊りの魅力を知って、観光の材料になるということで目をつけたのではないかと思います。そういった意味でも、大学生の活動による波及効果があったといえるのではないでしょうか。

残念ながら、私の退官と同時にこのあけみおフェスタは休止してしまいましたが、意欲のある教員や学生でいつか開催されることを期待しています。





# 食の大切さを子どもたちへ伝える学生オリジナルの食育劇



前川美紀子
スポーツ健康学科 上級准教授

## 経緯

食育劇は2007（平成19）年からスタートしました。名護市内をはじめ近隣地域の小学校や幼稚園を訪問し、寸劇で食の大切さを伝えるという活動です。私のゼミでは当初から食育を研究課題に取り上げており、「食と健康について」というテーマから研究が始まりました。進めていくうちに、かなり大きなテーマであることがわかってきました。

ちょうどその頃、中国産輸入食品の殺虫剤が混入した冷凍餃子中毒事件がありました。そうした食に関する事件があったこともあり、ゼミでは現在の食事情に対する危機感を覚え、食の安全面や大切さについてもっときちんと学ばなくてはいけないと感じました。まずは子どもたちに食について考えることの重要性を伝える活動をしようとゼミ生たちが動き出したのが食育劇が始まったきっかけです。

食育を伝えるために、まずバランスのとれた食事の重要性について考えることから始めたのですが、食育とは食そのものだけでなくリズムも大切であり、生活全体について学ぶことであるというふうに内容が少しずつ深まっていきました。

2007（平成19）年は６校ほどの小学校で食育劇を行いました。始めた頃は、学生から劇開催のお願いにうかがっていました。テレビ番組で取り上げられたことがきっかけで、翌年からは学校側からのオファーが増え、あまりにも依頼が多くなったため学業に支障が出ないよう、授業の入っていない曜日に学校を訪問する日を調整したほどです。現在は金曜日をゼミの食育ボランティア日として設定し活動しております。

訪れる学校や幼稚園などは、くり返し開催するところもありますから、今では延べ100ヵ所以上に増えています。それくらい回数もあるので、練習や道具の準備が常にできている状態にしていなければなりません。人の前で踊ったりするのでそれをやったことのない学生は苦手意識もあるでしょうし、時間外での練習も多く、ゼミ生が少ない年もありましたが、これまで毎年継続してきました。

## 食育劇の内容

この食育劇は20分ほどで構成されています。主人公はゆきちゃんという女の子で、夜遅くまで起きているために朝ごはんを食べずに学校に行ってしまい、学校で具合が悪くなってしまいます。そのときの体の中の様子を赤・黄・緑の“バランス戦隊”というメンバーとバイキンマンの対戦を通して見ていきます。ゆきちゃんの体内では、バランス戦隊３人の元気がありません。――なぜ元気がないのでしょう？　ごはんを食べても、またバイキンマンに負けてしまいます。――どうして？　といった具合に役者たちが質問を子どもたちに投げかけ、司会役が子どもにインタビューをします。ときには応援してもらったりと、子どもたちに参加してもらいながら、進めていくというのがこの劇の内容です。

衣装や劇で使う教材はゼミ生たちの手作りで、栄養素について教える「赤・黄・緑」の食材の用意もします。小道具などを徹夜で準備したこともあります。毎年ほぼ同じシナリオで、先輩から舞台用具も引き継いでいます。初めての年は人手が少ない中、舞台用具もゼロから準備しましたし、役者が足りないので私も出演しました。この１期生たちが食育劇の基礎を作り、続く後輩たちが徐々にアレンジをしていき今にいたっています。

４期生のときに、北部農林高校と協働で劇を行ったことがあるのですが、ゼミ生が農業体験をしたところ、“いただきます”の意味や地産地消の大切さなどに目を向けるようになり、この頃から劇の内容も少しずつ変化していきました。ゼミ生たちは自らの農業体験を経て、そこで感じたことを子どもたちにも伝えていきたいという新しい方向性を見出したといえます。この経験から劇中では、一生懸命野菜をつくる生産者がいるということや豚や鳥などの生きものの命をもらっていることに触れて、“いただきます”の意味も伝える内容になりました。時代の流れの影響もありますし、学生たちの気づきや学びがその年ごとの劇のスタイルにつながっています。

劇の最後には、人形などを使って劇中にあった内容の根拠を説明したり、「栄養素クイズ」というのを行い、劇の復習をしてまとめます。






上・手作りの教材でわかりやすく解説
下・バイキンマンを倒す赤・黄のバランス戦隊

## 食育劇の効果

子どもたちは食育劇を観て帰宅すると、家庭の食卓の“チェックマン”になるという声を聞いています。我が家の食べ物で何色（どんな栄養素）が足りないかを指摘して、お母さんたちを刺激しているようですね。親御さんの食に対する意識の向上もこの活動のねらいです。食育というと、食そのものに注目することだと思いがちですが、生活、つまり食べて、寝て、動くということを整えていくことが食育だと私は考えています。生活の中心は家庭ですが、昨今は社会状況とともに生活習慣が変わってきています。家庭だけでは十分な食育が難しい状況であることも否めません。子どもを介して家庭にその重要性が入っていくことで、家族全体に浸透してほしいと思います。

私がもう一つ重要なねらいとしているのは、食について子どもたちに伝える立場である学生たち自身にも変わってほしいということです。食育劇を通して、自らの食生活を見直すことにもつながっていってほしいです。現在、ゼミでは月１回、３・４年生合同で“弁当の日”を設定し、各自手作り弁当を持参して昼食会を行っています。弁当作りを通して、食について学び食を見直す機会になっているのではないかと感じています。

学校現場では食の大切さについて、いろいろな教科の中に取り組まれています。学校教育の一環として食育が継続することを重視されているため、たとえば「総合的な学習の時間」の授業の一つとしてゼミ生たちの食育劇を観て、話し合いの時間を設け、それをつなぎとして栄養士さんが関わったりもします。食育の指導が劇そのものだけの単発で終わるのではな

く、その後の食育活動にも活用されているようです。

先生方がいる学校現場に学生が訪れるわけですが、子どもたちにとって、大学生は先生とは違って、お兄ちゃんお姉ちゃんのような憧れの的です。そんな大学生たちが、朝ごはんを食べている、野菜を食べている、というと、自然に子どもたちはマネをしたくなります。こうした食育は、大学生だからこそできることでもありますし、非常に大きな食育劇の効果です。

## 食育は地域活性化につながる

小学校や幼稚園は地域の中にありますから、食育劇を通して、こうした学校現場とつながることができたのは、大学と地域がより近くなれたということだと思います。こうした取り組みが発信源となり、地域の自治体での健康講話がある機会に劇を行って地元の大人とも関わることができました。

食育劇は今のところ、ゼミ単位で行っている取り組みですが、今後は本学の健康・長寿サポートセンターとの連携を密にしていきたいと考えています。さらに、この活動を地域の高齢者に向けても広げていきたいと思っています。以前、高齢者に食育劇を行ったとき、自分たちの孫に地元の野菜を食べさせていきたいという話題が出ていました。なかには日頃、農業をされている方も少なくありません。生産者ならではの“野菜自慢”の機会が増えていけば地元にある食材の魅力や大切さについてもっと子どもたちに伝えることができるでしょう。このようにして、地域そのものが健康や地産地消に対する意識を高めて子どもたちの生活を支えていくということが、将来的に地域の活性化にもつながるのではないのでしょうか。





劇のまとめに児童にインタビューをする

# 名桜大学の地域貢献活動（広報誌「meio」より抜粋）

## 名護市21世紀の森ビーチを清掃　2007.8.4



本学体育系サークル主催で地域クリーンアップ活動が、名護市21世紀の森ビーチで行われました。約100人の学生・教職員が参加して、台風４号の影響でビーチに散乱した漂流物を除去しました。２時間で60袋分のゴミが集まり、元通りの美しい海岸になりました。

## 「大学弁当・沖縄リーグ」に参加　2007.10



㈱沖縄ファミリーマート主催「大学弁当・沖縄リーグ」に、本学経営情報学科の学生が参加しました。県内でマーケティングを学ぶ大学生（名桜大学・琉球大学・沖縄国際大学・沖縄大学）が、商品開発から販売促進のCMの企画・放映まで実際に行います。名桜生が考案した「魚ッ！グルクン弁当」（460円）は、10月30日より２週間、県内のファミリーマートで発売されました。

## 図書館新システムを導入　2007.12.3



本学図書館の窓口サービス・図書検索サービスをスムーズに行うため、新図書館システム火入れ式が行われました。新システムの導入により、貸出返却サービスの迅速化、蔵所検索（OPAC）サービスの充実化が実現し、利用者の満足度の向上が図られました。

## 前川ゼミ生が地域の子どもたちに食育指導　2007



食育をテーマに研究するスポーツ健康学科の前川美紀子上級准教授と同ゼミ６人の学生が、地域の健康・長寿社会づくりに貢献しようと、小学生や幼稚園児を対象に食育指導を展開しています。名護市内をはじめ近隣町村内の小学校、幼稚園に出向き、一日３食、バランスよく栄養を取ることの重要性を寸劇を通して啓発しています（写真は12月７日、名護幼稚園にて）。

## 名護市教育委員会と学校教育・生涯学習に関する協定を締結　2008.5.12



本学と名護市教育委員会が、名護市立小中学校の教育活動支援に関する協定を締結しました。この協定により名護市立小中学校で、教員志望の学生による特別支援教育や英語教育、部活動などの支援ボランティア、また、教員による研究・研修活動など、双方の教育・研究活動連携が推進されます。



## キッズウインドサーフィン体験教室を開催

2008.7・8

2008年７月27日、８月９・10日の３日間、海洋博のエメラルドビーチでキッズウインドサーフィン体験教室（海洋博覧会記念公園管理財団主催、本学協力）が開催されました。スポーツ健康学科の平野貴也上級准教授の指導のもと、ゼミ生が中心となり、県内外から参加した148人の小中学生に対し、陸上練習、海上練習、シーマンシップの学びを実施しました。




## 交通安全キャンペーン「58（ゴーヤー）作戦」に協力

2009.2.27

交通事故防止、飲酒運転根絶を訴えようと、交通安全キャンペーン「58（ゴーヤー）作戦」（名護地区交通安全協会、名護警察署主催）が名護市内の国道58号線沿いで展開され、本学の体育系サークル学生68人が協力しました。参加学生は、信号待ちの車両運転者に安全運転と飲酒運転根絶を呼びかけるチラシとお守り（ゴーヤーグッズ）を配り、地域の交通安全に一役買いました。



## 屋部小学校４年生と名桜大学南米留学生の文化交流会

2009.3.3

小学生の地域理解、国際理解を促進しようと、屋部小学校４年生と本学留学生の文化交流会（名護市国際交流親善委員会主催、本学共催）が、屋部小学校体育館で行われました。本学から南米出身留学生４人が参加し、同小学校４年生51人と自国の踊りや武術を披露し合いました。児童らは初めて見る外国の文化に触れ、歓喜の声を上げていました。





## 看護を通して地域の人と交流を深める「ふれあい看護体験」

2009.5.16

人間健康学部看護学科が「ふれあい看護体験」を開催しました。この企画は「看護の日」を踏まえて、看護を多くの人々に周知する目的で行われています。今回は新築された看護学科棟での初めての開催で、多くの看護学科の学生がボランティアとして参加し、地域の中学生・高校生を対象としてミニオープンキャンパスを兼ねた「ふれあい看護体験」を進行していました。参加した中学生20人、高校生26人、社会人２人、保護者２人の50人は、初めて体験する蘇生法や抱っこ体験などに熱心に取り組み、看護に興味を増した様子でした。



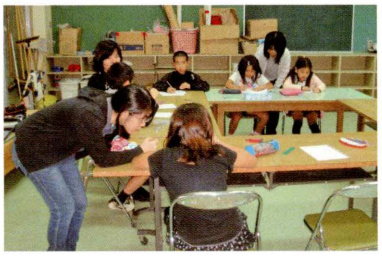

## 札幌国際大学との文化交流

2009.6.20・21

名桜祭実行委員３人と名桜エイサー12人は、「人と物産、そして文化の交流」をテーマに掲げ、本学の国内交流協定大学の中で最も北に位置する札幌国際大学の文化祭「清麗祭」に参加しました。物産交流として、ちょこもち、サーターアンダギー、伊江島ピーナッツ、島ぞうり＆Ｔシャツセット、ちんすこう、スナックパインの６品を販売し、大盛況でした。また、文化交流として、沖縄の伝統芸能「エイサー」を演舞すると観衆は当初戸惑っていましたが、踊りが終了すると盛大な拍手で賞賛してくれました。

## 教育ボランティアサークルPure Supportの活動

2009.7



教育ボランティアサークルPure Supportは2009年７月に設立され、名護市内の学校を中心に学習支援・部活動支援のボランティア活動を行っています。Pure Supportに登録しているのは学校教師を目指し、教職課程を履修している２・３年次の学生で、その中の20数人の学生が毎週ボランティア活動に参加しています。

## 「第２回宮里区ゆんたく健康まつり」を開催

2009.12.20



看護学科教員と学生ボランティアで結成している「朝市」ゆんたくチームが、第２回ゆんたく健康まつりを開催しました。ゆんたくチームは月１回、宮里区の「朝市」で血液測定や健康相談活動を続けており、今回は普段行っている活動に加え、栄養士・大城るみこさんによる講話や、ゆんたくチームによる活動の報告が行われました。

## MESHサポートへ寄付金の贈呈

2009.12.21



本学の硬式野球部、陸上競技部、男子ソフトボール部を中心に構成される体育系サークルが、救急医療用ヘリMESHサポートに寄付金を贈呈しました。12月５・６日に開催された名桜祭において体育系サークルが出店した沖縄そばの売上金と、企業からの寄付金を合わせた200万円を、MESHサポートの小濱正博理事長を訪問し、贈呈しました。

## 「美ら島沖縄総体2010」をサポート

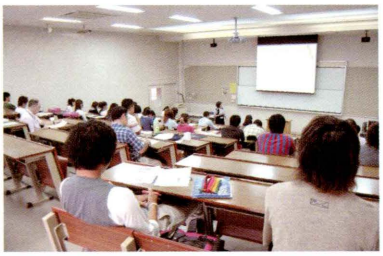
2010.7･8



2010年７月28日～８月20日までの24日間、「美ら島沖縄総体2010（全国高校総体）」が開催され、本学の教員と学生が各競技協会（連盟）と連携し、競技をサポートしました。与那原町で開催されたヨット競技で、コース設置の責任者を務めたスポーツ健康学科の平野貴也上級准教授は、「コース設定の手順を誤るとレースが中止になってしまうため、毎レースかなり神経質になったが、競技に打ち込む高校生の真剣なまなざしに感動した」と語っていました。

## 「第３回名桜大学語学教育フェア」を開催

2010.10.9



JALT（全国語学教育学会）共催で、「第３回名桜大学語学教育フェア」が開催されました。英語のネイティブ、日本人教員、日本人学生、留学生など、学内外から約150人が集まり、賑わいをみせました。この教育フェアは、県内で日本語・英語の教育に携わる小・中・高校、大学の教員のほか、日本語・英語に興味のある学生や一般の方を対象に、日本語や英語の教授法や学習法について学んでもらい、語学力や語学の教授力の向上を図ることを目的に開かれています。



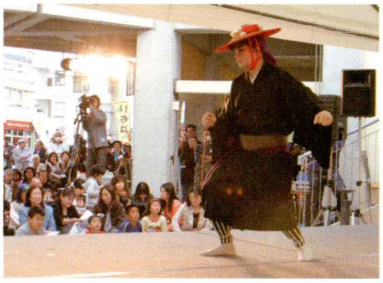
## 名護市制40周年記念「ガジュマルフェスティバル」に参加　2010.10.24

名護市制40周年を記念して市民主催で行われたガジュマルフェスティバルのウォーキング大会に、本学から渡具知伸部長を中心としたボランティアスタッフが参加しました。渡具知部長は大会の実行委員も務め、ウォーキング者引率や交通誘導、受付などに本学教員、学生約40人が活躍しました。



## 飲酒運転根絶運動に参加　2010.11.1

11月１日、「飲酒運転根絶運動の日」に、本学サッカー部とフットサークルの学生10人が、「道の駅　許田」で運転手に飲酒運転根絶を呼びかけました。名護市内の少年サッカー選手約150人とともに、飲酒運転の根絶を促すチラシの配布などを行いました。



## 「第１回あけみおフェスタ2011」を開催　2011.3

観光産業専攻の宮里ゼミが、名護市、名護市観光協会、名護市商工会とともに名護市街地の活性化を目的に「第１回あけみおフェスタ2011」を開催しました。名護十字路市場再開発施設内パティオを会場に、名護地区の伝統的な村踊りなどが披露されました。





## 「東日本大震災チャリティーイベント」を開催　2011.4.16

名桜エイサー、Hip Hopサークル、ミュージックサークル、ウェルナビ、VAG（看護学科ボランティアサークル）の学生たちが、「道の駅　許田」で東日本大震災チャリティーイベントを開催しました。会場では各サークルによるパフォーマンスや被災地の写真展示を通して募金活動を行いました。なお、集まった義援金は、名護市社会福祉協議会を通して被災地へ送られました。



## 地域を美しく！ビーチクリーンアップ活動　2011.4.29

本学スポーツ健康学科柳ゼミの学生と地元の少年サッカーチームの子どもたち総勢44人で、名護市21世紀の森ビーチクリーンアップ作戦を行いました。参加者はゴミの傾向を調査しながら、１時間程度でゴミ拾いをした結果、空き缶やタバコの吸殻など30袋のゴミを集めました。



## 看護の日「ふれあい看護体験」を開催　2011.5.14

看護週間に伴い恒例となった「看護の日･ふれあい看護体験」を開催し、地域の小中学生12人が参加しました。看護学科が開設して５年目となります。生徒のみなさんは看護演習を体験することで、表情は生き生きと輝き、楽しく充実した１日を過ごすことができたようです。

## 国頭村の子どもと学生の学習支援

2011.8



国頭村教育委員会から夏期休業中の村内の小中学生に対しての学習支援と部活動の補助の依頼がありました。教職を履修している学生12人を二つのチーム（チーム国頭A・チーム国頭B）に分けて派遣しました。学生たちは、国頭村の森林公園のバンガローに宿泊しながら、村内の小中学校や公民館でボランティア活動に参加し、国頭の子どもたちに学習支援を行いました。

## 恩納村未来塾の開講式

2011.11.16




恩納村教育委員会による「未来塾」が開講しました。この塾は村内の高校受験生を対象に村が運営する学習塾です。毎週平日の３日間、安富祖中学校の教室を活用して授業が行われます。教職を履修している学生９人が講師となり、学習支援ボランティアを行います。

## 学習支援ボランティア in 伊是名島

2012.2.27~29



伊是名小・中学校において学習ボランティアを実施しました。活動の狙いは、島嶼県沖縄の離島における教育の実情について知る機会を得ることでした。学生たちは授業における学習支援を展開し、放課後はサッカー部とバレーボール部の指導補助に関わりました。両校の教員や児童生徒からは、次年度以降も学習支援ボランティアの活動を期待されました。今回の引率教師は３人、参加した学生は41人でした。

## 東屋部川でカヌー体験と干潟自然観察・ゴミ拾いイベント

2012.7・10



2012年７月10日と10月13日、観光産業専攻の新垣ゼミで、名護市街地を流れる最も大きな河川・屋部川の観光資源（エコツーリズムなど）としての可能性について検討することを目的として、屋部支部区長会・屋部小学校及び自然体験事業者などの協力を得て、一般市民を対象としたカヌー体験と干潟自然観察・ゴミ拾いイベントを開催しました。

## 「第１回世界若者ウチナーンチュ大会」に参加

2012.7.25~29



世界若者ウチナーンチュ大会は、世界中に在住する若者ウチナーンチュたちのネットワークを確立することを目的に、ブラジルで開催されました。ブラジル・アルゼンチン・ペルー・ボリビア・アメリカ・香港・日本・沖縄から集まったウチナーンチュが、沖縄伝統芸能の披露をはじめ、スポーツやワークショップ、ディスカッション、企業訪問など様々なプログラムを通して交流を図りました。



## 学習支援ボランティア in 国頭中学校夏期講座・国頭村地域こども会

2012.8

2012年１月、「名桜大学と国頭村教育委員会の連携に関する協定書」が締結されました。この協定に基づき、８月７日～10日と12日～15日の日程で、国頭中学校夏期講座・国頭村地域子ども会において、15人の学生がボランティアで学習支援を行いました。



## 学習支援ボランティア in 伊平屋島

2012.9.11~13

伊平屋小・中学校において学習支援ボランティアを実施しました。引率教員３人と学生12人が参加しました。学習支援を通して、沖縄の離島における教育・子どもの実態を知ることが、この取り組みの主な目的です。進路講話を行った学生は、自身の経験を振り返りながら話していました。



## 北部地域の高校生をインターンシップ生として受け入れ

2012.11･12

高校生のキャリア教育を支援することを目的に、北部地域内の高等学校５校（宜野座高校、名護高校、本部高校、北山高校、名護商工高校）から、11人の高校生をインターンシップ生として受け入れました。インターンシップ生には、本学事務局の総務課、学生課、会計課、図書館、北部生涯学習推進センターにおいて、職員の指導のもと、書類整理や窓口対応などの業務を体験してもらいました。





## 看護学生による「救急法のデモンストレーション」を実施

2012.12.13

看護学科３年次学生６人が名護市の実りの里保育園で保育士を対象とした救急法のデモンストレーションを実施しました。このデモンストレーションは、同保育園からの依頼を受けて行われました。学生は、モデル人形を使って大人の心肺蘇生法とAEDの使用方法、幼児・乳児の心肺蘇生方法についてデモンストレーションを実施しました。



## 久辺小学校６年生と名桜大学生との交流授業

2013.2.27

名護市立久辺小学校の６年生29人と本学の学生10人による交流授業がありました。６年生は総合的な学習の時間を使って、イラク戦争、発展途上国、HIV、差別、環境問題、エコ、国際連合の七つのグループでそれぞれのテーマで追求活動をしていきました。これらのテーマに対する学生によるコメントや話し合い活動を通して、子どもたちにとっては「深める」時間となりました。

## 誰でも簡単にリズムに乗って楽しくエクササイズ

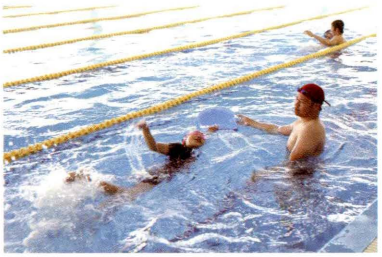
2013.3.5



国では2008年より毎年３月１日から８日までを「女性の健康週間」と定め、女性の健康づくり国民運動を展開しています。そこで健康・長寿サポートセンターと北部福祉保健所健康推進班が協同して、北部地域の住民に「女性の健康週間」の周知を図るとともに、健康づくりの気運を高めるために、イオン名護ショッピングセンターにおいて「誰でも簡単にリズムに乗って楽しくエクササイズを体験しましょう」というイベントを開催しました。本学の健康支援サークル「ヘルスサポート」の学生が中心となり、JOYBEATを使用し「脳と体のトレーニング」や「椅子に座って楽しむ歌謡エクササイズ」のプログラムを、参加者と楽しみながら行いました。

## 金武町営プールスイミングクラブの児童たちが来学

2013.3.28



本学屋内プールにおいて金武町営プールスイミングクラブと本学水泳競技部による合同練習が行われました。クロールや飛び込みを中心に行われた練習では、学生が児童に積極的に声かけやサポートを行い、交流を深めました。参加した児童たちは、わかりやすく楽しい指導に満足した様子でした。

## 「名護市学習支援教室ぴゅあ」開設

2013.5.10



本学において「名護市学習支援教室ぴゅあ」の開講式を行いました。この支援教室ぴゅあは、名護市と本学の教育連携事業の一つであり、その目的は、市内の生活困窮世帯・ひとり親世帯の中学生を対象に学習支援を行うもので、親の所得格差による学力格差を防ぐことをねらいとしている事業です。対象の中学生は、名護市借用の送迎バスを活用し、学内の教室でボランティア学生による学習指導を受けます。

## 北部11市町村教育委員会と教育連携に関する協定を調印

2013.5.17



本学は、沖縄県北部11市町村教育委員会と教育連携に関する協定を調印しました。本学はこれまでに名護市、恩納村、国頭村の教育委員会と教育連携に関する協定を調印していましたが、今回、北部の市町村教育委員会との一括協定を調印する運びとなりました。協定の内容は主に、教科・領域・外国語活動などにおける学習支援、心の相談や生徒指導上配慮を要する子どもへの支援などとなっています。また、北部地区の学校における教育実習生の配置も、連携内容の一つと位置づけています。



## 名護市宮里区ミニデイサービス活動の支援を終えて　2013.7~9

健康・長寿サポートセンター／ヘルスサポート活動報告

2013年７月９日から宮里区公民館にて３ヵ月間の日程で行っていた月２回のエクササイズ指導が無事終了しました。参加者は毎回40人程度で、70歳代から102歳までの幅広い年齢の方々に自主的に参加していただきました。現在、沖縄県北部の平均寿命は沖縄県の中で下位に位置しているため、身近な地域の健康を大切にしていくことが、将来の健康長寿沖縄の復活につながるのではないかと感じました。




## 「第39回大正区エイサー祭り」に出演　2013.9.6~10

名桜エイサーが、「第39回大正区エイサー祭り」に出演するため、大阪に渡りました。この祭りは、大阪で暮らす沖縄の人々が沖縄を懐かしみ、また、大阪という地を介して沖縄文化を広く伝えたいという思いから、県人会をはじめ様々な団体が協力して開かれています。出店には沖縄の郷土料理が並び、三線と太鼓の音色が鳴り響いて、大正区がまるで沖縄に変わってしまうようなユニークなイベントです。沖縄からは毎年、名桜エイサーと沖縄国際大学のエイサー団体「琉球風車」が参加していますが、今回は名桜エイサーのみの参加となりました。





## 名桜大学と名護市大西区との連携に関する協定書を調印　2013.10.9

本学は、名護市大西区との連携に関する協定を調印しました。内容は、１・地域づくり、２・健康福祉の増進、３・人材育成に関する連携・協力です。この連携により大学の「知」を生かした地域づくり、健康福祉の増進および人材育成などで地域発展に寄与することを目指しています。



## 東村と名桜大学との「健康支援活動提携協定書」の締結式　2013.11.5

本学本部棟の第１会議室において、東村と本学との「健康支援活動提携協定書」の締結式が執り行われました。東村に対して本学が行う健康支援活動を効果的に実施することで、東村の健康問題の改善ならびに地域コミュニティーの活性化を図ることを目的としています。



## 「第６回宮里区ゆんたく健康まつり」を開催　2013.12.15

看護学科では、開設年度より、宮里区産業部が主催する「朝市」の会場で、ボランティアサークルの学生を中心に健康支援活動を続けています。12月の朝市ゆんたく健康まつりは、学生のボランティア活動に協力してくださった住民の方へ１年間の感謝を込めて、学生が企画運営を行います。また、沖縄では、寒さが厳しくなる冬至（トゥンジビーサ）の頃に、豚肉を入れたクファジューシー（炊き込みご飯）を先祖に供え、家族の健康と繁栄を祈る慣習があることから、地域の方と一緒に地元の野菜を使ったスープや冬至ジューシーをつくり、沖縄の生活文化に触れる機会にもなっています。

## 「第２回名護市ハンドボール祭り」開催　2014.2.1



「第２回名護市ハンドボール祭り」が、名護市ハンドボール協会と本学主催で開かれました。午前は、スポーツ健康学科の仲田好邦助教が講師、本学ハンドボール部員がアシスタントを務めて、市内の小学生と小学校教諭を対象としたハンドボールスクールが開かれました。コートには終始笑顔があふれ、掛け声も響き、受講生は走る、跳ぶ、投げるというハンドボールの醍醐味を存分に味わっていました。午後は交流試合が行われ、盛り上がりをみせました。

## 伊平屋村での健康教室　2014.2.15



伊平屋村から依頼を受け、村民を対象にした健康教室を開催しました。イベントには、子どもから高齢者まで40人以上が参加しました。本学からは、地域の健康支援を目的に活動するサークル「ヘルスサポート」の学生４人が参加しました。音楽と映像で様々な運動を楽しく気軽に行うことができるJOYBEATによるエクササイズ、また、血圧・骨密度・体組成の３種類の測定と測定結果の説明も行いました。

## 「道の駅　許田」のレストランメニューを翻訳　2014.3



地元の方はもちろん、観光客にも人気の高い「道の駅　許田」（やんばる物産センター）から、レストランのメニューを中心に、中国語と英語の翻訳依頼を受けました。翻訳に携わったのは、交換留学生と本学に在籍している３人の学生です。メニューを日本語からほかの言語に訳するには、どのような食べ物なのかを理解する必要があるため、何度か道の駅に足を運びました。

## 「第１回北部地域保健・医療・福祉施設代表者等懇談会」を開催　2014.6.19

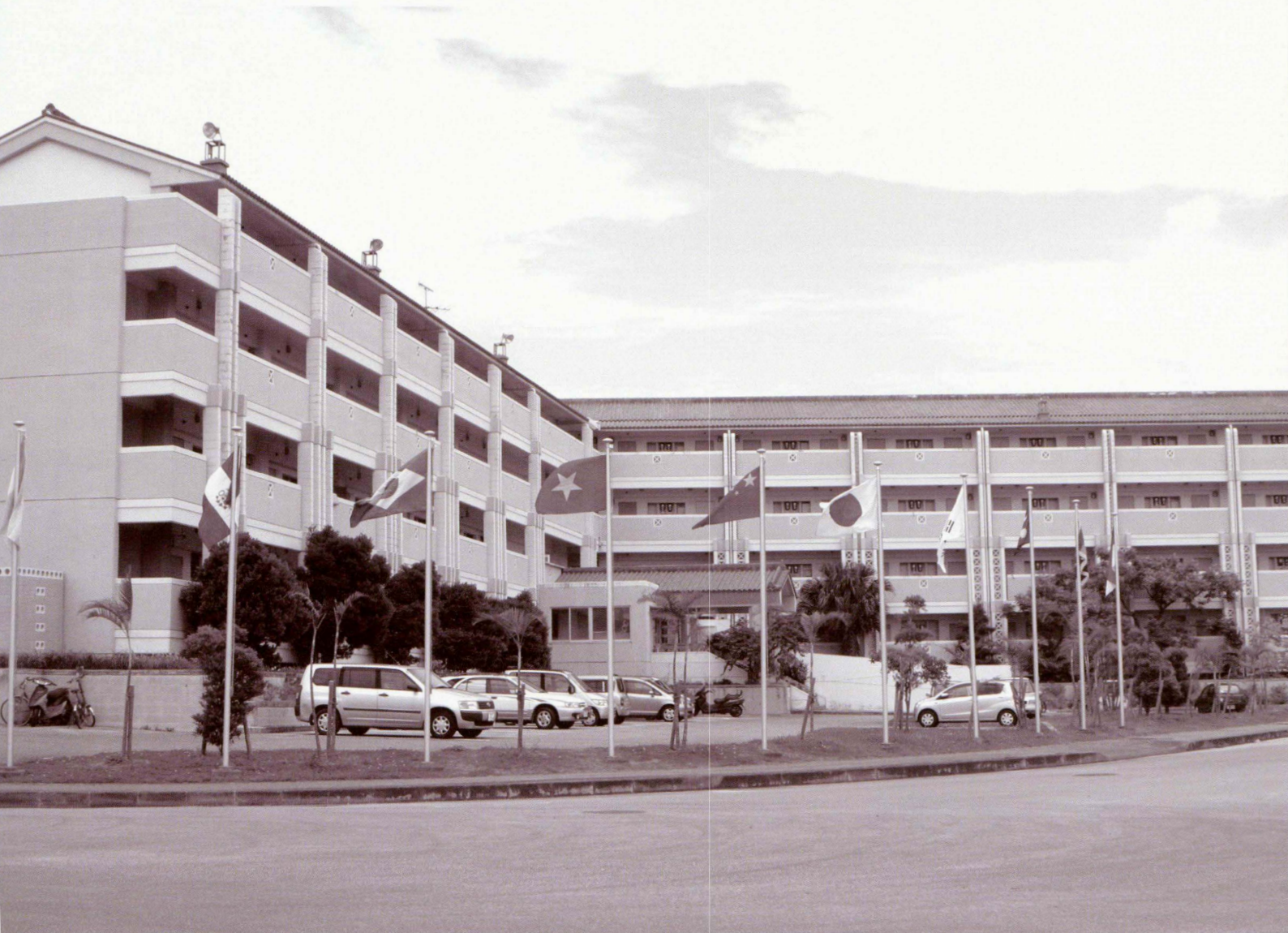


看護実践教育研究センター主催、エクステンションセンター共催で、「第１回北部地域保健・医療・福祉施設代表者等懇談会」を開催しました。第１回の開催を記念して、筑波大学名誉教授・本学看護学研究科非常勤講師の紙屋克子先生をお招きし、「社会と共に歩む看護―エビデンスに基づく優しい実践―」と題した特別講演を行いました。参加した北部地域の施設や学校の教員・医師・看護師・介護士・行政関係者の方々から、「すぐに実践したい」「少しでも患者様に役立つことができるように努力したい」等の感想があり、有意義な懇談会になりました。


学生センター

# 4章

# 国際交流



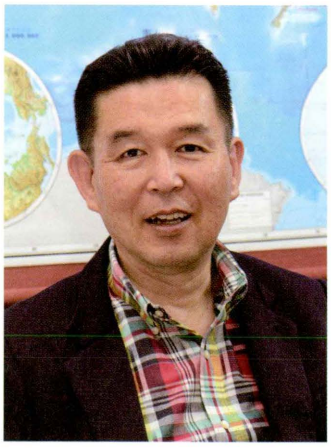
# 海外学術交流協定校一覧（2014年度現在28校）




ブロック大学（カナダ）
ナイアガラ大学（カナダ）
サウスイーストミズリー州立大学（アメリカ）
スプリングフィールド大学（アメリカ）
ジョージフォックス大学（アメリカ）
ロングアイランド大学（アメリカ）
メキシコ国立自治大学（メキシコ）
ハワイ大学ヒロ校（アメリカ）
ロンドリーナ州立総合大学
（ブラジル）
パシフィコ大学（ペルー）
産業社会科学大学
（アルゼンチン）

# ロンドリーナ州立総合大学
# 産業社会科学大学（UCES）
# パシフィコ大学
# ガブリエル・レネ・モレノ国立自治大学
# メキシコ国立自治大学





住江　淳司
国際文化教育研究学系 教授

1991（平成３）年７月14日、東江康治前琉球大学学長を委員長とする名護総合学園設立準備委員会が発足しました。同委員会では国際性豊かな教養人を育成する学部学科を設置するため、全国の学部を調べ、全国でも少なく、沖縄の他の大学と競合しない中南米や東南アジアに焦点をあて、英語のほかにスペイン語・ポルトガル語も導入しました。

国際学群国際文化専攻では、日本・沖縄の歴史文化を学び、東アジア、東南アジア、オセアニア、北米、中南米などの歴史文化を考究する人材の育成に取り組んでいます。

特に沖縄は昔から東南アジアとは貿易を通して密接な関係を持っていますし、中南米には多くのウチナーンチュが移民として渡っています。

## 中南米の大学50施設を訪問

1993（平成５）年６月30日、文部省の「大学設置・学校法人審議会」に第二次申請が受理され、同年７月８日には校舎建設工事の起工式が行われ、1994（平成６）年４月の開学に向け作業は順調に進んでいました。

その頃、東江康治委員長は安井祐一先生と住江淳司（私）に対し、「国際文化学科（1994年当時）のカリキュラムで柱になるのが、東南アジア文化コースと中南米文化コースです。開学の２年後の夏休みを利用して３週間、中南米地域の現地実習と集中講義が受けられる学術協定大学を探してください」と命じられました。私たちは手始めに中南米の各沖縄県人会へ電話やFAXでコンタクトを取り、１ヵ国につき10大学を視察したいと協力をお願いし、承諾を得ました。

1993（平成５）年当時、ブラジルには日系ブラジル人が150万人在住していて沖縄系の人たちはその１割の15万人いました。アルゼンチンの日系アルゼンチン人は５万人で、３万５千人が沖縄系、ペルー共和国の日系ペルー人は９万人いて６万３千人が沖縄系でした。沖縄からボリビアへの移民は1954（昭和29）年から始まり、米国の統治下にあった琉球政府とボリビアが農業移民流入の協定を結んだのが始まりで、沖縄系ボリビア人は約１万人と他の国に比べると多くはありません。

同年９月、安井祐一先生と私は名桜大学と学術交流協定を結べる大学の調査のためブラジル、アルゼンチン、ペルー、ボリビア、パラグアイの５ヵ国を巡る旅に出ました。私たちを出迎えてくれたのは、現地の沖縄県人会の方々でした。また、私たちは現地の事情に詳しくないため、大学を訪問するときは県人会の会長や副会長の車に同乗させてもらい、約１ヵ月間をかけて５ヵ国の国公立と私立の大学計50校を視察しました。

## ロンドリーナ州立総合大学

中南米で最初に訪れた国はブラジルです。ブラジルは1980年代から続いていた天文学的なインフレに加えて、1993（平成５）年当時、リオやサンパウロなどの大都市には、ファヴェーラ（favela）という大きな貧民街があり、治安も悪くなっていました。ブラジルの沖縄県人会は、サンパ




海外学術交流協定校第１号となったロンドリーナ州立総合大学との交流協定調印式＝1994.5.25

ウロにある本部のほか、多数の支部があります。私たちは本部から、比較的治安が良いと言われていた内陸部のロンドリーナにある沖縄県人会ACROLを紹介してもらいました。国立のリオ・デ・ジャネイロ連邦大学やサンパウロ大学にも行きましたが、ACROL会長のジョン名嘉間氏が推薦したのがロンドリーナ州立総合大学でした。同大学では会長の友人であるルジア・ヤマシタ・デリベラドール（写真中央）副学長が対応してくださり、訪問の趣旨を話すとすこぶる興味を示してくれ、仮の覚書も交わしました。ルジア副学長は翌年、名桜大学を訪れ、東江康治学長と正式に学術交流協定の調印をしました。

2014（平成26）年度現在、名桜大学は海外の28大学と学術交流協定を結んでいますが、ロンドリーナ州立総合大学がその最初の協定校です。同大学にはこれまでに名桜の学生が合計で72人留学しています。また同大学からの留学生も合計で31人います。それとは別にブラジル沖縄県人会（サンパウロ市）、沖縄県、また名護市と本部町から推薦を受けた学生も本学で学んでいます。

## 産業社会科学大学（ＵＣＥＳ）

２番目に向かったのがアルゼンチンのブエノスアイレスです。サンパウロから飛行機に乗るのですが、ブエノスアイレスに到着する予定時刻が午前１時半頃でした。安井先生は南米からの県費留学生を琉球大学で面倒を見ていた関係で、その中でエルネスト宮城という方に電話され、「現地への到着は夜中になるので君だけで迎えに来てほしい。深夜なので県人会の皆さんには連絡しないで」と伝えていました。私たちが乗った飛行機が着いたのは午前２時半でした。しかし空港ロビーに在亜沖縄県人連合会の会



UCES校舎

長と第１副会長から第４副会長たちの姿を見ることになり、予期せぬ出迎えに驚きました。

笑顔で迎えてくれた会長は「お疲れでしょうから２階の喫茶ルームで少し休みませんか」と言い、一段落すると会長が「私たちの沖縄県人連合会会館が建設できたのは東江康治先生のご尽力があったからです。ですから東江先生は私たちの大恩人です。その大恩人と関係のあるお二人を私たちがお迎えするのは当たり前のことであり、少しでもお手伝いができれば恩返しにもなりますから、私たちにとってうれしいことであり、何よりも大事なことなのです」と初めて聞く東江学長の別の顔を知って、今までの疲労が快感に変わりました。

アルゼンチンではブエノス・アイレス国立大学、ラ・プラタ国立大学などを回りましたが、連合会はスペイン語圏の国立大学には必ず政府が介入してくるので、ここで協定校を探すなら柔軟性があり自由の利く私立大学が良いと薦められ、産業社会科学大学と提携しました。同大学は1993（平成５）年、アルゼンチンの企業家グループらによって創設された新しい大学です。学科は経営と経済が中心で産業学科、マーケティング学科、体育学科など９学科があります。同大学は南北アメリカ、ヨーロッパ、アジア・太平洋地域の大学など全世界68以上の大学と学術交流協定を提携している私立大学です。

2014（平成26）年度現在、名桜大学からは合計で25人の留学生を派遣し、産業社会科学大学からは１人の留学生を受け入れました。在亜沖縄県人連合会の推薦入学者も本学で学ぶことができます。また在亜高等学校である日亜学院の学生も、沖縄県人連合会の会長の推薦があり、日本語検定２級以上の力があれば、本学で学ぶことができるシステムもあります。



## パシフィコ大学

1980年代、ペルーも深刻な経済危機に陥り、農村部では大学教授のアビマエル・グスマン率いる毛沢東主義のセンデロ・ルミノソ（輝ける小道）という左翼ゲリラが誕生し、1984（昭和59）年には都市部にもキューバ派のトゥパク・アマル（MRTA）という左翼ゲリラができました。二つのゲリラはしだいに勢力を伸ばし、リマなどの大都市にできたプエブロス・ホベネス（貧民街）を拠点に暗躍し、都市部の治安は悪化していきました。80年代末になるとハイパーインフレに見舞われ、経済は破たんしました。

1990（平成２）年、ペルー共和国で世界初の日系人大統領アルベルト・フジモリが誕生しています。フジモリに投票したのは下層階級やインフォーマルセクターの人たちでした。1992（平成４）年、テロ二大組織の指導者グスマンが逮捕され、組織は弱体化しましたが、都市部の治安に変化はなく、市民らは天文学的インフレとテロに戦々恐々としながら日々を送っていました。

私たちがペルーを訪れた1993（平成５）年、インフレはやや改善され

ていましたが、主要道路にはテロ対策として車がまっすぐ進めないように大きなコンクリートの塊が点在していました。

私たちはペルー沖縄県人会の会長や副会長の車に同乗させてもらい、国立のサンマルコス大学やカトリック系の大学など、10大学を見て回りました。びっくりしたのは、会長や副会長の車の助手席にマシンガンが置かれていたことです。安全装置をかけていて暴発はしませんからと言われても、銃口が私の方を向いていたので、ゆったりと腰を下ろす気分にはなりませんでした。車窓から外を眺めていると、銀行から白い煙が上がっていました。あれは何ですかと尋ねたら、爆弾による噴煙だと平然と話すのを聞いて、大変な所に来たものだと思いました。私たちは身の安全のため警備が厳重な五ツ星ホテルに泊まりましたが、視察を終え地下駐車場に入るときには、毎回爆弾探知機のチェックとボディーチェックを受け、緊張の連続でした。しかし県人会のサポートで、何事もなく業務を推進できました。

当初、ペルーでも、協定校は国公立の大学と考えていましたが、県人会長の話はアルゼンチンのときと同じで、「国立だと国の意向に沿った動きをする教授たちもいるので、何かと問題が発生する。自由の利く私立大学と協定を結んだ方がいい」と助言され、県人会が推薦してくれたパシフィコ大学と提携しました。

同大学と交流協定を結ぶことができたのは、ペルー沖縄県人会の人的支援のおかげでした。それ以来、ペルー沖縄県人会は、本学にとって欠かせない組織となっています。

たとえば、名桜大学からの留学生が病気になったときの援助や生活面の相談などに対応してくれています。また、毎年９月に行われる中南米現地実習の文化交流会も同県人会館の講堂で催されています。

パシフィコ大学はイエズス会が創設した私立大学です。偏差値の高い大学で経営と経済に強く、ペルーの慶応大学と言われている有名私立大学です。2014（平成26）年度現在、ペルーの治安が不安定なため、名桜大学から留学生の派遣と受入は実施していません。






上・下　パシフィコ大学を親善訪問
＝2014.8



ガブリエル・レネ・モレノ国立自治大学
交流協定調印式



## ガブリエル・レネ・モレノ国立自治大学

ボリビアの沖縄県人会には三つの組織があります。外交を担当するボリビア沖縄県人会、行政を担当する沖縄日ボ協会、経済を担当するコロニア沖縄農牧総合協同組合（CAICO）があります。その三つが他の国の沖縄県人会に相当します。

ボリビアでもカトリック大学など10の大学を視察しました。その中でガブリエル・レネ・モレノ国立自治大学のウィリアム教授が熱心に協定について応対してくれました。同校には、名桜大学の学生４人が現在までそれぞれ１年間留学しています。また２回目の現地実習には86人が参加しました。引率体制は、私と安井先生、名桜大学の職員２人、添乗員２人の６人体制でした。ボリビアは衛生状態があまり良くないと注意していたのですが、学生たちは移動中に路上で販売していた食べ物を口にしたのか、

47人が食中毒にかかりました。日程の関係で気分のすぐれない彼らも引き連れてアルゼンチンに向かったのですが、その中の２人はアルゼンチンの病院に入院するほど重症でした。そんな出来事があったため同大学への現地実習はこの１回だけです。同校には、1995～98（平成７～10）年の４年間で毎年１人の学生が留学し、学術交流協定が切れる1998年までに４人が留学しました。1998（平成10）年度以降は、衛生上の問題と治安が悪化したため、提携は継続しませんでした。

## 中南米現地実習を経験した学生の就職状況

現地実習と留学の経験を生かし在日チリ大使館及び在日ペルー大使館専任職員、沖縄県庁国際交流推進課中南米県人会担当職員、中南米沖縄県人会団体事務所職員、メキシコシティ日本語教師、埼玉県警国際捜査１類ポルトガル語専任通訳官、国際協力事業団などに就職したりと、国際舞台で活躍する人材が育っています。

2014（平成26）年３月19日、ブラジルのロンドリーナ市から私（住江）に名誉市民の称号が与えられました。名桜大学とロンドリーナ州立総合大学との学術交流協定で、現地実習や留学生の派遣、及び受け入れが国際交流の取り組みとして高く評価された証だと喜んでいます。

## メキシコ国立自治大学

### 学術交流協定締結の経緯

名桜大学は1994（平成６）年の創設当時から南米のブラジル、アルゼンチン、ペルー３ヵ国の各国１大学と学術交流協定を締結しています。当初はボリビアにも協定大学がありましたが締結は続きませんでした。2013（平成25）年６月、学内で南米にもう１校の協定校をつくろうと話し合いが持たれましたが、距離的なことを考え、南米につくるよりは中間地点に位置する中米のメキシコにつくるべきだと考えました。問題は、ブラジルのロンドリーナ州立総合大学のように自治をもった大学にするのか、アルゼンチンの産業社会科学大学やペルーのパシフィコ大学のように政府の干渉を受けない私立にするかでした。また、その国に沖縄県人会がなければなりません。名桜大学が南米の大学と協定を結ぶことができたのは、それぞれの国の沖縄県人会の協力があったからであり、現在も３国の沖縄県人会には、現地を訪れた学生たちがお世話になっています。

2013（平成25）年９月、メキシコシティに現地実習で赴きました。そこで、メキシコ国立自治大学の学生部長と面会したとき、学術交流協定を結ぶために授業料相互免除、単位互換、学生寮などについてたずねました。こちらの要望はすべて満たされ、好意的に話は進みました。それでも名桜大学の学生数約2,000人に対し、メキシコ国立自治大学の学生数は約33万人で、あまりにも規模が違うため、大学間の交流協定は難しいと話されました。しかし、学部長は、「名桜大学とカリキュラムが似た社会政



ロンドリーナ市の名誉市民の称号を受けた住江淳司教授。外国人では２人目

治学部との協定なら可能です」とも話されました。この提案に関して名桜大学内で紆余曲折ありましたが、前向きに受け入れることになりました。メキシコ国立自治大学は名桜大学のほかに、東京大学、京都大学、九州大学などと交流協定を結んでいます。

2014（平成26）年８月21日、山里勝己学長と私（住江）はメキシコ国立自治大学の社会政治学部との学術交流協定調印式のため、現地を訪れました。メキシコ国立自治大学はスペイン統治下の1551年９月21日に王立メキシコ大学として創設。1821年メキシコ独立後、1910年メキシコ国立大学となり、1929年メキシコ国立自治大学となりました。ラテンアメリカ（中南米）ではペルーの国立サンマルコス大学に次いで２番目に古い大学です。

メキシコシティの南部コヨアカン地区に位置し、大学都市を形成しています。総面積700万㎡（東京ドームの約150倍）の広大なキャンパスに、学部・研究所・博物館など40以上の研究機関があります。学生数は33万人でラテンアメリカ最大規模を誇る大学です。ちなみに同大学の卒業生にはメキシコの歴代大統領やノーベル文学賞を受賞したオクタビオ・パス、ノーベル化学賞、ノーベル平和賞などを受賞した学者もいます。





メキシコ国立自治大学
上・学内を案内してもらう
下・交流協定調印式＝2014.8

## 外国人教育センター（CEPE）

メキシコ国立自治大学には、留学生にスペイン語教育を行うため、外国人教育センターがあります。同センターでは留学生に対し下宿の斡旋も行っています。





メキシコ国立自治大学

# 大仁科技大学
# 湖南農業大学
# 北京聯合大学旅遊学院大学

## 東アジア３大学との学術交流協定締結

### 経緯

名桜大学では「国際人の養成」という建学の理念のもと、開学当初より海外の多くの大学と学術交流の協定を結び、また正規留学生の受け入れを行ってきました。しかし、2008（平成20）年の北京オリンピックの開催の年まで、中国・台湾に協定校は１校もありませんでした。

私は2008（平成20）年に名桜大学に入職しましたが、学内から中国・台湾との国際交流が必要ではないかとの声があり、また学長からも直接ご指示を受けて、中国・台湾の大学と国際交流協定を結ぶことが私の名桜大学での最初の仕事になりました。

### 大学選定

大学の選定にあたって重視したのは、カリキュラムとして名桜大学と専攻が一致していることです。名桜大学は観光立県・沖縄に所在する大学として、「リゾートの中で観光を学ぶ」というキャッチフレーズのもと、県内で最も早く観光産業学科を持つ大学としてスタートしました。ですから、観光専攻のある大学と協定を結ぶということになりました。

北京聯合大学旅遊学院大学は、観光分野において中国でトップレベルの大学です（「旅遊」は中国語で「観光」を意味する）。また北京は中国の首都ですから、中国語を勉強している学生が標準語の北京語を学べるというメリットもあります。

北京旅遊大学には13の専門大学がありますが、そこに元同僚がいたので、そちらに学術交流協定の話をもちかけたところ、すぐに学長に会えるよう取り計らってもらえました。そこで、渡具知伸学生部長（当時は課長）と出向いて、名桜大学の紹介をし、なぜ北京旅遊大学と協定を結びたいかという話をしました。北京旅遊大学の趙鵬学長（当時）は、ハワイ大学で観光の博士号をとった学者だったので、沖縄は日本のハワイだという話題が伝わり、PRが届いて締結につなげることができました。

大仁科技大学は、台湾第二の都市・高雄から車で約40分の屏東（ピンドン）市にあります。屏東市は台湾の南に位置し、観光が有名である点など、沖縄と多くの共通点があります。大仁科技大学はもともと薬学関係の大学でしたが、地元の経済発展に合わせて専攻を増やしていき、その過程で観光専攻も設置されました。実学教育として実習にも力を入れていて、学内にホテル、レストラン等の設備も整っています。

このように、観光地で実践的に観光を学ぶことができますから、名桜大学の観光専攻の学生にとっては申し分ありません。さらに観光以外にも、情報管理や健康分野の専攻もあり、名桜大学のすべての学生が大仁科技大学で単位を取得することができます。大学間でお互いのメリットが確認された頃、大仁科技大学の学長が瀬名波榮喜学長（当時）を表敬訪問した際、



中山　登偉
学生課主幹（国際交流係長併任）

「提携しましょう」との申し出があり、協定締結に至りました。

北京旅遊大学、大仁科技大学との提携が決まってからも交流協定大学の選定は続きました。その際の選定条件は、中国という広い国土の中で北京とは提携を結んだから、今度は中部地方にある大学がいいという地理的条件が新たに出ました。また専攻については、北京旅遊大学にも大仁科技大学にも観光はあったから、観光はなくてもよいというふうになりました。

私は中国の中南部に位置する湖南省の出身ですので、そちらには話ができる知り合いが多くいました。そこで、湖南省の省都・長沙市にある湖南農業大学の知人に連絡をとり、話をしました。湖南農業大学には観光専攻はありませんでしたが、湖南省の重点大学として人文社会、芸術、スポーツ、理学、農学、経済から医学までカバーする総合大学で、ほとんどの分野を学ぶことができます。知人に担当者とつないでもらって、こちらもすぐに渡具知部長と出向き、協定締結の了解を得ることができました。







交流協定調印式
上・大仁科技大学＝2008. 6
中・湖南農業大学＝2008.11
下・北京旅遊大学＝2008.11

## 中国・台湾への留学の目的

３校とは2008（平成20）年に協定を結びましたが、2009（平成21）年の最初の留学説明会には学生がひとりも集まりませんでした。しかし、中国・台湾に留学したいという学生は年々増えてきています。一番大きな要因は、中国の経済発展に伴い、就職の際に中国語が話せることが有利になっていることです。たとえば観光専攻の学生なら、沖縄を訪れる中国人観光客が増えているので、中国語は役に立つという考えがあります。ほかに、中国の歴史や小説が好きで、文化にあこがれるという学生もいます。

## 留学後の学生の変化

何よりも留学前と後では、学生たちはいい意味で話し方が変わっています。留学で密度の濃い時間を過ごし、大きく成長しているのだと思います。また中国については、テレビやインターネットから間接的に得ていた情報を通して持っていた留学前のイメージが、実際に現地を見て、現地の人と交流し、イメージがまったく変わったという学生が多いです。ほとんどの学生が、自分が直接肌で感じた中国を好きになったといいます。

中国の大学は、大学英語試験４級合格などの卒業条件があるのが普通で、日本の大学よりも厳しいです。留学生に対しても、HSKという中国語版TOEFLを入学及び卒業の条件とするなど、厳しい対応をしている場合があります。こうした環境で学び、学生たちは、苦しかったが、しっかり勉強できたといって帰ってきます。

東アジアは日本にとってすぐ隣近所ですから、仲良くしたらきっといいことがあると思います。教育機関として、中国や韓国の文化を学ぶ学生を養成し、これから社会に出ていく学生の成長を担っていきたいです。

# 開南大学
# 中州科技大学

## 開南大学

### 協定締結までの経緯と同大学の特徴

沖縄と台湾は一番近い隣人といえますが、私自身台湾を研究対象としていることもあり、本学学生を派遣するうえで魅力的な台湾の協定大学を増やすことは本学着任以降目標としてきたことでした。様々な条件を考慮した結果、桃園県に位置する開南大学を選定し、2013（平成25）年末頃に交流協定について打診しました。先方も日本の大学との交流促進に対して非常に熱心であったため、2014（平成26）年６月に協定校締結にいたりました。

開南大学は今年で大学創立14周年と、本学よりも若い大学です。しかし、学園自体は1917（大正６）年に日本統治時代の東洋協会によって建学された台湾商工学校が起源であり（同じ東洋協会により設立された台湾協会学校、現在の拓殖大学は兄弟校）、100年近い歴史を誇る非常に日本と縁が深い学園です。

開南大学には商学部、情報学部、観光運輸学部、人文社会学部、健康福祉学部の５学部28学科、14の研究所が設置されており、学生も１万人以上在籍しています。大学が位置する台湾北部の桃園県は、桃園国際空港を抱える台湾の国際的玄関であるだけでなく、200万の人口を擁し、2014（平成26）年12月には直轄市となる成長著しい地域です。また、国際空港に最も近い大学である特徴を生かして、台湾でも数少ない航空関係の専攻を有しています。チャイナエアラインから寄贈された実際の客室キャビンが設置されている教室もあり、航空・観光業界に関する実践的な学びが提供されていることも同大学の特色の一つです。

### 中国語を学びながら英語でも学べる大学

開南大学には、中国語と英語の両方を学べる環境があり、これは本学からの派遣留学生にとって大きな魅力です。中国語については外国人のための華語（中国語）センターが設置されていますし、一方の英語については、「英語を学ぶ」のではなく、「英語で学ぶ」（英語を教授言語とする）科目の履修だけで学士の学位が取得できる国際栄誉プログラム（IHP：International Honors Program）が提供されています。主に社会科学の科目が中心となりますが、留学を通じて英語の向上を図りたい学生にとって最適な環境といえるでしょう。もちろん日常生活は中国語ですが、IHPで学ぶ各国からの留学生とは英語での交流となるでしょうし、このような学習環境はこれまでの中国語圏の協定校と大きく異なる点であるといえます。



**菅野　敦志**
国際文化教育研究学系 上級准教授

## 中州科技大学





交流協定調印式
上・開南大学＝2014.6
下・中州科技大学＝2014.6

1968年に中州技術専門学校として開学した中州科技大学は、台湾中部の彰化県員林にある私立大学で、工学部、マネジメント学部、健康学部の３学部、15学科、３つの研究開発センターがあり、在籍する学生は約5,000人です。中州科技大学は先に沖縄工業高等専門学校と交流協定を結ばれていましたが、同じ名護市に位置する本学に強い関心を寄せてくださり、2013（平成25）年に先方大学の学長はじめ、関係各所の先生方が本学を訪問されました。その後協定締結の打診があり、2014（平成26）年６月に調印の運びとなりました。

広大な敷地と充実した設備を備えた中州科技大学は緑多く自然豊かな環境にあり、地域を支える人材を育成し、地域の高等教育を担う重要な役割を果たしていることなど、本学と似ている点も多いといえます。中州科技大学は工学部、マネジメント学部、健康学部があることから、本学とは特に情報・経営・健康分野での交流が期待できるかと思います。従来の大仁科技大学に加え、今回の開南大学と中州科技大学２校との協定締結によって、台湾の北部、中部、南部の各地に協定校が揃ったことも本学の国際交流のさらなる展開にとって記念すべき出来事であったと思います。

## “アジアの中の沖縄”のための新規協定締結

これまで中国語圏の協定校としては、中国には北京聯合大学と湖南農業大学の２校が、台湾には大仁科技大学の１校があるだけでした。もともと中国語圏への留学希望者はそれほど多くなかったのですが、残念なことに、尖閣問題、大気汚染をめぐる報道の影響を受けて、2013（平成25）年には中国に出願する学生は０名となってしまいました。今後も状況が改善されない限り中国から台湾への志望変更は避けられないと考え、これまで１校しかなかった台湾の協定校を増やすことで本学からの中華圏への派遣留学を盛り上げていきたいという思いが協定締結の背景にありました。

現在、沖縄に来る外国人観光客の半数近くは台湾人です。加えて、香港や中国大陸からの中華圏全体を含めれば相当な数に上ります。英語はもちろん重要ですが、英語プラス中国語を学ぶメリットは多く、本学の学生が沖縄で、日本本土で、そしてアジアを舞台としてこれから飛躍を目指していくうえで大きな助けになることでしょう。

本学の学生に限らず、“留学＝英語圏、欧米”という図式は多くの学生の中にいまだ根強いように思われますが、しかし、中国経済の驚異的な発展を例に挙げても、これからの日本、特に沖縄がアジアの中で自らの活路を見出していくことは当然の選択であるといえます。“アジアの中の沖縄”という私たちの置かれた場所の強みをあらためて認識したうえで、今後、本学の多くの学生がアジアの協定校に留学し、身近な“隣人”に対する理解を深めてほしいと思います。

# 啓明大学
# 国立済州大学
# 明知大学

## 啓明（ケーミョン）大学

### 交流協定調印までの経緯

2008（平成20）年、本学でのe-ラーニング構築に先立って瀬名波榮喜学長と清水則之国際学群長は、11月25日～27日、２泊３日の日程で韓国のe-ラーニング事情視察のため、「大邱（テグ）サイバー大学」と「嶺南（ヨンナム）大学」の２校を訪問する運びとなりました。出発前の11月21日、私は両大学の説明をするため、学長室に呼ばれました。その席で、学長から、韓国にもぜひ協定大学を作りたいので、私の母校である啓明大学を訪問し、本学と協定締結を打診してほしいとのご提案がございました。学長は以前、琉球大学在職中に、協定大学委員長を務め、啓明大学と協定を結んだときのことを話されました。私は啓明大学の申総長とは予てから面識があり、また、多くの先生方とコンタクトを取ることも可能なので、同大学との学術交流協定を視野に入れるなら、私もぜひ同行したいと申し出ました。同大学には韓国に到着した翌日の26日に訪問し、学長のご提案を先方にしっかりとお伝えしました。誠に幸いなことに、学長のご熱意と啓明大学の申総長のリーダーシップがマッチし、難なく同年12月に学術交流協定を結ぶことができました。

### 概要

啓明大学は1954（昭和29）年に外国の宣教師によって設立され、1978（昭和53）年に総合大学に昇格し、2014（平成26）年現在、世界33ヵ国の157大学と学術交流協定を結んでいる韓国屈指のグローバルな私立大学です。韓国第３の都市の大邱広域市に所在し、首都ソウルからは高速鉄道（KTX）で約１時間40分、飛行機だと約１時間のところです。キャンパスの敷地は205万1,736㎡もあり、韓国一番の広さを誇ります。校舎はヨーロッパ風の赤レンガ造りで、小高い山を背景にした広い平地の中にあります。四季折々の樹木に映えて美しく変化する校舎は、映画やテレビドラマなどのロケ地としてよく利用されています。

学部生は24,085名を数え、交換留学生114名を含めた外国人学生743名が勉学に励んでいて、キャンパス内は国際色豊かです。大学院生は2,412名、教員は外国人教師92名を含めて848名にのぼります（2014年３月現在）。設置学部には、人文（語学教育専攻）をはじめ、国際学、経営、ファッション、芸術、理工、医学、薬学、看護、体育（スポーツ健康学科）など19学部98学科があり、本学での専攻科目はすべて継続して勉学できます。

### 授業料及び生活費

授業料は相互免除のため無料です。ただし、大学内で運営している韓国語習得のための「韓国語学堂」は有料で、２ヵ月半で７万円（100万ウォン）です。



許　点淑
観光産業教育研究学系 上級准教授

学生寮は二人一部屋、朝夕食付で３ヵ月７万円（100万ウォン）なので、ひと月の生活費は県内より安く賄えます。大学周辺にはコンビニやスーパー、食堂、ネットカフェなどがあり、地下鉄やバス停も近いので週末に出かけるのにも便利です。


啓明大学正門

### 学業

交換留学生は交換学生用の必修科目以外に留学生担当の先生やバディーと相談して自由に学部の授業を無料で履修することができます。授業形態は１科目３単位（１時限75分授業×２）と２単位（１時限90分）の２種類があります。授業は韓国語と英語（約300科目）で行います。

留学生を対象にした韓国語だけの学習の場の「韓国語学堂」があり、初級から上級レベルまで６段階に分かれた授業を受けることができます。

### 派遣期間と選抜試験

派遣期間は３月から翌年の２月までの１年間です。派遣されるには本学での韓国語による筆記試験と面接があり、選抜試験を受けるためにはGPA（Grade Point Average）が2.5以上でなければなりません。

2014（平成26）年現在、同大学へ派遣した留学生は20人、受け入れた学生は10人です。

## 国立済州（チェジュ）大学



### 交流協定調印までの経緯

2010（平成22）年３月、大谷健太郎上級准教授と私は総合研究所の共同研究の一環として済州大学を訪問し、観光関連カリキュラムやインターンシップ、国際交流に関する内容の調査を行ったことがあります。その後同年９月、何の前触れもなく済州大学から12名の教官が本学を訪ねてきました。その日は瀬名波学長も学内にいらしたので、さっそく一行を学長室に案内しました。その席で学長は、数年前に本学を訪問した済州大学一行から学術交流協定のご提案があったが、本学の諸事情により実現できなかったので、この際、協定を締結したいと申し入れ、先方から好意的な反応がありました。

これを機に両大学は交流協定締結に向けて一気に動き出し、2011（平成23）年６月13日、私と学長は、済州大学で許香珍総長や国際交流センターの皆さんの歓迎を受け、無事に調印にこぎつけることができました。調印式後、車でキャンパスを案内された学長が、20年ぶりに目の当たりにする済州大学の飛躍的な発展にたいへん驚いていた様子が印象的でした。

### 概要

済州大学は済州特別自治道済州市我羅（ア）１洞（済州大学路）に本部を置く韓国の国立大学で1955（昭和30）年に設置されました。済州市内に我

羅（ラ）・沙羅（サラ）（旧・済州教育大学）の２キャンパスを持っています。同校には済州空港からタクシーで約20分、バスだと約35分を要します。

学部生は9,144名、大学院生は705名、また15ヵ国の約107大学と15の機関と国際交流協定を結んでいます。学部は人文、社会科学、海洋科学、工科、教育、医学、看護、芸術デザインなど12の学部、22専攻と52の学科があります。

### 授業料及び生活費

授業料は相互免除のため無料であり、交換留学生は韓国語学堂も無料となります。韓国語学堂では、週５日（月～金）、１日４時間の韓国語の授業が提供されます。ただし、テキスト代は有料です。寮は最新式の福利厚生施設で、朝・夕食を提供しています。施設内には読書室、コンピュータ室、スポーツルームなどもあり宿泊のみならず、学業や健康管理に最適の環境を備えています。

派遣期間と留学までの手続きは啓明大学と同じです。

## 明知（ミョンジ）大学

### 交流協定調印までの経緯

瀬名波学長から、韓国の首都であるソウルにも学術交流協定校を作りたいとのご要望を承り、私は、同大学に勤めている知人の教授と何度もコンタクトを取りました。その努力の甲斐あって、2014（平成26）年４月30日から５月２日まで同大学を訪問して国際交流院院長と面談し、両大学間の学術交流協定締結のための事務的協議を行ってきました。そして2014（平成26）年10月、学術交流協定を結ぶことができました。



国立済州大学にて

## 概要


明知大学寄宿舎

明知大学は、京畿道龍仁市に本部を置く韓国の私立大学です。1948（昭和23）年に設置されたソウル高等家政学校が始まりであり、1956（昭和31）年に男女共学の短期大学として開校し、1983（昭和58）年９月に総合大学に昇格しました。

同大学の学部は人文、社会科学、経営、法科、自然科学、工科、芸術体育、建築の８学部があります。人文キャンパスは各大学が密集している都心部の新村に程近い地域です。そのため新村は若者の街として有名であり、韓国の若者文化の現在を知るうえで重要なところでもあります。人文キャンパスには約7,500名の学生が在学していて若者のエネルギーに満ち溢れています。

明知大学は26ヵ国134大学と協定を結んでいます。日本の大学との交流はそれほど活発ではないものの、本学との協定を機に交換留学などの国際交流が活発になることが期待されます。

## 留学生たちの感想

留学を志す学生の大半は、希望とは裏腹に外国での生活に対し一抹の不安を抱いています。しかし、実際に韓国の若者たちや他の国からの留学生たちと接することで、日本では経験できなかった人と人のふれあいに歓喜し、現地の自然や文化に感動し、充実した日々を送っているようです。留学から帰ってきた学生たちは、外の世界を体感することにより、沖縄をより客観的に見る目が養われ、世界観が広がっているように思います。１年間の留学ですが、これからの長い人生において大きな礎になるのは確かのようです。

# ベトナム国家大学ホーチミン市人文社会科学大学
# メーファールワン大学
# サイアム大学



山田　均
国際文化教育研究学系 教授

## ベトナム国家大学ホーチミン市人文社会科学大学

ベトナム国家大学ホーチミン市人文社会科学大学は1955（昭和30）年、サイゴン大学に属する文科大学として開設されました。ベトナムが統一された1975（昭和50）年以降、同大学は教育内容、方向、プログラムを変更し、1977（昭和52）年に文化大学と理科大学が併合してホーチンミン市総合大学となり、ベトナム南部で最も大きな大学となりました。1996（平成８）年には国家大学に編成され、2000（平成12）年の再編で自然科学大学とともにベトナムの最高レベルの大学となりました。同大学のメインキャンパスは、人口約740万人が住むベトナム最大の都市ホーチミン市の中心に位置しています。同市はベトナムの金融や産業の中心地です。

学部の主な専攻は、文化学、教育学、地理学、歴史学、哲学、社会学、文学・言語学、東洋学、国際関係学などです。

学部、修士課程、博士課程合計で約２万人の学生が学んでおり、留学生用の寮はホーチミン市から車で30分程離れた郊外にある第２キャンパスにあります。生活費は沖縄と比較すると比較的安く、学食を中心とした食生活で約２万円程度。ベトナム料理は日本人の口に合いやすく、値段も良心的です。現在、本学にはベトナム語の科目がないので、選択科目にしたいと思います。

## メーファールワン大学

メーファールワン大学は、タイの首都バンコクから北に830キロ、ラオスとの国境に近いチエンラーイ市から車で30分ほどの丘陵地帯にある大学です。同大学は1998（平成10）年９月25日に、ソンクラーナカリン王母殿下を中心としたタイ王室の後援のもとに開学された、比較的新しい国立大学です。メーファールワンとはタイ語で王母殿下という意味です。タイでも辺ぴな山の中に造られており、12平方キロメートルの広大な敷地に美しい校舎が並ぶ学園都市の風景は、別世界を思わせます。学生の多くが地元の学生ではなくタイ全土から来ているため、ほぼ全員が寮生活という、言わば日本の筑波大学のような大学です。学生数は約7,000人、教授数が約250人、職員数は約500人、学部数は９学部、タイでは中規模の大学だと言えます。

### 留学について

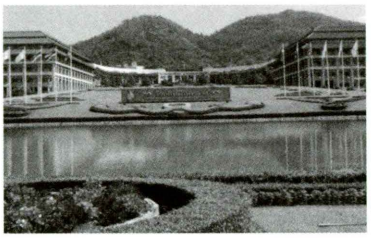
留学は４月から１年間です。年間授業料は相互免除があるため無料です。毎月の生活費は15,000円もあれば十分賄うことができます。渡航にかかる費用として、海外旅行傷害保険が約12万円、航空運賃は約10万円です。

## サイアム大学

サイアム大学は、タイの首都バンコクのパーシーチャルーン区にある都市型の私立大学です。同大学は1965（昭和40）年に工学系の専門学校と

して創立され、1986（昭和61）年に４年生の総合大学となり、現在、私立大学としてはタイで５番目に大きな大学です。工学部、理学部、看護学部、薬学部、法学部、経営学部、マスコミ学部、教養学部、情報技術学部の９学部及び国際コースがあります。学生数は学部生・大学院生合計で約15,000人です。留学生用の寮はありませんが、大学が学内に近いアパートを探してくれます。広さは10畳程度で家具、エアコン、バス・トイレ、電話などがついて１ヵ月13,000円ほどかかります。食費は大学の食堂や近くの食堂でも１日400円ほどで賄えます。タイのアパートにはキッチン設備はありませんので食事は基本的に外食になります。毎月の食費は約１万円ほど、海外旅行傷害保険が約12万円、航空運賃は約10万円です。留学期間は前期と後期があり、前期は６月上旬から10月上旬まで、後期は11月上旬から３月上旬までです。授業料は名桜大学の授業料のみで無料です。同大学との学術交流協定は、2013（平成25）年に結ぶことができました。


ベトナム国家大学ホーチミン市人文社会科学大学


メーファールワン大学


サイアム大学

## 留学は心の中に種をまく作業

英米仏など先進国の留学だと周囲から羨望の眼差しで見られ期待されますが、東南アジアへの留学は、いままで知らなかったところに行くので、保護者からもそんなところに留学して、英語が上手くなるわけでもない、と期待よりもマイナスのイメージを連想されがちです。しかし、行ってみると、タイの人々は非常に豊かであると感じ、帰国する頃には好きになっています。東南アジアへの留学は、米国や日本の方が豊かなのか、それともタイやベトナムの方が豊かなのか、豊かさについて考えさせられる留学になると思います。留学は知らないところに一人で出かけるので、言葉が理解できず苦労し、様々なストレスを感じます。悔しくて涙も流します。しかし涙を流した分だけ心の中に種をまいています。そのことが重要だと思います。

タイの人々は歴史上飢えた経験がありません。それは日本の本州が入るぐらいの平野で米を収穫しているからです。歴史的に、日本の米づくりは、皆が力を合わせて苦労しながら行われてきました。タイの場合はそんな苦労をしたことがありません。そのためコミュニティよりも個人が優先される国です。自由、豊かさ、ゆとりを象徴する一例として、大学の図書館のロビーに野良犬が寝そべっていても誰も追い出したりしません。可愛がることもありません。人と同様そこに犬がいると思うだけです。ですからタイには野良犬や野良猫が多いです。しかし、あまりにも増え出すと行政が対応しますが、日本のように捕まえて殺すのではなく、避妊手術を行い、時間をかけて減らすやり方です。蚊に対しても同様なやり方です。コストはかかりますが殺生をしないですみます。東南アジアへの留学は、ひと味ちがう、人の豊かさに気付く経験であり、リベラルアーツそのものです。

# マラヤ大学
# ハサヌディン大学

## 地元名門大学との交流協定

名桜大学では、国際的な人材を育成するためのカリキュラムの一つとして、学生の海外への留学を積極的に後押ししています。なかでも今後、日本との経済的・社会的な交流がますます活発になると予測される東南アジアは、非常に重要な地域と位置づけています。そうしたことから、同地域を代表するマレーシアとインドネシアの大学と協定を結ぶことになりました。

マラヤ大学は、マレーシアの首都クアラルンプールにある、マレーシアで最も古い最高学府です。授業は英語で行われるため、英語を専攻していない学生には非常にハードルが高いです。しかしまだ数は少ないものの、派遣・受け入れとも実績があります。

一方、ハサヌディン大学も、インドネシアの五つの名門大学の一つで、東部インドネシアでは最上位の大学です。ハサヌディン大学と協定が結ばれた2002（平成14）年には、名桜大学にインドネシア語の専攻コースがあり、同校と関係する先生がいました。そうした人脈を通じて、協定が結ばれることになったようです。長期の派遣・受け入れの実績はまだありませんが、インドネシアにおけるJICAの活動等の関係もあって、ハサヌディン大学には日本に興味を持ち、日本語を学んでいる学生が結構います。日本に行きたいという学生も多いです。大学側も国際交流に積極的で、奨学金制度もありますが、競争が激しく、費用が大きな壁になっています。しかし、一昨年の2012（平成24）年に、約２週間のスタディツアーの形で、ハサヌディン大学から約５名の学生が派遣されてきました。名桜大学でもプログラムを用意して対応したところ、翌年もスタディツアーが実現しました。

## 協定の見直し

国際交流協定を結んでいるがあまり実績のない大学に対して、名桜大学では２、３年前から、短期留学、またはスタディツアーの形で学生を派遣することを検討しています。

これまでは「学生の希望者がいたら」ということで派遣が行われていましたが、学生の希望をただ待つだけでなく、大学側が企画して、学生を海外に行かせる方向で動いています。最初は先生が引率して連れていくという体制をとりますが、その次の年には、学生は自分でプランを考えて海外に出かけていくことができるようになります。

こうした大学の方針もあり、また瀬名波榮喜学長（当時）からも直接要請を受けて、2013（平成25）年、人間健康学部の石橋千征准教授、国際交流課の津嘉山淳子さんと私の３名で、マラヤ大学、ハサヌディン大学を訪問して、交流を深めるため協定の見直しを行いました。そこで、「名桜大学は積極的に学生を派遣したい。長期派遣にこだわらず、短期で派遣できる制度をつくろう」という話をし、両校と合意にいたりました。



アリ、ファテヘルアリムF
経営情報教育研究学系 教授

教員が派遣先の大学に直接足を運ぶことはとても大切です。教員同士が交流を深めることで、派遣もしやすくなるからです。ハサヌディン大学からも学長と学部長が名桜大学を訪れ、交流を深めました。２年前から行われているハサヌディン大学のスタディツアーが実現したのも、その後です。これからはさらに国際的な共同研究を行うなどの形で、教員同士の距離を縮めて、協定校とのパイプを増やしていきたいと考えています。

現在、準備を進めているスタディツアーも、協定校や協定校がある地域を活用して、派遣を行う計画です。





2013年、協定見直しのため両校を訪問
上・ハサヌディン大学にて
下・マラヤ大学で開かれたミーティングの様子

## 留学生の受け入れ体制

学生たちの現地での生活のサポートも、派遣先との連携が欠かせません。マラヤ大学、ハサヌディン大学とも、住居に両校の学生寮を提供してもらい、学生の安全を確保しています。名桜大学の方でも、留学生には留学生センターに滞在してもらうようにしています。

私は国際交流委員として２年間、両校からの留学生の受け入れを担当していました。その間、２回学生を受け入れ、留学生センターに住んでもらいましたが、ほかにもさまざまな面で面倒を見なければなりません。

たとえば両校の学生は、イスラム教徒の場合が多いです。そのため日本では、食べられないものが結構あります。こうした受け入れる相手の文化を前もって理解しておくことで、ふさわしい対応をとることができます。

名桜大学から送り出す学生についても、住居だけでなく、派遣先で関わる人やプログラム等を前もって把握します。さらに、派遣する学生の専攻や留学先で何を学びたいのかを調査し、派遣先に前もって伝えることで、学生の希望を最大限実現するようにしています。

## ハサヌディン大学のサマーキャンプ

ハサヌディン大学の国際交流プログラムに、２年前にスタートしたサマーキャンプがあります。ハサヌディン大学の全協定大学にアナウンスして、学生を同じ時期に誘い、世界中の学生と交流を深めてもらうものです。

その中のコミュニティサービスというプログラムでは、田舎に行き、現地のコミュニティに滞在して、さまざまな体験ができるようになっています。たとえば、滞在先の村が抱えている問題を調査し、どう解決するかを考えるプログラムでは、ハサヌディン大学の学生と海外からの学生が一つのグループになり、議論します。名桜大学の学生にもぜひ参加してもらいたいと思っています。

このようなプログラムは、非常に参考になります。沖縄にも、平和、戦争体験、長寿、観光など、勉強できることがたくさんあります。留学生の受け入れを通して、こうした沖縄の経験、文化を発信していくことは、沖縄を世界中の人に知ってもらい、国際的な貢献になるという想いもあります。

## きっかけづくりは教員の使命

一昨年、私のゼミの学生が自分で計画を立てて、インドネシアへ行きました。この学生は、先に述べたハサヌディン大学のスタディツアーで、名桜大学に留学してきた学生の受け入れに、ボランティアとして関わっていました。そこで留学生と友達になり、その友達の招待でホームステイのような形でインドネシアを訪れたようです。

私は、スタディツアーで一番大事なのは、学生同士の交流だと思っています。現地のいろいろな観光スポットを回るのも大事ですが、現地の同世代の学生たちと話をし、お互いの考え方を知るのは、学生にとってとてもいい経験になります。

この学生がハサヌディン大学からの留学生とボランティアで関わったのは１年生の頃で、当時は語学力もそれほど高くありませんでした。しかしその後インドネシアを訪れ、さらに翌年にはアフリカにも出かけていきました。今年は、イギリスに長期留学することになっています。１年生のときの国際交流体験をきっかけに、海外に行くことの価値を実感し、自ら意志と意欲を育ててきた結果です。学生はみなたくさんの可能性を持っています。ですから環境、きっかけづくりは、われわれ教員の大きなミッションだと思っています。



## 留学の意義

国際交流委員として留学生の受け入れを担当したとき、留学生と話をすると、彼らは日本のことを教科書やテレビを通じてある程度知っています。しかし、実際に現地を見て、現地の人との交流を通して、文化を理解するのが一番です。そこで、学生同士で自分の国の文化を紹介し合い、意見交換するセッションを開きました。

帰国する前に留学生が語ったのは、自分の国のことを聞かれてもうまく説明できず、自国のことをあまり知らないということが初めて分かったということです。こうした体験をした学生は、もっと自分の国のことを表現し伝えられるようになるために、帰国後、真剣に勉強するようになります。

自分の国のことや自分の課題を表現する機会は、普通の生活ではほとんどありません。しかし国際的な場面においては、自分の文化、アイデンティティをしっかりと持ちながら、相手の文化、アイデンティティを理解することが非常に重要です。ですから、これから社会に出ていく学生には、海外に出かけていって、自分を表現する能力を磨き、高めてもらいたいと願っています。

# 学術交流協定と英語圏留学について

## 盛り上がる学術交流協定

近年実施した留学説明会では、国際学群の約３分の１の学生の参加がありました。英語や国際的なことを専攻したいと考えている学生、留学制度について関心のある学生が非常に多くいることがうかがえます。本学が留学に力を入れていることが知られており、ホームページで留学生の体験記が閲覧できるため、入学前から留学を意識していたという学生も多いようです。

留学制度は開始当時から年々盛り上がり、2003（平成15）年はこの20年間で派遣・受け入れ人数がピークに達した時期です。しかしながら一時期、派遣留学生数が落ち込んだ時期があります。2001（平成13）年に協定を結んだジョージフォックス大学は、派遣する条件の20名という人数を下回ったため2006（平成18）年に交流が停止してしまいました。ちょうどその頃、学生の留学に対する関心が薄れていたような気がします。

そういった危機的な状況がありましたが、現在のように盛り上がりを見せるまでには先生方の頑張りが大きいです。一つは2007（平成19）年、ウーロンゴン大学との協定をきっかけとして英語圏の大学との交流に力を入れてきたことです。さらに、先生方が非常に努力されて、韓国の啓明大学をはじめ東アジアの大学との交流も広がり、2009（平成21）年頃から派遣人数は大きく盛り返しました。

協定校は2007（平成19）年時点で17校でしたが、2013（平成25）年度には23校になり非常に増えています。開学20周年を迎える本年（2014年度）は台湾、韓国、メキシコ、カナダの５校と協定を結ぶので急激に増えます。

ところが派遣に関しては増えているものの、受け入れに関しては横ばい状態ということもいえます。理由として考えられるのは、日本といえば東京・京都というイメージが強く、沖縄という場所を選んでもらえないということ、日本語の授業が少ないことです。英語で提供する授業も増やして、外国の学生が留学しやすい条件を整えていく必要があります。

本学の受け入れ留学生の特徴としては、中南米の学生が多いことです。国内でも中南米に協定校を持っている大学は少ないです。中南米に強い先生がいらっしゃるということが大きいです。アジアからの留学生だと中国が一番多く、ほかに韓国、タイなどです。

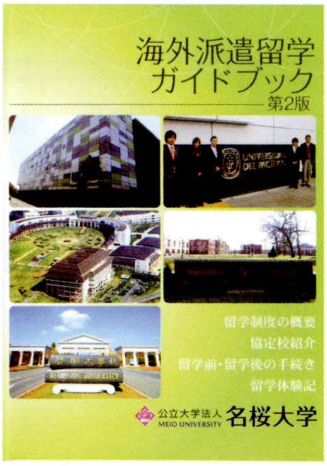
## 留学期間中の単位認定整備とガイドブック作成

留学から帰ってきた場合には、その期間の単位認定が必要です。留学制度が始まったばかりの頃はその基準があいまいでした。開学10年目からの10年間で留学後の単位認定の規定が明確になり、最も力を入れてきた点だといえます。

また留学に関する担当者は、派遣する際の指導は指導教員、その他派遣に関しての事務手続きなどは学生課、単位に関しては教務課というふうに



渡慶次正則
国際文化教育研究学系 教授



海外派遣留学ガイドブック 第２版
（2013年７月20日発行）

多岐にわたっていたためお互いに情報共有が難しかったのですが、チェックリストを作って整備してきました。

2010（平成22）年度は「海外派遣留学ガイドブック」を作成しました。2013（平成25）年度に第２版が発行されています。それまでは協定校の情報が散乱していましたが、ガイドブックとしてまとめることによって名桜大学の留学制度がよりわかりやすくなり、学生は自分にあった留学条件を確認できます。留学担当者も留学情報の管理がしっかりできます。全ページをPDF化してインターネットでも公開し、留学に関する応募用紙なども入って学生も担当者もスムーズに対応できるようになりました。留学に関する盛り上がりの一つのターニングポイントになったと思います。

## 留学制度、今後の展望

今のところ、派遣と受け入れの両方とも事務的な手続きなどは一人で対応している状態で、協定校が28校（2014年現在）ある中で10名ほどの先生方が国際交流委員会として対応しています。少人数で担当するのは限界があり、職員を増やす必要があります。外国語の堪能な職員など人員も強化して、将来的には独立した国際交流課のようなところが設置されるといいなと思っています。

また今後は、協定校との教育研究のための協同プロジェクトを行い、教員同士の交流もしていきたいと考えています。将来的には、１年間本学の教員が協定校で教えて、協定校からも同じく名桜大学に来ていただいて教えるというような教員の交換もできるようになればと思います。教員にも学生にもよい刺激になるでしょう。

## 留学して英語を学ぶということ

英語圏の留学は以前は語学留学というのが主流でしたが、公立大学になるとともに語学留学だけでなく、できるだけ学部にも行くということを推進してきました。英語そのものは、日本国内でも勉強する教育機関があります。しかし、現地の学生と同じ授業を受けて同じ課題でディスカッションするというのは、ものすごく高いレベルを求められるので、その中で学生は自信と力をつけることができます。語学学校では周りは英語が母語でない人同士なので、お互いに甘えた関係になってしまいがちなのが難点です。

学部に学生が行ってネイティブと知り合って、ぜひ本学にも現地の学生を連れてきてほしいという願いもあります。語学学校に通っている学生は語学学習のために来ている学生なので名桜大学に来ることはないのですが、現地の学部学生なら興味を持って本学に来てくれるということが時々あるのです。そういう意味でも学部留学を推進することが「国際交流」をより盛んにすることだと思います。

## 英語漬けの留学生活を

今は10年前に比べるとインターネットが発達しているので海外にいて

も日本と簡単に連絡がとれます。そういったことからも学生が留学先でホームシックになるというような話はあまり聞きませんが、日本を忘れて英語漬けになってほしいとも思います。

電子通信ツールの発達は留学の形としても、この10年の大きな変化といえるでしょう。Eメールなどでの写真の送信も容易になり、フェイスブックなどによるインターネット上の共有ツールも増え、一つの新しい留学のコミュニケーション形態かとも感じています。しかし、やはりあちらに行ったら日本のことを忘れてできるだけネイティブの友人をつくって、新しいことにチャレンジしてほしいです。せっかく留学しても、モバイル機器をしょっちゅう触っているようだと留学する意味がなくなってしまいます。

## 海外留学は一つのステップ

留学後はかなりの英語力をつけていますので、言語学習センターでチューターをしてそこで自分の留学体験を伝えたり、英語の学習支援をする学生や教員の養成プログラムに活かしている学生もいます。観光関係で留学した学生も、身についた英語力を活かした職場につきたいということでがんばっています。

しかしながら、実際には留学経験を活かす場が少なく、将来のキャリアに直接つながっている学生が少ないように感じます。留学経験者は特別に企業が採用するというようなシステムが日本に少ないというのが残念です。

また、留学して英語を充分に勉強しているので、大学に戻ってきて普通の英語の授業では物足りなく、興味を失ってしまう傾向も見られます。留学後に大学の単位を取ったり就職活動などをしているうちに、留学体験というのが埋没してしまうということもあります。留学自体が最終目的ではなく、その経験が一つのステップとなって、次に向けてどう動くかが重要になってきます。

大学としては、留学後のチャンスやオプションを紹介するコーディネーターの役目をもった留学キャリアカウンセラーや特別プログラムのようなものを設けて、留学後のいろいろなニーズに応えていけるようにすることが今後の取り組みの一つです。

留学したことがステータス、あるいは満足感に終わってしまわず、自分の留学体験を差別化して将来に活かしていくこと。それを含めて留学なのです。

## 英語が聞こえるキャンパスへ

今後は、海外の学生も日本の学生も、英語をキャンパスの中で自由に話すような雰囲気になっていってほしいです。名桜大学生はひかえめな学生が多いようで、留学後せっかく上達した英語を日常的に使うことに少し抵抗があるという学生もいます。恥ずかしがらずに自然に英語で会話できる場所があるといいなと思います。

20周年に合わせてオープンする学生会館が、留学帰りの学生や受け入れ学生が集まって自由に交流できるような大きな空間になることを願っています。

# ウーロンゴン大学
# サウスイーストミズリー州立大学

## ウーロンゴン大学

2005（平成17）年頃からジョージフォックス大学への学生の派遣が少なくなっていたので、英語圏の派遣先がなくなることを危惧していたことと、オセアニア地域の協定校がなかったということが決め手となり、2006（平成18）年に締結されました。

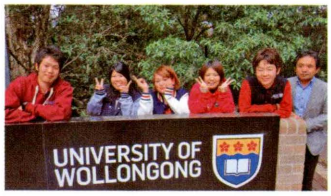
最初は他の英語圏の協定校と同様に９月から派遣して翌年の５月までという計画を予定していましたが、それですと英語教員免許をとるまでに５年間かかることになります。ウーロンゴン大学に関しては２年生の４月から派遣して、翌年の２月まで留学し、３年生の４月から名桜大学で教職科目を受講できるというような留学期間を設けることができました。４年間のうちに１年間の留学経験と教職免許を取得したいという学生に勧めています。

派遣された学生は、ホームステイで語学学校に通います。大学の立地がよく、首都であるシドニーは週末などに気軽に出向ける距離にあり、ウーロンゴン市は人口は30万人くらいで田舎と都市的なものを非常にいいバランスでもっている場所です。オーストラリアは非常に安全で親切な人々が多いです。ただ、現状としては近年オーストラリアの物価が上がっており、学費は高くないのですが留学中の生活費などの経費がかかるということが少し難点といえるかもしれません。

学生は２万５千人くらい、そのうち留学生は７～８千人と多く、たいへん国際的な大学で日本の大学の協定校もとても多いです。








上・ウーロンゴン大学キャンパス
下・現地実習でウーロンゴン大学を訪れた学生たち

## サウスイーストミズリー州立大学

アメリカ本土に交流協定校を増やそうということと、なるべく学費の安い大学ということで、2012（平成24）年６月頃単身で出向き、11月に学長が訪問し調印をしました。翌年から１期生を派遣しています。その中からミズリー大学の学長による優秀学生のリストに一人が選ばれたという報告がありました。

大学はミズリー州のミシシッピ川のすぐそばにあります。トムソーヤで有名な場所の近くで、人口３万５千人くらいのケープジラドーという街にあります。特徴としてはアジア人がほとんどおらず白人がほとんどの街なので、学内だけでなく留学中の日常の中で英語がとても鍛えられるといえます。

語学学校ではなく学部留学をして、現地の学生と一緒に勉強したいという学生に勧めています。授業料が他に比べて非常に安く１万１千ドルくらい、日本円で約110万円くらいです。日本人学生専用の現地スタッフが大学の中のオフィスに常駐しており、銀行などの手続きや、空港までの送迎、ネイティブの方が英作文の添削などをしてくださいます。スタッフから生活の様子の報告が定期的にありますし、我々も安心して送り出すことができます。

留学中の前半は語学学校、後半は学部に通います。学部では、ダンスの授業や教育関係の授業など個人の興味のあるものを受講する学生が多いです。



サウスイーストミズリー州立大学
交流協定調印式＝2012.11

# ハワイ大学ヒロ校 ブロック大学 ナイアガラ大学

## ハワイ大学ヒロ校

ハワイ大学は1996（平成８）年に協定校の締結をしていましたが、実際にはしばらく派遣が止まっていました。これではいけないということで、2011（平成23）年12月に学長と国際交流委員長であった私がヒロ校を訪問し、派遣のための協定条件の覚書を交わす会談をしました。そこからあらためて再スタートしたという経緯があります。翌年から派遣を再開しています。

ほとんどの学生が学部入学をしています。観光関係に興味をもっている学生、ハワイのポリネシアンの文化に興味をもっている学生に勧めています。留学中の前半、秋学期は語学学校に行き、後半の春学期は学部に通い現地の学生と同じように授業を受けます。

留学生には専門的な分野を勉強するのは難しいため、ハワイの文化、ハワイの言語、ハワイのダンス、音楽の授業などの比較的難しい言語を要求されないような授業を受講しているようです。留学生用の初歩レベルの授業があるので、語学学校の先生のアドバイスを参考に受講科目を決めます。

ハワイ大学とミズリー大学はTOEFL（iBT）のテストで61点を取れば学部に入れます。他の大学は79点が条件ですから、少し入りやすい点数であるため派遣しやすい協定校です。

## ブロック大学

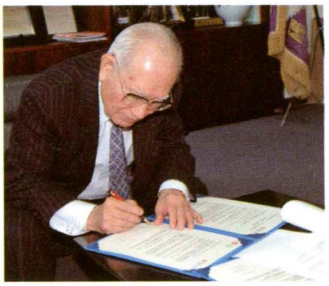
2013（平成25）年度で退官されたレイサム先生の紹介で、交流協定が2013年に実現しました。カナダのオンタリオ州、ナイアガラの滝のすぐ近くにあります。地理的にはアメリカの国境の近くで、学生数は２万５千人くらい。自然が多く治安のよいところです。カナダ全域に言えることですが、どの地域も英語のなまりが少なく英語の学習にはたいへん適していると思います。また、カナダは多民族文化ですから、国民性として外国人を受け入れる素地ができており、なおかつ友好的だと言えます。

英語圏への留学は通常２学期で10ヵ月くらいですが、こちらは９月から翌年の８月までの３学期間じっくり留学経験ができます。要求されている英語の点数が非常に高いので、派遣直後の学部留学は難しいと思いますが、２学期までに語学学校の一番高いレベルのクラスに入って、３学期目で学部に入れるようにがんばりなさい、と激励しています。2014（平成26）年９月に派遣された第１期生の中にはもしかすると学部に入れる学生も出てくるかもしれませんので、まずはその結果を待ちたいと思っています。

## ナイアガラ大学

2014（平成26）年12月に協定を結びます。記念式典の際にナイアガラ大学の学長が本学に見えられてそのときに調印する予定です。

ナイアガラ大学については、語学能力が十分であれば３年次から学部に



ハワイ大学ヒロ校
交流協定の再調印（名桜大学）



ブロック大学
交流協定調印式＝2013.9

編入ができるという非常に魅力的なプログラムが組まれています。また、相互免除といって、名桜大学に授業料を納めるだけでナイアガラ大学の学部に通うことができます。今のところ、このシステムで交流協定を結んでいる大学は、英語圏ではほかにセントラルランカシャー大学しかありません。ほかの大学は減免配慮がなく授業料を相手校に支払っています。

語学学校は含まれていないので、すぐに現地の学生とディスカッションができるくらいの英語力が必要です。そのためにはTOEFLで高い点数を取らないと留学自体が難しいため、ナイアガラ大学や学部留学を目指す学生には、TOEFLの勉強をしっかりがんばるよう話しています。

# スプリングフィールド大学

## バスケットボール発祥の地

瀬名波榮喜学長、柳敏晴教授、石橋の３名は、スプリングフィールド大学との学術交流協定を結ぶため、2011（平成23）年12月６日から11日の４泊５日の日程で同大学を視察し調印を締結してきました。

スプリングフィールド大学は、北米東部マサチューセッツ州にある男女共学私立の大学です。1885（明治18）年にYMCA（Young Men's Christian Association）で活躍できる人材を育成するために設立されました。モットー「Spirit, Mind, and Body」に基づき専門家養成を行っています。今日では多くの体育・スポーツの指導者を輩出している著名な伝統のある大学として知られています。また、同大学はバスケットボール発祥の地として知られ、校内にはネイスミス記念バスケットボール殿堂の本部があります。バスケットボールの殿堂には、バスケットボールの発展や普及に努めた個人やチームの記念品や遺品などの展示物が多数あります。参観者が希望すれば、実況アナウンスを体験できます。またバスケットコートで実際にバスケットボールを体験することもできる体験型記念館です。バレーボールを誕生させたウィリアム・モーガンもこの大学の卒業生です。

同大学の学生数は名桜大学の約２倍程度で、学部、大学院を含め約5,390人程度の小中規模な総合大学です。特色としては北米で数少ないDoctor of Physical Educationの学位を出している体育系を中心とした大学です。そのため体育・健康増進施設が非常に充実しており、学生や職員専用のジム、体育館、サブアリーナ、室内トラック、実験実習室、リハビリテーションルーム等が一つの体育施設（コンプレックス）に美しく機能的にまとまっています。また野外施設としては野外陸上トラック、アメリカンフットボール場など充実した施設が完備されています。学内のいたるところに、椅子や机、ソファーが設置され、学生が集い自由にコミュニケーションできる工夫がなされています。食堂は、ブュッフェスタイルで多くの学生で賑わい非常に活気があり、校内は非常に清潔に保たれていて、学生、教職員のモラルの高さを垣間見ることができます。

## スポーツ活動

スプリングフィールド大学はNCAA（National Collegiate Athletic Association）＝全米大学体育協会のDivisionⅢ（３部）に入っています。ちなみにDivisionⅠ（１部）は、カルフォルニア、ハーバード、スタンフォード大学など、スポーツを学ぶ学生全員が特待生という大学が入っています。DivisionⅡ（２部）は、スポーツを学ぶ学生の半分が特待生で残りは一般学生という大学が入っています。スプリングフィールド大学のようなDivisionⅢの大学には特待生制度はなく、全員が一般学生で占められています。ですから留学生も努力すれば同大学のバスケットボール、野球、アメリカンフットボール、バレーボール、体操、ラクロス、サッカー、テニス、水泳などのクラブに入ることができます。



石橋　千征
スポーツ健康学科 准教授



スプリングフィールド大学正門




体育施設（コンプレックス）


交流協定調印式＝2011.12

## 学費と宿泊施設

スプリングフィールド大学に留学するには、TOEFLスコア525点（PBT）が必要ですから、留学するには他の大学に比べ、ハードルが高いと思います。しかし、語学学習センターもありますので、語学留学することは可能です。

同大学の１年間の授業料は約31,000USドル、キャンパス内の宿泊費用が約10,500USドル（2012年現在）必要ですから公立大学法人名桜大学の授業料と比較した場合かなり高いです。同大学全体に占める留学生の割合は、非常に少ないですが、日本からの留学生が一番多い大学です。

毎年、私のところにスポーツ健康学科の学生が数名、同大学への留学について相談に来ますが、英語の必須能力が問題となっています。もともとスポーツ健康学科の学生は留学を前提として入学していませんから、今は致し方ありません。しかし、４年間しっかり名桜大学で学び、その中で語学力を身に付ければ、卒業後スプリングフィールド大学の学部や大学院に進むことも夢ではないと思っています。

# セントラルランカシャー大学

## 留学生にとってすばらしい拠点

セントラルランカシャー大学（以下UClan）は、イギリス西北部のプレストンという町に位置し、ロンドンからは汽車で１時間ほどかかります。生活するには環境も良く静かで美しい町です。

UClanは1828年に設立され、その後、様々な教育機関との合併を繰り返し、1992（平成４）年に現在の国立大学となりました。同大学はイギリスでも５番目に大きな総合大学の一つです。大学の施設は町のいたるところに点在していますので、プレストンの町全体が大学という感じです。

UClanの学部では留学が必修になっているので、多くの学生が世界各国の大学に留学しています。また、国内や海外から留学生に対するサポートが素晴らしいと高く評価されているため、世界各国からも多くの留学生が集まるインターナショナルな大学です。名桜大学とは1998（平成10）年に学術交流協定校となっています。2006 ～ 09（平成18 ～ 21）年度の４年間を除き毎年相互に留学生を派遣しており、2012（平成24）年度には、名桜大学から３人が留学、UClanからは５人の留学生を受け入れています。2013（平成25）年度現在までに名桜大学から24人派遣し、UClanからは21人の学生を受け入れています。

## 学生数と施設

学生数は約35,000人で、その中に留学生は世界100ヵ国から約3,000人、大学院生が8,000人います。大学内にコーヒーショップやパブ、映画館、小売店、書店、ラジオ局などがあり、充実した環境となっています。大学の施設はプレストンの町全体に広がっており、移動は徒歩、自転車、電車などです。

## UClanの留学手続き

もちろんのことですが、UClanでの講義はすべて英語で行われます。そのため本学でも選抜試験はありますが、UClanの審査に合格するためにはIELTS、TOEFL、TOEIC などの英語力を測定できるテストを受験し、そのスコアを留学手続きの書類として提出しなければなりません。目安としてTOEICのテストスコアでは517点以上となっています。英語を母国語としない国の学生のための、留学生用基礎コースで学ぶ場合がほとんどですが、学部で提供されるクラスを取ることも可能です。

## 宿泊・学費

大学寮は大学外の宿泊施設より安く設定されています。大学外でのアパートを借りる場合は、ルームシェアをしてアパート賃を安くすることができます。物価はあまり沖縄と変わらないようで生活費は同じくらいだと考えてもいいでしょう。特に食費が安いとのことでした。学費はUClanが名桜大学より割高ですが相互免除であるため、名桜大学への授業料払込だ



与那覇恵子
国際文化教育研究学系 教授



交流協定調印式にて。右は東江康治初代学長＝1998

けで済みます。留学期間は８月後半から翌年の６月までです。

## 留学体験報告

2012（平成24）年、名桜大学からは３人の学生を派遣しました。UClanへの名桜大学からの留学生は年に数回報告書を学生課の中山登偉さんやゼミ担当教員に提出します。報告書の文面からは文化の違いや学業の悩みは余り感じられず、１年間の留学を楽しみ有意義に過ごしていることがわかります。特に日本語を専攻している学生や日本に興味のある学生たちとは自然と打ち解け、彼らに日本語や沖縄の文化を教えたり、彼らから英語やイギリスの文化を教えてもらったりするそうです。クラスメートは中国、東南アジア、中近東、アフリカなど各国から集まっているので、交流がおもしろくグローバルな感覚を養えるということです。また、学外のクラブ活動に入ると地域のクリスマスパーティーなどの行事やイベントに招待されることが多く、文化体験の機会が増えるようです。ヨーロッパは近いのでイギリスからヨーロッパ各国への旅行を楽しんでいる学生もいます。プレストンの町（街）を歩いていると中国系、イラン系、アフリカ系の学生たちも目につきます。各国からのいろいろな人たちがプレストンの街並みに溶け込んでいました。UClanの学長によると、世界各国から留学生を受け入れているが、アジアでは中国からの留学生が最も多く、韓国と日本の留学生はそれに比較すると少ないとのことです。



## ポジティブなUClanの留学生

名桜大学への留学生たちは言語学習センター（LLC）でも活躍、貢献しています。イギリスからの留学生も学生チューター（家庭教師）となって、他の国の留学生や名桜大学生の英語学習を助けています。それはまた、彼らの日本語の学習にもつながっており、ほとんど日本語を話せなかった留学生が、帰る頃には流暢に話せるようになり、日本語検定試験ではさらに上を目指すようになります。2012（平成24）年、UClanから来た５人の学生たちも、他の留学生に交じってLLCでチューターとして働きました。イギリス出身の彼らは綺麗なイギリス英語で話しますから、LLCだけでなく他の名桜大学生の間でも人気者でした。英語だけでなく、その気さくさやフレンドリーな社交性ゆえでもありましたが、すべてにおいて一生懸命でした。名護市の国際交流会館でイギリスの歴史や文化を紹介したり、毎年行われている「世界の家庭料理フェアー」ではイギリス料理を出店するなど、市民との交流も楽しんでいました。留学は、その学習対象言語にどっぷりつかることができ、短期間で語学力を向上させることのできる絶好の機会です。何よりも異なる文化や生活習慣に触れ、異なる国の人々と出会うことは、自分の国や自分自身を知ることにつながりますね。

## 名桜大学で異文化理解を分かち合い織り成すこと

東江康治氏が、沖縄で小規模で新しい国際的な大学に英語プログラムを構築するために、米国の私の家に来たのは1992（平成４）年でした。

当時、私はミシガン州立大学で教えることに満足していましたが、この申し出を新たな挑戦として捉えたのです。私が沖縄に到着したのは翌年の1993（平成５）年10月31日でした。日本の文部省が正式に「名桜大学」を認可したのは同年12月21日で、1994（平成６）年４月１日に名桜大学の開学式典が行われました。

私は開学式の前に、第１期生の比嘉信君と松永英久君の両名に英語サークルを立ち上げることを頼みました。同サークルは名桜大学設立以来、最も人数が多く、最も活動的であり続けたサークルの一つです。のちにIEGCC（国際英語グローバルコミュニケーションサークル）に名称を変更しました。

当初、私はサークルを通じて学生を、米国の友人や前の同僚宅、自宅などで無料の１ヵ月間のホーステイを行うため、連れていきました。これが北米現地実習に発展し、米国とカナダ（時々、英国やニュージーランド）に40名の学生を引率し１ヵ月間ホームステイファミリーと過ごし、大学（主にミシガン州立大学、ナイアガラ大学、セントラルランカシャー大学、ワイカト大学、マッセー大学）などで授業を受けさせ英語コミュニケーション能力を伸ばしながら、現地の人々の生活や文化を体験させたのです。

名桜大学は米国と英国の大学と国際学術交流協定を締結し、ハワイ大学とセントラルランカシャー大学は最も活動的な協定校の一つです。最近、オーストラリアのウーロンゴン大学、カナダのブロック大学とも交流協定を結び、米国のナイアガラ大学とも近々、交流協定を結ぶ予定です。

これらの交流留学を通して１年間またはそれ以上、海外で学生は生活し、学習するようになりました（少なくとも２名の名桜大学生がセントラルランカシャー大学に通い、内１名は修士課程インターナショナル・ビジネスを修了し、他１名はドイツ人学生と結婚し、英国に居住しています）。さらに、本学の海外協定大学からの学生が、JETプログラムの教員として、再び日本に戻ってくることもあります。これらの生活体験や方法を通して、名桜大学の国際的な絆が強まり、国際理解がここ日本や海外で広がっています。

過去10年間で本学の３名の学生が参加した別の海外プログラムは、国際YFU GCP（Youth for Understanding Global College Program）です。

私は名桜大学生がYFUに参加することで大きな利益をもたらすことを知っていましたので40年間、ボランティアで文化アドバイザーとキャンパス・コーディネーターを務めてきました。YFUは名桜大学の公式の交流協定プログラムではありませんが、文部科学省に認定されたプログラムで、米国で少なくとも１年間、YFU GCPの学生が通う大学は全世界に知られており、広く認証された機関です。名桜大学のYFU参加者のすべてが、



レイサム,キャロラインC
名誉教授




現地実習でナイアガラ大学を訪問

卒業後は海外での体験と流暢な英語力のおかげで、各分野のリーダーとして活躍し、貿易会社や銀行などの重役を担っていることは特筆すべきです。

## ■JALT（Japan Association for Language Teaching）の創設

沖縄や日本で学生が他国の文化を理解するには、英語コミュニケーション能力を伸ばすことです。国際的学会であるJALT（Japan Association for Language Teaching）の継続的な事業によって英語コミュニケーション能力の教育を行っています。同僚の支援で、私が琉球大学で初の外国人招聘講師（1979～83年）だった1980（昭和55）年にJALT沖縄支部を立ち上げ、教員や学生が研究や教育、アイディア、経験を共有するために月に１回か２回の集まりを開いたり、英語４技能の実践的で理論的な面、演劇、世界的な問題などについてゲスト・スピーカーを招いたりし、そのとりまとめ役を務めてきました。JALTの集まりは名桜大学の学生同士、国内や海外からの教育者とのネットワークづくりの良い手段でもあります。

協定大学とYFUやIEGCC、JALTでの経験は、本学の学生の英語コミュニケーション能力を伸ばし、自信をつけるのに役立っていますが、さらに重要なのは、人々の間の理解の架け橋を築くのに役立っていることです。私たちは相手と自分について言語と交流を通してさらに学ぶことができます。私たちは、国際的な経験と第二言語の体験（IEGCCやJALTと海外留学）を通して、自分の言語や文化についてもっと学び、自分の文化や他人の文化をより客観的な視点で見ることができます。

私たちがコミュニケーションをするのは言語（言語的かつ非言語的）を通してです。自分や他人を理解し始めるのはコミュニケーションを通してです。お互いを受け入れ、愛し、最終的には自分自身や自国への愛を見つけるのは、理解を通してです。国際YFU（Youth for Understanding）の創設者であるRachel Andresen博士は、「世界の国々の人々がお互いを理解するなら、世界に平和をもたらすでしょう」と述べています。名桜大学の海外交流プログラム、そして名桜大学のIEGCCやYFU GCP、JALTにおいて平和を支援し育てていくのは価値のある夢です。

# 看護学科 海外スタディ・ツアー

## 概要

2009（平成21）年度の看護基礎教育カリキュラム改正に伴い、看護教育機関では、国際化に関する教育活動が積極的に行われるようになりました。看護学科では、2013（平成25）年度に初めて海外スタディ・ツアーを実施しています。その目的は「開発途上国、地域を訪問し、現地の人々やNGOスタッフとの交流をとおして異文化を理解するとともに国際保健協力活動の実際を学ぶ」ことです。

2012（平成24）年５月の企画段階で、予てから活動に注目していた日本国内のNGO団体である特定非営利活動法人シェア＝国際保健協力市民の会（以下「シェア」）に協力依頼の突撃電話をしたところから、このスタディ・ツアーは始まりました。同年９月には視察のために２名の教員とともに現地を訪れ、ここなら学生が「異文化を尊重した健康へのサポート」について多くのことを学べると確信しました。

2013（平成25）年度のツアー期間は、９月７日～16日で、タイ王国のウボンラーチャターニー市内より北へ105kmの所で現地の NGO 団体 HEALTH AND SHARE FOUNDATION（HSF）の活動地であるウボンラーチャターニー県ケマラート郡で研修を行いました。本ツアーの到達目標は以下の五つです。

1．現地の人々との生活や交流をとおして、文化的背景が異なる人々の生活様式や価値観、考え方を理解することができる。
2．共通言語が異なる人々とのコミュニケーションについて考えながら実施することができる。
3．HIV/AIDS陽性者や家族の生活や健康課題を学ぶ。
4．現地の保健医療事情を知り、国際保健活動の実際を理解することができる。
5．文化背景が異なる人々に対する保健や看護のあり方について考えることができる。

また、現地での活動概要は以下の通りです。

1．日本及び現地の国際保健協力NGO（以下、NGO）がサポートするHIV陽性者自助グループの定例会、家庭訪問、郡病院、村病院の訪問・見学を行う。
2．NGO活動地の農村地域に宿泊して、現地の人々の生活を理解する。
3．現地の人々との活動を計画し、状況に応じて工夫しながら実践する。
4．現地の看護学校の見学および学生との交流を行う。

## 事前学習

より有意義な研修にするために、５月下旬から事前学習とミーティング、アクティビィティの準備を開始しました。事前学習での達成目標と内容は表１の通りです。



横川裕美子
看護学科 教授





上・HIV陽性者定例会での活動
下・タイの看護学生とともに

## タイ王国でのスタディ・ツアー

現地に出向いてから、学生はタイ東北部のウボンラーチャターニー県で村レベルのヘルスボランティアシステムや地区・県の病院、県保健局を見学しました。またHIV/AIDS陽性者自助グループの定例会や同グループのリーダーによる家庭訪問にも同行しました。学生は以下のような企画を実施しました。

1．同定例会参加者と現地の看護学生との交流
2．HIV/AIDS陽性者やその子どもたちの発達段階をふまえたアクティビティ

表1 事前学習の達成目標と内容

| 事前学習での達成目標 | |
|---|---|
| 1．海外スタディ・ツアーの概要を理解することができる<br>2．シェアとHSFの活動やタイの保健、エイズの状況を学び、考察することができる<br>3．スタディ・ツアー参加にあたって準備すること（看護・保健や言語に関する学習、心構え、健康面、物品など）について理解することができる<br>4．参加者が相互に交流しながら連携を深め、積極的に準備ワークを継続することができる | |
| 時限 | 事前学習の内容 |
| 1 | 1．今日のガイダンス<br>2．学科長からのメッセージ<br>3．現地実習スケジュールの説明<br>4．自己紹介ゲーム（アイスブレイクを兼ねて）<br>5．教務課からの手続きに関する説明（9時30分から予定） |
| 2 | 6．シェア＝国際保健協力市民の会について（事前オリエンテーション）<br>タイ事業概要説明：保健システム、エイズの背景、タイと日本のエイズの状況<br>7．タイ語の自己紹介：挨拶のことば、自己紹介の内容など |
| 3 | 8．個人およびグループワーク<br>・全体リーダー・グループリーダーの決定<br>・個人目標を決めてグループ目標を話し合う<br>・アクティビティの企画と今後の進め方を話し合う |
| 4 | 9．グループワーク・全体ワーク<br>1）グループワークの内容の発表　2）全体での調整<br>3）連絡網の作成など<br>10．研修までの課題（講師より）<br>11．今後のスケジュールの調整と確認（直前オリエンテーションなどの日程）<br>12．今日の振り返り |

3．県看護学校での日本のラジオ体操の紹介

さらに学生は、９日から12日までホームステイで村生活を体験し、タイ日文化交流会にも参加しました。

学生はタイの保健医療システムおよび各施設の役割と連携のあり方について理解したり、HIV/AIDS陽性者との交流では当事者の思いを聞くことで、周囲の人々の正しい理解の重要性を痛感したことが多かったようです。また現地の人々との生活や交流を通して、共通言語が異なる人々と工夫をしながらコミュニケーションを図る必要性、文化的背景が異なる人々の生活様式や価値観、考え方を尊重する重要性を理解していました。そして、主体的に企画した活動を行うことによって積極的に人々と交流し、異文化を持つ人々への健康面のサポートについて考える機会を確実に得ていました。

平素の授業や実習の合間に集まって話し合ったり練習するのは大変でしたが、よく頑張ったと思います。現地の皆さんも学生の熱心さに驚いたり喜んだりしてくれました。また３学年の学生が参加したことによって、学習の相乗効果もあったように思いました。

スタディ・ツアーに参加した学生は日本とは医療・保健の現状が異なりますが、看護の概念や思いやりは日本と同じということを述べていました。また、学生のレポートを読むと、学んだことと同時に反省も書かれていました。単に良かったで終わるのではなく、客観的に振り返ることができていることに感心しました。今後は、それらを糧にしてさらに成長してくれることと思います。





上・ホームステイでの食事の様子
下・スクワンの儀式





研修先のケマラート郡病院で



# 5章

## キャリア教育・就職支援・各種実習



# 国際学群・インターンシップ

## インターンシップとは

インターンシップ（企業実習）とは、学生が在学中に自らの専攻、将来のキャリアに関連した企業などにおいて実習・研修的な就業体験を行う制度のことです。学生が、社会における実践的な知識と技術の獲得に向けて励むためのチャンスを与えてくれるのがインターンシップです。

名桜大学国際学群では、関連専攻の教員がインターンシップに関わり、企業訪問や事前研修を担当しています。創立３年目の1996（平成８）年度から職場体験プログラム「インターンシップ」を専門教育の柱と位置づけ正課活動に組み込んでいます。当初、実習期間は３週間と設定していましたが、2005（平成17）年より現行の２週間となっています。2013（平成25）年度は国際学群の六つの専攻から145人の学生が夏期の実習を行いました。実習先は北部12市町村役場、沖縄県庁、マスコミ、銀行、製造業、建設業、流通業、情報関連業、旅行業、ホテル業、観光業、病院など、75の機関で行われました。

## インターンシップの目的

４年次に就職活動が本格化しますが、その前に学生が職場体験を踏まえることで、組織の中で自分に何ができるのか、チームに対し協調性を持って参画できるのか、自己分析と生きがいを感じながら働けるのかを学ぶことを目的としています。

インターンシップは、アルバイトと違って与えられた仕事をこなす受身的な仕事ではありません。職場体験で自らやっている仕事は何のためにしているのか、問題はないか、改善すべき点はないか、など受身的な対応から能動的な思考や態度を実践体験できる場なのです。

そのため、服装や身なりなども学生生活とは異なり、企業にマッチしたものが求められます。キャリア教育やゼミの中で事前に実習先の仕事の内容や必要な知識、スキルを前もって修得しておく必要があります。

本学では2007(平成19)年度より実習に先立ち､「インターンシップ基礎」をもとにインターンシップ先でプログラムを展開する「インターンシップ実践」と、計画から実践、そして検証という自己学習プログラムを次のように明確にしています。

1・社会的スキルの習得
社会人としての履歴書作成、ビジネスマナーや報連相（報告･連絡･相談)、指示･指令･命令の違いなど社会的スキルを修得すること。

2・組織の構造と機能の理解（実習先研究）
組織図から部署･職位の役割や業務内容､意思決定の手続きや方法、事務処理の手続きや仕組みを理解し体験すること。

3・組織における資源配分の理解（実習先研究）
組織内における資源の適正な配分方法、コンピューターなどの情報資源の概要と運用方法を学ぶ。企業・組織の経営理念と将来ビジョ



林　優子
経営情報教育研究学系 上級准教授



インターンシップ報告会で熱心に聴き入る参加学生


実習風景




上下・実習報告発表会

ンを理解し効率的な組織の仕組みを考える。

4・自己分析と職業適性

企業から望まれる人材とは何かを学ぶため、就職情報や就職相談室を積極的に活用し、併せて多様な業種、職種について知識を深める。希望する職種に対しては、これまで習得した知識と技能とのギャップを認識し、必要な知識と技能の習得に努める。

２週間のインターンシップを振り返り、自己の欠点・弱点・問題を見つけ、克服・解決し、希望する進路が求めている技能と専門知識を習得するためにも絶好の機会であったと多くの学生が認識しています。

## インターンシップの意義

企業では外部環境の変化に対応できる様々な創造性を持つ弾力的な人材やリーダーシップを発揮できるような人材が求められています。これらの素養を持った人材を育てる制度の一つが本学のインターンシップです。この制度を有効に活用することで実習生、実習先、大学の３者にメリットがあります。

企業が実習生を受け入れるメリットとして、若い人材との出会いの中で社内の活性化、意識改革のきっかけとなります。より多様な学生を採用するために企業・事業に対する理解が深められます。

## 実習先への配慮

実習生には、事前講義を通して以下のことを周知徹底させています。

実習中に知り得た情報に関する守秘義務を理解させます。実習生は全員「学生教育研究災害傷害保険と学研災付帯賠償責任保険」へ加入させています。実習期間中、事故にあった場合は講義中の事故と見なされ、保険金が支払われる仕組みになっています。また、トラブルが生じた場合には、本学の担当者が速やかに対応するシステムを整えています。

# 観光産業専攻・インターンシップ



宮城　敏郎
観光産業教育研究学系 上級准教授

## 観光産業専攻におけるインターンシップの概要

宮城：国内インターンシップは、開学当初、国際学部の経営情報学科が必修科目として実施していました。その後観光産業学科も観光業のオンシーズンを避けるために春に実施することになりました。2007（平成19）年、国際学部が国際学群となってからは合同で夏期のみの実施となっています。

大谷：2014（平成26）年度は３年生の約50％の学生の登録がありました。

インターンシップは実際に社会に出たときとなるべく近い形で業務体験するのが意図です。そして観光について学ぶということは、実学、いわば実践が重要です。大学で理論を勉強し、それを現場で確かめながら学ぶということが強く意識されています。

宮城：そういった実学は産・官・学の連携によって可能です。現場に出て体験し、そこで学んだことを大学に帰ってフィードバックすることで理論と実践とのギャップが埋まり、大学で観光産業について学ぶ意欲が高まります。理論だけではなく、サービスに対する高い志とそのための行動力が備わっていなければ、きちんとしたホスピタリティー精神は養えないということです。また、インターンシップには就職に対する意識づけの目的もあります。どんな職に就きたいのかということを明確にする機会にもなりますね。

大谷：観光産業専攻が実施しているインターンシップは、①国内インターンシップ、②海外インターンシップ、③ホテル実務の三つがあります。それぞれ実習期間は、２週間（実質10日間）、１ヵ月、４ヵ月（680時間）です。

## ①国内インターンシップ

大谷：インターンシップに出る事前の科目「インターンシップ基礎」では、働くとは何かといった基本的なところ、自己分析、企業研究、履歴書作成方法、ビジネスマナーなどを学びます。企業研究に関しては、なぜそこに行きたいのかといったことを含めて発表もありますね。

宮城：主な派遣先には、沖縄ツーリストなどの旅行社が一番多いです。エアー沖縄などの空港カウンター業務や市役所の観光課のような職場などもあります。ほかに、ホテル業、マスコミ関係、地方自治体、観光施設などです。接客サービス業ということで商業施設などに行く学生もいます。観光産業として学んでいきますが、その技能や知識を活かせる職場は多いですね。

大谷：そういった意味では観光産業は裾野が広い分野と言えます。実際に観光を学んで観光系の職に就くのは全国的にみても20～30％くらいです。学生の希望に沿って、新たにインターンシップを受け入れていただける企業を開拓する場合もあります。

宮城：今のところ県内でのインターンシップが多いですが、近年は県外出身の学生も増えているので県外のインターンシップも増えています。それぞれの地元の企業や役所などですね。

## ②海外インターンシップ





上・海外インターンシップ（マレーシア）
下・ホテル実務

宮城：国外での実践を強化する必要性があったことと、県の助成金を渡航費の補助に充てられるということで2001（平成13）年に開始しました。当初は県から渡航費１人20万円に加えて滞在費の補助があり、学生は食費・宿泊費など１日1000円の負担で滞在することができました。その後は大学の単独事業として同じように予算をつけることになりましたが、留学する学生は自費で行くため、公平性の観点から大学の予算を分け、現在は補助が少なくなっています。

派遣先はマレーシア、韓国、台湾があります。海外インターンシップの企画当時は、マレーシアとシンガポールのホテルにインターンシップの派遣ができないか交渉しました。シンガポールはかなり高いレベルの英語力が求められましたが、マレーシアの場合、多くの日本のビジネスマンが利用するため日本語が必要ということで、受け入れていただくことができました。また、マレーシアのホテルはインターンシップの受け入れ経験も豊富だったということも決め手でした。

海外インターンシップの事前学習として一番重視していることは、その国のことを知ることです。気候や人口構成、歴史や文化などその国の基本情報に加えて、英語以外の現地の言葉も勉強しますね。また現地で困らないように、ホテルとツーリストで１週間程度の研修を行います。

大谷：韓国は2011（平成23）年から開始し、翌年に台湾が決まりました。

参加はマレーシアはホテル３名、韓国はホテル３名、旅行社２名、台湾はホテル２名、旅行社２名の最大12名で、英語や面接などの試験があります。国際学群全体の中からの選抜ですが、2013（平成25）年は９名中７名、2014年は全員が観光産業専攻の学生で、毎年の傾向としてはやはり、観光産業専攻の学生が多いですね。

## ③ホテル実務



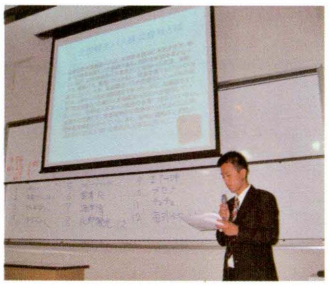
大谷健太郎
観光産業教育研究学系 上級准教授

大谷：ホテル実務は、県内で行われます。ほかの二つと比べて長い期間ですが、給料が発生し、シフト制で約４ヵ月間、680時間勤務するということになっています。４ヵ月のうち、２ヵ月間は夏休み中、残りの２ヵ月間は大学に通いながら出勤します。

初めの２週間は研修期間で、４ヵ月間で学生がすべての業務をまんべんなく経験できるようにホテル側にお願いしています。事前の講義などはありませんが、観光学概論、観光事業論、ホテル経営論の三つの受講が必修です。

宮城：ホテル実務も海外インターンシップのスタートと同じ時期、2001（平成13）年から始まりました。スタートは万座ビーチホテルです。最初は半年と１年のコースも計画していたのですが、大学に通いながらということも考慮して４ヵ月に調整したという経緯があります。

その頃は「なぜ大学まで出てホテルで働くの？」という、いわゆる





上・インターンシップ前に行われる企業研究の発表会
下・インターンシップ後の報告会

“３Ｋ”のイメージがあったため、ホテルに就職する学生は少なかったです。そういう中でもっとホテル業務について知ってもらおうということで、ホテル実務のカリキュラムが設けられました。ホテル業務の内容や経営がどういう仕組みになっているのか、といったことまで学べる環境を大学で整えて、ホテルも就職先の選択肢に加えていきたいということがねらいでした。地元のホテルにインターンシップ先として協力してもらい、大学からホテルで働ける人材を輩出して、地域貢献にもつなげようという目的もありました。

その後にホテルマハイナウェルネスリゾートオキナワに参加していただきました。マハイナと名桜大学のプロジェクト提案書も作成しました。ホテル側でもホテル人材が少ないということを危惧していて、そうした問題意識と大学側の問題意識が重なったということもあり、ホテル実務のインターンシップが徐々に軌道に乗っていきました。

大谷：インターンシップの受け入れホテルは、始まった当初から着々と増えてきましたね。カヌチャリゾート、ホテル日航アリビラ、ホテル日航那覇グランドキャッスルなどです。ホテル実務は選択必修で、参加学生は年平均３名くらいです。

## インターンシップを終えた学生の変化

宮城：社会に出て、まず学生はショックを受けます。何をしていいのかわからない、指示を聞こうにもみんな忙しく働いていて、タイミングがみつからない、といった感じで自分の未熟さを痛感するようです。厳しい現実を目前にやめたくなることもあるようですが、１週間を乗り越えれば、後１週間頑張ろうという感じで大学に帰ってきます。

職場や接客中の世間話についていけないと感じ、もっと新聞などを読んで、日頃から社会の動きを意識することが大切だと気づく学生もいました。初めての社会人経験で、ある程度は打ちのめされますが、大学に戻ってきてからの学習意欲は向上しているようです。ただ、そのやる気を長く持続するためにはどうすればいいかというところも課題ですね。

大谷：また、基本的なことですが、社会人としてのマナーを身につけて帰ってきますね。あいさつなどのコミュニケーションのとり方や、期限を守って課題を提出するといった当たり前のことですが、そうした意識の向上が感じられます。社会人としての常識を身をもって知り、自分の未熟さに気づくということは、大きな前進だと思います。

宮城：ホテルでのインターンシップで観光客の方と接する際に、沖縄のことを尋ねられることがあります。たとえば沖縄の人口、年間入域観光客数など基礎的なことを聞かれて答えられなかった、と言っていた学生がいました。現場に出て人と接することがどういうことなのか、自分目線ではなくお客様の立場になって考えることの重要さに気づいたようです。お客様から応援の手紙をいただいて励みになったという声もありました。そういった接客のおもしろさを知ってこの道をあらためて決意する学生もいます。

## 今後の展望

宮城：観光産業について学ぶということは座学と実践のバランスがとても重要です。今後はインターンシップを経験した学生の力がさらに伸ばせるような科目を増やす必要があります。

大谷：３年生になると就職活動なども忙しくなるので、インターンシップの経験を活かせる科目を学ぶ時間が必要だと感じます。たとえば企業実習の基本となる２週間の国内インターンシップを、２年次に下げて社会の現場の意識づけの機会とし、３年次は観光実務と理論に重点をおいて、半年くらいの長期の海外インターンシップなどでじっくりと経験できるプログラムになると、もっと有意義に学べるのではないかと思います。

現在、インターンシップを経験した学生の進路決定率および就職率はほぼ100％といえるのではないでしょうか。とくに海外インターンシップに行った学生は、国内企業で必要な人材として求められる傾向があるようです。海外インターンシップでお世話になったホテルなどからも声をかけてもらえるのですが、日本との賃金差が大きいので、今まではあまりいませんでした。しかしながら、給料よりも経験を優先して海外で働きたいという学生のニーズは確実に増えています。

宮城：インターンシップの受講者は、2014（平成26）年は専攻の半分くらいで昨年は３分の１くらいでした。しかし、この10年程でみてみると、インターンシップを受ける学生が減ってきたと感じます。大学というところで守られて勉強するのと社会に出てチャレンジするのと、学べることが違うのでもっと積極的に外に出ていってほしいですね。

その年度によって違いはありますが、人と接することに消極的な学生が増えたのではないかと感じることもあります。同級生とはよく話すが、ジェネレーションが違えばコミュニケーションをとりたがらない。社会に対して距離感をもってしまっているような感じです。

大谷：確かにそうですね。大学にいるときも、教員から声をかけられるのを待っているような雰囲気の学生もいますね。しかし、一概にそうではなく積極的な学生とそうでない学生の差が大きく、二極化していると感じます。成績もよく真面目な学生が多くなりましたが、思い切って何かに飛び込むという姿勢が弱くなっているのかなあと思うときもあります。

宮城：人と接するということは、勉強で覚えることではないので、自分の中にあるものをいったん壊して、再構築するような機会が必要かと思います。頭でっかちにならずに、「心豊かな人間」としての接し方をもっと学べるようなインターンシップのプログラムを、これからも整えていきたいです。

# 海外インターンシップ

## 国際学群のインターンシップ

新垣：インターシップをインターンシップという科目名で大学の正課として採り入れたのは、日本では名桜大学はかなり早い方だったと思います。今必修は経営情報だけですが、当初は観光産業でも必修でした。海外インターンシップはその後、2001（平成13）年に始まりました。

現在、国際学群にはインターンシップに関連する科目として、インターンシップ基礎、インターンシップ実践、海外インターンシップ、ホテル実務の四つの専門教育科目があります。海外インターンシップには独自の事前研修も組み込まれており、インターンシップに関するすべてをこの科目の中で学べるようになっています。事前研修は、県内のホテルでも行っています。座学では、ビジネスマナーや派遣先の国の文化や言語等をしっかり学んでもらいます。

## 海外インターンシップ創設の経緯

新垣：名桜大学は開学当初からグローバルに活躍できる人材の育成を大きな柱として掲げています。ちょうど、県の方で海外での就職先を広げる事業の公募が行われた際に、名桜大学が採択されたことが、海外インターンシップの創設につながっています。

こうして当初は県の事業として始まったので、最初の２年ぐらいは県の補助を受けたと思います。その後１回は名護市からの支援も受けています。それ以外は大学独自で行っています。2010（平成22）年までは、学生の費用負担はほとんどありませんでした。今は大学で費用の一部を支援しています。

派遣先がマレーシアのグランドブルーウェーブホテルになったのは、海外インターンシップが創設された当時、万座ビーチリゾートの元支配人の安田晃次氏が名桜大学に教授としていらしていて、先生の伝手でグランドブルーウェーブホテルを紹介してもらい、派遣協定を結ぶことができたといういきさつがあります。

グランドブルーウェーブホテルは、名桜大学のほかにも、インドネシアの大学などからの学生も受け入れていて、インターンシップ受け入れの独自のプログラムを持っています。

## 現在の派遣先

新垣：現在の海外インターンシップ受け入れ先は、マレーシアのグランドブルーウェーブホテル、台湾のホテルロイヤルニッコータイペイ（2013年から）、沖縄ツーリスト（以下「OTS」）台北事務所（2012年から）、韓国のホテルインターブルゴー大邱（テグ）、ハナツアー済州（それぞれ2013年から）です。



新垣　裕治
観光産業教育研究学系 教授

## 台湾でのインターンシップ

新垣：台湾は沖縄から近く、長い交流の歴史があります。またビジネス交流も盛んです。それで台湾で海外インターンシップを行うのは重要だろうということになりました。近いので、学生にとっては費用もそれほどかかりません。

台湾での受け入れ先を見つけるために、台湾を何度か訪れています。OTSは東社長に直接依頼し、受け入れていただきました。ロイヤルタイペイは足掛け２年の交渉を経て、受け入れてもらうことができました。ロイヤルタイペイは、どんな学生を派遣するのかということをいろいろと議論しました。ロイヤルタイペイは台湾で常にトップクラスの評価を得ている五つ星ホテルです。英語、中国語、学生のやる気などすべてが備わっていなければ派遣できません。

学生を選ぶ際には、英語で日常的な会話ができること、それにプラスして派遣先国の言語能力も重視しています。派遣までに台湾なら北京語、韓国なら韓国語、マレーシアならマレー語の講義もしています。

## 韓国でのインターンシップについて

許：交換留学協定校が韓国にできてから、インターンシップの派遣先も、韓国をはじめさらに開拓した方がよいとの要請が、瀬名波榮喜前学長よりありました。

そこでまずは、現地の協定を結んだ大学を通じて派遣先を開拓したら、継続できるのではないかということで、受け入れ先探しに取り組みました。

初め、済州大学の先生にお願いして、済州にあるいくつかの企業を紹介してもらいました。一番よかったのがロッテホテル済州でした。2011（平成23）年３月に協定を結び、８月に派遣することができました。

テグでは、啓明大学の知人にお願いして、啓明大学と関わりが深く、五つ星ホテルとして評価の高いインターブルゴーホテルを紹介してもらいました。インターブルゴーホテルは啓明大学に寄付を行うなど、啓明大学と強いつながりがあります。啓明大学の協力を得て、2012（平成24）年11月に協定を結ぶことができました。

## 派遣先の受け入れ態勢

新垣：今、学生への支援は以前に比べると少なくなっていますが、といっても、このような現場体験は個人ではなかなかできないと思います。たとえば、受け入れ先に宿泊先を用意してもらったりしていますが、グランドブルーウェーブホテルでは、ホテルの１室を１泊1,000円で学生の宿泊先として使わせてもらっています。食事は無料で提供してもらっています。受け入れ先にはいろいろと配慮していただいて、大変感謝しています。

許：韓国のインターブルゴーホテルでも、ホテルの部屋と食事を無料で提供してもらっています。もし部屋が満室のときには、社員寮に宿泊させて



許　点淑
観光産業教育研究学系 上級准教授

もらっています。

新垣：できれば台湾でも派遣先ホテルに宿泊させたいと思っているのですが、ロイヤルタイペイは客室の稼働率が常に９割を超える程の有名ホテルですので、部屋がなかなか空きません。ですから大学の方で、学生の負担が少なく安全な宿泊先として国際学舎を探しました。

許：ハナツアーの場合は社員寮などがないので、済州大学のゲストハウスを利用させてもらっています。

## 事前研修

新垣：ホテルでの事前研修は海外インターンシップスタート時から実施しているプログラムです。派遣先で、英語または派遣先国の言語でまるっきり新しいことを最初から覚えるというのはかなり難しいことです。ですから派遣前に、具体的な業務を体験してもらい、業務内容をある程度覚えた上で、インターンシップに入ってもらうようにしています。

当初からホテルマハイナウェルネスリゾートオキナワに、１週間ぐらい事前研修の受け入れをお願いしています。前田産業ホテルズには国内インターンシップでも長い間お世話になっています。また去年からは、オキナワマリオットリゾートの協力も得ています。

旅行業については、ＯＴＳの名護支店で研修の受け入れをお願いしています。台湾のＯＴＳ事務所での受け入れも、もともとは名護支店を通じ東社長に話をして、実現したという経緯があります。ＯＴＳ名護支店には、観光産業の卒業生が３名はいます。そういうこともあって非常にいろいろなお願いがしやいところがあります。



## 派遣期間中のサポート

新垣：３～４週間という長い期間海外に学生を派遣するわけですから、現地での生活の様子が心配です。派遣期間の中間にスカイプ（Skype）を利用して、学生の顔を見ながらの報告会議を持っています。この会議には受け入れ先の担当者にも加わってもらいます。

また、現地では学生たちは日誌をつけ、派遣先の担当者にチェックしてもらう方法で、学生たちの生活をサポートしてもらっています。

## 海外インターンシップ

新垣：名桜大学では開学当初からインターンシップを採り入れており、そのノウハウが蓄積されています。そうした積み重ねがあるからこそ、派遣先を国内から海外にまで広げることができたのだと思います。

また、ずっと続けてこられたのは、まずは受け入れ先、企業のご協力それから学生の気概、それに大学の理解と協力があったからだと思います。

インターンシップというのはお手伝いではありません。インターンシップをお願いして、派遣先の企業に受け入れてもらっているわけですが、受け入れる企業に教育という観点がないと、インターンシップは成立しませ

ん。この点で受け入れ先企業のご理解とご協力には非常に感謝しています。

また、学生たちには、派遣先には名桜大学の代表、日本の代表という心構えで行くように、と話しています。受け入れ先からの評価はとてもいいです。それで続けてこられたのだと思います。派遣先で学生が頑張ってくれたということもありますが、派遣先でも教育ということを意識して受け入れていただいていることが大きいです。

さらに、大学として、派遣先との交流も持っています。グランドブルーウェーブホテルとロイヤルタイペイの社長をお招きして、シンポジウムや講演会を開催しました。地域貢献と交流、また沖縄、本学への理解の向上等、いろいろと良い効果があったのではないかと思います。

## 海外インターンシップの成果

新垣：海外インターンシップを体験すると、学生の視野がかなり広がると感じます。そういった意味で、本当にいい機会だと思いますし、卒業後海外に就職するなど、海外に居場所を見つけた学生もいます。

また、派遣された学生は自分自身の実力のなさ、というのを身にしみて感じるようです。これをバネにして、残りの学生生活は奮起し、以前にも増して勉学に励むようです。

許：特に言語の壁というのを意識して帰ってきます。





現地調査（韓国）

# スポーツ健康学科・インターンシップ



## 目的と概要

インターンシップはスポーツ健康学科が開設された2005（平成17）年度の入学生が３年生になった年から行われています。当初は選択制で100名の学生のうち80名の学生が派遣されました。

学科開設時は、保健体育の教員免許を取得し教員を目指す学生がほとんどでしたが、県内教員採用は狭き門であるため全員が採用に至るには厳しい状況がありました。そういった中、ほかの就職の選択肢を幅広くもてるようにするというのもインターンシップの目的の一つでした。また、大学卒業後に教員になるということは、学校を卒業してすぐ学校に就職するということになるので、「学校」という場所以外のいろいろな職業を実際に肌で感じて、その経験を自分の教育観などにつなげてほしい、という願いもあります。

2010（平成22）年に３年次の実習から２年次に下げて必修科目になりましたが、学生の主体性を重視したいということで２年後に再び選択制になり、2012（平成24）年度は39名、2013（平成25）年度は８名、2014（平成26）年度は18名をインターンシップで派遣しています。

インターンシップ先の業種は、主に次の分野に分けることができます。一つは健康スポーツ分野で、フィットネスジム、スイミングスクール、県立や市立の体育館や陸上競技場の施設管理などです。もう一つは、野外教育分野です。全国各地の国立の自然の家でファシリテーターとして、アクティビティに参加する子どもたちのリーダー役などになりサポートするといったものです。

## 学び合いから現場での実践へ

現在、インターンシップはⅠ～Ⅲの科目になっています。「インターンシップⅠ」は事前準備として学内で学び、「インターンシップⅡ」は２年次、「インターンシップⅢ」は３年次でインターンシップを行います。インターンシップ先は自己開拓で、学生自ら企業や施設にアプローチすることになっています。

インターンシップⅠの内容としては、インターンシップの意味や価値、スポーツのもつ力、学生がもっている強みや弱みとその裏に隠れている強みや弱みなどについて講義をしています。ビジネスマナーなどについては１泊の宿泊型で集中して勉強します。また、希望するインターンシップ先の研究をし、模擬指導なども行います。たとえば、スポーツジムに行く学生なら、トレーナー役になりそれ以外の学生が利用者役になってトレーニングの指導などを実際に模擬的に行います。その後、両者の立場で反省や感想などをディスカッションし、学生同士による学び合いの場を設けています。

インターンシップⅡは夏期休業中の８日間で行われ、広く社会を見て自分の世界観を広げるということが最大の目的となります。



仲田　好邦
スポーツ健康学科 助教

2014（平成26）年度の３年次から実施されているインターンシップⅢは８日間以上ですが、実施時期を指定していません。学生は自分の専門性を活かせる受け入れ先を模索し、その企業の特色に合わせて日程を立てます。たとえば、プロスポーツの運営などで土日のイベントに合わせてインターンシップを行いたいという場合などのように、年間を通じて計画することもできます。

２年次の経験を活かして、３年次では自分に合わせたスケジューリングができるのが本学科のインターンシップの特徴といえます。２年次のインターンシップをせずに３年次のインターンシップを受講することもでき、企業や施設の特色に合わせて学生自身によるオリジナリティのあるプログラムを構築することができます。







上・ビジネスマナーの実習風景
中・インターンシップ出陣式
下・マリンレジャーの現場でのインターンシップ

## 体育・スポーツ系学生の“強み”と“弱み”とは

これまでのいわゆる「体育・スポーツ系」学生の“強み”とは、元気でハキハキしている、忍耐強くて上下関係をわきまえているなどのイメージです。そういった学生を求める企業も多く、体育・スポーツ系の学生のみを対象にした合同説明会もあります。

一方で、学生自身がステレオタイプの体育・スポーツ系のイメージにとらわれてしまいがちなのが隠れた“弱み”といえます。最近では知性を兼ね備え、困難に立ち向かうための合理的な判断ができるプロスポーツ選手が多く活躍しています。そういった力を発揮できる可能性があることは、実は体育・スポーツ系学生のもう一つの強みです。体育・スポーツ系のイメージの壁を自らで壊し、本当のスポーツマンとはどういったものかという認識をもってインターンシップ先や就職先の選択の幅を広げてほしいと考えています。インテリジェンスを備えた、体育・スポーツ系の学生を輩出していくことが教員にとっては一つの使命ともいえます。

## インターンシップの成果と今後の展望

派遣する際、学生に「インターンシップを終えたときに、ぜひうちにきなさい、と言ってもらえるようにがんばれ」と声をかけています。指示を待つのではなく、自分で仕事を見つけたり、仕事をリクエストしたりする積極的な姿勢で取り組んできなさい、ということです。

１年生の時点では、自分が何をしたいのか定まらなかったという学生も、２年次で実際にインターンシップに行くことで、自分に足りなかったことやできないことが明確になり、目標をもって、その後受講すべき科目の展開がみえてきたという声が聞かれます。インターンシップが終わった後も、授業とは別で自主的に学外にフィールドを求めていく学生もいます。

今後は、2016（平成28）年にカリキュラムの改訂があります。専門性を養成していくために、カリキュラムのさらなる充実が必要だと考えています。インターンシップで学生自身が感じた自分の課題を、カリキュラムの中で選択し勉強できる、というような好循環を自然な形で作り出していきたいです。

# 就職の翼・学内合同企業説明会

## 名桜大学の就活はトップセールスが原点

名桜大学の開学当時の1994（平成６）年、就職課はありませんでした。１期生が３年次に上がる1996（平成８）年に学生課に就職係が置かれ、無料職業紹介等をはじめとする第１期生への就職支援が開始され、翌1997（平成９）年度に就職課が開設されました。当時の職員は知念一郎課長、翁長千恵係長、伊計耕一係員（当時の事務所は本部棟３階、現在は多目的ホール１階）の３名でした。

1998（平成10）年春、名桜大学は長引く不況が続く中、初の卒業生を世に送り出していますが、沖縄県下６大学の中では最高の86％という就職率を達成しています。特に１期生の県外就職等、出口保証に尽力したのは、東江康治初代学長兼理事長と知念就職課長でした。お二人は、東京の中小企業家同友会や東京県人会、大阪県人会に出向き中小企業の社長に対しトップセールスを展開したのです。また知念就職課長は、学生たちの宿泊施設として、飯田橋の東京国際ユースホステルや代々木の東京オリンピック記念青少年総合センターを手配するなど就職の翼事業に着手しました。

## 名桜大学「就職の翼」

1999（平成11）年、県内企業に留まらず、県外企業にも目を向け、学生たちの職業選択の幅を広げるために、名桜大学独自の先駆的取り組みとして県外就職促進事業「就職の翼」が開始されました。当初は東京（３月）・名古屋（３月）・大阪（４月）などで開催される合同企業説明会に午前中は参加し、午後は個別に企業訪問を行っていました。なかには早々と内定をもらった学生もいました。2000（平成12）年、名古屋の合同企業説明会が小規模になり、同様に大阪も小規模になったため、2002（平成14）年に大阪は取りやめになりました。結果として、東京だけという状況が長く続きましたが、2012（平成24）年より福岡での就職の翼事業がスタートしました。期間は４泊５日で学生の負担金額は３万円、残りの費用は本学の予算で補助しています。

就職の翼は1999（平成11）年に始まり、2012（平成24）年で14年目となっています。これまでに34回実施し726人の学生が参加しています。参加した学生の就職状況は、14年間で県外内定率30％、県内内定率55％、全体の内定率は85％と高い数値となっています。



渡具知　伸
学生部長（元就職課長）

## 学生の動向

完全失業率が全国平均の約２倍の沖縄県では、新規学卒者の就職は開学当時から就職超氷河期といわれ、深刻な問題でした。名桜大学就職の翼は、県内出身学生の県外への就職を促進するために企画したのですが、公立大学法人化（2010年度）以降は県外出身の学生が多く参加するようになっています。現在、本学の学生は、県内と県外出身者の比率は均衡を保っていますが、今後は県外出身の学生が多くなると思っています。

## 就職活動に向けた新たな取り組み

2001（平成13）年９月、第１回就職ガイダンス宿泊研修会が国際学部各学科の３年次158人が参加して、１泊２日の日程で名護市青年の家で行われました。初日は「県内の雇用状況について」名嘉山兼一名護公共職業安定所長の講演、スカイグループによるビジネスマナー実践指導、模擬面接、ビジネス文書の書き方、２日目は就職した先輩の体験発表、就職活動の進め方などのプログラムです。また翌年には、「2002就職指導講座」を本部棟４階の大会議室や多目的ホール講堂で４回にわたって開いています。さらに、有料ですが、公務員・一般企業対策講座も開講しました。





上・模擬面接に挑む学生たち
下・企業説明を熱心に聞く学生たち

## 学内合同企業セミナー

名桜大学就職課主催「第１回学内合同企業セミナー」は、2007（平成19）年５月26日、㈱エスエフシーの運営協力のもとに、本学の大学食堂に26の優良企業に参加いただき開催されました。会場には３・４年次の学生を中心に、県内外の大学生も含め342人（本学学生243人）が参加していました。県内企業参加のセミナーですから、県外志向の学生や公務員、教員、軍雇用員、県警、自衛隊志望の学生は参加に消極的でした。この頃、名桜大学以外に合同企業説明会はあまりありませんでしたが、今は、学生向け就活・就職情報サイト運営のマイナビやマスコミ、県なども、就活のための合同説明会を催しています。どの説明会も出展する企業はだいたい同じですので、今後は合同企業説明会のやり方を考えなければならないと思います。

2013（平成25）年12月１日から現３年次（2015年３月卒業予定者）の就活が解禁となり、企業説明会や会社訪問が一斉に始まりました。就職を希望する３年次は、内定を勝ち取るまで就活が続きます。アベノミクスで企業の業績が回復状況にあるといっても、新卒者の意欲や能力が企業の基準を満たさない場合は、予定採用人数を下回っても採用しないという厳選採用時代で、就活はいまだ厳しい状況です。

## 就活支援・応援プログラム

本学のキャリア支援課とキャリア開発委員会では、厳選採用時代の学生の就活を支援するため、３年次の前期日程から様々な就活支援・応援プログラムを実施しています。

その一環として2013（平成25）年12月に、県内の優良企業を中心に、41社による名桜大学学内合同企業説明会を催しました。当日来場した学生は206人、本学以外の学生も40人参加していました。これまでにない41社が参加したことは、沖縄県内企業の本学卒業生に対する期待の表れであり、本学卒業の学生を積極的に採用したいという企業が集まっています。キャリア支援課は、学生たちがもっと積極的に自分の就活に取り組めるようサポートしていくつもりです。



上原　康成
キャリア支援課長

# 現地実習・中南米コース

## 現地実習のはじまり

はじめに、現地実習とは語学研修ではなく地域研究を集中講義で行うカリキュラムです。

名桜大学開学１年前の1993（平成５）年は、全国で大学を造る機運が高まっていました。また、座学が主流であった既存大学のカリキュラムが、実学、現地実習を取り入れたカリキュラムになったのもこの年からです。

名桜大学設立のため1992（平成４）年に文部省に提出された認可申請書の中にも、現地実習のプログラムを記載してありました。文部省審議会のヒアリングで、審議官が「中南米現地実習とは、その地域の歴史、政治、経済、社会、文化、民俗などを現地の学術交流協定大学で集中講義を行ってもらうプログラムです。講義は日本語ではなく現地の言葉で行われます。学生たちが理解できるのですか？」と問いかけると、のちの初代学長・東江康治先生は「名桜大学の現地実習は、東南アジアや中南米各国の母国語に精通した先生たちが学生を引率するため、講義の内容は同時通訳で学生たちに伝えます。たとえ言葉がわからなくても、内容を把握し理解することはできます」と答えたそうです。実際、中南米の現地実習では、地域研究を集中的に掘り下げて講義していただくため、名桜大学側で毎年違うテーマを考え、現地の大学に送ります。それに沿う形で、現地の教授に講義内容をＡ４サイズで12枚ほどにまとめてもらい、実習の１ヵ月前に名桜大学へ送ってもらいます。その原稿を我々が翻訳し、学生を引率して現地実習に向かうのです。

## 特色ある学部学科の設置

1994（平成６）年に名桜大学は１学部３学科制（国際学部の中に国際文化学科、経営情報学科、観光産業学科の３学科）の公設民営単科大学として設立されました。国際文化学科の中には日本・沖縄文化コース、東南アジア文化コース、中南米文化コースの３コースがありました。環太平洋の東アジア（朝鮮、韓国、日本、中国）がないのは、すでに他の沖縄の大学が取り入れていたからです。そこで本学は、沖縄と貿易で関係のある東南アジア、沖縄からの移民が多い中南米、またそれまでオセアニアはあまり沖縄や日本と深い関係にはありませんでしたが、環太平洋という視点からオセアニアに関する科目が組み込まれました。中南米は、私と、琉球大学でスペイン語を教えていた安井祐一先生が1994（平成６）年に定年退官され、本学の開学に合わせて赴任しましたので、２人で担当しました。

## 初めての現地実習

中南米コースの場合は国際文化専攻の専門科目の中にある５科目（中南米の言語と文化、歴史、民俗、社会、移民と文化）がベースになっています。それに加え、以前は外書講読もありました。つまり現地のスペイン語やポルトガル語で書かれた文献を読んでいく授業です。それから実学の現



住江　淳司
国際文化教育研究学系 教授

地実習がセットになっています。



中南米現地実習＝2013.9

１回目の現地実習は1996（平成８）年９月、ブラジル、アルゼンチン、ペルーで行われました。ペルーのパシフィコ大学での集中講義は、インカ帝国の歴史についてでした。講義の途中、パシフィコ大学のペレス・ペレーラ学長が私に「フジモリ大統領に会いたいですか？」と小声で話しかけてきました。私は驚き「エッ、フジモリ大統領に会えるのですか？」と返すと、「私に任せなさい」と言われました。私は安井先生に通訳を代わってもらい、先に学長と一緒に公用車で大統領官邸に向かいました。大統領官邸は、インカ帝国を滅ぼしたフランシスコ・ピサロの館であったことは知っていましたので、車が入口を通り過ぎ裏手の通用門を入って停まったのには驚きました。学長は「非公式な面会ですから正面から入ることはできないのです」と話しました。車を降り通用口に目をやると、小柄な年配の女性が立っていました。学長が「フジモリ大統領のお母さんですよ」と紹介すると、小柄なご婦人は優しい笑顔で話しかけてくれました。私は「沖縄の名桜大学の住江です。学生たちがフジモリ大統領に謁見できるとお聞きし、おうかがいいいたしました」と挨拶すると、「お話は聞いていますよ。私についてきてくださいね」とおっしゃり、さっそうと歩き出しました。案内された部屋は、大統領が大臣を任命する黄金の間でした。すぐ脇には上り階段があり、婦人が上がっていったので、「上が大統領の執務室かもしれない。もうすぐフジモリ大統領に会える」と考えると、ワクワクしてきたことを思い出します。

しばらくして安井先生が74名の学生を引き連れて入ってきました。それから小柄な人物でしたが背筋をピーンと伸ばし威厳のある人物が執務室から下りてきました。大統領を眼前に見た学生たちがワイワイ騒ぎ出したので、大統領は護衛のSPに対し「静かにさせなさい」とスペイン語で話しかけ、執務室に戻りました。SPは側にいた私に「学生たちを静かにさせ、至急３列に並ばせてください。それができなければ大統領とお会いすることはできません」と言いました。ビックリした私がそれを学生たちに伝えると、学生たちはすばやく３列に整列してくれました。

静かになると再び大統領が執務室から出てこられ、整列している学生一人一人と笑顔で握手をしてくれました。それから大統領が教員２名と事務の方１名の３名を執務室に招き入れてくれました（そのときの引率者は私と安井先生、名桜大学の事務方２名、添乗員２名の６人体制）。そのときの写真は、私の研究室に今も飾ってあります。中南米でも外国の民間人が大統領に会えるのは珍しいと聞いていましたから、第１回目の現地実習で大統領に会えたのは幸運でした。また、びっくりしたのは、同年12月17日ペルーの首都・リマの日本大使公邸が、テロリストに占拠され、青木盛久大使をはじめ約600人が人質となった事件が起きたことです。この事件は翌年の４月22日にペルー警察の突入によって解決しましたが、我々は日本大使公邸占拠事件の３ヵ月前に、青木大使とお会いしているのです。

現地実習の集中講義では、マスメディアでは取り上げられることがない

ような内容についても取り上げられることがあります。たとえば、ラテンアメリカで、ブラジルに次いで２番目に領土が大きいアルゼンチンが、なぜ1999（平成11）年に経済危機に落ちいったのか？　マスメディアでは報じられない、濃い内容の講義を聞くことができるのです。

## 現地実習の３本の柱

第１の柱は現地での集中講義です。南米や東南アジアの情報を書物や映像で見るのは、間接的な２次情報です。現地実習の一番の利点は、１次情報を現地で得られることです。現地まで赴くことにより、自らの五感で何も加工されてない情報を得ることができます。１次情報を得ることで、今までに経験したことのない知識が得られ、それを持ち帰って卒業論文として執筆することができます。第２の柱が人脈づくり、沖縄県人会との文化交流です。交流会ではウチナーンチュのアイデンティティを再認識します。今では、南米の沖縄県人会には、９月になると地球の裏側にある自分たちの母県から名桜大学生がやってくると楽しみにしている人たちが大勢います。アルゼンチンのレセプションでこんなことがありました。県人会館に入ると、県人会の皆さんが座っているテーブルに名護、本部、今帰仁など沖縄の地名が掲げられていました。名桜大学生たちは、自分の出身地名が掲げられたテーブルに案内されたのです。県人会の方と話をしていると、自分の親戚だと分かり、お互い涙を流し喜んでいる学生もいました。レセプションには、自分の親戚に会えるのではないかと期待を抱き、60～80キロ離れた奥地から参加される方も多数います。また、文化交流会では、現地の若者が、踊りや格闘技、音楽などを披露してくれます。

我々名桜大学生もこうしたもてなしに応えるために、エイサーや空手、琉球古武道を披露します。そのために本学で毎年練習を重ね準備するのです。若者は言葉でのコミュニケーションはあまり取れませんが、身振り手振りで互いの芸能文化を通して交流を深め、友好関係を築くことができるのが沖縄県人会です。交流の果実として現地の２世・３世の若者が、エイサーを習いたいと希望し、ロンドリーナ州立総合大学の留学試験を受け、１年間名桜大学に留学し、エイサーをマスターしてロンドリーナ大学で普及させています。

第３の柱は、アルゼンチン、ブラジルそれにパラグアイの国境にあるイグアス国立公園、ペルーのマチュピチュやインカ帝国の遺跡、メキシコのアステカ文明、マヤ文明などの世界遺産見学です。

私が参加しているラテンアメリカ学会では、「毎年遠い南米まで学生を引率してよく続けられますね」とよく驚きを込めて言われますが、現地実習は国際学群の必修であり、18年続いているリベラルアーツ（liberal arts）の基本理念「円満な人格形成」のためのカリキュラムなのです。

# 現地実習・アジアコース

## 経緯

海外現地実習は開学当初、協定大学で授業を受けることを特徴とした必修科目で「中南米コース」と「東南アジアコース」の二つが開催されていました。

現在では、学生のニーズが広がってきたことをふまえ、中国や韓国など東アジア諸国にも協定校が増えました。そこで東南アジアコースの枠を広げ、「アジアコース」となっています。アジアコースでは、おおまかな二つのエリアに分けて毎年そのどちらかをほぼ交互に開催しています。主に東南・南アジア方面は私（山田均）、東アジア方面を菅野敦志先生が担当しています。この海外現地実習は、３年次の履修単位として行われており、2014（平成26）年現在、18回現地実習を行っています。

## 大学の変遷とともに変わってきたこと

2013（平成25）年のアジアコースは20名以上の学生が参加しましたが、過去には一桁の参加人数の年もありました。要因としては、2007（平成19）年に国際学群が設置され、３年生になってからの専攻選択制になり、国際文化を専攻する学生が非常に減った時期があったためです。

そうした時期に感じたのは、広い世界に目を向けようとする学生が少ないということです。英語＝外国という意識が強いため、英語ができないことを理由にしたり、自分の生活の中に“外国”というものがしみ込んできているというのに、まったく国外のことに興味を持てないという学生もいたのです。そういう考え方の学生が多くなると、国際文化専攻に進む学生も少なくなります。現在は、公立化に伴って国際文化専攻の希望者も増えているので、現地実習の参加人数も増えてきました。

## 東南・南アジア方面の旅程

東南アジア方面の現地実習では、沖縄から台湾経由でベトナムへ行き、現地のバスを使ってプノンペンへ入ります。その後、船でシェムリアップへ行き、アンコールワットを見学して、トラックやバスなど地元の交通方法でタイに入り、バンコクから鉄道でマレーシア、シンガポールへ。帰路は台湾に寄り沖縄に帰ってくるという流れです。

台湾はトランジットの目的もありますが、帰りには３泊滞在します。なぜ初めに滞在しないかというと、東南アジアのイメージを強く残したいからです。たとえば、東南アジアに入るときに、インドのデリーからスタートする場合もありますが、そのときにもやはり、アジアの強烈な第一印象を大事にしたいのでトランジットの国に長居せず、最初の１日目をインドでスタートできるよう計画しています。

インドでは、現地の人が泊まるようなところに泊まったり、お寺に泊まることもあります。鉄道やリキシャという現地の乗り物でバングラデシュへ行き、農村で１～２日ホームステイさせてもらい、船で移動します。乗



山田　均
国際文化教育研究学系 教授





上・現地の食堂にて
下・タイの露店街を歩く学生

り込んですぐに甲板で現地人の寝場所の陣地争いに加わりつつダッカへ向かいます。日本人の集団が珍しいのか、船の上では現地の人々に見られながらの移動です。

## 旅の計画と準備

旅行会社を介して予定を組む部分もありますが、ルートの計画や予約は私が行っています。これまでの現地実習の経験から、宿泊できるお寺や、地元ならではのいい宿の場所がわかってきました。我々のやろうとしていることの理念をわかってくれるようなところがあれば、そこにまた次の学生と訪れるというようなことができます。ときには、あちらに留学している学生に連絡して船などのチケットを手配してもらうこともあります。普通のツアーのような旅行と違って、地面を這うような旅をするときには、こちらの旅行会社だけではできません。

現地実習では、どういうものを食べるかということも重要です。一度はその国のごちそうを食べさせるということを意識しています。そして普通の人が食べるもの、屋台の食べ物、いろいろな食べるシーンを経験してほしいと思っています。

安全な旅には事前にどれだけの準備がしてあるかということが大事です。ただし、準備は見えないのが準備であり、学生はそれに縛られることなく自由にしている、という雰囲気になるような塩梅が大切であり難しい点でもあります。学生たちには、海外でも一人で行動できる力を身につけてほしいと思っています。旅に慣れてきたところで「○○大学で留学の資料をとってくる」というものや、「国立図書館に行って入館カードを作ってくる」などの“指令”の書かれたくじを一人ずつに引かせてそれを実行するというアクティビティを行っています。学生たちは異国の地で知恵をしぼって行動し、地元の人と接しなければならない状況を経験して自信をつけていきます。

## 「まかぬ種は生えぬ」

学生には現地実習中からすでにビビッドな変化があります。初めはおどおどしていたような学生も、自信をもって歩くようになります。こうした異国を訪れる経験をする機会は種をまいたということであって、その種がいつ芽吹くかは人それぞれなのです。すぐ芽吹く学生もいますし、時間がたってからそうなる人もいるでしょう。“まかぬ種は生えぬ”という言葉があるように、大事なのは学生たちに種をまくということなのです。自分に芽吹いたその芽に、いつどんな肥料や水をやるかは、その人によって違います。だからこそ、すぐに芽が出てこないからといって決してあきらめることはありません。

## 海外入門スタディツアー



海外入門スタディツアーの参加者
（タイ・サイアム大学）

３年次の現地実習で海外に出るのが初めてだという学生がほとんどです。これについて少し遅いのではないかという意見もあり、2014（平成26）年の２年次では「海外入門スタディツアー」というのを開催しました。短期間で行けるアジア圏を設定し、ミャンマーコース、タイ・マレーシアコース、台湾コース、インドネシアコースの４コースが開催されました。一番長い日程で７泊８日という期間です。定員を15名としていましたが、30名の応募があり、くじ引きで決めました。私自身、海外に興味をもつ学生が増えたという実感があり、このことは公立化し学力が伸びたことの影響が大きいと感じます。

私は、“国境を感じる旅”というテーマでタイ・マレーシアコースを担当しました。“国際”とは、国が際を接しているという意味です。国境を１歩越えれば言葉も違うし、宗教も違う、人の顔も違う、というようにいろいろな違いがあります。それをまず感じてほしいと考え鉄道で国境を越えるというルートを計画しました。現地実習と違って短期間のコースなので、背中を押すという意味でいい種まきができたのではないかと思います。

今回は協定校であるタイのサイアム大学にも行き、そこの学生もこの旅行にバンコクから参加しクアラルンプールまで旅をしました。海外の学生と一緒に旅をしたということも貴重な経験です。今後の現地実習でも国外協定校の学生と一緒に行動するというプログラムを発展させていきたいと考えています。

## 旅は有効な教育の手段

現地実習の課題は、やはりお金がかかるということです。旅行会社に任せる部分が多いほど費用もかかりますが、そうでない場合私一人で管理しなければなりません。ところが添乗員をつけて旅行会社が把握できるような旅程にしてしまうと、観光バスを使うような旅行になってしまいます。ただ「安全でおもしろかった」という旅になってしまっては、この現地実習の意味が違ったものになってしまいます。しかし、近年学生の体力が落ちていると感じることが多く、南アジアの方を何日も旅するということは精神的なストレスも並大抵ではないため、そのあたりをどうケアしていくかということも、現地実習のポイントになってくるのではないでしょうか。

海外入門スタディツアーは高校生や社会人の方々にも広げていきたいと思っています。高校生には高校生なりの種のまき方がありますし、参加者が高校の先生のような立場の人なら旅でどう育てるかという理論や、私の今までのノウハウの蓄積を伝えたりもできると思います。旅というのは、とても有効な教育の手段ですので、それも一つ“種をまく”という行為であると思います。

# 現地実習・オーストラリア

## それぞれがテーマを決めて現地調査

2011（平成23）年までは北米現地実習でしたが、私が担当することになってからは、オーストラリアで行っています。このオーストラリア現地実習は2013（平成25）年度で２年目です。期間が短くなりすぎず、費用は高くならないようにということで、期間は17日間で実習費用は30万円くらいに収まるよう設定しています。

語学学校にも通いますが、大きな特色としては現地で調査をするという課題を出していることです。過去の調査にはオーストラリアの教育制度、料理、水事情、国歌、言語とマナーについてなどのテーマがあります。出発前に各自が調べるテーマを決め文献調査をします。

現地での調査方法は各自のテーマに合わせて練っておきます。オーストラリアの国歌をテーマにした学生は、50名にインタビューを行いました。沖縄とオーストラリアの水泳トレーニングの違いを調べた学生は、実際にオーストラリアの学生たちとプールで泳いで日本との練習の違いを発見したようです。現地で行うので、もちろん英語を使っての調査になります。それらを最終的に報告書にまとめます。

全員で一緒にただ観光地を廻るのではなく、それぞれに目的意識を持って行動するというのがこの現地実習の大きな特徴です。



## 現地でのふれ合い

宿泊はホームステイです。寮などの集団生活では、せっかく海外で語学研修をしても、そこに日本人がいれば日本語をどうしても使ってしまいます。それですと、日本人がそこに移動しただけになってしまい、学校以外の日常において英語にふれる機会が少なくなってしまいます。ホームステイなら実際の生活の中なので英語で意思疎通しなくてはならない、また現地の生活を肌で感じることができます。

現地ではいろいろなアクティビティをプランに入れています。2013（平成25）年はオーストラリアに住んでいる日本人の方を招いて、オーストラリアの生活について語ってもらいました。現地の小学校に行って、小学生に折紙を教えるという交流もしました。現地実習の参加者は６名でしたが、一人が10人くらいの子どもに囲まれて教える状態になりながら、折紙を完成させました。たいへん盛り上がって、学生たちも楽しかったようで２時間くらいの交流ですが、充実感にあふれていました。

語学学校では、ネイティブの大学生との交流がなかなかなかったので、ウーロンゴン大学の日本語クラスで日本語を教えるという交流もしました。マンツーマンで日本語を英語で教えるという体験ですが、これもたいへん盛り上がりました。ウーロンゴン大学では、午前中は授業、午後はアクティビティというプランになっているので、たとえば午後はアボリジニーの薬草を試してみたり、アボリジニーの音楽を聞いたり、ロックペインティングをしたりなどの異文化体験をしました。



渡慶次　正則
国際文化教育研究学系 教授

およそ３週間弱の中で現地調査の課題に加えて、そういったアクティビティを織り込んでいるので、忙しいですが、充実していたと思います。

もちろんその中ではシドニーに行ってオペラハウスを観に行ったりなどの観光地巡りもしました。週末に、動物園に行ってカンガルーにエサをやったりといったお決まりの体験もしましたが、そういった一般的にやることとは別に現地の人とふれ合ったり、問題意識を持って調べものをしたりするというのが、この現地実習の醍醐味であるといえます。






上・現地の小学生に日本語を教える学生
下・オーストラリアに出発する学生
＝2013

## 現地実習を終えた学生の変化

現地実習は短期間ですし、大きく英語力がアップするわけではないですが、ホームステイ先で英語が通じなかったという経験が、英語をもっと使わなきゃいけない、もっと勉強しようという前向きな姿勢につながっていると思います。

また、現地実習に参加する学生の中には、一人では海外旅行に行く自信がないという学生もいます。いろいろな手続きなどをなるべく自分でさせるようにし、この現地実習の一連の経験が練習にもなっていると感じます。そういった学生たちも次回の海外への旅は自分で行ってみようという気持ちになれたようです。今後、英語を積極的に使っていくことや、海外旅行をするということの大きなきっかけにはなったのではないでしょうか。





現地の小学生にあやとりを教える学生

# 現地実習・沖縄コース

## 国内現地実習の目的

本コースは2013（平成25）年度までは国内現地実習の「沖縄・日本コース」として実施されていました。デスクワークだけでなく、実際に現地に行って知るというフィールドワークを重視しようということで始まりました。

2014（平成26）年度は沖縄コースとして独立したので、県外出身の学生が多いと予想していたのですが、13名のうち12名は県内出身者でした。県内出身でも宮古・八重山に行ったことのない学生や、首里城に行ったことのない学生もいるということで沖縄のことを知らないという自覚をもった学生が参加したようです。

沖縄は小さいですが、島ごとに文化や風土、環境、言語が違います。同じ沖縄の中に文化の多様性があるということを知るのがこの実習の大きな目的です。

## 2013（平成25）年度、沖縄６島巡り

2013（平成25）年度の沖縄コースでは、伊是名島からスタートし、本島、さらに宮古諸島は宮古島本島と来間島、八重山諸島は石垣島と竹富島に行きました。

伊是名島は、琉球国の支配者の出身地で、琉球国のはじまりに深く関わっています。そういった歴史や離島ならではの風土、住宅のつくり方、アスファルト舗装ではない道のある古い景観が残っています。ただ眺めるのではなく、たとえば道は石でできているのか土でできているのか、といった細かい点にも着目して見学しました。

沖縄本島では、沖縄の城（グスク）を見て、それぞれのグスクの石の積み方などを実際に目で見て詳しく特徴を学びました。

宮古島では苧麻（ちょま）を使った染織について学びました。実際に植物の刈り採りをし、その繊維を裂いていき、糸を紡ぐという工程までを実体験しました。繊維は、道具を使わず伝統的な切り方をした爪で裂いていきます。実際に訪れることで、そうした職人の手先の様子まで見て、手作業の姿を目に焼き付けることができます。苧麻の織物は重労働として歌にも残されており、その難しい作業は体験してみなければわかりません。

石垣島では戦前から民衆の物流を支えてきた公設市場を見学しました。八重山に限らず沖縄の市場は世界でも珍しく昔から多くの女性が活躍してきました。18世紀頃の中国の使者による絵には女性が働く様子が描かれています。沖縄の市場の歴史観を意識しながら、学生は市場で働く方にインタビューしました。日常的な風景の中で働く人に声をかける行為は、観光客としてよりも実習としての方が積極的に質問できたようです。

その後、石垣島から竹富島に渡り、「オン」と呼ばれるいわゆる宗教施設を廻りました。オンは沖縄本島における御嶽と同じ役割をもっています。学生は拝みの方向やそのオンが守っている場所を確認し、島の神聖な



照屋　理
国際文化教育研究学系 上級准教授

区域を実際に肌で感じ取ることができました。

宮古島ではプランになかった予想外の“現地実習”もありました。夕食をとるために食堂兼居酒屋のようなところに行ったときのこと。宮古の有名な文化のひとつ、「オトーリ」に参加する機会がありました。オトーリとは、「親」がいて自分の気持ちをのんでくれ、という意味をこめて同席する人たちに水でわった泡盛をまわして飲むというお酒の飲み方です。地元のフレンドリーな雰囲気の中に引きこまれて参加していったわけですが、こうした体験も現地を訪れたからこそできた貴重な体験になったのではないでしょうか。

## 沖縄を学んで文化の広がりを意識

2014（平成26）年度からは、奄美地域も沖縄コースのプランに加えました。奄美は、琉球の文化と鹿児島県を通して入ってきた日本文化の混ざり合った琉球文化圏です。様々な行事や食文化、建物の違いや景観など、沖縄本島との違いや似ているところの両面を感じて興味をもってもらうことが目的です。

本島から奄美大島までの移動は船です。船で行くと与論島、沖永良部島、徳之島という順で北上していくことになります。三つの島々を過ぎ、見えてくる奄美大島は一段と大きく感じるのがたいへん印象的です。飛行機で行くとあっという間ですが、船で行くと他の島々の存在を実感し、それぞれの土地に興味を馳せて目的地に着くことができます。

この現地実習で大切なことは、どんな小さな地域にも深い歴史があり伝承されてきた文化があるということを知ることです。実習を通してそれに気づくと、今後新たに訪れる地域でもそこに暮らす人々が育んできた文化に敬意を払うことができるようになります。

沖縄は日本ではありますが、中国や東南アジアとのつながりが深く、海を渡ってきた文化の影響を受けながら独自の文化を築いてきた土地です。その一つは織物で、沖縄では大正時代まで高機（たかばた）を使わずに、腰と足のテンションを使って織る腰機（こしばた）（バックテンション）という織り方が特徴でしたが、もともとこの織り方は東南アジアから伝わったとされています。ほかにもタイ米を使ったお酒、つまり泡盛や、芭蕉布も日本からではなく南方から伝わったという説があります。そういった文化の広がりを知って、文化圏全体に目を向けることに、沖縄で勉強する意義があるのではないかと思います。

今後はこの沖縄コース現地実習に、海外からの留学生も参加してほしいです。たとえば、中国から来た留学生なら中国文化の片りん、名残りなどを「沖縄の中にある中国」という視点で見ることができます。八重山においては、尖閣問題などについても他国の視点と織り交ぜて考える機会になりうるのではないかと思います。県内・県外の日本人学生とも刺激しあえるという意味でも、実習でともにする時間が、もう一つの異文化交流になると考えています。

# 現地実習・日本コース

## 国内現地実習の概要

国内現地実習は、2013（平成25）年度は“沖縄”と“日本”の２本立てで夏季休業中の10日間ずつ実施され、学生は両方とも同じ参加者で行われました。2014（平成26）年度は「沖縄コース」と「日本コース」に分かれて開催されました。国際文化専攻が提供するこのプログラムは、国外だけでなく国内の歴史・文化にも目を向けて身近なものを見ていこうというのが目的です。

私が担当してからは、まだ留学生の参加者はなく、2013（平成25）年度は参加者４人のうち県内出身の学生は一人。2014（平成26）年度の日本コースの参加者は12人で、そのうち県内出身の学生は３人です。近年の名桜大学全体の傾向にもいえますが、県外の学生の参加者が多いです。県内出身の学生の中には、あまり県外に出たことがないのでぜひ参加したいという声も聞かれます。

## テーマを決めてプランを作成

どこを訪れるかは、講義やゼミの内容ともリンクさせつつ考えます。まずは一つのテーマを設定することから始まります。たとえば2013（平成25）年は、江戸上り（江戸立ち）をテーマに琉球と関係ある日本本土の土地を巡り、2014（平成26）年は〈辺境〉というテーマで計画しました。テーマと大体の候補地をこちらで考え、学生と話し合いながらプランを立てていきます。

日本コースのプログラムには鹿児島県を組み込むようにしています。鹿児島は歴史上外国との接点も多く、琉球との関係も深いため本土と沖縄の関係も学べます。また、日本の歴史を勉強する上でも、重要な場所であり、豊かな情報をくれるところです。このコースの内容は毎年変えていく予定ですが、今後も鹿児島県内は巡っていきたいです。

2014（平成26）年は鹿児島の離島と組み合わせて東北地方や北海道など、前近代の日本の周縁にあたる地域を訪れました。中学、高校と日本の〈中央〉の歴史を学ぶ機会は多いので、それ以外の地域“日本の端っこ”に注目してみようということで〈辺境〉をテーマにしました。

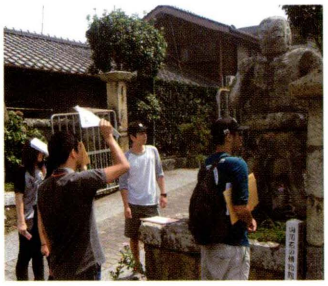
## 日本の歴史の発見現場を訪れる

現地実習で行く場所は、個人の旅行で行かないようなマニアックなところだといえます。地味ではありますが、普通の観光地では見えてこないものもあり、歴史を深く知ることができます。

2013（平成25）年に訪れた奈良文化財研究所は、日本の古代史の最先端の研究を行っているところです。そこで平城京から発掘されたものや、それらを分析する作業の様子を見学しました。これまで座学で習ってきた歴史について、古文書や出土物、遺跡を自分の目で見ることによって理解を深めることができます。



屋良健一郎
国際文化教育研究学系 准教授



実際に研究所や博物館、発掘現場を訪れて、研究している人、発掘している人など、歴史を解明する現場にいる方々の生の声を聞けることが現地実習の醍醐味の一つです。そのことを通して、これからも新しい発見があるかもしれない、新しい説が出てくるかもしれない、というワクワクを感じてもらえたらうれしいです。今後も地元の方や研究者の方と直接話す機会を増やすために、その訪問地の方々と信頼関係を築いていくことが大事なことだと感じています。

## 現地実習で身につけること

留学に比べて短い期間なので、より綿密な計画性が求められます。短時間の実習を充実したものにするために、学生は実習前に訪れる場所について細かく調べ、それを現地でほかの学生に解説・発表します。実際に現地を訪れると、調べたことについての疑問点を自分の目で確認できるのでたいへん有意義なものになります。そうした一連の作業の中で、史跡に行くときの、訪れ方や見方のようなものを学んでいきます。

## 国内現地実習は三つのバランスがポイント

現地実習は短期間でなるべく多くのものを見るために、どうしても移動が多くなりがちです。朝からずっと動きまわるのがほとんどで、しかも暑い時期、交通の不便な場所に行ったり、山の中を歩いたり、想像以上に体力が必要です。

また、飛行機や船などが移動手段にある場合はそれなりの費用もかかります。海外の現地実習は、当然ながらお金がかかると思いますが、本コースは国内なので、なるべく安く実施できるように心掛けています。費用を抑えつつ、学習効果の上がる場所で実習ができるよう意識しなければなりません。かといって、費用を抑えてずっと同じ地域に滞在すると学習する内容も狭くなってしまうのではないか、という不安もあります。

現地実習の計画は、充実した体験にすること、体力面、費用面の三つのバランスをうまくとることが重要で、一番難しい点だと考えています。

## 国内現地実習で国際交流を意識

学生には実際に現地に足を運ぶことで歴史を考えることの楽しさをさらに実感してもらいたいです。一つの国といえども国内の各地域にそれぞれの歴史があるというのを知ることは、同時に自分のいる場所を客観視する姿勢につながります。物事を絶対視せず相対化する視点をもてるようになることは、国際的な舞台で活躍するために必要なことだと思います。

また、海外に出たとき、その場所で本当の深い交流をするためには自分の国、母国について知っているということは重要だとよくいわれます。これから羽ばたいていく学生たちには、自分たちの国のことを発信していく力も身につけてほしいです。

# 現地実習・国際協力コース

## 国際協力コースの趣旨

2013（平成25）年度から国際文化教育研究学系の国際貢献・交流コースの名称を国際協力コースに変更しています。夏休みの８月中旬から９月の下旬の間で約２週間、学生たちを国際協力・海外援助などを行っている官公庁、NGO（Non-Governmental Organization：非政府組織）、NPO（Non-Profit Organization：民間の非営利組織）、企業、市町村役場などに派遣して、現場で就業体験を通し、座学では習得できない様々な業務を学んでもらうことが趣旨となっています。

現地実習である国際協力コースは国際文化専攻の必修科目で４単位です。

## 研修生の受け入れ機関

学生たちの研修先はすべて国内で、その一つが浦添市にあるJICA（独立行政法人国際協力機構）沖縄国際センターです。JICA沖縄には毎年、海外から日本が持つ専門的知識や技術を学びに多くの研修員が来ます。学生たちは、職員や研修員のお手伝い、ふれあい講座や研修員と市民の方との国際交流などのイベントのサポート業務などを行っています。NGOの派遣先としては、宜野湾市にある沖縄NGOセンターがあります。そこは国際協力・交流、助成、活動支援などに取り組んでいる市民団体です。世界のウチナーンチュの歴史を学ぶコースや中高生の平和を考えるワークショップ、東南アジアや中南米などの多文化共生を学ぶコースなどがあり、人材育成にも取り組んでいます。ここに派遣された学生はNGO活動を通してさまざまな交流を体験します。

NPOとしては、糸満市にある市民活動支援センターが学生を受け入れています。同センターは地域の課題解決や街おこしに取り組みながら、国際交流に関する事業を展開しています。

北部12市町村では、名護市に国際交流活動やイベント、語学講座などを行っている名護市国際交流会館があります。そこでも学生たちがイベントや国際交流活動などでお世話になっています。

2013（平成25）年、同会館で国際交流の一環として本学の住江淳司教授が主催したポルトガル語の弁論大会が行われましが、その運営の手伝いとして派遣学生が携わっていました。現地実習とは関係ありませんが、本学には海外からの留学生も多いので、国際交流会館が主催する語学講座で母国の歴史を母国語で紹介した留学生もいます。また、年１回名護市で催される世界の家庭料理フェアには、毎年、留学生たちが自国の自慢料理を出店し、市民との交流を楽しんでいます。

沖縄市観光文化課では、沖縄全島エイサーまつり、異文化を取り込んだ国際・国内交流などのイベントがありますので、そこにも学生たちを派遣しています。



高嶺　司
国際文化教育研究学系 上級准教授

## 研修後の変化

２週間の研修で実際に業務の中の一つを担当できるということはありません。手伝いが主になりますが、単発的な業務、たとえば撮影や記録係などを任せられることもあるようです。

国際協力コースの現地実習では、外国の方と接する機会があります。そのとき、うまくコミュニケーションが取れないと英語力のなさを痛感し、研修後は座学での英語学習を一生懸命やっているようです。また、研修機関のどの職場も、事務的な作業はコンピューターを使って行われているため、ITの技術と操作の必要性を再認識するようです。さらに国際協力というのは、海外に出向いて行うものだとの思い込みがあったため、海外から研修員として日本に招いて行う国際協力もあるということに新鮮な驚きを感じたようです。

## 意義

大学は学び研究する場所ですが、実際に現場に赴いて自ら仕事を経験し、外国の方々や市民とふれあい、職員からは貴重な体験談を聞き仕事を教えてもらいます。２週間と短い期間ですが、キャンパス内や座学では決して得ることができないことを体感しています。

参加学生たちは、それぞれの派遣先で戸惑いながらも、社会人として生活しています。実習後は、日常の挨拶やコミュニケーションの重要性と自己の弱点部分を認識し、今後の学生生活にフィードバックさせていけること。それが国際協力コースの意義だと思っています。

## 最後に

研修生を受け入れる側の立場からすると賃金は発生しませんが、日々多忙な業務の中、学生の安全面に留意しながら指導していただいていますので、ご苦労があると思います。実習機関と担当者各位に深く感謝しております。今後の課題ですが、国際協力の業務を行っている民間企業にも学生の研修を受け入れてもらえるように取り組んでいきたいと思います。

# 看護学科・臨地実習

## 臨地実習とは

医療の場では質の高い臨床実践能力が求められています。看護学科では沖縄の豊かなケア文化に学び、人々が健康に生きる権利を擁護できる看護師・保健師を育てます。そこで重要になるのが「臨地実習」です。

看護職の国家試験受験資格を付与することができる、一定の水準を備えた学校及び養成所を指定する基準と手続きを定めた「指定規則」があり、23単位以上の実習単位が求められています。本学の臨地実習は、学習進度に沿って１年次から４年次まですべての学年が実習を行います（表１参照）。臨地実習は、講義・演習で学んだ各看護学等の知識・技術を基盤として、さまざまな場で生活する人の健康レベル、発達段階に応じた看護について実際に理解を深め、適切な看護を提供することを目標にしています。学生は教員や臨床指導者の指導のもと、受け持ち患者に直接看護を提供します。

**表１．各学年で行われる臨地実習一覧　2012（平成24）年度以後入学生**

| 学年 | 実習名 | 単位数 |
|---|---|---|
| １年次 | ケアリング文化実習 | ２単位 |
| | 基礎看護実習Ⅰ | １単位 |
| ２年次 | 基礎看護実習Ⅱ | ２単位 |
| | 公衆衛生看護実習Ⅰ | １単位 |
| ３年次 | 成人看護実習Ⅱ（慢性期） | ３単位 |
| | 小児看護実習 | ２単位 |
| | 母性看護実習 | ２単位 |
| | 高齢者看護実習 | ２単位 |
| | 在宅ケア実習 | １単位 |
| | 精神看護実習 | ２単位 |
| ４年次 | 成人看護実習Ⅰ（急性期） | ３単位 |
| | 公衆衛生看護実習Ⅱ | １単位 |
| | 公衆衛生看護実習Ⅲ | ３単位 |
| | 総合実習 | ２単位 |



松下　聖子
看護学科 上級准教授

## 各学年で行われる臨地実習について

１年次は、ケアリング文化実習と基礎看護実習Ⅰがあります。

### １．ケアリング文化実習

その方の生きてきた背景を考慮して、その人らしく豊かな人生を送れるよう支援することは重要です。１年生の前期から開始するケアリング文化実習は、沖縄に生きる方々の深く長い生活を知ることから始まります。６月23日の慰霊の日の前後には、読谷地域と北部地域の戦跡めぐりを行い、過去から現在そして未来への平和を守ることの重要性を学んでいます。また、７月の愛楽園見学実習で学生は、差別・偏見・迫害の歴史的な事実を

知り、正しい知識の重要性やそれらに加担していた法律・教育の恐ろしさ、基本的人権の尊重の重要性を学んでいます。北部地域でのふれあい活動では、各区長さんへのインタビューを通して、また地域の行事に参加し子どもから高齢者と積極的にふれあうことで、地域の絆や文化を学び、看護学生として今後、何ができるのかを思案する動機付けになっています。





上下・ケアリング文化実習
（愛楽園見学）

## 2．基礎看護実習Ⅰ

基礎看護実習Ⅰの目的は、患者の安全・安楽と自立を考えながら看護を行い、そのことを通して、人間を尊重し、援助関係を築きながら看護する意味について考えることです。１グループ５～７名の学生で15グループを編成し、県立北部病院、北部地区医師会病院、国立療養所沖縄愛楽園、もとぶ野毛病院の４施設で行いました。実習後の学習発表会では、入所者が過去にハンセン病ということで受けた差別を引きずったまま生きておられることを知り、それにも拘らず愛情深く接してくれる人間としての偉大さに感銘を受けたこと、また、障がいがあっても以前と変わらない生活をするための工夫をされていることを知ったという報告がなされ、学生たちは、人間の逞しさも学んでいるようです。基礎看護実習Ⅰは、学生が実際に患者と接することで“看護とは何か”について初めて真剣に考える機会となっています。その体験は、看護に対する学生の姿勢を前向きにし、意欲的に学習に取り組む姿勢へと学生を成長させています。



２年次は、基礎看護実習Ⅱと公衆衛生看護実習Ⅰがあります。

## 3．基礎看護実習Ⅱ

基礎看護実習Ⅱは、２年次後学期に、北部地域の５施設（県立北部病院・北部地区医師会病院・北部地区医師会附属心臓血管センター・もとぶ野毛病院・北山病院）において、１名の患者を受け持ち、日常生活の援助を行



ケアリング文化実習（戦跡めぐり）

う実習です。学生は、１グループ６～７人の14グループに分かれ、２週間の臨地実習を通して、看護の実際を学んでいきます。実習前は、期待よりも不安が強く、ストレスを訴える学生も少なくありません。しかし、既習の知識や技術を総動員して患者のケアを実践していく過程で、学生は、目の前で繰り広げられる現象を、患者の立場になって解釈していくことを学んでいきます。緊張しながらも、誠実に患者と向き合うことで返される「ありがとう」の一言に励まされ、看護を学んでいる自分自身と対話し、看護の専門性と責任感に目覚める貴重な体験となっています。

### ４．公衆衛生看護実習Ⅰ

公衆衛生看護実習Ⅰは、「健診機関及び事業所における、それぞれの理念と目的、役割と機能、制度とシステム及び健康増進活動と健康課題、展開方法について学ぶ」ことを実習の目標としています。総合健診センターまたは事業所にて１週間の実習を展開しています。

総合健診センターにおいては、健診機関の役割と機能、システム化、人間ドック・労災二次健診・住民健診の展開方法などを見聞しています。また、総合健診センターで働く専門職スタッフや保健師等看護職の役割・機能を学んでいます。

事業所においては、職場の環境管理・作業管理・保健師による健康相談・健康教育などを通して、職場の安全管理・健康管理体制などを学んでいます。総合健診センター・事業所保健師及び関係者皆様のご指導・ご助言のもと、ヘルスプロモーションにおける１次予防・２次予防的視点で、公衆衛生看護活動の基礎を学んでおり、学びの深い実習であります。



３年次は、成人看護実習Ⅱ（慢性期）、小児看護実習、母性看護実習、高齢者看護実習、在宅ケア実習、精神看護実習の６領域をローテーションで、後期の半年をかけて実習します。

### ５．成人看護実習Ⅱ（慢性期）






上下・成人看護実習Ⅱ。下は報告会

成人看護実習Ⅱは、慢性的な経過をたどる健康障害により、生涯にわたり生活のコントロールを必要とする成人期の患者・家族を対象に、セルフケア能力の維持・向上を目指した最適な看護を実践するための能力および態度を養うことを目的としています。生活習慣に起因する場合が多い慢性疾患患者への看護実践として、学生は患者・家族と共に生活を振り返り、共に目標を立て、行動変容理論などを用いてセルフマネジメント能力を高める援助を学んでいます。時に学生は、実習中に洗礼のごとく刺激的な体験をします。その体験は一見ネガティブに捉えられがちですが、視点や立場を変えて考えることで、患者・家族の秘めている本質に触れたり「看護とは？」を再考したりと一層学びを深める機会にもなります。臨床現場での体験は、座学では学べない貴重なものばかりで、実習を通し、学生は知識・技術を獲得します。

## 6．小児看護実習


小児看護実習

小児看護実習は保育園実習と病院実習で構成しています。保育園実習では、年齢の異なる子どもと関わることにより、子どもについて理解を深めるとともに、成長発達の過程を学びます。実習中にプレイタイムと称し、学生が子どもの年齢に応じた遊びや衛生教育を提供しています。

病院実習では「経験型実習」を取り入れています。子どもや保護者と関わり、看護を提供し、その経験を手掛かりに必要な援助や実習での経験を意味づけていきます。学生の経験の意味づけを行うためには、学生と共に看護の場を共有し、学生が何に気づいたのか、なぜ気づいたのか、その気づきをどうすればよいのか、その時々に声をかける必要があります。教員の時機を得た声かけにより学生は自らの経験を振り返り、意味づけを行っていきます。さらに、学びを深めるためにカードメソッドを活用し、学びの共有化も図っています。この取り組みは名桜大学看護学科の特徴的な学習（実習）方法です。

## 7．母性看護実習

母性看護実習は、妊娠・分娩・産褥・新生児期にある母子およびその家族に対して、適切な援助や生命誕生と親になる過程における看護職の役割を学ぶことを目的としています。

2013（平成25）年度は、83人（そのうち13人は男子学生）が、ハートライフ病院、南部徳洲会病院、中頭病院、琉球大学医学部附属病院で９日間の実習を終えました。実習内容は、主に産後のお母さんの経日的に変化する身体の回復状態の観察、母乳哺育の支援、新生児の観察、新生児の沐浴を実施しています。沐浴実施では、実習指導者より「上手に沐浴に入れてますよ」とのよい評価でした。学内での人形を用いての沐浴練習に比べ、実習では児の心地よさそうな「ホー」とした表情に癒され、学生の声かけ、手つきも優しく、丁寧になり、大切な命を実感する気持ちになるようです。


小児看護実習でカードメソッドを活用

特に、男子学生は児を沐浴する際、目がキラキラしています。母性看護実習では、生命誕生の場面、母子や家族との関わりなどの体験から、学生は母性（父性）を高めるよい機会となっています。

## 8．高齢者看護実習

高齢者看護実習は高齢者看護学概論や方法論で学んだ知識や技術を基に、加齢に伴う生活変化や健康問題を持つ高齢者に対して生活の維持・向上を目指した看護実践能力を養い、高齢者を取り巻く環境などについて学ぶことを目的に行われます。

療養型病床や介護老人保健施設で行う高齢者看護実習は学生が一人の患者を受け持ち、２週間の実習を行いますが、学生主体で行われるアクティビティケアは入院・入所している高齢者から特に好評です。日頃見られない高齢者の楽しそうな表情や言動を見られることは、学生のケアに対する喜びに繋がり、健康問題を持つ高齢者の生活の質の維持・向上を目指した高齢者看護の理解を深めています。また、認知症高齢者との関わりに学生は戸惑いが見られますが、日々の関わりの中でその人の思いを感じ取りながら認知症についての理解を深めています。

超高齢社会が進む中、高齢者看護実習は学生にとって意義深い実習であると感じています。



## 9．在宅ケア実習


在宅ケア実習

在宅ケア実習は、介護保険制度における通所や訪問の居宅サービス、地域密着型サービス、診療などを行う多様な施設で実施し、一人の学生が北部地域の施設で２日ずつ２施設をまわります。そして最終日にはそれぞれの施設を紹介するような情報交換会を持ち、施設間連携などの学びを共有します。

北部は山間僻地の広大な地域で、自然に恵まれているとはいえ、高齢化率や独居率の高さに追いついていけない医療・福祉・介護サービスの厳しい現状があります。本大学看護学科では１年次より「教養演習」、「ケアリング文化実習」などのフィールドワークを通して、地域の特性を捉えながら住民とふれあってきていますが、特にこの３年次の在宅ケア実習では、高齢者がこの地域の中でどう生活してきたのかを知り、どうケアしたら今後もその人らしく生きていくことができるのかを今までの学びも統合しながら考えられる貴重な実践の機会となっています。

## 10. 精神看護実習

精神看護実習は、金武町の国立病院機構琉球病院と本部町のもとぶ記念病院で入院中の患者さんを２週間受け持ち、教員および臨床指導者の指導の下で看護を行います。初めての精神科病棟での実習に学生たちは戸惑うことの連続ですが、気づきや悩みを日々のカンファレンスにおいて丁寧に検討していきます。患者さんとの相互作用を通して浮かび上がる現象の意





上と左・精神看護実習

味づけを行い、精神看護で大切なことを明確化し学生なりの答えを見つけていきます。精神の病はいまだに偏見を抱かれやすいものでありますが、多くの学生が精神科病院や精神障がい者の方々への理解を深め、寄り添う看護を展開するようになります。実習終了後には将来精神科看護に携わってみたいという希望をもつ者も多く、手応えのある学びを支えて下さっているスタッフの皆様のおかげと感謝しております。患者数では糖尿病を大きく上回り、がんの２倍以上である精神疾患は、2011（平成23）年から「５大疾病」（厚生労働省の指定した緊急性の高い疾病）の一つとなり、わが国が取り組む保健医療の重点課題となっています。自殺者数の増加、うつ病や認知症、発達障がいの増加など現代を生きる人々の精神の健康について、この実習を通して深く学び、将来看護者として一人ひとりの方々に寄り添えるケアを提供できるように、実習教育に携わっていきたいと考えています。



## ４年次は、成人看護実習Ⅰ（急性期）、公衆衛生看護実習Ⅱ・Ⅲ、総合実習を実習します。

### 11. 成人看護実習Ⅰ（急性期）




上下・成人看護実習Ⅰ

成人看護実習Ⅰは、県内４施設（県立北部病院、北部地区医師会病院、県立中部病院、中部徳洲会病院）で行われ、いずれの施設も沖縄本島中北部の医療圏の救急医療を担う中核病院であり、その中で行われる医療や看護体制は最先端といっても過言ではありません。本実習は、救命救急センター、集中治療室、手術室、人工透析室などの特殊な環境の中で救命救急の最前線を見学実習した後、外科系病棟で急性期患者を受け持ち、看護実践を学びます。

見学実習は、救命救急センターでの医療者の協働・連携したチーム医療や手術室での緊張感など、クリティカルな場で繰り広げられる医療現場の張り詰めた状況下で行われ、学生には新鮮で深い学びとなり、看護専門職

を目指す者の自覚の促進につながります。

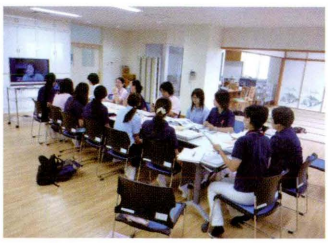
病棟実習は、周手術期や急性状況下にある患者のケアを通して、刻々と変化する患者の生命状態の理解に戸惑いながらも、患者のケアに真摯に向き合う学生の成長した姿を垣間見ることができ、たくましさと頼もしさを感じます。

## 12. 公衆衛生看護実習II









上４点・公衆衛生看護実習II・III

公衆衛生看護実習IIは、保健師教育課程の４年次学生を対象に、県内の福祉保健所において１週間の実習を行います。保健所における管轄地域の特性と公衆衛生活動の実際を学ぶことを目的として、①保健所の役割・組織・業務内容について理解すること、②保健所の各班における所掌業務について理解すること、③保健所管内における地域連携について理解することの三つを実習の目標としています。実習内容は、保健所の概要や管内の地域特性および保健対策などについてオリエンテーションを受け、保健所各班の所掌業務の学習・見学、体験などを実習します。

## 13. 公衆衛生看護実習III

公衆衛生看護実習IIIは、保健師教育課程の４年次学生を対象として、県内各市町村において３週間の実習を行います。公衆衛生看護実習Ⅰ及びⅡと関連させ、地域の人々の健康の特徴と、市町村または市町村保健センター、地域包括支援センターの役割と機能、公衆衛生看護活動及び保健師活動の実際について実習します。実習内容は、地域診断、健康教育、家庭訪問、健康相談、地区組織活動、地域ケア体制、社会資源の活用方法、地域支援事業等です。

2014（平成26）年度までは地域看護実習とし、「地域で生活するすべての住民の健康を保障するために、住民と協働した地域看護活動を学ぶこと、地域のケアシステムを活用した健康課題の解決方法を学ぶこと」を目標とし、看護学科４年次生を対象に、保健所または市町村において３週間の実習を行いました。

学生は、公衆衛生看護活動における個別支援、集団支援の方法を地域住民とともに考えること、住民の健康生活を支える視点を、保健師業務を通して学んでいます。健康教育と家庭訪問支援から、住民の健康に責任を持ち、誠意をもって対応をすることを学んでいます。そして、学生は、保健師活動のコアである「地域をみる、つなぐ、動かす」を実感できたと考えます。地域看護実習は、保健所・市町村保健師及び関係者皆様のご指導・ご助言のもとで、学び多き実習であります。

## 14. 総合実習

４年次の総合実習は、看護実習の集大成として、「１年から４年までに修得した看護の実践能力の評価をふまえ、自己の課題を明らかにし、保健、医療、福祉の包括的な視点から看護の総合的な実践能力を高めること」を



実習連絡調整会議

目的にした実習です。学生の関心領域（基礎看護、成人看護、高齢在宅看護、母性看護、小児看護、精神看護、地域看護、総合看護）で、自らが実習を企画し実施、評価します。

総合看護領域では、過去の経験の中から看護マネジメントへの関心を明確にして実習計画を立案します。看護における管理と同時に、専門職連携教育として他職種の業務も見学及び経験し、複雑化する医療サービスの現場で他職種と協働しながらチーム医療を支える看護マネジメントのあり方を考えながら学びます。初めて経験する看護部や他部門での実習は、病院全体の中での看護職の役割をあらためて考える機会になったようです。



## 臨地実習の流れ

看護学科では、臨地実習の実施にあたり　毎年４月に実習連絡調整会議を開いています。この会議は、各領域の実習施設で本学の実習を担当する方に大学に来ていただき、直近の卒業生の報告と今年度の実習がどのように計画され、実施するのかを説明するものです。また、実習施設からの提案事項などの検討も行っていきます。全体の会議が終了した後は、各領域に分かれて実習調整が行われます。また、この会議以外にも実習開始前や実習中に各実習場所での調整が行われます。

学内では、講義、演習、実習が一連の流れになっています。講義では看護における基礎的な専門知識を学習します。演習は学内実習として、講義で学んだ看護技術を実際に学生同士あるいはモデル人形を使って実施します。その後、臨地実習に臨みます。臨地実習では、受け持ち患者に安全安楽な看護の提供が求められます。そのため、実習前ガイダンスが重要になってきます。各学年の実習の前にはガイダンスが行われ、このガイダンスを受けなければ学生は実習に参加することはできません。ガイダンスでは、教育理念や教育目標の確認、実習目標、実習方法、実習上の留意事項、事故予防と事故発生時の対応について説明をします。その後、各領域実習のガイダンスが行われます。

臨地実習は、授業の一形態であり、１グループ６名の実習グループに１

名の教員が配置されます。教員は、１日の実習開始から終了まで、受け持ち患者の安全で、安楽な看護が提供できるよう、臨床指導者と連携を取りながら学生の指導にあたります。１日の実習開始時は、学生が受け持ち患者をどのように捉え、なぜその看護が必要だと考えたのか、どのように進めていくのかなどを確認し、指導の後学生と共にベッドサイドに立ち看護を提供します。そして、カンファレンスで１日の振り返りを通して、看護実践を評価し、翌日の実習につなげます。また、各領域実習終了時には、看護学科独自で、実習の授業評価を行っており、学生からの意見や思いを大切にしながら、学生にとって効果的な実習ができるように常に検討しています。

## 学生の成長ぶり

実習では、健康障害をもった患者と対面し、命の大切さや人権などの倫理観を身に付けていくことが求められます。

看護には思いやりはもちろん大切ですが、ただ「かわいそう」といった感情だけでは処理できないものです。たとえば、子どもが注射を嫌がっていてかわいそうだと思っても、やめるわけにはいきません。その人にとってなぜこれが必要なのかということを理解し、それを相手に説明することによってケアや処置が進められるということの認識が大切です。

３年次の実習では、教員や臨床指導者のアドバイスを多く必要としますが、４年次の総合実習では、学生自身が考えて行動できるようになります。たとえば、受け持ち患者の酸素飽和度が十分でない場合、まず、なぜ酸素飽和度が低下したのか、その原因をアセスメントします。酸素飽和度低下の原因が酸素マスクの外れと判断した場合は、教員や臨床指導者の指示がなくても処方された酸素流量か確認した上で、酸素マスクを適切に再装着し、酸素化を図るという対処ができるようになります。また、調べた結果を報告するのが精いっぱいだった学生が、自分で判断し、適切なケア、看護師に報告、という迅速な対応ができるようになります。



## 今後の展望

今までは医者まかせといった患者・家族が多かったのですが、本学の看護学科では、患者・家族が自分の病気を治していく姿勢をサポートしていくことに重点をおいています。「患者・家族中心の看護を真に実現するのが参画型看護教育」であるという本学科の理念に基づき、患者・家族が主体の医療の場を経験するためには、臨地実習先の指導者との連携が不可欠です。今後はそういった実習教育に関する体系づくりをより具体的にしていきたいと考えています。

# 6章

## インタビュー・寄稿






# インタビュー

| | | |
|---|---|---|
| 名護の大学構想 | 東江　康治 | 初代理事長・初代学長 |
| ヤンバルに資源はないが、人材をもって資源となす | 比嘉　鉄也 | 第２代理事長 |
| 留学生への奨学資金について | 島袋　茂照 | 勝山病院 理事長 |
| 地域に開かれた名桜大学 | 稲嶺　　進 | 名護市長 |
| 山紫水明だった「ヤンバルはひとつ」 | 仲泊　弘次 | 株式会社東開発 代表取締役会長 |
| 名桜大学と地域の架け橋として | 荻堂　盛秀 | 名桜大学後援会 会長 |
| 岸本建男「逆風帳帆」のあゆみ | 岸本　能子 | 元名護市長岸本建男夫人・名桜大学理事 |
| 名桜大学と共に20年 | 比嘉　幹郎 | ザ・テラスホテルズ株式会社 特別顧問 |
| 旧友・岸本建男氏からの依頼 | 比嘉　克己 | 昭和化学工業株式会社 代表取締役社長 |
| 公立大学法人化はキラリと光るプロジェクト | 川上　好久 | 沖縄県 副知事 |
| 天地人 | 屋嘉　義和 | 開学20周年・公立大学法人設立５周年事業実施本部 財務部会長 |
| 公立大学法人化・行政の取り組み | 比嘉　克宏 | 名護市産業部 参事 |
| | 金城　秀郎 | 名護市企画部企画調整課 課長 |
| | 仲井間　修 | 名護市総務部財産管理課 課長 |

※肩書はインタビュー時のものです。

# 名護の大学構想

初代理事長・初代学長 **東江　康治**

1970年代、日本の大学はどこも学園闘争が盛んで、本来あるべき最高学府としての態をなしえていませんでした。私は外間守善法政大学教授とお会いするたびに、暴力のない大学を造りたいと話していました。外間先生も同じように感じておられ、本島北部、それも今帰仁に私学を造りたいと話していました。1989（平成元）年、外間教授と私は大学設立に意欲的な比嘉鉄也名護市長に招待され、名護市内のホテルで会いました。挨拶もそこそこに比嘉市長は「山紫水明の地、名護の町に若者が居着かない。ぜひ、若者たちが住める名護の町にしたい。そのために大学を造りたいのでお力をお貸しください」と話されました。私たちは、既存の大学にうんざりしていましたから、その場で比嘉市長の要請を引き受けました。

1990（平成２）年、私はまだ50代半ばでしたが、６年間務めていた琉球大学学長の任期を終えると学部に戻らず退職し、同年６月に設立された放送大学沖縄地域学習センターの非常勤をしながら名桜大学の開学に向けて取り組みました。

文部省に提出する名桜大学設置基本構想を策定するとき、外間教授は建学の精神に法政大学と同じ「自由・進歩」を提案しました。それに対し委員の皆さんから反対の意見は出ませんでしたが、私は沖縄に造るのだから平和も入れましょうと提案しました。こうして名桜大学の建学の精神「平和・自由・進歩」が掲げられました。また、外間教授から今帰仁に分校として１学科でも置くことはできないか、との話がありましたが、設立準備委員会の委員の大半は、小さな大学に分校は難しいということで実現しませんでした。

大学を造るということは、一つにはいろんな分野の研究者が一つの地域に集まるということ。大学という地域ができると若者が集まり、若者たちは町を闊歩し、町は活気に満ち豊かになっていきます。また、北部地域に学問研究の拠点ができたということは、将来に向け大変意義深いことだと思います。

## 国際学部１学部３学科でスタート

観光は将来、沖縄のリーディング産業と考えていました。そこで名桜大学は観光産業学科を目玉にするため小谷達男先生を学長待遇で招聘しました。経営情報学科は、経済分野で沖縄の自立発展に貢献できる人材を育成していくこと。国際文化学科は、国際化時代に向けて、アジアの中心に位置する沖縄の特色を生かし、英米・東南アジア・中南米文化を考究する人材の育成と東南アジアや中南米の若者のために、日本文化の研究に取り組んでもらい、それぞれの国に帰ったら自国の大学で日本研究の指導者とし働くことを願って、日本・沖縄文化コースを造りました。



## 国際交流協定大学

名桜大学の設立年度に中南米のブラジル、アルゼンチン、ボリビア、ペルーの４大学とスムーズに交流協定が結べたのは、我々名桜大学の組織に加え中南米の沖縄県人会の協力があったからだと思っています。思い出としては36時間も飛行機に乗り、とてもハードな仕事でした。ペルーでは1980年代、二大テロ組織が頻繁にテロ活動を行っていたようですが、90年になると、ペルー政府が強力なテロ対策を展開した結果、テロ関連の犯罪は減少したと聞いていました。しかし、私たちが訪問した1994（平成６）年でも、単発なテロはあったと思います。その証拠に私たちが宿泊したホテルでは、地下駐車場に侵入するとき、必ず入口で爆弾探知機の検査を受けました。今思えば、命がけの国際交流協定調印の旅でした。

最後に私は、名桜大学でも２期６年学長を務め、理事長も兼務していましたが、資金面は、名護市が担当していました。私は、本学の教育理念である国際的教養人の育成を目指すため、教授ら優秀な人材の発掘と海外の大学との協定などに取り組んできました。学生、地域、大学が相互に信頼し、信頼される関係の中でやんばるの教育土壌づくりができたと感じています。



COLUMN

## 東江康治学長もうひとつの顔

事前調査のため私（住江）と安井祐一先生が中南米を訪問したときの話です。ブラジルのサンパウロからアルゼンチンのブエノスアイレスのエセイサ国際空港に向かうのですが、着くのが夜中の1時半頃でしたので、出迎えを県人会の方には連絡せずに、安井先生の教え子で琉球大学に県費留学していた学生に頼みました。私たちがエセイサ空港の到着ゲートを出たのが午前２時半頃です。しかし到着ロビーでは、沖縄県人連合会の会長と４人の副会長が出迎えてくれました。予想もしていなかったのでビックリしていると、お疲れでしょうと空港２階の喫茶店に案内され、そこで会長は驚くようなエピソードを話してくれました。「我々連合会の大恩人である東江康治先生の大学から来られた方に対しては、何があろうと、何時であろうと、私たちは喜んでおもてなしをしなければならないのです。なぜなら、東江先生はお話されていないと思いますが、80年代、私たちは、沖縄県人会館を建設するため現地で資金集めをしたのですが、思うように資金が集まらず、また、銀行からも借り入れができませんでした。沖縄県人連合会の中に、沖縄県立第三中学校で東江先生と同級生だった玉城昌一さんがいて、相談したそうです。すると玉城さんが、東江先生に沖縄での建設資金集めを打診し、東江先生が精力的に資金集めに奔走してくれたおかげで80年代後半には、沖縄からの寄付金で建設の目途がたちました。しかし、インフレにより貨幣価値が急速に下落したため再び資金不足となり、建設が危うくなりかけたとき、また手を差し伸べてくれたのが東江先生でした。1990（平成２）年、東江先生はご自身の退職金全額を建設資金に用立ててくださったのです。おかげで沖縄県人会館は見事に完成しました。それもすべて東江先生のご尽力があったおかげなのです」。そう語る会長の顔はとてもうれしそうでした。

国際文化教育研究学系
教授・住江　淳司

# ヤンバルに資源はないが、人材をもって資源となす

第２代理事長 **比嘉　鉄也**

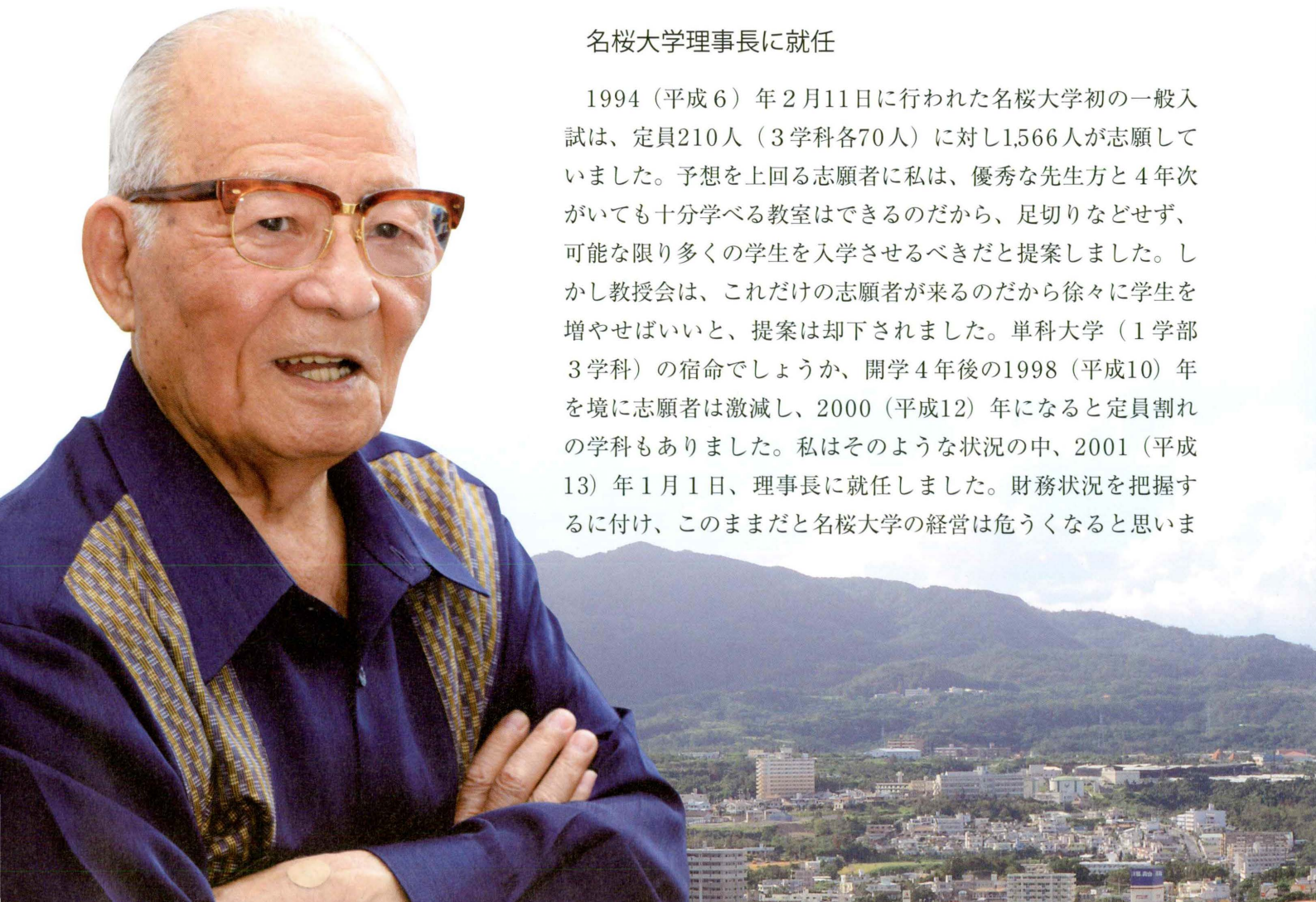
私が名護市長在任中の1991（平成３）年７月、大学設置構想を具体化するため名護総合学園設立準備委員会を発足させ、さあ、いよいよヤンバルに自力で大学を創設するのだと意気込んでいました。しかし、その年にバブルが崩壊し、言いようのない苦労に直面しました。大学の創設という大事業は、私一人で成しえるものではありません。東江康治初代学長や岸本建男（元名護市長）ら教職員が寝る間も惜しんで取り組んだおかげです。

あの頃は北部市町村の財政はどこも赤字で、私たちが首長を訪ね負担金のお願いをしても、当初は首を縦に振ってもらえませんでした。足しげく通い、北部12市町村によって設立することに意義があると話し続けました。北部11町村は苦しい財政の中から創設経費として３億30万円を捻出してくれました。沖縄県は10億3,000万円、名護市が52億9,905万７千円でした。大学用地は名護市の提供です。



## 名桜大学理事長に就任

1994（平成６）年２月11日に行われた名桜大学初の一般入試は、定員210人（３学科各70人）に対し1,566人が志願していました。予想を上回る志願者に私は、優秀な先生方と４年次がいても十分学べる教室はできるのだから、足切りなどせず、可能な限り多くの学生を入学させるべきだと提案しました。しかし教授会は、これだけの志願者が来るのだから徐々に学生を増やせばいいと、提案は却下されました。単科大学（１学部３学科）の宿命でしょうか、開学４年後の1998（平成10）年を境に志願者は激減し、2000（平成12）年になると定員割れの学科もありました。私はそのような状況の中、2001（平成13）年１月１日、理事長に就任しました。財務状況を把握するに付け、このままだと名桜大学の経営は危うくなると思いま



したが、創設時の苦難を考えれば、学内には東江学長や屋嘉義和君、金城正英君がいる。彼らがいるから打開できると信じていました。学内では以前から１学部３学科の単科大学を見直すために大学改革に向けた取り組みを行っていたようです。第一弾が、開学前から懸案としていた大学院の増設でした。私は大学院を増設しても定員が６人では、経営の打開策にはならないし、本学にはまだ早いのではないかと思っていましたが、学長や教授会の熱意に押され、2001（平成13）年４月に大学院国際文化研究科を増設しました。開設初年度は約30人が入学しました。

2005（平成17）年４月には、人間健康学部スポーツ健康学科の増設で名桜大学の志願者は増え、これで当分はいけるかなと思っていました。しかし翌年は減少に転じました。そのとき、看護学科を増設しようと考え、筑波大学から金城祥教先生を招聘し、優秀な教員を集めてもらい、2007（平成19）年４月に人間健康学部に看護学科を増設し、国際学部を国際学群に改組しました。その結果、入学者は増えましたが、国際学群の減少には歯止めがかかりませんでした。この頃から理事長室では毎週木曜日、瀬名波榮喜学長や屋嘉義和法人事務部長、金城正英総務部長等を集めて大学改革の定例会を持っていました。



## 公設民営大学から公立大学へ

もう名護市からの援助は望めないし、ましてや北部11町村にさらなる負担金も望めない。北部12市町村は、ハラハラしながらも冷やかな目で、我々の動向を静観していたと思います。2008（平成20）年10月の定例会で金城君が、「公設民営の高知工科大学が2009（平成21）年に公立大学法人化を目指している。公立になると国からの補助金と志願者も増えるので、経営基盤が安定します。もしかすると本学も移行できるかもしれません」と話したので、「アンシェージョウトウヤサ、泊まり込みでも構わないからノウハウを学んできなさい」と、同年10月20日月曜日、屋嘉君と金城君の両名を高知工科大学の視察に向かわせました。また良い感触だったら総務省まで行って情報収集をするようにと指示しました。



私と瀬名波学長は、名桜大学を創設するときにご指導いただいた文科省や他の省庁の方々に事前に電話を入れ、二人が総務省自治財政局の担当者と面会できるようにお願いしました。

二人は高知工科大学の関係者や総務省との話から、名桜大学にも公立大学法人移行への手ごたえは十分あると目を輝かしながら語ってくれました。

2009（平成21）年１月、事務組織の「公立大学法人化準備室」と瀬名波学長を委員長とした「学内公立大学法人化検討委員会」を設置させ、どんな手を使っても構わないから2010（平成22）年４月には公立大学に移行すると檄を飛ばしました。その日を境に瀬名波学長、屋嘉事務局長、金城企画部長は夜を徹し日々頑張ってくれました。また、他の教員や事務職員も一丸となって公立大学への移行に取り組んでくれました。

私も彼らとともに北部12市町村の首長や議会を訪ねて、頭を下げて協力をお願いし、また、新たな負担金が発生するのではないかという不安を払拭するため、幾度となく各市町村に出向きました。特に、当時の北部広域市町村圏事務組合理事長であった島袋吉和前名護市長の英断には、あらためて厚く感謝申し上げたいと思います。

2010（平成22）年３月、学校法人名護総合学園が運営していた名桜大学は、北部12市町村で構成する北部広域市町村圏事務組合が新たな設立団体となり、公設民営から公立大学へと移行しました。「平和・自由・進歩」の３本の柱を理念とする名桜大学は、公立大学に生まれ変わったことにより、国際社会で活躍できる人材を育成しつつ確実に前進していくと確信しています。

理事長在任中の９年間、2001（平成13）年８月の名桜大学協力会の設立に始まり、校地東側の遊歩道整備、北部生涯学習推進センター建築（北部振興事業）、北部森林組合の協力による校内への松の植樹、開学10周年記念事業、スクールバスの導入、学生センター建築、野球場整備、実験実習棟（スポーツ健康学科棟）建築、屋内温水プール棟建築、第３学生課外活動棟建築、北部国道事務所の資金を含めた全面協力による実験実習棟南側駐車場用地埋立、同じく北部生涯学習推進センター北側駐車場用地埋立、看護学科棟建築（北部振興事業）、名護市の協力による県道から大学正門までの緑地帯整備（沖縄米軍基地所在市町村活性化特別事業＝島懇事業）、そして公立大学法人化と、振り返りますと万感胸に迫るものがあります。

私は多くの仲間や部下に支えられ、うまく舵を執ることができたと感謝しています。



# 留学生への奨学資金について

勝山病院 理事長 **島袋　茂照**

私は４歳から小学２年生まで叔母に育てられました。叔母には息子が一人いました。1934（昭和９）年、私が小学２年生のとき、ブラジル・サントスへの移民があり、辺野古からも３世帯・11人がブラジルにわたったのですが、その中に、叔母の息子もいたのです。息子さんは叔母をブラジルに連れていきました。後で知った話ですが、ブラジルでは極貧生活を送ったようです。私は叔母に会いたいという思いを胸に秘めていました。

1998（平成10）年８月11日、岸本建男名護市長から、ブラジル・パラナ州ロンドリーナ市と姉妹都市提携を結ぶので、一緒にブラジルに行きませんかという話がありました。私は叔母の息子さん夫婦やお孫さんと会えるかもしれないと思い、二つ返事で承諾しました。

ロンドリーナでは盛大な歓迎を受け、いくつかの懇親パーティーにも参加しました。叔母のお孫さんと会うこともできましたが、方言はもちろんのこと日本語もわかりませんから、名桜大学に留学していた学生に通訳していただき助かりました。それから２回、私はブラジルを訪問しています。

2008（平成20）年、孫娘の方から手紙が届いたのですが、ポルトガル語で書かれているため読めません。そこで名護市役所に相談したら、住江淳司先生を紹介され、翻訳をお願いすると、快く引き受けてくださいました。

それからしばらくして、住江先生から、「南米の学生が名桜大学に来たがっていますが、金銭的に苦しいので、彼らを支援する組織をつくれませんか？」という提案がありました。私は二つ返事で「私の方で組織を立ち上げましょう」と話しました。早速、友人や取引業者に話すと、24社に賛同していただきました。2009(平成21)年から奨学金制度をスタートし、今年で６年目を迎えます。会員も24社から27社に増えました。資金の運用は名桜大学が行っていますが、毎月１社あたり５千円の奨学資金を出し合い、南米からの留学生２名に対し毎月一人あたり６万円の奨学金を無償で提供しています。沖縄の文化を学ぶ彼らの姿に、私たちも多くのことを学んでいます。今後も可能な限り応援したいと思っています。





# 地域に開かれた名桜大学

名護市長 **稲嶺　進**

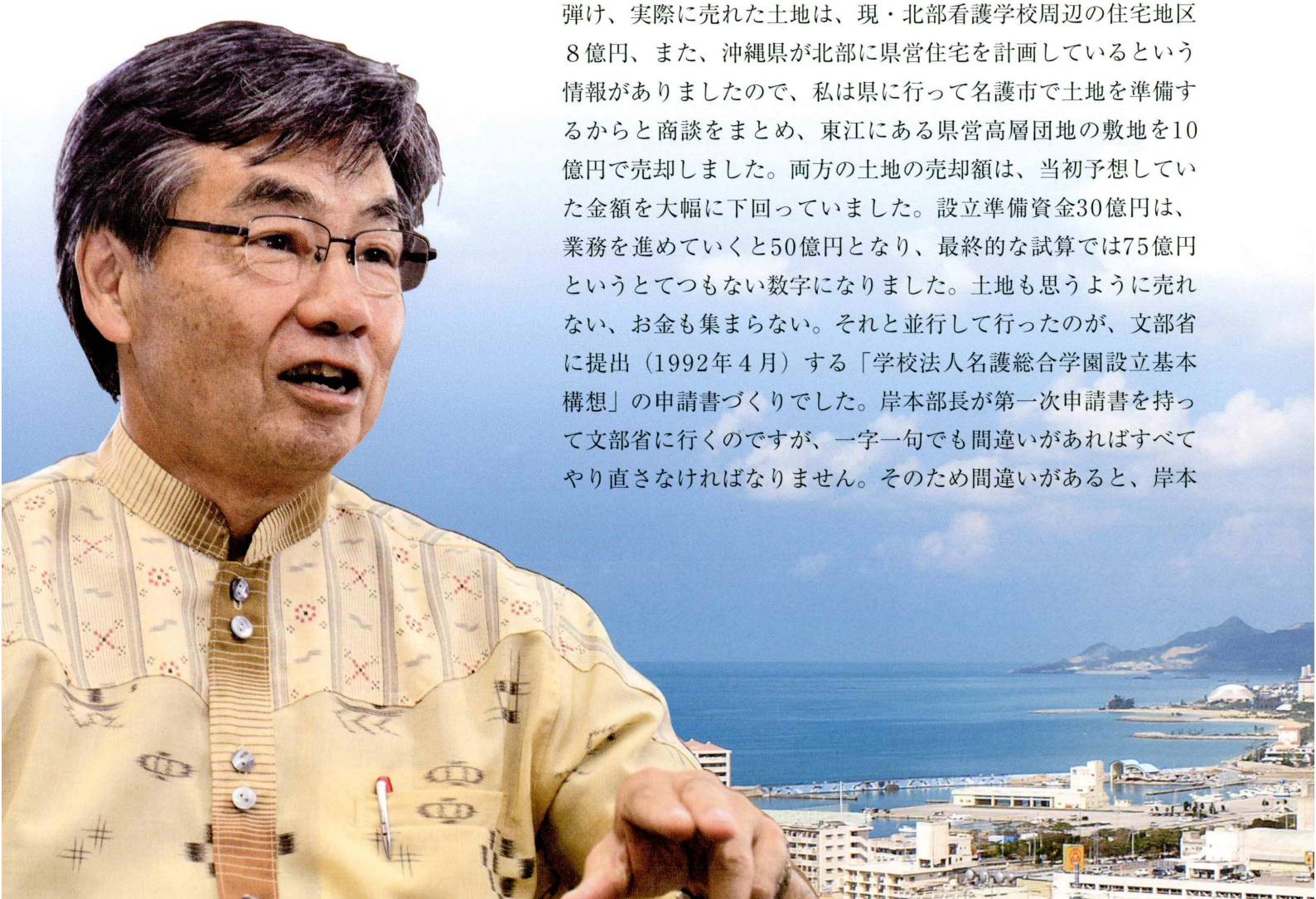
1990年代、私は名護市の企画調整課長で、岸本建男企画部長と共に大学設立準備室発足に向け取り組んでいました。名護市議会は1991（平成３）年３月、名護総合学園設立を決議し、同年４月、大学づくりに詳しい砂川栄右氏（元琉球大学事務官）を迎え入れ、大学設立設備室をスタートさせました。名護市は各課から人選したプロジェクトチームを砂川氏の下に派遣しています。私はそこに、初めの約６ヵ月間いました。その後再び、岸本部長と行動を共にしたのです。

砂川氏は主にカリキュラムの編成、教員の採用計画、文部省への大学設立申請書の仕上げなどに尽力され、創設経費と建設などにかかる業務は、岸本部長が担当しました。

## 大きく膨れあがった設立準備資金

当初、東江康治先生と外間守善先生は、名護に大学を造るのに30億円あればできるとお話されていましたので、ブームとなっていたゴルフ場建設計画に便乗して、名護市の山を売れば、資金は準備できると目論んでいました。しかし、バブルが弾け、実際に売れた土地は、現・北部看護学校周辺の住宅地区８億円、また、沖縄県が北部に県営住宅を計画しているという情報がありましたので、私は県に行って名護市で土地を準備するからと商談をまとめ、東江にある県営高層団地の敷地を10億円で売却しました。両方の土地の売却額は、当初予想していた金額を大幅に下回っていました。設立準備資金30億円は、業務を進めていくと50億円となり、最終的な試算では75億円というとてつもない数字になりました。土地も思うように売れない、お金も集まらない。それと並行して行ったのが、文部省に提出（1992年４月）する「学校法人名護総合学園設立基本構想」の申請書づくりでした。岸本部長が第一次申請書を持って文部省に行くのですが、一字一句でも間違いがあればすべてやり直さなければなりません。そのため間違いがあると、岸本





部長は東京から電話で修正箇所を準備室に連絡し、我々は岸本部長が飛行機で那覇に向かう間に間違いを直して、修正した書類を那覇空港で岸本部長に手渡していました。そして岸本部長はまた東京に向かうのです。そんなことを幾度となく繰り返しましたから、岸本部長が一番大変だったと思います。当時は、大学のあるまちづくりに取り組んでいる自治体が全国各地にありましたから、文部省にはたくさんの申請書類がありました。そんな中、厳しい審査を予想より短期間でクリアできたのも、設立準備委員会に、文部省の元事務次官で放送大学学園理事長の阿部充夫氏が加わっていたからです。また、自治省地域政策課の猿渡知之氏に親身になって指導していただいたお陰だと思っています。

こんなエピソードがあります。岸本部長が駆けずり回っているのを見た猿渡さんが、「岸本さん大変ですね」と話したら、岸本部長が「猿渡さん、あなたは猿渡、我々は綱渡りです」と話したそうです。また、当時県の企画開発部長だった仲里全輝氏には、大学設立に関して様々なアドバイスを授けていただきました。

## 大学のある第２の中核都市を目指して

その頃、沖縄県から第２の中核都市を目指す「地方拠点都市地域」指定の話が名護市にありました。これは、国と調整の上で県が指定するのですが、計画が認められれば29億円の起債が認められるというものでした。我々は1992（平成４）年10月に北部12市町村で北部広域市町村圏事務組合を結成し、翌年の２月、北部地区地方拠点都市地域指定推進協議会を発足させ、名護市を大学のある第２の中核都市とする内容の計画書を提出し、指定を受けることができました。



名桜大学の創設経費75億円のうち、ここで得られた資金は名護市の負担金の一部として組み入れ、名護市が50億円、11町村が５億円、沖縄県が20億円を負担すると考えていました。しかし、11町村の首長から、北部というなら名護市も入れて、12市町村は人口比で負担を決めるべきだという意見が出て、結果、北部11町村は３億円、沖縄県は10.3億円、そして名護市は53億円を負担することになり、開学時の創設経費は66.3億円となりました。残りの8.7億円は、段階的に調整するということになりました。これでようやく、設立に必要な最小限の資金の確保ができたわけです。

また、名桜大学に対する出資の承認を12市町村の議会からもらうため、いくつかの町村議会を訪れた際、担当職員が説明に戸惑ったときには休憩を挟んでもらい、オブザーバーとして参加していた私が質問内容に関する資料について職員に説明を行うこともありました。11町村の議会では、厳しい質疑が続出し、薄氷を踏む思いの展開もあり、大変苦労しました。

我々は多くの方から指導や助言を授けてもらいながら、準備室に寝泊りし、突貫で大



学設立のための業務を行いました。もうついていけません、という職員もいました。それだけ精神的にも肉体的にも過酷な業務でした。1993（平成５）年９月、文部省の現地調査が無事終わったときは、飛び上がるほどうれしかったことを今でも覚えています。

## 学生専用アパートの建設

その頃、大学用地の造成が始まりますが、同時に進められたのが、学生専用のアパート建設の取り組みです。あの頃の私は、名護市の職員でありながら、不動産会社の営業マンのようでした。空き地を見つけると、すぐに地主に会い、「学生専用アパートを建てて学生が住むようになったら、地域も活性化します」と自信をもって説明するのですが、「こんな田舎に大学を造っても学生が来るのか」「アパートを建てて学生が入らなかったらどうするのか」というようなことを言われることが多かったです。

名桜大学の開学に向けて着々と準備が進んでいるのに、学生が生活するアパートがなかなかできない。そんなとき、協力してくれたのが、東開発の仲泊弘次社長です。200人の学生が暮らせるアパートを造るためのアクションを起こしてくれました。そして、現在の北部観光バス近くの高台に、学生専用の高層アパートを建設したのです。これで、大学設置要件の一つである学生用宿舎基準をクリアすることができました。

一方、大学についても、限られた予算と工期の中で、用地造成から校舎建設までやっていただきましたから、建設に携わった方々も大変だったと思います。

文部省から大学設置の認可が下りたとき、ほかの地域から「名桜大学はどんな魔法を使ったのか」という声も聞こえました。沖縄ということもあったかもしれませんし、また素人集団だったからこそ、多くの方々の協力と助言を得ることができ、勝ち取った大事業でした。

名桜大学は2010（平成22）年４月に公設民営の私立大学から、公立大学に生まれ変わりました。私は同年２月に名護市長に就任しましたが、公立大学法人化にあたっては、北部広域市町村圏事務組合の理事長として、これに対応しただけです。公立大学法人化の立役者は、当時名桜大学の理事長だった比嘉鉄也氏、前学長の瀬名波榮喜氏、そして北部広域市町村圏事務組合職員や名桜大学事務局の皆さんだと思っています。

## むすびに

公立大学になると、国からの運営交付金を受けられます。また、学生が支払う授業料は私立大学の約半分になり、大学のステイタスも上がり、認知度も高まっていくでしょう。これからは、県外からの学生がもっと増えると思います。名桜大学には、地域の活性化のため、座学だけでなく実学もこれまで以上に取り入れ、学生がどんどん地域に溶け込んで、地域から評価される開かれた大学になってほしいと願っています。



# 山紫水明だった「ヤンバルはひとつ」

株式会社東開発 代表取締役会長 仲泊　弘次

1990年代初頭、大学創設計画の推進にあたっては、大学の学部学科の中身や教員の選定などは外間守善法政大学教授と東江康治琉球大学学長等が関わり、資金づくりと用地選定は名護市がやる、と比嘉鉄也名護市長は話していました。

この名護市の取り組みを統括したのが、岸本建男名護市企画部長でした。比嘉市長は資金は心配ないと言っていましたが、バブルが弾けた影響で、資金調達のために売れた土地は結局２ヵ所だけで、校舎１棟を建てる費用にも足りない状況でした。私は、こんな状況で、校舎建設資金を準備することができるのだろうか、と心配していました。

1993（平成５）年６月、その頃には敷地造成工事も行われ、あとは校舎建設工事と文部省の現地調査を残すのみとなっていました。そうした中、当時、沖縄県建設業協会北部支部長を務めていた私のところに、岸本企画部長と末松文信企画振興課長が相談があると訪ねてきました。

## 入札の危機

岸本部長は、「仲泊支部長、校舎建設の入札を始めなければなりませんが、お金は一銭もありません。しかし、30億円の工事を発注しないと、開学に間に合いません。ここでストップすると、大学を造ることは永遠にできないと思います。また、今まで文部省の審査をクリアしてきても、最後の現地調査で大学の設置要件を満たすことができなければ、申請は却下されます。工事代金は必ず返済しますから、入札できるように力を貸していただけませんか」と話しました。私は、「30億円あれば、工事に着工できるのか？」と聞きました。二人は「できます」と返答しました。私もヤンバルの活性化のため、この動きを止めることはできないと考えていましたので、「入札は予定通り行ってください。入札に参加する予定の業者は私が説得します。工事代金の支払いについては、工事が終わってから話し合



いましょう」と二人を帰しました。

その時点では、校舎が完成しても集金できるという保証はありませんでしたが、早速北部地域の主な建設業者10社にお集まりいただき、審議しました。そこで私は、「名護市は、名桜大学の校舎建設の予算をまだ準備できていませんが、入札を行う予定です。また、工事代金の支払いは、完成後になるかもしれません。こうしたことを了解した上で、校舎建設に着工してほしい、と名護市から頼まれました。今、我々が、市のお願いに背を向けてしまうと、市が大学設立のために積み上げてきた実績がすべて崩壊してしまいます。普通では考えられない厳しい条件での依頼ですが、ヤンバルのため、大学を建設しましょう」と話しました。

これに対して、「理解はできる。しかしやりたくても、我々にはその体力がない」という理由で、10社のうち５社が辞退しました。しかし残る５社からは、校舎完成までは工事代金を請求しない、という了承を得ることができました。これで、30億円の発注物件（校舎５棟とその他）の目処がつきました。私は、この５社で取り組めば工期内には完成できると確信していましたが、もし集金できなければ５社とも倒産しかねないと思うと、喜んでばかりもいられませんでした。

## 30億円調達の攻防と学生用アパート建設

その２日後、琉球銀行の中山吉一頭取が名護を訪れると聞いて、㈱屋部土建の前田裕継氏（現・会長）と新垣産業㈱の新垣誠福氏（現・会長）を誘って、中山頭取を接待しました。

席に着くなり私は、「名桜大学の校舎建設のための工事資金、30億円を、名護市か沖縄県建設業協会北部支部に無担保で融資してほしい」と頼みました。あまりにも無謀で唐突な話に、中山頭取は、「仲泊、一体何を言っているのか。無担保で保証もなく……」と言葉を失っていました。私はさらに「造った建物と土地が担保になります。そして琉銀と取引している我々が工事をするのだから、頼む」とお願いしました。すると中山頭取は、「名護市のメーンバンクが琉銀なら考えられますが、名護市は２年ごとにメーンバンクを替えています。今年のメーンバンクに頼むのが筋でしょう」と言いますので、私は「建設を請け負う５社のうち、４社のメーンバンクは琉銀です。だから、お願いしているのです」と互いにテーブルを叩きながら議論しました。途中、前田さんと新垣さんには席を外してもらい、中山頭取と二人で１時間ほど話し合いました。すると、中山頭取が、「１週間考えさせてくれ」と言ったのです。

工事の入札は２週間後でしたから、まだ交渉の機会があると思い、その日はそこで話を打ち切りました。それから、前田さんと新垣さんを呼び、





その後は和気あいあいと酒を酌み交わし、中山頭取も気分よくホテルに帰っていきました。

翌日の午前８時半頃、琉銀名護支店の儀武支店長が「会長、会長、とう…とう…」と興奮しながら訪ねてきました。「とう…？」と問いかけると、「頭取から、昨日の話はOKです」と連絡があったというのです。私はすぐに岸本部長に電話を入れ、「琉銀が30億円融資するから、建設業者が心配しないように、入札の段取りをつけてください」と話しました。しばらくして岸本部長がやってきて、「先程の話は本当ですか？」と今にも泣きそうな顔で、私の手を握り、喜んでいました。

しかし、残された問題がもう一つありました。学生が住むアパートの建設が、思うように進んでいなかったのです。名護市商工会会長の荻堂盛秀さんや私は、土地を持っている方々には事あるごとに、「学生用のアパートを造ると、今以上に生活がよくなるよ」と呼びかけていましたが、返ってくる言葉はいつも「大学ができなければどうなる。学生が来なければどうなる」という否定的なものばかりでした。私も岸本部長や稲嶺進企画調整課長から、学生用アパートの建設をお願いされ、８階建ての学生専用アパート「アフロハイツ」を造り、文部省から視察に訪れた担当者を案内したこともありました。その後、ようやく、名護市のあちこちに学生向けのアパートが建ち始めました。

比嘉鉄也市長の「自分たちの力で大学を造ろう」という呼びかけに賛同し、これまで私なりに、自分の得意とする分野で名桜大学に関わってきました。山紫水明の地と謳われたヤンバルを、若者が闊歩すると、地域は元気になります。精神的・経済的な効果は計り知れないほどで、街には活気が出てくると思います。私が動くと、仲泊は行政と癒着しているのではないか？等々いろいろと揶揄もされましたが、同じ目的意識を持った仲間たちと大きな仕事をやり遂げることができたことは、私の財産であり、誇りでもあります。

1994（平成６）年の第１回の入学式に参列して、比嘉市長が口癖のように言っていた「ヤンバルはひとつ」を肌で感じ、小さな田舎でも力を結束すればこんな大事業ができるのだ、と感動しました。

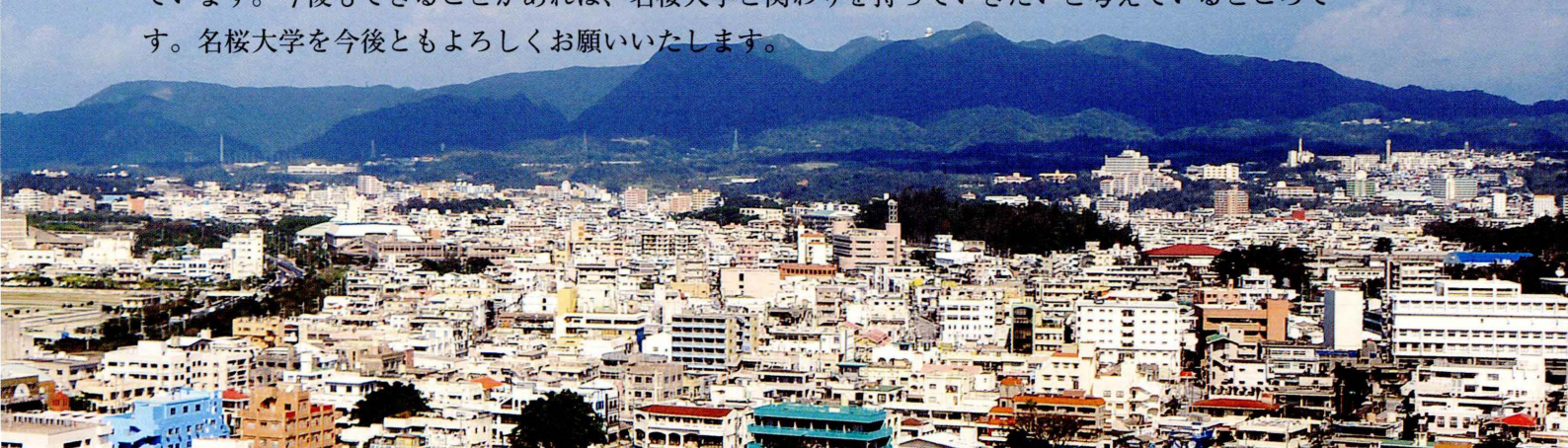


## 結びに

しかし、開学後、名桜大学を取り巻く状況は次第に厳しくなり、大学存続に危機感を抱いた先生方や事務方は、北部の高校で説明会を開き、学生を集めるのに一生懸命でした。しかし、志願者は増えても、合格する学生が増えないと、定員は満たされません。

比嘉鉄也理事長は、「ナカティグァー（成績が中間の子）を入れても、４年かけて教えていけば、それなりに伸びていくから、入れるべきだ」と話していました。当時理事を務めていた私もそう思いました。しかし大学の質を盾に、こうした考えは学校側にはなかなか受け入れてもらえませんでした。当然のことですが、経営側からすると、大学存続のため、参考意見として言わざるを得ないのです。

2010（平成22）年、名桜大学は私立大学から公立大学に移行し、授業料が安くなり、親たちにとってもうれしい出来事でした。また、公立になったことで、県内だけでなく県外にも名桜大学の存在が知られるようになり、県外からも多くの若者がやってくるようになったのは、大変喜ばしいことだと思います。多くの若者たちが地域に溶け込み、地域の活性化に貢献していってほしいと願っています。今後もできることがあれば、名桜大学と関わりを持っていきたいと考えているところです。名桜大学を今後ともよろしくお願いいたします。



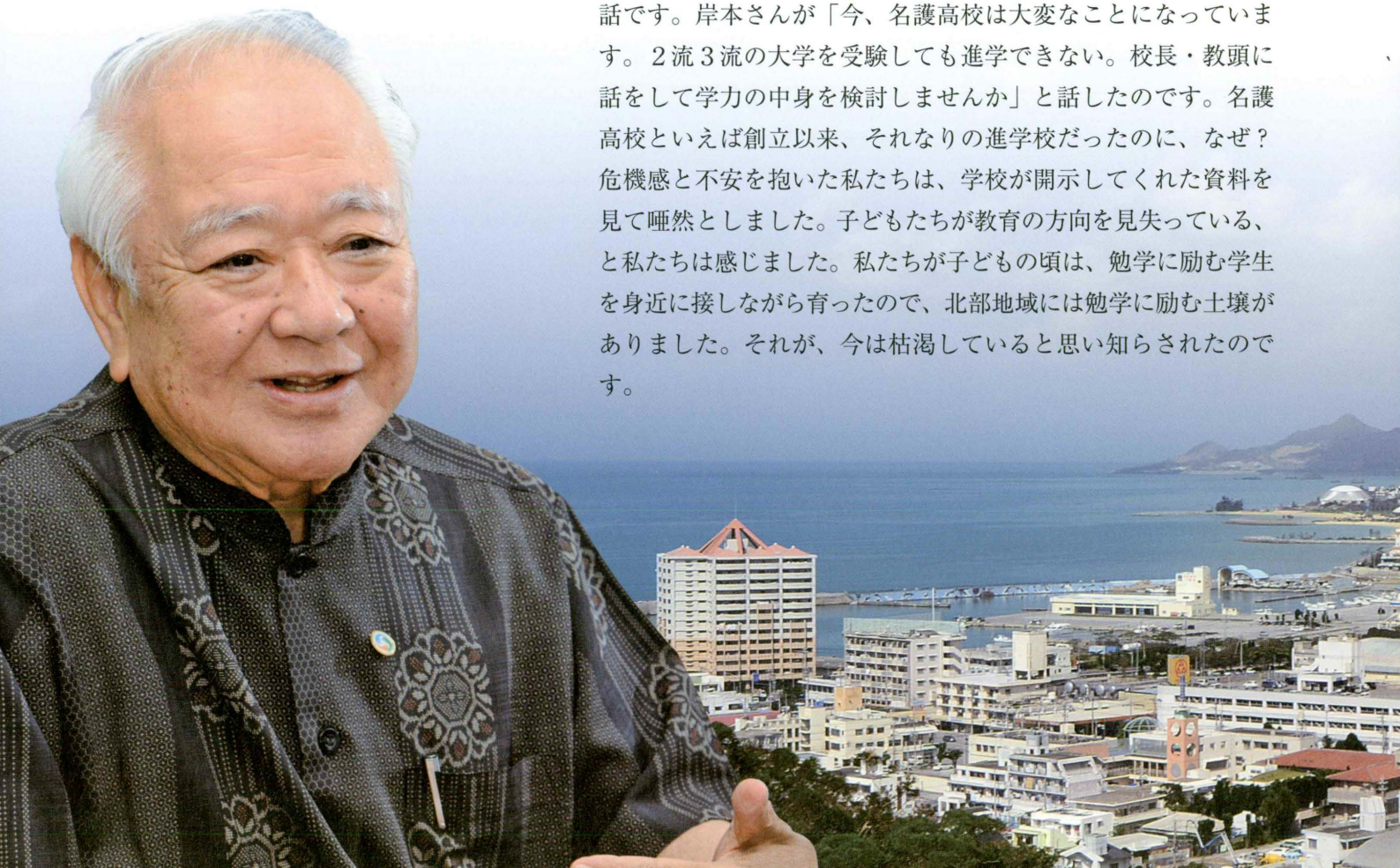
# 名桜大学と地域の架け橋として

名桜大学後援会 会長 荻堂　盛秀

1945（昭和20）年４月、米軍の大空襲によって北部の緑豊かな山野や東江国民学校、県立第三中学校、県立第三高等女学校などの教育機関も破壊されましたが、1946（昭和21）年１月、第三中学校と第三女学校があった敷地に田井等（たいら）高等学校（現・名護高等学校）が開校しました。また同月、名護城址の麓に北部農林高等学校が開校しました。３年後の1949（昭和24）年、北部農林高校は現在地に移転し、同校の旧敷地は現在、東江中学校になっています。

1953（昭和28）年、宮城盛吉氏が私立の名護英語学校を開校しました。同校には全島から来た学生たちが名護近隣に下宿しながら通学し、北部は伊豆味から通っていた学生もいました。学生たちはバンカラで、手には辞書を持ち、カランカランと下駄を鳴らしながら闊歩する姿は子どもたちの羨望の的でした。同校では元県知事の大田昌秀氏や名桜大学初代学長東江康治氏が教鞭をとっていたようです。優秀な教師のもとに優秀な人材が集まっていたのでしょう。同校からは、米国留学者や沖縄の行政・経済界・教育界をリードした人材が多数巣立っています。

岸本建男さんと私が名護高校のPTA活動をしていたときの話です。岸本さんが「今、名護高校は大変なことになっています。２流３流の大学を受験しても進学できない。校長・教頭に話をして学力の中身を検討しませんか」と話したのです。名護高校といえば創立以来、それなりの進学校だったのに、なぜ？危機感と不安を抱いた私たちは、学校が開示してくれた資料を見て唖然としました。子どもたちが教育の方向を見失っている、と私たちは感じました。私たちが子どもの頃は、勉学に励む学生を身近に接しながら育ったので、北部地域には勉学に励む土壌がありました。それが、今は枯渇していると思い知らされたのです。



## 名護に大学を

比嘉鉄也名護市長が、北部の子どもたちに夢と希望が持てる教育機関を名護市に創ろうと取り組んだとき、私も名護総合学園設立審議会の一員として参画しました。当初の総合学園構想は、幼稚園・小学校・中学校・高校・大学まで一環教育ができる学園を模索していました。

1991（平成３）年、名護市議会が名護総合学園の大学設立に関する決議を行い、設立準備室が発足しました。私は名桜大学の設置運営に直接は関わっていませんでしたが、名護市商工会会長をしていましたので、経済界の立場から「名護に大学ができると若者が増え、町も活気づく。商工会のメンバーは目の前の損得ではなく、長い目で見て北部地域の活性効果を鑑み、行政と連携し大学設置に向けサポートを行おう」と考えていました。

名桜大学は1994（平成６）年４月に開学していますが、沖縄初の道の駅「道の駅　許田」が名護市許田にオープンしたのも、同年１月です。「道の駅　許田」やんばる物産センターは、名桜大学の開学10周年に、微力ではありますが、寄付もさせていただきました。また、後援会では、大学入口の門柱を寄贈しました。私は名桜大学とは後援会長として、また経営審議会委員の一人として、経営にも参画しています。

2010（平成22）年に名桜大学が公設民営大学から公立大学へ移行しました。その貴重な歴史を体感し歓喜したのを思い出します。また、決断をした比嘉鉄也理事長と瀬名波榮喜学長の偉大さをあらためて認識しました。話は前後しましたが、名桜大学の初代後援会長は、岸本建男さんでしたが、彼は名護市長に当選しました。それで岸本さんに、「君の息子も名桜大学の学生だから、君が後援会長を引き継いでくれ」とバトンを渡され、今日まで名桜大学と関わっております。

名桜大学の卒業生に一人でも多く、後援会に加入していただきたい。また、名桜大学の卒業生として誇りを持ち、それぞれの専門分野で活躍してほしいと思っています。



後援会より寄贈された門柱




北部農林高等学校発祥の地の石碑





# 岸本建男「逆風張帆（ぎゃくふうちょうはん）」のあゆみ

元名護市長岸本建男夫人・名桜大学理事 **岸本　能子**

沖縄が本土復帰した1972（昭和47）年は、本土との間にできた経済格差を縮めるため、開発という価値が何よりも優先され、県内各地でさまざまな開発工事が進められていました。そんな時代を憂えた夫は、1973（昭和48）年に名護市役所に入り、逆・格差論を提唱した「名護市総合計画・基本構想」の立案に携わりました。その中で、市民の憩いの場である21世紀の森公園の整備や名護市営球場の建設にかかわっています。

夫は、元名護町長（1950年）で郷土史家・比嘉宇太郎さんの著書『名護六百年史』の中の「名護にぜひ大学を創りたい。大学を創れば大学の風が吹く」という言葉に共鳴し、その後、「学園都市構想」として、自然と共存する、大学のある街づくりを描いていました。その頃から、豊かな自然の中に、大学と街が共存するまちづくりを考えていたようです。

バブルが崩壊した1991（平成３）年に、「学校法人名護総合学園設立準備委員会」が発足、続いて事務局も設置されました。当時、市の企画部長だった夫は、大学の用地選定と資金づくりに奔走していたようで、いつも帰りが遅かったです。夜中に歯ぎしりが始まったのもこの頃です。ある日、あまりにも歯ぎしりがひどかったので、「どうしたの」と聞くと、資金が30億円足りないというのです。あまりにも大きな金額に、大学を造るというのは大変なことだと思いました。

1992（平成４）年４月、文部省との折衝のため、夫は東京に日帰りで出張し、翌朝また東京へ出かけていくというような日々が続きました。東京にいる夫から、「着替えを役所に届けてくれ」と電話が入るのです。一度なら理解できますが、こうしたことが続いたので、私は心配のあまり役所の職員に、「なぜ主人が東京と役所を行ったり来たりしないといけないの。主人を殺す気か」と怒ったこともありました。夫は担当職員から書類と着替えをもらうと、その足でまた東京に向かっていたようです。大学設立に必要な膨大な書類の準備に、精魂込めて取



り組む夫や担当職員の姿には、感動すら覚え、短期間でこれを成し遂げた皆さんを誇りに思っています。

夫は1998（平成10）年に名護市長に就任しました。その頃、全国の市を対象にした「住みよさランキング」で、名護市が１位になったことがあります。夫は、これまで名護市のまちづくりのために取り組んできたことが評価されたと、大変喜んでいました。一緒に取り組んできた市の職員たちと自分へのご褒美だと思っていたのかもしれません。

同年８月、名護市は、県系移民が多数活躍しているブラジルのロンドリーナ市と姉妹都市提携を結び名桜大学と学術交流協定を締結したロンドリーナ州立総合大学も訪問しました。夫は20代の世界旅行の際にブラジルで、親戚でもある移民たちと交流していましたが、（その社会で）日本語が通じない３、４世移民たちと世代間ギャップが問題となっているのを憂えていました。その体験から留学生のために温めていた「国際交流会館」建設を1999（平成11）年３月にスタートしました。それからひと月後の４月、私たちは2000年九州・沖縄サミットの名護市での開催を、名桜大学グラウンドで催された緑の日の植樹祭会場で聞きました。それはまさに青天の霹靂（へきれき）で、名護市が世界の中心になったような大騒ぎになりました。夫は名護を「小さな世界都市」にしたいと考えていましたし、この小さなまちから「世界に羽ばたく人材」を輩出する夢を持っていましたから、名桜大学には大きな期待を寄せていたと思います。しかし、小さくても真珠の粒のように光り輝くまちにしたいという夢は辺野古基地問題でついえてしまいました。

名桜大学は「小さくとも大きな夢を持つことができるヤンバルの宝」なのです。大学の創設には夫のような多くの人の想いが込もっている、ということを忘れないでいただきたいと思います。

私は名桜大学の理事を務めていますが、北部地域の子どもたちの可能性を少しでも大きくするため、特別に設けられている北部地域の推薦枠は減らさないでほしいと思っています。名桜大学と地域との連携については、名桜大学の学生がボランティアで行っている学習支援の取り組みに期待しています。これは、名桜大学が地域と提携して進めている取り組みで、学生たちは、不登校の子どもたちや、もっと勉強したいという意欲のある子どもたちのために、放課後、大学や地域で学習支援を行っています。私自身も、理事として、亡夫に代わり今後も名桜大学とかかわりが持てることをうれしく思っています。



岸本　建男




逆風張帆（ぎゃくふうちょうはん）

向かい風に帆を広げ、立ち向かい、すなわち危機にあっても、ひるまず挑戦せよという意味。（岸本氏直筆）

# 名桜大学と共に20年

ザ・テラスホテルズ株式会社 特別顧問 **比嘉　幹郎**

私は1991（平成３）年７月、名護総合学園設立準備委員会発足当初から大学創設に係わってきました。それは同郷の先輩で、米国留学の同期生でもあり、琉球大学で共に教えた東江康治さんからのお誘いを引き受けたからです。名護出身の私にとって、とても光栄であり、誇りに思う出来事でした。

当時私は、沖縄県が名護市に設立したブセナリゾート株式会社の社長でしたが、本来教育畑の人間である私も、地元の大学とタイアップして県の観光産業を発展させようと考えていました。当時の文部省は、特色がなければ新しい大学は認可しないだろうと言われていましたので、全国的にもごく少ない観光分野の教育研究を軸にして計画を進めるべきだと考えていました。

## 北部地域に大学の風が吹く

1992（平成４）年４月に、設立準備委員会は、名桜大学設置の趣旨、１学部３学科（国際学部・国際文化学科・経営情報学科・観光産業学科）の基本構想が盛り込まれた申請書を文部省に提出しますが、提出と同時に受理されたと聞いて、大喜びしました。というのは、私の定義では、国際的に通用する人材あるいはグローバル人材は、語学とくに英語に堪能で、進化するIT機器の操作技術を身につけ、異文化の人々と寛容な精神で接することができる人です。そのような人材を育成できるだろうと期待したからです。大学の新設には、まずその地域にニーズ（必要性）があるかということです。沖縄本島北部地域「山原（やんばる）」には高等教育機関がなく、大学への進学率も比較的低いという現実に、教育に熱心な北部地域の住民は、常々どうにかしなければならないと憂慮していたと思います。

私自身1979（昭和54）年２月に県副知事に就任する以前は、琉球大学で15年間、教鞭をとっていました。その頃から山原の高校から入学してくる学生が非常に少ないので、「山原」にも大学が必要だと痛感していました。しかし、大学の新設には資金や教員の確保など多くの課題があります。比嘉鉄也名護市長は、大学設立のために積極的に名護市の土地や資金を提供できるように動いたのです。実務を担当していた岸本建男企画部長も熱心でした。私は、彼を激励するために、『名



護六百年史』の著者で私の“伯父さん”比嘉宇太郎氏が「名護に大学ができれば、そこから吹く風で、名護は文化のまちになる」と話していたことも伝えました。

戦後間もないころ名護には英語学校があり、そこで教えていた大田昌秀さんが、沖縄県知事であったこともよかったと思います。大田知事の裁量で県は異例の補助金を支出してくれました。また、北部11町村も積極的に協力しました。那覇市近郊在住の旧名護町出身者も米国留学経験者も協力的で、私の主宰するうらわ会や琉球財団も物心両面から支援したことで感謝状をいただきました。

教員や事務職員は琉球大学OBを中心に集められましたが、観光産業学科の教員確保に苦労したと思います。そのため観光産業学科はその分野の実務経験者も活用していました。私は非常勤講師として政治学を担当しました。

準備委員会で大学名について議論したとき、私は将来、国際的な大学にふさわしい「Western Pacific University」（西太平洋大学）がいいのではないかと提案しましたが、高校生になじみやすい「名桜大学」が選ばれました。しかし、名桜大学の建学の精神「平和・自由・進歩」について討論した記憶はありません。西洋政治思想史が好きな私としては、平和と自由には異論はありませんが、「進歩」は前二者と同列に並べられる理念ではないと思います。教育機会の均等化という意味で「平等」がよかったのではないかと今でも考えています。ともあれ、大学認可申請にあたっては、東京サイドで郷土史研究家の外間守善法政大学教授や文部省元事務次官の阿部充夫氏ら設立準備委員の指導助言もあって認可されたと思います。

## 海外留学の重要性

私は、名桜大学の理事や評議員、経営審議会委員、非常勤講師などを務め、学期中は少なくとも週１回那覇から自分で車を運転して名護に通っていました。その間、大学がハード、ソフト両面にわたり徐々に充実してきたことを実感しています。とくに公立大学法人化で、授業料が軽減され本土からの入学者も多くなり、学生の質も向学心も高まった気がします。ここでまた先に述べたように地元からの入学者をどのように増やし、育てるかという課題が頭をよぎります。

海外交流協定校も飛躍的に増え、国際化・グローバル化すると同時に人間健康学部のスポーツ健康学科、看護学科、大学院看護学研究科などの新設で名護市を中心とする北部12市町村に貢献し、時代と共に変貌しつつあるというのが実感です。

大学の運営会議で感じたことは、制限された時間に議題や資料があまりにも多く、充分審議がなされたとは言えないということです。もっと問題点を絞って審議した方が、より効果的ではないでしょうか。一方授業面では、クラスの適切な人数を30名ないし40名とし、もっと学生との対話を充実させ、また、講義はできるだけ英語で行われるよう期待したいものです。

今、ヒト、モノ、カネ、情報、技術などの交流が国境を超えて増幅し、国家や政府以外の多国籍企業やNGO、NPOが国際舞台のアクターになっています。グローバル時代にはその時代にふさわしい人材に育ってほしいというのが私の願いです。そのためには海外に出て生活体験を積み、自身を磨き、沖縄や日本のために大いに貢献してもらいたいと思います。近い将来、名桜大学も理系の学部と医学部を設置し、大学院も充実させなければならないでしょう。そうすることによって、21世紀には北部地域の後発性を克服し、ひいては過去の暗い沖縄のイメージを払拭し、太平洋で自立し輝く沖縄に寄与することになると思うのです。





# 旧友・岸本建男氏からの依頼

昭和化学工業株式会社 代表取締役社長 **比嘉　克己**

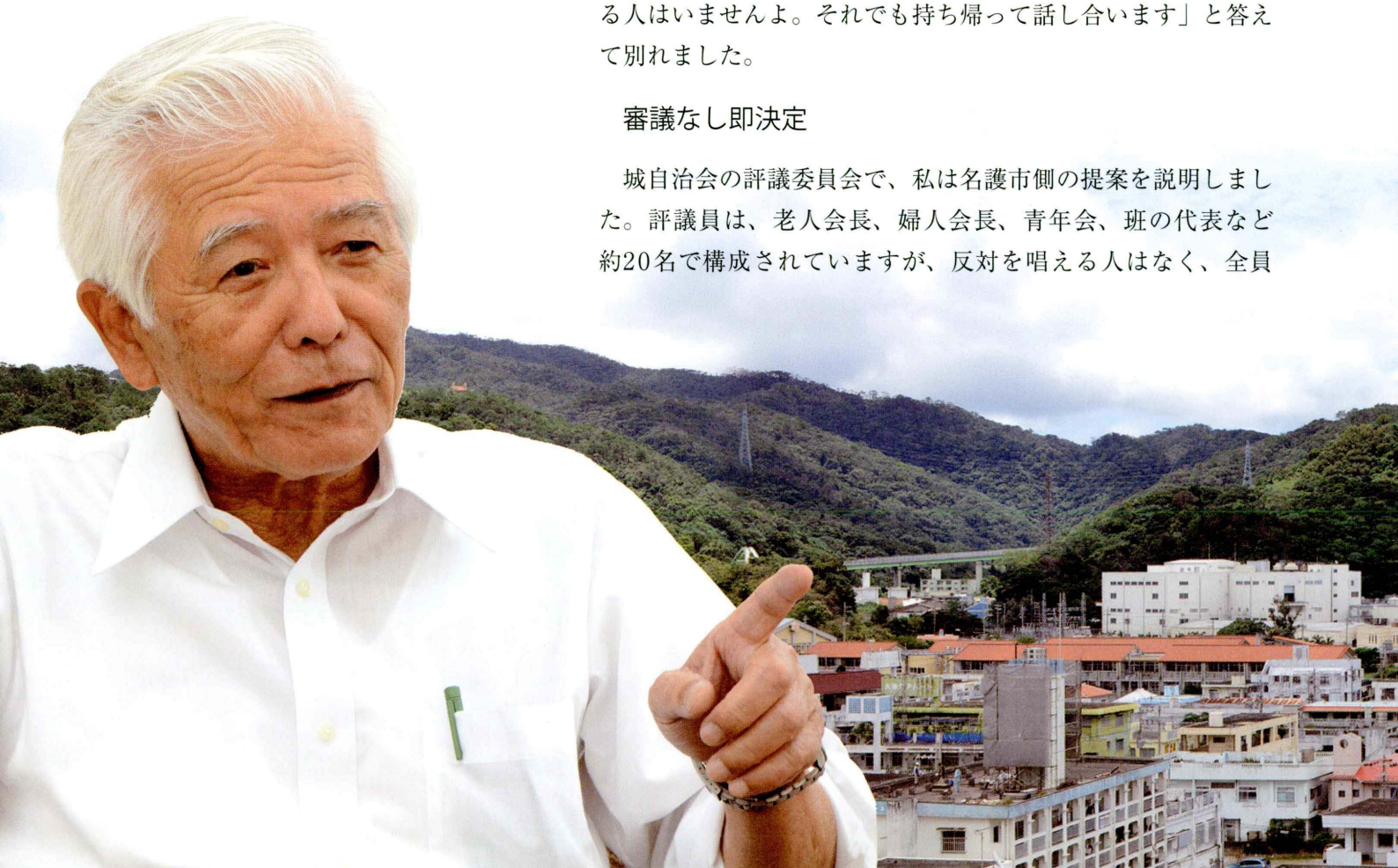
私が城区の評議委員をしていた1990年代初頭だったと思いますが、当時、城区の山入端信博区長から「岸本建男名護市企画部長が、大学建設について話したいことがあるらしい。比嘉さんは、岸本さんとは旧知の仲だから、すまないが話を聞いてきてくれ」と頼まれました。さっそく岸本氏とお会いしました。岸本氏と私は同年で、中学時代までは一緒に遊んだ仲でした。彼は中学を卒業すると那覇の高校に進み、本土の大学へ進学しています。彼が再び名護に戻り名護市役所に就職したと聞いたときは、うれしかったです。あの頃の岸本氏は、大学設立という大きな目標に向かって輝いていました。

私は「山入端区長の委任を受け、お話を聞きに来ました」と挨拶しました。

彼は「大学設立のために資金を準備しなければならない。名護市が城自治会に管理していただいている名護城跡地、医師会看護学校、名護消防署そばの高層住宅などを県に売却するため、管理を放棄してほしい。また、名護城址周辺の私有地は県に売却してほしい」と、大変申し訳なさそうに話されました。私は「城区の住民は、北部地域に本当に大学ができるのだろうかという疑問はあるけれど、大学ができることに対して反対する人はいませんよ。それでも持ち帰って話し合います」と答えて別れました。

## 審議なし即決定

城自治会の評議委員会で、私は名護市側の提案を説明しました。評議員は、老人会長、婦人会長、青年会、班の代表など約20名で構成されていますが、反対を唱える人はなく、全員



が大学設立に役立つならと賛成したのです。この問題はそれ以降、評議委員会の議題に上がることはありませんでした。

私事ですが、私の父・比嘉宇太郎は、戦前、33歳にして名護町助役を務め、その後も名護町議会議員などを歴任しました。終戦後は名護町都市計画課長に就任し、戦災で廃墟と化した名護の復興を目指し、区画整理事業に着手しました。その頃から、名護に大学の必要性を感じていたようです。ですから、父が成し得なかった大学創設が実現するかもしれないと考えると、目頭が熱くなりました。

城区自治会が管理している土地の管理放棄と、名護城址周辺の私有地の売却が決定した後、山入端区長から、「ゆくゆくは名護城一帯を県が名護城址公園として管理します。その前に名護市は見返りとして、老朽化している名護城址の神殿と拝殿の修復を行います」という話がありました。

後日、岸本氏とお会いしたとき、名護市の提案が評議員全員一致で承諾されたという話をすると、彼はびっくりしていました。

岸本氏をはじめ名護市の職員が、大学設立のため、国や県に掛け合い、休日も返上して日夜問わず働いていることは聞いていました。

我々の子や孫の教育環境を整備しようと一生懸命取り組んでいる彼らから協力依頼があれば、喜んでそれに応じる。当たり前のことだと思っていますし、大学創設という一大イベントに、城自治会として微力ながら貢献できたのは、良かったと思っています。





# 公立大学法人化はキラリと光るプロジェクト

沖縄県 副知事 川上　好久

2009（平成21）年８月20日、学友である名桜大学の屋嘉義和事務局長から、当時県の企画部長だった私に、「ちょっと寄っていいか」と電話がありました。私は「ああいいよ、コーヒーでも飲みにおいでよ」と応え受話器を置き、しばらくして二人が訪ねてきました。若い方は金城正英と名乗りました。屋嘉は高校時代の同級生なので、しばし雑談を楽しみました。「ところで、今日の目的は？」と尋ねると、屋嘉は「名桜大学を公立大学に移行したいから協力してくれ」と話すのです。私は予期せぬ発言に驚き、「公設民営大学を公立大学に移行できるの？」と、問いかけました。彼は「できる」と言いました。さらに続けて、「我々は昨年、高知県を設立団体として公立大学に移行した高知工科大学を訪問してきた。総務省の自治財政局財務調査課にも出向き話を聞いてきた。そして、可能な限り情報収集した結果、北部広域市町村圏事務組合を設立団体として名桜大学を公立大学法人化に移行できると確信した。そのためには沖縄県のバックアップが必要です。今日は、そのお願いに来ました」と言うのです。二人は分厚い資料をテーブルに広げ、「公設民営の名桜大学は、毎年４月に国から下りる補助金１億６千万円と授業料収入の約16億円で運営している。公立大学法人になると補助金はなくなるが、優遇措置として総務省からの地方交付税10億円が受けられる」と話しました。「そんなうまい話があるの？」と質問すると、「ある」と言います。それで私はすぐに企画部の担当課長を呼び、こんなうまい話があるのかと尋ねると、「時間があればできます」という答えが返ってきました。それで「アンシェージョウトーヤサ。こんないい話はないから、県としても手伝う」と話し、その場で担当課長に取り掛かるよう指示を出しました。すると、再び予想もしないことを屋嘉が話しました。「来年から公立大学として学生募集を行いたい」と言うのです。「まだ国と話もついていないのに、大丈夫なのか？」と言うと、「県が動いてくれれば大丈夫です」と言われました。なんと性急な男



たちだと思いましたが、彼らの熱意と行動力に私も担当課長も心を動かされ、総務省に提出する書類を突貫で仕上げました。交付税10億円は14億円に修正しました。初年度の総務省からの交付税は、事務組合や名桜大学の予想を大幅に上回る29億円でした。２～４年目は交付税の額は徐々に下がっていきます。しかし４年目以降、毎年14億円が交付されています。これには私たちも驚きました。

復帰以来約20年間、北部には教育の最高機関はありませんでした。そんな中、比嘉鉄也氏が苦労して公設民営の名桜大学を創立させたことで、為又周辺に若者が集まり、北部地域が活気づいていきました。

沖縄県は日本の中で一番失業率が高く、学力も最下位です。そういう状況の中で北部地域に公立大学が誕生したことは、北部地域の発展に大きな力になると思っています。

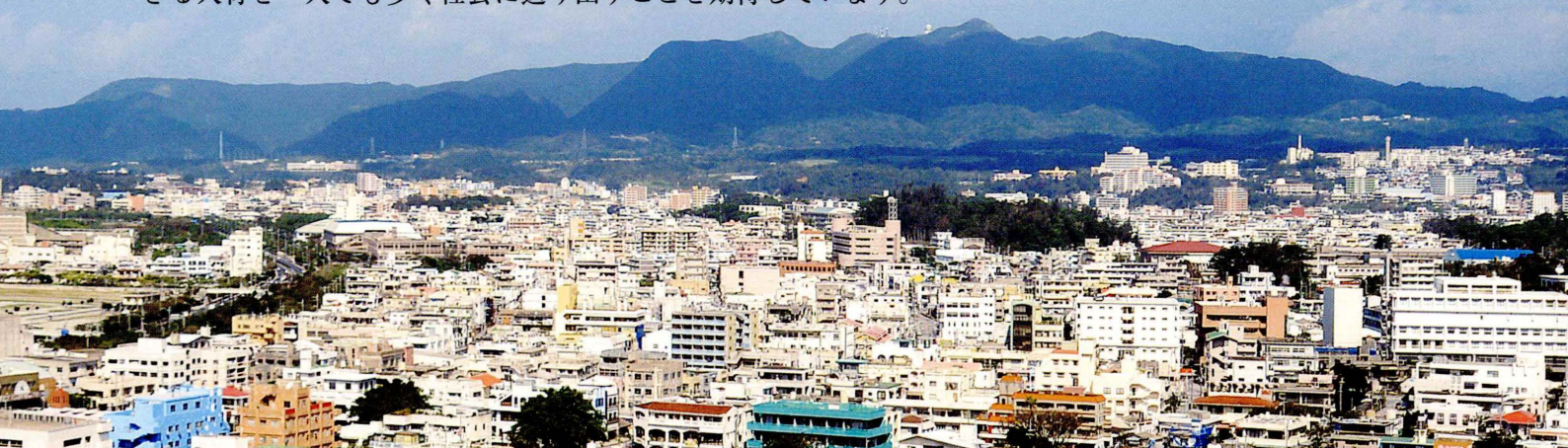
私は長年、地域振興というテーマに取り組んできました。地域振興の目的はシンプルです。地域に企業を誘致して、そこに人を住まわせて、人々の生活を安定させることです。つまり、いかにしてその地域に人と情報を呼び込み、金を集めるか、物の流れを作るか、ということが基本になります。

北部地域は那覇から見ると田舎です。通常、田舎からは若者がだんだんいなくなり過疎化していきますが、地域振興という視点から名桜大学を見ますと、画期的なプロジェクトだと思っています。2012（平成24）年度、海洋博公園を訪れた人の数は408万人ですが、ほとんどが日帰りの観光客です。これに対して、名桜大学は、県内外から2000名の若者を集め、北部地域で生活させているのです。地域振興の視点から見ると、北部地域にとって、名桜大学は、海洋博公園以上のプロジェクトだと思っています。沖縄県全体から見ると小さいかもしれませんが、名桜大学が北部地域に活力を与えているのは、紛れもない事実です。



## 世界に開かれた大学

県の振興策は、時代とともに劇的に変わっていっています。本土復帰した頃の沖縄は、地理的には東京から遠く、環境的には亜熱帯に属して台風が多く、日本の辺境とみなされていました。また、沖縄を取り巻く東南アジア地域の国々も貧しかったです。しかし今日、東南アジア地域の国々が発展して国際舞台で台頭するようになったことで、沖縄もアジアと日本を結ぶ中心地となり、沖縄に人が集まるようになりました。名桜大学が公立大学になったことで、県内外から優秀な若者たちが集まってきます。公立大学法人化という彼らのプロジェクトは、どんなプロジェクトよりキラリと光っています。私は、彼らの情熱と執念、熱意、行動力には敬意を表しています。また、彼らのプロジェクトに我々も参加できたことを誇りに思っています。そして、名桜大学が国際社会で活躍できる人材を一人でも多く社会に送り出すことを期待しています。



# 天 地 人

開学20周年・公立大学法人設立５周年事業実施本部 財務部会長
**屋嘉　義和**

## 名桜大学とのかかわり

2001（平成13）年１月、元名護市長の比嘉鉄也さんが、名桜大学初代理事長・東江康治氏の跡を引き継ぎ、２代目の理事長に就任しました。それからまもなくの頃、名護自然動植物公園（名護市の第３セクター）の取締役会後の懇親会で、鉄也さん、岸本建男さん（当時、名護市長で同社社長）、稲嶺進現名護市長、末松文信元名護市助役らと話をする機会がありました。

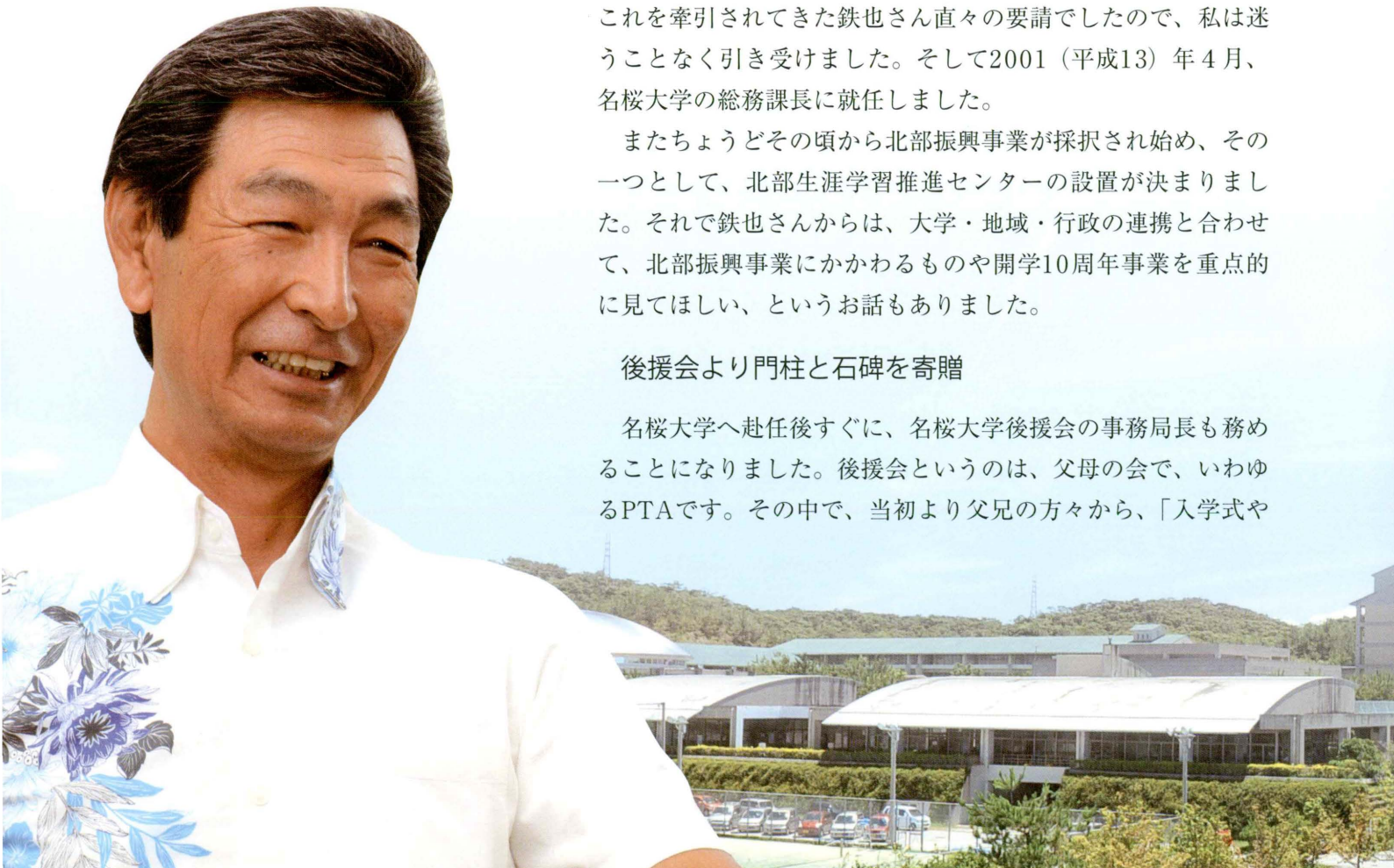
鉄也さんは、名桜大学は北部地域の先人たちの思いと力を結集して誕生した大学であるにもかかわらず、地域や行政との連携が希薄になってきていることを憂えていました。そこで、「名桜大学は10周年を控えており、あらためて地域との連携に目を向けて、地域の大学として歩んでいってほしいと考えている。屋嘉くん、名桜大学に行って一役買ってくれないか」と言われました。

当時、私は名護市観光協会の事務局長を務めており、地域や行政と協力しながら長年にわたり地域の振興に取り組んでいました。北部地域の発展を願う気持ちは私も鉄也さんと同じで、これを牽引されてきた鉄也さん直々の要請でしたので、私は迷うことなく引き受けました。そして2001（平成13）年４月、名桜大学の総務課長に就任しました。

またちょうどその頃から北部振興事業が採択され始め、その一つとして、北部生涯学習推進センターの設置が決まりました。それで鉄也さんからは、大学・地域・行政の連携と合わせて、北部振興事業にかかわるものや開学10周年事業を重点的に見てほしい、というお話もありました。

## 後援会より門柱と石碑を寄贈

名桜大学へ赴任後すぐに、名桜大学後援会の事務局長も務めることになりました。後援会というのは、父母の会で、いわゆるPTAです。その中で、当初より父兄の方々から、「入学式や



卒業式のときに大学を訪れ、記念写真を撮ろうとしたときに、正門もモニュメントもないので、場所もわからない写真になってしまう。名桜大学とわかるような記念碑のようなものがあったらいいのに」というお話がありました。そこで、後援会の寄贈という形で、正門に門柱を設置しました。また地元企業より寄付をいただいて、正門の正面にある「名桜大学」と刻まれた石碑を設置しました。後援会で行った事業としては、この二つが一番大きな出来事だと思います。

また、名護市商工会の会長で地域経済界のリーダーとして活躍されている荻堂盛秀やんばる物産株式会社社長には、長年、後援会会長の任を引き受けていただき、地域として大学を応援していただいており、大変感謝しています。

## 公立大学法人化を目指す

私が総務課長として赴任する以前から、名桜大学は入学志願者数の減少に頭を痛めていました。特に、2000(平成12)年度以降は定員ぎりぎりで、留学生を増やして穴埋めしたこともありました。しかし根本的な解決にはいたらず、打開策を見出せずにいました。

教職員一同、大変な危機感を抱いており、2007（平成19）年、緊急対策会議を結成しました。週に１回集まって、毎回長時間話し合い、議論を重ねましたが、有効な手立てを見出すことができませんでした。

そうしたときに、名桜大学と同じ公設民営の高知工科大学が、公立大学法人化に取り組んでいるという話を聞き、名桜大学での実現可能性を探るために、高知工科大学を視察することにしました。2008（平成20）年10月のことです。その結果、十分可能性があるということで、これをきっかけに、公立大学法人化に向けた勉強会が始まり、続いて検討委員会も設置しました。

このように学内で公立大学法人化の検討が進み始めている頃、2009（平成21）年２月23日の日本経済新聞に、公立大学法人化を目指す高知工科大学の記事が掲載されたのですが、その中にわれわれの視察についても数行触れられていたのです。これを偶然琉球新報の記者が見つけて、「そうなんですか（公立大学法人化への移行を目指しているんですか)」とすぐに取材に来ました。公立大学法人化を目指していたのは事実ですが、12市町村長の了解を得るどころか、検討していることも何も話していないし、公にしていませんでしたから、正直、参ったなと思いました。比嘉理事長に相談しましたら、「まあいいか。(12市町村への説明は）後追いになるけど、記事を載せてもらおう」と。すぐに記事が掲載され、結構大きく報じられました。われわれももう後戻りはできないという覚悟ができ、これが大きく動き出すきっかけとなりましたから、今になると非常によかったなと思っています。





## 12市町村を説得

その後、3月3日の今帰仁村、本部町を皮切りに、10日間で12市町村すべてを訪れて、協力要請を行いました。初めに市町村長、次に議会への説明を行いましたので、各市町村を平均3回訪問しました。名護市にいたっては、部長会議に加えて、議会でも会派別、与党、野党、全体と説明を行いましたので、相当の回数になると思います。

公立大学法人化にあたっては、設立母体となる北部広域市町村圏事務組合（以降、北部広域事務組合）の定款を変更しなければなりません。北部広域事務組合でこの大変な仕事を引き受けてくれたのが、比嘉克宏さんです。資料作成から市町村への説明まで、彼がいなければこんなに短期間でこの大事業を成し遂げることはできませんでした。

また、学内においても、私立から公立になると、職員の身分も変わりますし、規約の変更なども必要です。一番苦労したのが、会計業務の違いです。私立と公立では、まるっきり異なるのです。学校法人会計では、消費収支計算書と資金収支計算書を作成して、公表しなければなりません。企業会計では黒字で計上されるものが、学校法人会計の消費収支計算書では数字上、赤字を計上することがあります。あくまで数字上の赤字なのですが、市町村長や市町村議会での説明では、この点を心配され、理解してもらうのに大変苦労しました。



## 沖縄県との交渉から公立大学法人設立認可まで

公立大学法人化の取り組みについては、12市町村を回るより前に、県への対応の話があります。高知工科大学の視察では実現の手応えを得て帰ってきましたので、その後すぐに、一緒に視察してきた金城正英総務部長（現事務局長）と、県に相談に行きました。

最初に総務私学課を訪ねて、持ってきた書類を手渡したのですが、中にも入れてもらえず、廊下で、「紙を預かります。でも非公式です」と、門前払いの対応でした。

それで、公立大学には運営費として地方交付税が支給されますので、市町村課でもいいかなと、今度は市町村課を訪ねてみましたが、やはり同じような対応でした。県の対応窓口が定まらず、途方に暮れましたが、市町村を説得している間に県も窓口を決めるだろうと、とにかく手を休めることはありませんでした。



2009(平成21)年８月、高校の同期生の川上好久副知事が、当時、県の企画部長を務めていたので、公立大学法人化のことは告げずに、ちょっと寄ってもいいかな、と連絡を入れ、金城次長と一緒に県庁を訪れました。だまし討ちのような形での突然の訪問であったにもかかわらず、彼は、われわれが持参した書類に目を通して５分もしないうちに、市町村課の担当者を呼んで、「やんばるにも公的な高等教育機関が必要だから、すぐ対応しなさい」と話し、それで県としても対応してもらえることになりました。

2009（平成21）年12月、12市町村の了解を得て、北部広域事務組合より県に、公立大学法人の設立認可申請を行うことができました。そのすぐ後で、北部市町村会議長会の忘年会があったのですが、なんと、「一緒に忘年会をしよう」と、議長でもない私が声をかけられたのです。その席で「よくここまでやってくれた。挨拶をしてくれないか」と言われました。そんなふうに言われて、本当にうれしかったですし、１年間の苦労が全部吹き飛びました。

## 人とのつながり

2010（平成22）年３月、公立大学法人の設立認可が下りました。大変な業務でしたが、みなやんばるの子どもたちの教育と北部地域の経済発展のためという思いでは一致していますから、やり遂げることができたのだと思います。

また、もちろん、名桜大学だけでこの大事業を成し遂げることはできませんでした。名桜大学と、北部広域事務組合、県、名護市、この４者の連携があって実現したのです。北部広域事務組合には比嘉克宏（現名護市産業部参事）、県には川上好久、名護市には末松文信前副市長、金城秀郎（現名護市企画部企画調整課課長）と仲井間修（現名護市総務部財産管理課課長）がいました。彼らには本当に感謝しています。

もうひとつ、快くアドバイスしていただいた高知工科大学の担当職員の皆様の協力も忘れられません。まさに「天地人」の言葉どおりでした。

## 地域と大学の連携

このように振り返ってみると、公立大学法人化の取り組みは、私が名桜大学に赴任した一番の目的である「名桜大学と地域との連携」の大切さを認識し、絆を深めるものでした。

公設民営から公立大学となり、名桜大学には一層の地域貢献が求められています。北部生涯学習推進センターや総合研究所はさまざまな公開講座を提供し、その中心的役割を担ってきました。

大学全体として地域のニーズに応えるため、それらを統括する組織が必要と提唱してこられた瀬名波榮喜前学長のリーダーシップのもと、昨年（2013年）４月、エクステンションセンターが開設されました。20周年を迎えた今、エクステンションセンターが地域と大学をつなぐ拠点となり、名桜大学の地域貢献がますます高まることを期待してやみません。





# 公立大学法人化・行政の取り組み

## 行政の始動

比嘉：公立大学法人名桜大学の設立が認可されたのは、2010（平成22）年３月19日です。名桜大学内では、その２年ほど前から公立化について検討・調査が行われていたようです。また、１年ぐらい前に、北部市町村会の方にもその意向が伝えられていたようです。しかし、その頃にもまだ私は知りませんでした。

公立大学法人として認可される半年ほど前に開かれた北部広域市町村圏事務組合（以下「広域」）の理事会と議会で、理事長である島袋吉和名護市長が、広域の北部振興対策室で公立化を検討させたいと発言しました。当時、対策室長を務めていたのが私です。広域にも名護市にも、名桜大学の公立化を専門に扱う部署はもちろんありません。ですから、私が一担当として検討するということで動き始めました。

また、名護市で担当することになったのが、名護市の名桜大学との窓口である企画調整課の課長を務めていた金城さんです。

しかし、われわれ二人が公立大学法人化の業務を任されることになったのには、縁があったのだと思います。名桜大学設立時、私は大学設立準備室にいました。一方、金城さんは財政課にいて、大学設立のために起債を行うなど、資金面の担当者でした。二人とも設立業務に携わっていたということもあって、公立化も担当することになったのだと思います。



## 具体的な取り組み

比嘉：公立化にあたって、広域には二つの業務がありました。一つは、広域が設立団体として大学運営を行うためには、規約の共同処理する事務の中に、「大学の設置および管理を行うこと」の業務を追加しなければなりません。これには、広域の理事会・議会だけでなく、北部12市町村の議会の議決も必要です。これらすべての議決を経て、沖縄県に申請をして認可をもらうわけです。

もう一つは、公立大学法人の設置者となるための申請です。これらを同時進行で行いました。

地方独立行政法人法、名桜大学の経営状況、学費をどうするかなど、すべて一から勉強でした。公立化にあたっての事務手続きは行政が行わなければなりません。沖縄県、総務省、文科省との調整や申請のための資料作りなど、半年ですべてを行うため、土日もなく取り組みました。



**比嘉　克宏**
名護市産業部 参事

## 12市町村への説明

比嘉：広域の規約改正の議決が一番遅かったのは金武町で、2009（平成21）年12月７日です。県に規約変更申請を行ったのがその翌日です。

名桜大学は北部地域全体で設立したという意識はあっても、やはり中心

となるのは名護市です。ですから、名護市の議会が了解しないで11町村の議会が了解するのはいかがなものかという意見もあり、議決が遅れることになったという経緯もあります。

公立大学法人化の名護市の窓口である金城課長とは、常に情報交換を行い、連携して動いていました。広域が了解しても名護市が了解しないとできないし、名護市が了解しても広域が了解しないとできないですから。

金城：12市町村の了解といっても、そのためには名護市が了解しないとにっちもさっちもいかないわけです。

11町村については、やはり金銭的な部分、すなわち新たな負担が生じるのではないかという懸念が大きかったです。

資料の準備を広域が行い、この資料について議会に対して説明を行うのが私の役目でした。私も初めはそうでしたが、議員のみなさんも、公立化とは何か、公立化した場合に本当に負担は生じないのか、と分からないことばかりです。そういったことすべてについて、説明を行わなければなりません。

公立化する・しないの話に入るまでに理解してもらわなければならないことが多くて、議会に対しては週１回ぐらいのペースで説明を行いました。

説明で一番苦労したのは、何かあった場合に資金の負担が生じるのではないかという不安を取り除くことです。大学と行政では予算の作り方がまったく違っていたので、大学の予算の作り方を勉強して、議会に説明を行いました。

比嘉：なぜこれほど費用の負担を心配するのかというと、広域が設置者になるわけですから、学生の定員割れ等、何かあった場合に責任を問われる。そうすると、費用負担をお願いされるのではないかと考えるわけです。12市町村としては、公設民営よりもっと踏み込んだ関わりになります。

金城：新たな負担はありませんと説明しても、「もしも負担があったらどうする。」という話になる。最終的に11町村に対しては、名護市の責任において行うという形で了解してもらうことになりました。半年でよくできたなと思います。





金城　秀郎
名護市企画部企画調整課 課長

## 指定管理

比嘉：名桜大学には名護市の施設があります。多目的ホール、北部生涯学習推進センター、総合研究所、留学生センターなどです。これらを名桜大学に指定管理していました。公立化にあたってこれも変更しなければならないわけですが、その担当者が企画調整課の係長だった仲井間さんです。

仲井間：この話が私のところにきたのは、12月末頃です。３ヵ月で、しかもまだ設立認可されていない団体を、指定管理者として議会で承認してもらうのは初めてのことです。

金城：短期間ですので、公立化されるという前提のもとで動かなければな



**仲井間　修**
名護市総務部財産管理課 課長

らず、議会等への説明も大変でした。

仲井間：認可要件のひとつに「指定管理している施設を引き続き指定管理者として選定されること」がありましたので、「認可された場合には、引き続き指定管理者として予定しています」という覚書を作成して、議会へは指定管理についても、名桜大学公立化に向けた手続きの一環であり、公立化へ移行されても指定管理されている施設の設置目的は変わることがなく、指定管理者として適切であるという説明を行いました。

### 地域の思い

比嘉：北部地域では成績が優秀でも、地元に大学がないため、経済的な理由で進学をあきらめざるを得ないという子どもたちもいました。そういう子どもたちを救うために、私立名桜大学ができました。しかし私立ですから、年間100万円前後ぐらいの学費負担があり、やはり厳しい。そういう中で公立化の話が出て、公立になると学生数に対し、国から交付税という形で運営資金が交付されますので、学費負担が軽減されます。北部地域の子どもたちにとってとてもいいことで、我々も是非やりたいという思いがありました。ですから、大変でもやり遂げることができたのだと思います。

公立化によって、名桜大学の設立母体は広域になりました。広域には大学支援室が設けられ、大学側からも職員が何人か出向しています。公立大学法人化によって、公的にも地域と大学の関係が構築されました。

今後は、行政と大学がさらに連携を深めて、地域の活性化につなげていってほしいと思っています。



# 寄　稿
# 活躍する卒業生

## 国際文化専攻

# 私の人生の宝



宮城ジェラルド
（2012年度卒業）

私の人生の転機は大学への入学でした。

名桜大学へ入学したことで、人生を豊かにするためのたくさんの機会に恵まれることができました。

私が専攻をしていた国際文化学を勉強しようと思ったきっかけは、私のバックグラウンドにあります。

父方の祖父母が“ナグンチュ”母をペルー人に持つ私は自分のルーツを知るため、小さい頃から日本に深い興味があり、沖縄に住みたいと思っていました。

実際、名桜大学での学生生活を通し沖縄に住んでみて、故郷のような感じがしました。

そして私は、故郷は産まれた場所ではなく、心が安らぐ場所が故郷になるのだと感じました。

大学時代、国際文化学を通して2009（平成21）年千葉で開催されたGlobal Partnership of Asian Colleges（GPAC）、2010（平成22）年ベトナムで開催されたGPAC、2011（平成23）年台湾で開催されたGPAC等たくさんの学会に参加することができました。これらの学会で私はチームのリーダーに抜擢され、台湾の学会では優勝することができました。

名桜大学は、イギリスのUNIVERSITY OF CENTRAL LANCASHIREで１年間の交換留学をする機会も与えてくれました。

留学を通し、イギリス人や世界各国の人々と交流を図ることができ、この経験から国際関係の基盤は互いの順応性にあると気づきました。留学経験を通して学んだことは、国際的な職場で働く私の職業にとても役立ちました。

また、国内留学として桜美林大学に１年間派遣をしていただきました。国内留学を通し、日本の文化、言語、社会についてさらに教養を深めることができました。

現在、私は在東京ペルー共和国総領事館で職員として勤務をしています。名桜大学で得た知識と経験なしでは、この職に就くことはできませんでした。

名桜大学で過ごした貴重な時間は私の人生の宝となりました。名桜大学のおかげで私の夢を叶えることができ、小さい頃から興味があった日本で毎日充実した日々を過ごしています。

（在東京ペルー共和国総領事館
ペルー出身）

# 日本語を学び、日本に学ぶ



ユオン・バン・ビン
（2007年度卒業）

名桜大学開学20周年・公立化５周年に当たり、心よりお祝いを申しあげます。名桜大学は小さな島にある小さな大学であるにもかかわらず、大きく豊かで国際的なビジョンを持つ多くの人材を育成されてこられました。育成された人材は日本国内のみならず世界各国で、名桜大学の建学の精神である平和と自由と進歩のために活躍されておられます。私もベトナム出身の名桜大学の一員として、常に光栄で誇りに思っております。

海外留学、異国での生活はとても苦しいものと聞かされていましたが、地元の方々や大学の皆さまには親身になって学業ばかりでなく、生活面まで相談に乗っていただきました。おかげで日本留学前に考えていた日本で博士号を取るという計画の通り、2013（平成25）年３月に大阪大学大学院博士後期課程「言語文化学」博士号を取得することができました。異国にあって、最も心に残るのは、人々の厚い心遣いに包まれたことです。私は生涯にわたり、日本人の人情に学び、日本の優れた伝統に学び、そして日本の文化、言語を深く学び続けることを決心いたしております。私の信条は「日本語を学び、日本に学ぶ」ですが、その原点を形作っていただいたのは、名桜大学です。

私は、日本とベトナムの絆を結ぶことを生涯の仕事としようと考え、株式会社心越を立ち上げました。株式会社心越というその社名に恥じぬよう「ベトナムの心」を基本として、日本とベトナムの友好をより深め、より高めたいと念じております。すなわち、これまで学んできた「日本語・日本文化」学を活かした翻訳・通訳業務を根幹に、「言葉」で日越両国のお客様のコミュニケーションをサポートさせていただきたいと考えております。

私どもの会社は、通訳・翻訳・IT事業・経営コンサルティングを四つの柱としております。 詳しくは下記のホームページを御覧いただければ幸甚です。

www.vietcocolo.com

（株式会社心越 代表取締役
ベトナム出身）

# ウェルナビの思い出



伊差川　章
（2007年度卒業 旧姓：上間）

この度は開学20周年並びに公立大学法人化５周年おめでとうございます。この20年間には大学に対する多くの方々の努力が折り重なった歴史があると拝見しております。これからも常に最高学府のあるべき姿を軸に、学生が様々なことに挑戦できる母校であってほしいと願います。

私が編入した当初は、学問をする場所にしては、意欲が薄れているという印象がありました。その状況を変えたい教授陣、職員、学生が一致団結して設立したウェルカムナビゲーション通称「ウェルナビ」に私も誘われ活動をしました。当初の目的は、新入生の大学への順応を支援し、留年・退学を減らすことでしたが、今日では新しい活動を取り入れた学生ボランティア集団に変化を遂げているようです。設立当初は初めてのことばかりで教授陣、学生同士、皆それぞれ意見の食い違いなど多々ありましたが、一同良い大学にしたいという情熱がありました。その情熱を根底に人のために行動することが、自己の成長に繋がったと当時のメンバーは自負しており、再会する度思い出話に花が咲きます。

私は卒業後、日本トランスオーシャン航空の客室乗務員として勤務を始めました。客室乗務員の仕事は、お客様の命をお守りし、安全で快適な空間を作れるかが問われる仕事です。そのため「気付いてコミュニケーションをとり問題解決に動く」という能力が重要視されます。困っているお客様に気付く、機内の通常と違う些細な事柄に気付く、その気付きから解決策を推考しキャリアに関わらず他のクルーにコミュニケートする。その能力は名桜大学で、沢山の人と関わりボランティア活動を通して得られたスキルではないかと思っています。

近年は名桜大学に入学することが難しいという嬉しい評判を耳にします。これからも名桜大学の益々の発展をお祈りし、卒業生として輝けるよう日々精進して参ります。

（日本トランスオーシャン航空株式会社）

# 受け継がれた鶏飯店に感謝



松　輝明
（2011年度卒業）

母校の開学20周年・公立大学法人化５周年おめでとうございます。

早いもので私が名桜大学を卒業してから、３年が経ちました。在学中は語学教育専攻に所属し、国語教員をめざし講義を受講していました。同じように教員を目指し共に講義を受講していた学友、先生方のご指導もあり、無事免許を取得するに至りました。現在は教員とは違う道に進んでおりますが、名桜大学で学んだ４年間は社会人として仕事をする上で大きな糧となっております。在学中は伊藤孝行ゼミに所属し、ゼミのメンバーとともに『キャンパス言葉辞典』の編纂や卒業論文作成を和気あいあいと進めたことが今でも思い出されます。ただ、『キャンパス言葉辞典』の完成まで至らなかったことが、大学生活での心残りのひとつです。

卒業論文は多くの先生方にご指導いただき、「肝」と「心」に対応する琉球方言語彙の比較考察をテーマとしました。現地で方言語彙の収集を行ったことは私にとって改めて「方言」を見直すよい経験となりました。また、学祭では同郷の先輩、後輩たちと地元の郷土料理「鶏飯」を出店したことが思い出されます。私たちが卒業後も後輩たちが受け継ぎ出店を続けていると聞き大変うれしく思っております。

現在、私は日本放送協会に勤め、日々受信料の公平負担に向けて業務を行っております。公平負担への道のりは平坦ではありませんが、名桜大学で学んだ４年間を糧にやるべきことを全力で取り組んでいます。これからも自分にできること、任されたことを精一杯取り組んでいく所存です。皆様の公共放送への一層のご理解、ご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

最後になりますが母校、名桜大学の益々のご発展と後輩たちのさらなるご活躍を祈念してお祝いの言葉といたします。

（NHK熊本放送局）

## 経営専攻

# 幸運な学生生活



棚原　健太
（2005年度卒業）

私は名桜大学の第９期の卒業生となります。母校で過ごした４年間では現在の私の人生においてすごく大きな出会いがありました。

まず一つ目に、人生の友とも言える友人を得ることができました。私や私の友人たちも、名護市にアパートを借り、皆それぞれが一人暮らしをしていく中で協力・団結し合い強い絆が自然と結ばれていきました。私たちは学園祭などでは、他のグループに売り上げでは絶対負けたくないという思いから、喧嘩ぎりぎりの議論を交わしながらも協力し合い、販売方法について最終的に目標としていた売り上げ（２日間で30万円）を達成しました。彼らと一緒なら何でもできると感じるようになり、本当に信頼し合える仲間となりました。今でも仕事や家庭のことなどお互いに良い刺激を受けながら素晴らしい関係を築いています。

二つ目にはゼミでの経験やその仲間・ゼミの先輩、そして先生です。３年生から始まるゼミで、私は宮平栄治教授のゼミを選択し、卒業までの２年間を学びました。宮平栄治教授は、当時から大変厳しいと有名な先生で、実際はうわさ以上に厳しかったですが、愛情にあふれた２年間でした。毎週、自身が気になる記事の発表があるので自然と複数の新聞を読むのが日課となったり、何かを調べたり学んだりする習慣を得ることができたことなどはもちろん、その中で自分自身が本当に興味があるものや将来へのビジョンが少しずつ形成されていきました。

そして私は2013（平成25）年の２月に株式会社南国ベイベを立ち上げました。大学の友人であり宮平ゼミの同門でもある知念勇樹君（代表取締役社長）と一緒に立ち上げた会社は現在２期目を迎えました。今後、我々の会社がどうなっていくのか楽しみで仕方ありません。ここで学ぶ皆さんにも４年間の学生生活で色々な出会いがあると思います。その中で、今後の人生で大切なものを掴んでください。

また、私は大学生活で一人暮らしすることで両親の有難さを初めて理解しました。皆さんもきっと学生生活の中で感じることがあるでしょう。その気持ちを大切にして、濃い学生生活を送ってください。

（株式会社南国ベイベ）

# すばらしい出会いに感謝



仲里留美子
（2001年度卒業 旧姓：宮城）

名桜大学開学20周年・公立大学法人化５周年記念を迎えるにあたり、心からお祝い申し上げます。

このたびは寄稿させていただき大変光栄に存じます。最初お話をいただいたときは恐縮致しましたが、お世話になった先生方、名桜大学への感謝の気持ちを表せる良い機会をいただいたと思っております。

私が貴学へ入学したのは、今から16年前の1998（平成10）年４月でした。県内の商業高校在学中に、高校商業科の教員免許が取得でき、自然に囲まれた環境で学ぶことに魅力を感じ、名桜大学を受験しました。親元から離れ初めての一人暮らしや、キャンパスライフへの期待を胸に入学しました。簿記や情報関係の科目が好きだったこともあり、大学での講義はどれも興味深く楽しく学ぶことができました。

名桜大学へ行って一番よかったと思うことは、大切な友人たちとの出会いや教職課程をサポートしてもらった先生方との出会いです。大学４年の頃、教員選考試験に向けて教授の研究室で共に教職を目指す友人たちと勉強会をしていました。その経験が試験へ合格するまでの基盤となりました。先生方の私たち一人ひとりに対応した、きめ細かいご指導のおかげだと感謝しております。

大学卒業後は、就職課の紹介で高校の非常勤講師をしながら教員選考試験合格へ向けて勉強に取り組みました。そこで初めて授業を持ち生徒へ教えるということの難しさを学びました。私にとって仕事と勉強の両立は困難もありましたが、大学を卒業して４年後試験に合格することができました。現在は教職に就き８年目を迎え、生徒たちとの関わりを通して教師として経験を積む日々を送っております。今の私が在るのは、名桜大学で学び、良い友人・先生方と出会い、高校の非常勤講師という道筋を立ててくれたおかげだと感謝しております。これからも名桜大学の卒業生の一人として教職に勤しんでまいります。

（沖縄県立コザ高等学校 教諭）

# アリ先生との出会い



安次嶺直樹
（2001年度卒業）

開学20周年を迎えられ、先生方ならびに学校関係各位の皆様、おめでとうございます。

私は1998（平成10）年に５期生として、当時の国際学部経営情報学科に入学しました。

当時私は、経済的な事情もあり高校卒業後には就職することを目指しておりましたが、うまくいかず、高校生活も中盤に差し掛かり周囲の進路が決まっていく姿に、将来への不安と焦りを抱いておりました。私の姿を見かねた母から大学進学を勧められ、進路指導の先生からも大学推薦入試を勧められたため、それならと入試に挑戦。無事合格したとき、世界で一番強運だと少なからず思っておりましたし、今もその思いは変わりません。

入学後は、初めての一人暮らし、アルバイト、レポート提出、未熟ながらゼミ長を経験し、初めてづくしの毎日でした。在学中の大きな出来事は、アリ先生との出会いです。2000（平成12）年より名桜大学に赴任されたアリ先生とは２年間貴重な時間を過ごし、ネットワーク技術の講義など、現職に通じる多くの知識を教えていただきました。また、私を含めゼミ生に安心感を与えてくれる素敵な先生でした。

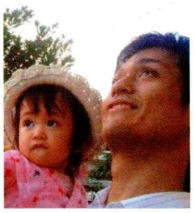
私が２週間程度教育実習へ行った際、実習の最終日にアリ先生が見学に来ていました。実習中の張りつめた緊張の中、私はアリ先生に会った安心感から思わず泣いてしまいました。アリ先生が大切な存在だったことを実感した出来事です。先生に出会えたことや、出会いを演出した母や高校の先生方に感謝しております。私は幸せ者です。

2002（平成14）年の卒業後は、沖縄日立ネットワークシステムズ株式会社へ入社しました。現在は、全国に広がる日立グループの各企業で使われている、PC、ネットワーク等ITシステムのサポートセンターの管理者として、マネジメント業務に携わっております。

開学20周年を迎えられ、多くの学生のステップアップの場として、また、社会に貢献できる人材育成の場としてその役割を未来まで続けるよう、今後のご発展を心よりお祈り申し上げます。私自身も、息子や次世代のジャンプ台となれるよう努力してまいります。

（沖縄日立ネットワークシステムズ株式会社）

# 名桜での武器で地域貢献



島　康貴
（2001年度卒業）

名桜大学（20歳）へのラブレター。To 名桜大学

名桜大学様、開学20周年おめでとうございます。

私の出身は沖縄の北部地区にある屋我地という地域です。私が小学生の頃の地元は週刊誌が他の地区よりも遅めにしか買えないくらい情報伝達が遅れた地域でした。

住んでいる北部に比べ、映画・音楽・雑誌・人など沢山の情報に触れることができる北谷や那覇等は、もはや憧れの地。“新しい”を求めて、高校卒業後は外に出ようと決めていました。

ですが、ちょうど中学生の頃、国際色豊かで経営や情報を教えてくれる貴方（名桜大学）が名護市内に生まれたことを人伝で知った私は、新しい出会いに興奮し、旅立ちを先延ばしにして貴方を選びました。

そんな日から約20年、貴方と共に歩んだ私は、IT企業でweb業務に携わりつつ、今年から非常勤講師として、また共に歩み始めています。開学20周年及び公立大学法人化５周年という記念すべき節目に、またご一緒させていただき、沖縄の未来を考えられることができてとても嬉しく思います。

在学時の黄金なる経験を武器に。To 学生様

名護商業高校（名護商工）の情報処理科を卒業した私は、さらなる高みを目指し、大学及び大学院でも経営情報を専攻しました。

大学という環境で沢山のサポートもあり、修士論文を海外の学会（CSIT2006）にぶつけて、ベストレポート10に選ばれた実績は本当に貴重な経験です。

今、私は名桜大学で得られた出会いと学問を武器にIT企業という媒体を通して地域に貢献させていただいています。おかげさまで、事業者のみならず、県職員や医者など幅広い人たちと関係を築けています。これも大学で培った経験の賜物です。

在学及び名桜大学への進学を考えている皆様。さらなる高度な知識と経験を携え、一緒に社会で遊びませんか。卒業生一同（勝手に）お待ちしております。

（株式会社 GaiaX Interactive Solutions、名桜大学 非常勤講師）

診療情報管理専攻

# 20周年へのメッセージ



石澤　正祥
（2012年度卒業）

この度、名桜大学が開学20周年を迎えられましたことに、心からお祝いを申し上げます。

私が今こうして診療情報管理士として仕事をしているのは、在学中に親身になって最後まで色々とサポートしていただいた先生方のおかげです。名桜大学で素晴らしい先生方に会えたことに感謝しています。

今後も名桜大学のますますのご発展を、お祈り申し上げます。

「即戦力となる診療情報管理士を目指す」これが名桜大学で診療情報管理士を目指すに当たっての私の目標でした。医療情報技師の資格の取得や、興味のあった統計学の勉強に力を入れました。次に相手に伝えたいことが上手く伝わらない、会議が上手くまとめられない、といった苦手意識があったため、これらの問題を克服するために、考えを論理的に組み立てて話す訓練をゼミで行ったり、積極的にオープンキャンパスや、先輩と後輩の繋がりを作るための場を企画したりしました。最後は、医療全体を見ることのできる広い視野を持ち、診療情報管理士としてできることは何かを考えることでした。医療従事者側、患者側それぞれの視点からの問題点を探るため、意見交換会や講演会などに積極的に参加しました。この目標を名桜大学で達成し、診療情報管理士として仕事をすることが実現できたのは、先生方のサポートがあったからこそです。名桜大学で学ぶことができてよかった。今は心からそう思っています。

現在、千葉県の南部にある医療法人鉄蕉会亀田メディカルセンターで、診療情報管理士として医療情報管理室と情報戦略室を兼務で仕事を行っています。医療情報管理室では、診療情報の整理、出力、分析などを行っており、情報戦略室では次期電子カルテの導入に伴う運用の全体管理、まとめを行っています。二つの職場を掛け持ちしての仕事で大変ですが、毎日が勉強になることばかりです。

（医療法人鉄蕉会亀田メディカルセンター 診療情報管理士）

# 充実していた学生生活

照屋由里子
（2013年度卒業）

まず、開学20周年記念、誠におめでとうございます。私が卒業したのは2013（平成25）年度で、所属していたのは国際学群・診療情報管理専攻です。ちょうど名桜大学が公立化してからの１期生であり、診療情報管理専攻の２期生にあたります。まだまだ若い専攻ですが、今後、沖縄の医療基盤を支える人材育成の場として重要な役割を果たす専攻だと私は確信しております。

学生時代は、診療情報管理専攻を３年次で選択する予定の学生は、１年次から必修ともいえる前提科目というものがあり、それを“着実にこなしていかなければならない”という面で、他の専攻に比べると厳しかった、という記憶がまずあります。また、副専攻取得のために、前提科目の合間に取る科目選択も綿密に計算し、履修しなければなりませんでした。しかし、厳しかった反面、診療情報管理専攻の講義はとてもやりがいのあるものばかりで、特に私は基礎医学の講義を現役医師から教えてもらえるというところに大変な興味と魅力を感じておりました。また、課外活動として、病院のボランティアに参加したり、病院見学を自ら企画したり、先生方のお力も借りながら様々な病院を見学できた経験も、現在では大きな糧となっています。その他にも沢山のことをこなしながら周りの仲間と切磋琢磨し、一度の試験で診療情報管理士認定試験に合格できたことは、何にも代え難い程、うれしかったです。

現在は、沖縄県浦添市にあります、医療法人 八重瀬会 同仁病院の医事課に所属し診療情報管理士として勤務しております。仕事の内容としては主に、カルテ管理に始まり、DPC関連のデータ入力（2014年現在、当院は沖縄県では唯一のDPC準備病院として、厚生労働省へのデータ提出を行っております）、入院患者様の病歴入力や、医師が学会で使うためのデータ整理や提出等も行っております。

（医療法人八重瀬会同仁病院 診療情報管理士）

# 活躍する卒業生



大谷健太郎
（1999年度卒業）

開学20周年、教職員や卒業生、地域の方々など関係者の努力に対して感謝を申し上げます。20周年をうれしく思う一方、月日の流れの早さに驚いています。卒業生には、経営者になった人、教育関係で活躍する人、観光産業で活躍している人などが多いなか、私は卒業から14年が経ち「活躍」していると言えるのであろうか、と常に自問自答しています。

３期で入学した年は国際学部３年次の先輩までしかおらず、施設面でも現在から考えるとまさに「発展途上」の大学であると感じていました。その分、教授陣には刺激的で個性的な先生が多く、入学式後の「人と同じこと、そして同じ努力をしていてはダメだ」という言葉は今も忘れられません。沖縄の歴史と文化に関する講義、講義中が一番楽しいと言って極めてアカデミックな比較文学論を教授してくれた先生、教科書通りではない考えさせられる講義ばかりでした。

さて、観光産業学科でも、実力を思い知らされた観光事業論をはじめ、当時全国でも希少だった「観光学」を学ばせていただきました。恩師である小濱哲先生のゼミでは伊平屋村と西表島の観光に関する住民意向調査を行い、観光開発に関する提言書をまとめるなど、常に理論と実践の関連を体感することができました。

大学生活の満足度はもう述べる必要もないかもしれません。今よりも「モノ」は少なかったですが、バンド、草野球、観光地そして大学生ならではのアルバイト、そして勉強、仲間と楽しむ環境に不足はありませんでした。

自分は15周年を迎えた2008（平成20）年から名桜大学に奉職しています。国際学群に変化した今、当時の魅力ある講義の何分の一でも学生に伝えられているのであろうか、そして名桜大学に必要とされる人材になっているのだろうか。常に「不足」していることを肝に銘じる、すなわち初心を忘れず、後輩を育てることに尽力していきたい所存です。

（名桜大学国際学群観光産業教育研究学系 上級准教授）

# 学生時代が現在の礎



渡慶次　潤
（1999年度卒業）

名桜大学が開学20周年を迎えられましたこと、また公立大学法人化５周年を迎えられましたことに対し、心からお祝いを申し上げます。また、私も３期卒業生として、母校が開学20周年という節目を迎えられたことに喜びもひとしおでございます。

1994（平成６）年に学校法人の大学として開学されて以来、「平和・自由・進歩」の基本理念のもと、国際社会で活躍できる人材の育成にご尽力され、数多くの素晴らしい人材を輩出されたこと、名護市を中心とした北部地域の振興発展に多大な貢献をされたことは衆目の一致するところであります。

私が卒業した2000（平成12）年以降、大学院の開学や人間健康学部の開設、国際学群への改組転換、そして今年５周年を迎えられた公立大学法人化と、着実にご成長を遂げられていることを、同じ名護市において多くの方と関わりを持つことができる観光業に従事する中で身近に実感しております。また、卒業生の名声を耳にしたりご活躍を拝見したりするたびに、卒業生の一人としてとても誇りに感じております。

私自身の在学時代を少し振り返りますと、恥ずかしながら非常に不出来な学生で、先生方に大変ご苦労をお掛けしたことと思います。今になって授業で用いた書籍をたびたび読み返しながら、もっと勉学に励むべきであったと反省の念にかられている次第です。しかし４年間の大学生活で「観光」について学んだことは、間違いなく現在の業務における礎となっており、ご指導くださった先生方には心から感謝の気持ちでいっぱいです。

今後とも名桜大学卒業生としての自覚と誇りを持ち、名桜大学はもちろんのこと、第二のふるさと名護市、そして沖縄のリーディング産業である観光産業の更なる発展に向けて、微力ながら尽力をいたす所存でございます。

結びに、公立大学法人名桜大学の限りないご発展と関係者の皆様のご健勝を祈念申し上げます。

（㈱前田産業 執行役員、ホテルゆがふいんおきなわ 総支配人）

## スポーツ健康学科

# 名桜時代は、大きな財産



宮國　康弘
（2008年度卒業）

名桜大学開学20周年お祝い申し上げます。2005（平成17）年度人間健康学部スポーツ健康学科の１期生として入学した当時は、創設されたばかりの学部で、教職員の方そして学生も毎日が手探りの状況で、１日１日少しずつ風土や歴史を築いていました。これは人間健康学部だけではなく、開学当時の国際学部草創期の諸先輩方も同様ではなかったかと思います。さらに、開学20年を迎える現在では、その風土や歴史は後輩に引き継がれ、卒業生らが築き上げてきた土台の上に、新たな文化を作りあげているはずです。特に現在の在学生の皆さんは、歴史ある名桜大学の歴史文化を継承していただき、学生自身の手で新しい名桜大学を築き上げていただきたいと思います。やはり大学は学生一人ひとりが主役なのだと思います。



在学時の思い出

学生が成長できる環境をどのように創るのかといったことをよく考えていました。そのような想いは、ウェルナビの立ち上げメンバーとして関わったり、ラオス・インドネシアフィールド研修を企画したことに繋がりました。また、学生が成長できる環境を自ら創るということは、それは同時に自分自身が成長できる環境を作っていることにもなり、このような企画・運営に携われたことは大学時代の大きな財産となっています。

現在の職業

現在は、千葉大学予防医学センターの研究員として、予防医学研究を進めています。また、同大学で博士課程にも所属し、医学博士号取得を目指しています。これからの高齢者が急増する時代においては、いかに健康な高齢者や健康な地域をつくるかが重要なテーマとなります。研究者としては駆け出しですが、人間健康学部の卒業生として「健康」に関わる研究、または実践でこれからの社会に少しでも役立てれば幸いです。

（千葉大学予防医学センター）

# チャレンジ精神を育む



佐藤　浩輔
（2010年度卒業）

開学20周年おめでとうございます。開学20周年記念誌の寄稿の依頼がきてビックリしているところです。大変恐縮ではありますが、名桜大学での思い出を二つ紹介したいと思います。

高瀬ゼミ　健康についての学び

最後の卒論発表会では最優秀賞をもらうことができました。テーマは「カロリー制限と長寿の関係」でした。テーマからもわかるように、私は完全に高瀬先生色に染まっていました。例えば、ある店のポテトは食べなくなり、ワインを飲み、ビタミンEとビタミンCのサプリメントを飲んでいました。今の高瀬ゼミにも私と同じような学生がいるのではないでしょうか。私の人生の目標は120歳まで生きることです。

学年リーダー

当時のスポ健は「先生方主体」の学科でした。私は「学生主体」の学科にしたいと思い、学年リーダーの組織を作りました。オープンキャンパスやスポ健運動会、クリスマス会、謝恩会など、学年リーダーが行事の企画・運営を行いました。その結果、少し「学生主体」の学科になり、スポ健が明るくなったような気がしています。今は、学年リーダーという組織名はなくなっているようですが、後輩たちが私たちの意志を受け継ぎ、スポ健を盛り上げてくれているようで嬉しく思っています。後輩たち、これからも名桜大学、スポ健を頼みます。

私は名桜大学を卒業後、教員を目指し、福岡教育大学教職大学院に進学しました。その後、教員採用試験（福岡県　保健体育）に合格し、中学校の保健体育の教員として頑張っているところです。今年度、勤務校で道徳の県大会が行われます。私は研究主任として、授業を公開することになっています。日々仕事に追われている毎日ですが、充実した教員生活を送っています。

最後に後輩の皆さんへ

大学生活はいろんなことにチャレンジしてください。ボランティア、部活、バイト、就職試験勉強など、いろんな経験をすることが自分自身を成長させることにつながると思います。「明日やろうはバカヤロー」だ！！！！！！

（教諭）

# 気になったらレスポンス

高宮城　悠
（2010年度卒業）

私は名桜大学人間健康学部看護学科１期生で入学し、現在、神奈川県川崎市聖マリアンナ医科大学病院救命救急センターで働いています。

看護学科に入学したときは、１期生ということもあり、全てが試行錯誤の日々でしたが、学科長、先生方のサポートにより、充実した大学生活を過ごすことができました。

名桜大学看護学科は日本初の参画型看護教育課程を導入しており、各講義には模造紙や付箋を用いてカンファレンスを行い、「気になったらレスポンス」という合い言葉に学生同士や先生と意見交換をしたことが印象的でした。また、学生と先生との距離が近く、気軽に会話ができ悩んだときや進路相談など大学生活における様々なサポートを行っていただきました。

私が学生生活で特に印象的だったことは、４年次での国家試験対策でした。やはり、１期生というプレッシャーや看護学科初の国家試験ということもあり、不安なことが多かったです。しかし、学生同士で勉強会を開いたり、講師を招いて講義してもらったりと試行錯誤しながら、１期生独自の勉強法を皆で積み上げていくことができました。不安な日々でしたが、先生方、学生同士が協力して勉強法や国家試験対策に取り組んだことは今の私の中で大きな自信に繋がっています。また、参画型看護教育により現在、看護師として臨床で働く中で、患者様との会話、医療スタッフとの連携という面において、相手を思いやる気持ち、リーダーシップ、コーディネートなど様々な点で役立つことが多く、今になって実感しています。

救命センターでは重症患者が多く、多忙な日々ですが、急性期では患者様の回復が目で見て実感できることが多く、人工呼吸器が繋がっており会話できなかった患者様と会話したときはやりがいを感じます。まだまだ技術や知識が至らない面が多いですが、一緒に就職した仲間と切磋琢磨し早く一人前の看護師になれるように努力しています。

今後、看護師という職業を通して、母校である名桜大学に何らかの形で恩返しできればと考えております。

（聖マリアンナ医科大学病院救命救急センター）

# 学生時代が今の私を形成



照屋　光希
（2010年度卒業）

名桜大学が開学20周年を迎えられたことを心からお祝い申し上げます。

2007（平成19）年に人間健康学部看護学科に１期生として入学し、高校時代とは違い、それぞれの夢に向かって専門の分野に歩み始め、その時の学び一つ一つに胸を膨らませていたことを今でも鮮明に覚えています。入学当初は看護師・保健師・養護教諭に関する基本的知識を学ぶことやゼミ活動などに大変ワクワクしていましたが、学年を経るにつれて難しくなってくる勉強や看護技術、実習などに夜も十分に寝ることもできなかった日々を懐かしく思います。在学中は、先生方に手をやかせてしまったと思いますが、私は大変楽しく、先生方一人ひとりに大切に育てていただき、愛されて卒業させていただきました。学生時代はお互いに意見を出し合って討論する機会が多くあり、相手は私に何を伝えたいのか…と常に考えるよう教えていただきました。学生が意見を出しやすいように質問をしたり雰囲気作りをしてくれたと感じています。自分とは違う仲間の価値観を共有し、仲間の意見を尊重する大切さや重要性を学ばせていただきました。学業の他にも新入生を支援するボランティアサークルや教職の講義を通して他学科の仲間との交流など多くの経験をさせてもらいました。

卒業後、伊江村役場の保健師として就職させていただいて今年で４年目になります。人口5,000人未満の村であり赤ちゃんから高齢者まで、また精神保健や健康増進など幅広く関わらせてもらっています。話を聞かせてもらった住民の方が、笑顔になったりスッキリとした表情を取り戻していく姿を見るとやりがいを感じます。今では船に乗っていると「照屋さん、車ある？乗っていくね？」「最近お腹周り測ってみると細くなっていたよ」と声をかけてもらい住民の皆さんに笑顔をもらっています。

名桜大学で、人と意見を交換し互いの考えを大切にし尊重することの肝要さを学ばさせてもらい、また、仲間の存在の大切さ、教職の講義やサークルを通して幅広い視野を持てたことは大学生活での貴重な経験であり、先生方や仲間がいたからこそ現在の自分があるのだと実感しています。

（伊江村役場医療保健センター）

## 国際文化研究科

# 開学20周年へのメッセージ



山崎 ヴケリッチ 久
（2011年度修了）

名桜大学開学20周年、そして公立化５周年にあたり、心よりお祝い申し上げます。私、山崎ヴケリッチ久は、2010（平成22）年にセルビアから来沖し、2012（平成24）年、名桜大学大学院（国際文化研究科観光環境領域）を修了いたしました。

名桜大学での２年間は、昨日のことのように思い出されます。初めて大学を訪れた際、名護湾を見晴らすこぢんまりとしたキャンパスを見て感動しました。こぢんまりとした大学であるからこそ、先生と学生、そして学生同士が密接な関係を築ける場だと思いました。まさにその通りでした。

来沖したころの私は、まったくの白紙状態でした。先生方や仲間の学生諸君から受け取るさまざまな知識と新しい経験が、毎日のようにその白紙に書き込まれていきました。

名桜大学での２年間に培われた部分はきわめて大きいと感じております。卒業後はセルビアに戻り、国際協力機構（JICA）のバルカン事務所に就職しました。事務所はセルビアの首都ベオグラードにあり、そこからセルビアを含む西バルカン６ヵ国を管轄しています。JICAは、バルカン地域で起こった90年代の紛争の当事者の和解や市場経済への移行、環境保全などの分野で、地域諸国の成長と安定化を支援しています。私は当事務所で広報を担当し、所長の秘書でもあります。国際協力の現場は、異文化が接触する場です。協力がよりスムーズに行われるためには、相互理解が欠かせません。私は、名桜大学で得た文化人類学の知識を基盤に、日本とバルカン地域諸国の相互理解を深める活動をこれからも続けていきたいと考えています。

私の指導教員だった李教授ならびに、沖縄空手のご指導をいただいたスポーツ健康学科の高宮城繁教授（当時）、観光環境領域の許先生、大谷先生、その他の先生方には、豊富な知識のみならず、「学ぶ楽しみ」をご教授いただきました。充実感に満ちた毎日を送らせていただき、心より感謝申し上げます。

名桜大学のこれまでの業績に敬意を表するとともに、今後のさらなるご繁栄をお祈りいたします。

（独立行政法人国際協力機構（JICA）
セルビア出身）

# 新崎康博先生に感謝を込めて



坂田ロスナエニ
（2004年度修了 旧姓：ロスナエニ・タワン）

私はインドネシア共和国南スラウェシ州の州都・マカッサルの出身ですが、2000（平成12）年から５年間、名桜大学で学びました。私が日本に来るきっかけとなったのは、1998（平成10）年にマカッサルで日本の国際協力機構（JICA）の南スラウェシ地域保健強化プロジェクトの秘書として１年間働いていたとき、このプロジェクトリーダーが沖縄出身の医師・故新崎康博先生でした。先生は、私に夢にも見なかった日本留学へのチャンスを与えてくれました。

JICAでのコミュニケーションは英語でした。日本語をあまり話せない私は、2000（平成12）年４月に国際文化学科に入学するとはじめの１年間は、他の留学生と一緒に日本語を学びました。名桜大学では同級生に恵まれ、互いに励ましあいながら日本語を学び、留学生同士の会話も日本語限定としたことが、日本語習得の近道だったと記憶しています。

２年目は、日本人学生と一緒に専門科目も履修しました。教室にテープレコーダーを持ち込み日本語の講義を録音して聞き返したこともありました。

2003（平成15）年３月、国際文化学科を卒業し、同大学院に進みました。大学院ではインドネシアの民族紛争について研究しましたが、シーキンス先生や山田先生、キャロライン先生といった先生方のご指導のおかげで、2005（平成17）年に修士号を頂戴することができました。名桜大学では良き友人、先生に巡り合うことができ、本当に有意義な５年間でした。

また、忘れられないのが課外活動です。名護の小・中・高校で、母国インドネシアの文化を紹介しながら子どもたちと交流できたことは、良い経験になりました。名護市で行われる世界家庭料理フェアに５年間参加したことも、思い出深い体験です。そのときお世話になった名護のレストランのお母さんとは、今でもお付き合いさせていただいています。

そして一番忘れられないのは、2004（平成16）年12月にインドネシア・スマトラ島沖で発生した大地震と津波の被災者を支援するため、名護国際交流会館でチャリティーコンサートを開催したことです。このときは、名桜大学の学生、職員の方々をはじめ、名護市民、沖縄県民の皆様に多大なるご支援をいただき、インドネシア国民の一人として感謝申し上げます。

最後に、名桜大学が今後益々発展し、地域社会はもとより、日本の将来を担う人材を輩出されることを願ってやみません。

（インドネシア出身）

# 有意義だった学生生活



鬼頭　和子
（2012年度修了）

私は、名桜大学大学院看護学研究科１期生で鬼頭和子と申します。現在、名桜大学人間健康学部看護学科の教員として勤務しております。

私は他県出身者ですが、縁あって、1993（平成５）年から本部町に在る精神科病院に勤務していました。当時の北部地域の医療現場では、医療職の人材不足、看護師の教育環境も不十分な状況でした。そのため、看護職としてキャリアアップを考えたとき、本土など遠方で教育を受けるしかなく、私は子どもの成長に合わせ、何年もかかり学習していましたが、容易なことではありませんでした。

そんな中、名桜大学の看護学研究科設置は、私にとって本当にうれしい出来事で、迷わず進学を決意しました。しかし、学業と仕事の両立には想像以上に苦労しました。管理当直、病院の業務、家庭での母親としての役割、大学院での授業や研究に追われ、どれもこれも中途半端になってしまい、一旦仕事を離れ学業に専念することにしました。家族の協力で学業に専念する日々でしたが、得るものもとても大きかったです。

学生生活で特に印象深かったことは、精神に障害を持った人が社会で生活していくため、社会技能やコミュニケーション能力を身につけるSocial Skills Trainingという方法があります。これを、臨床で行い、教員のスーパーバイズを受け、病棟のスタッフと共に改善点についてミーティングを重ね、その結果、臨床の場に定着させることができました。また、2006（平成18）年から臨床で行っていた研究テーマについて探究し修士論文をまとめることができました。看護学研究科１期生という右も左もわからない状況でしたが、細やかで熱心な先生方のご指導、励まし助け合った大学院の仲間がいたからこそ、とても有意義な学生生活を送ることができました。名桜大学開学20周年おめでとうございます。これからも名桜大学がますます発展することをお祈り申しあげます。

（名桜大学看護学科 助教）

# ３年間の研究が今の礎



柴山　順子
（2013年度修了）

名桜大学開学20周年・公立大学法人化５周年を迎えるにあたり、心からお祝いを申し上げます。沖縄県北部のこの地に大学ができ、地元で進学することができたことは、見知らぬ土地での生活の不安や生活費の負担がなく、学業に専念できる環境を得ることができたといえます。また、大学で学んだ様々なことを社会に役立てることのできる人材の育成が、この地域を支える力ともなっています。

名桜大学に看護学科ができ、大卒の看護師が北部にも増えてきたことは、地元の病院に勤める者として、とても頼もしく思っています。大学で催される研修会では、本土に行かなくても著名な先生方の講演が聴講でき、職員のスキルアップとリフレッシュの機会にもなっており、楽しみにしています。

私自身は、名桜大学大学院に看護学研究科が開設された2011（平成23）年に１期生として入学しました。名護市内に住んでいるため入学金は地域外の半額、フルタイムで勤務しながら修士課程を履修するために長期履修制度を利用し、３年間で修士課程を修了する計画を立てました。６名の１期生は研究の基本もわからないまま、先生方の講義やゼミを通して学んだことの情報交換をしながら、それぞれの研究を進めていきました。質的な研究にはじめて取り組んだ私でしたが、研究の概念枠組みをどうするのか、どのようなインタビューをするのか、分析方法をどうするのか等々、担当教授の金城祥教先生や同期の院生とディスカッションしながら、有意義な時間を過ごせたと思います。最終的には「新人看護師のチーム参画プロセスとチームワークコンピテンシー」として論文をまとめることができました。

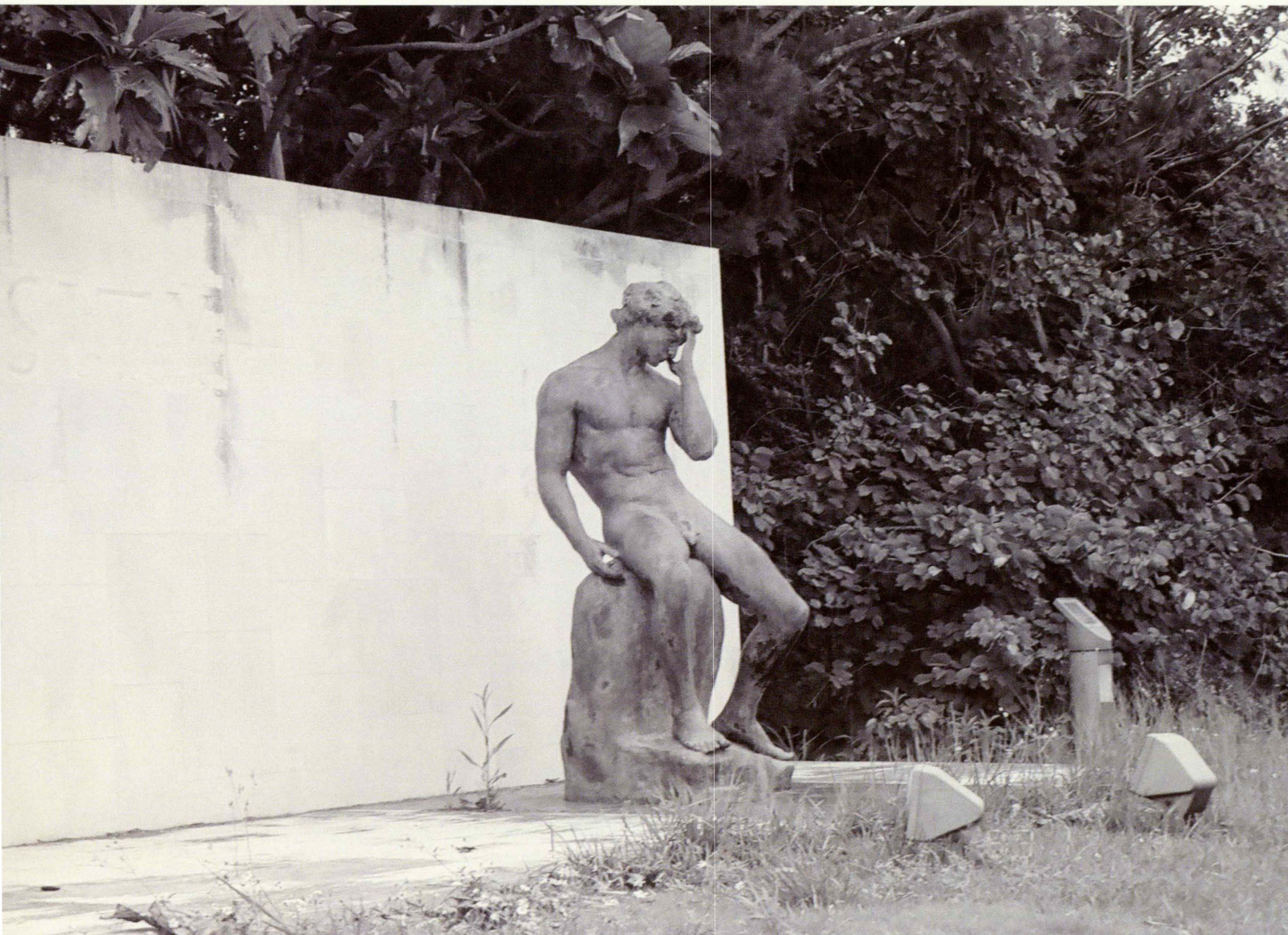
今後は、地域医療への貢献を理念とする北部地区医師会病院でこの研究成果を現場で活かせるよう引き続き取り組んでいきたいと思います。

（北部地区医師会病院 副院長兼看護部長）



# 7章

# 研究活動



# 研究活動と学会活動

西平　守孝　沖縄美ら島財団総合研究センター

研究活動と学界活動は表裏一体です。主に研究を通して学会と関わり、多くの人々と知り合い、互いに成果を共有します。論文を発表し読むだけでなく直接面談でき、批判され助言を貰い反省の機会も得られて、研究を展開する上でも有益です。学会との関わりは、ただ所属しているだけのものから、深く運営に関わるものまでさまざまです。また、社会的活動として、シンポジウムやいろいろな委員会や審議会などに関わる他に、市民の学習支援などもあります。研究のスタイルもさまざまで、課題を絞り込み、速やかに優れた成果を挙げるために共同研究をおこなうことが普通ですが、一方で、時流に流されずコツコツと取り組むスタイルも、今なお見られます。

私は、外で遊ぶことと生き物を観ることが好きで、自然環境下で生物の暮らしぶりを永いこと観察してきました。ほとんどが自分の目や手足を使っての肉体労働で、博物学の展開ともいえるような普通の手法を使い、大がかりな機器などは用いないものでした。一見関係なさそうに見える対象や現象も、陸海を問わず動物植物を問わず、いろいろ観察しました。自分の勉強のためにサンゴの図鑑を作り、後に国外の専門家とともにややまとまったものを作りました。何事にも楽しく励むようにしてきました。サンゴ礁の岩穴のウニを観て、ふとノグチゲラの巣穴にはどのような動物が棲み込むのか連想の環を広げ、サンゴの窪みに動くものを目にすると、樹洞の中の生き物と比べ、ホシズナの死殻などがつくる砂浜では、森の落ち葉が形を失って土壌を作ることに想いを馳せ、樹下の雨宿りではテーブルサンゴの陰に潜むウニや魚を想ったりしました。

万事この調子で、何をどの角度からどのように観るか、どう解釈し理解するか、いろいろ観たものを対象の枠を超えて統合し、包括的で適用範囲の広い考え方にどう纏め上げるか。一見関係のなさそうな多くの場所、多くの生き物、さまざまな現象を観てきたおかげで、群集の成り立ちや多種共存を「棲み込み連鎖」という概念で理解するようになりました。これは、広く知られている「食う―食われる」関係や競争などとは別の角度から多種共存の筋道を理解するもので、自然の保全や復元でも展開が期待できると考えました。

サンゴやサンゴ礁に関する経験を自分だけのものとせず、他の人たちの学習支援にも役立て、環境保全にも役立てようと努めてきました。環境問題への取り組み方は、表に出ることなく、求められれば意見を述べるというスタイルで関わってきました。

また、荒廃したサンゴ群集の復元に、限られた期間だけ莫大な費用を充てるより、草の根的でも日常的な取り組みが重要と考え、安価で手軽で安全で効率的なサンゴの移植法を考え出し、市民が手軽にサンゴ礁の保全に取り組める素地を作りました。外国では適用されて、移植サンゴの成長にともなって魚類が種・数とも増加することが実証されています。

これまでのさまざまな活動に対して、2008年に日本生態学会から功労賞、2010年に日本学士院エジンバラ公賞、2012年に日本サンゴ礁学会から学会賞を頂きました。身に余ることで、これからも自分のスタイルで、できる範囲で、励みたいと考えています。

# 「2010年 LOIS功労賞」受賞とシニア会員を拝受

**田邊　勝義**　国際学群経営情報教育研究学系情報システムズ専攻 教授

電子情報通信学会から、平成23年に「2010年ライフインテリジェンスとオフィス情報システム功労賞（LOIS功労賞）」を受賞し、平成24年に「シニア会員」の称号を拝受いたしました。このような名誉ある賞・称号を頂くことができ、身に余る光栄であると同時に身の引き締まる想いです。

当学会とは、かれこれ30年余りの付き合いであり、当研究会の前身である「オフィスインフォメーションシステム研究会」において、幹事補佐、幹事を務め、全国の研究会の企画・運営および活性化に尽力してきました。その活動において、更に研究会を発展させるために、新たにライフログ関連の研究分野を包含した形態へと研究会を移行させることに致しました。世の中にはライフログとして大量のデジタル情報が蓄積されるようになり、こうしたライフログを活用したサービスを支える蓄積、管理、利用に関する技術や「人の知的生産活動」に関するシステムおよび技術を扱う研究領域として、新たに「ライフインテリジェンス」という言葉を追加し、「ライフインテリジェンスとオフィス情報システム研究会」と名称変更することにしました。この時、学会内での調整作業に奔走し、この名称変更に貢献したことも評価される一因であったと推察されます。

また、当研究会の発表数増加を狙うという名目で、自分が最も行きたい場所であった沖縄での研究会を３月上旬に初めて開催するという試みも行いました。この企画が大当たりし、発表件数が前年同月の３倍を記録するという快挙を達成しました。その後は、沖縄で研究会を行うことが恒例となりました。

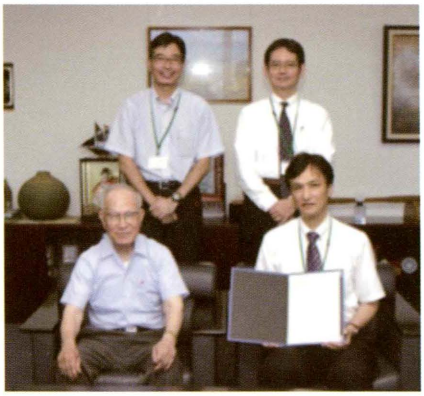
今後の学会への貢献もさることながら、名桜大学での研究会の開催、多くの学生を全国大会レベルの大会で論文発表させること、さらには論文誌へ投稿させること等を推進していきたいと考えております。

特に学生の皆さんは、各種研究会に参加し、最新の研究発表に触れることで、研究内容だけでなく、発表スライドの作成方法、研究発表の仕方、論旨の組み立てと展開方法、そして研究討論を通じて、沢山の刺激を受けることが出来るはずです。このことは、新たな研究活動の源になるはずですし、卒業研究の進め方にも必ずや役に立つはずです。

そのために私は、機会ある毎に名桜大学に学会を誘致し、学術交流や先端技術に触れる場を提供すると共に、今後も名桜大学が更なる飛躍を遂げるための一助となれるように貢献していきたいと考えております。



注記：ライフインテリジェンスとオフィス情報システム功労賞（LOIS功労賞）と「シニア会員」の称号は、電子情報通信学会ライフインテリジェンスとオフィス情報システム研究会における運営・発展に著しく寄与したことへの功績と、電子情報通信学会の正会員として、電子・情報・通信並びにその関連分野の発展に継続的に寄与したと認められる会員に対して贈呈される。



LOIS功労賞受賞時



シニア会員贈呈時

# 第33回「発展途上国研究奨励賞」

**菅野　敦志**　国際学群国際文化教育研究学系国際文化専攻 上級准教授

平成24年７月２日、東京都港区赤坂の日本貿易振興機構（ジェトロ）本部において、日本貿易振興機構・アジア経済研究所による第33回「発展途上国研究奨励賞」を賜り、表彰式および受賞記念講演会を開催していただく幸運に恵まれました。

同研究所は1963年から発展途上国を対象とした研究に対して表彰を行っていますが、同賞は「途上国に関する社会科学およびその周辺分野の調査研究水準の向上と研究奨励に資することを目的」として、昭和55（1980）年度に創設されたものです。第33回目は、平成23年の１月から12月までの間に刊行され、推薦を受けた49点の著作から拙書『台湾の国家と文化―「脱日本化」・「中国化」・「本土化」―』（勁草書房、2011年、500頁）を選定していただきました。

台湾は、1895年からの50年間に及ぶ日本の植民地統治を経た後、1945年の日本敗戦により「祖国」に復帰し、中華民国の一省として新たな歩みを始めることとなりました。本書では、国籍の転換のみならず、「中国人」として再度の言語・文化転換を迫られた台湾人が経験した「脱日本化」・「中国化」（祖国化）とはいかなるものであったのか、また、後に勃興をみせる台湾ナショナリズムを前に、冷戦下における模範国民の再生産を企図した政府の文化／言語政策が「本土化」（台湾化）の流れのなかでいかなる転換をみせていったのか、といった課題について取り組みました。受賞に際しては、新たな一次史料の発掘や、従来とは異なる新しい視座を提示できたことなどが評価していただけた点だったのではないかと思います。

今回の受賞は、文化政策篇『台湾の国家と文化』が対象となりましたが、同書にはセット本として言語政策篇『台湾の言語と文字―「国語」・「方言」・「文字改革」―』（勁草書房、2012年、356頁）もあります。両書は、早稲田大学大学院に提出した博士論文を基に、その後新たに発表した論稿を加えて出版したものです。刊行に際しては、前者が早稲田大学台湾研究所若手研究者出版助成、後者が平成23年度日本学術振興会科学研究費補助金研究成果公開促進費（学術図書）を受けました。思い返せば、二冊の本格的な校正作業に入ったのは平成23年４月の本学着任後のことで、当時は校正作業で苦しい日々が続きましたが、本学の教職員の皆様からは常に惜しみない激励をいただきました。このように、さまざまな形で、多くのご支援ゆえの受賞であったことに対して、この場を借りて改めて感謝の意を表したいと思います。

地理的にも歴史的にも、沖縄と台湾は一衣帯水の関係にあるといえます。今回の受賞を励みとして、東アジア地域の関係深化に貢献しうる研究に今後も取り組み続けていきたく思っております。



# 第12回日本キリスト教文学会賞受賞について

小嶋　洋輔　国際学群国際文化教育研究学系語学教育専攻 上級准教授

日本キリスト教文学会は、「キリスト教と文学」を洋の東西を問わず学問的主題として研究する学会として、1971年より全国大会、研究会を開催するなどの活動を行ってきた、日本学術会議協力学術研究団体に登録されている学会である。1983年からは学会誌『キリスト教文学研究』を発刊、2013年に30周年の節目を迎えた。日本キリスト教文学会賞も2000年より、「創作部門」と「研究・評論部門」（日本文学・外国文学）の二部門三種類に分け設けられ、今年度で13回を数える。その年度に刊行された「キリスト教と文学」について研究した優れた著作が、学会員の推薦によって集められ、選考されてきた。

第12回日本キリスト教文学会賞は「創作部門」受賞作無し、「研究・評論部門」の外国文学系を竹野一雄日本大学教授の『C.S.ルイス 歓びの扉―信仰と想像力の文学世界』（岩波書店 2012・12）、そして日本文学系を、拙著『遠藤周作 ――「救い」の位置』（双文社出版 2012・12）が受賞した。2013年５月12日、関西学院大学西宮上ヶ原キャンパスで行われた日本キリスト教文学会第42回全国大会において授賞式が行われ、関口安義会長より賞状が手渡された。

このような歴史ある賞を賜ったということで、大変感動している。選定された書籍は2005年に千葉大学に提出した学位論文「『遠藤周作』論―文学と救いの位置」の一部となった論と、それを書き上げる上で考察の必要を感じた問題を後に論文化したものを大幅に加筆、修正したものから成っている。大学院博士課程に進んだのが2002年であるから、10年間に積み上げた「遠藤周作論」をまとめたものといえる。私的なことを述べるならば、この10年間は、先の見えない長い非常勤講師暮らし、結婚、沖縄移住と、様々なことがあった10年だった。本賞受賞は、その生活も含めて評価して頂いたような気がして、その意味でも感動している。

本書の内容は、戦後、高度経済成長期、世紀末という時代を生き、その時代時代が持つ多様な側面に適宜対応していった作家遠藤周作と彼の言説、作品を、その周辺と照応させることで位置づけようとしたものである。つまり、遠藤周作という存在から時代をとらえなおすものといいかえてもよい。学会から与えられた賞状の文言を見ると、「遠藤文学を優れた社会学的な方法で詳細に研究した」とあり、作家至上主義に陥りやすい遠藤研究を、上記のようなスタンスで研究をしたことが評価されたようである。

だが、先に本書を10年間の成果のまとめであると述べたが、遠藤周作に興味を抱き、拙著の研究のスタンスを生み出す要因となった一連のオウム真理教をめぐる事件からも19年が経過した。この試み自体も相対化が必要な時期にあるように感じている。

そして現在、その相対化作業にこの山原の風土は良い影響を与えてくれる、そういった根拠のない直感を抱いている。これからは、キリスト教、宗教の問題に限らず、時代性ということで問題意識を広げ、「沖縄」という問題についても考えてゆきたい。

# 子どもが“子どもらしい生活”を維持するための研究

## －小児がんの子どもの生活・発達支援をベースにした研究への取り組み－

平成20年３月
博士（ヒューマンケア科学）
筑波大学 人間総合科学研究科

**金城やす子** 副学長・人間健康学部看護学科 教授

私の研究のベースは、小児がんで入院している子どもとの出会いであり、「学校に行きたい、お母さんの作ったたまご焼きが食べたい」の一言です。病気の治療を優先するという対応、入院という閉鎖空間で抑制・抑圧された環境下で生活する子どもと子どもの生活に疑問を持つことが研究の第一歩でした。入院という生活が子どもにどのような影響を及ぼすのか、子どもには健康な子どもと同様に生活、発達する権利があるのではないかという考えから、子どもが子どもらしい生活を維持するためには何が必要なのか、何ができるのか研究として取り組みたいと考えました。

はじめに手がけたことは、入院中の子どもへの学校教育の提供です。全国の小児がん治療施設を調査し、院内学級の必要性をまとめて提言することにより、担当の病棟に院内学級を設置し、入院中の子どもが学校に通える体制を整備しました。また、未就学児の生活には通常の保育活動による成長発達支援が必要だと考え、小児病棟に保育士を導入する必要性を明確にし、提言すると同時に、小児病棟に医療保育士を配置・推進するための研究を進めました。教育や医療保育等、病気療養中の子どもが子どもらしい生活を維持するための施策をまとめたものが博士論文です。博士号取得後、医療保育士の業務基準を明確にすることを目的に科研費（2009 ～ 2011）による３年間の追加調査、研究をしました。

現在では小児がんは治る病気とされ、多くの子どもが社会復帰をしています。しかし、治療により体力の低下や免疫力の低下、運動能力の遅れなどが問題となり、また小児がん経験者ということで通常の保育園への通園が難しい状況があります。そこで行ったのが、保育園での医療的な対応の可能性に関する実態調査です。身体障害のある子どもの受け入れについては、多くの保育園が対応し始めていましたが、病弱児の受け入れは十分な状況になく、保育保健の充実が必要ではないかと考えました。実際に保育園ではどの程度の障害や病弱児に対応できているのか、対応する看護職の配置はどのようになっているのか調査しました。その結果、看護師が配置されている保育園は非常に少なく、１園１人の看護師配置であり、医療の場に慣れている看護師が福祉の場で働くための支援システムが十分ではないことが明確になりました。そこで、保育園の看護師が自立できるための支援体制とは何かを考え、モデル事業として研究フィールドを作り、保育園看護師の質向上を図る研修会を開催しました。保育園看護師の支援体制のあり方について、現在も科研費（2012 ～ 2014）による介入研究を進めています。

また、抗がん剤や放射線治療による副作用（口内炎により唾液も呑み込めないほどの痛みや味覚変化等）のある子どもの食についてです。全国の小児がん治療施設を対象に入院中の子どもの食事に関する調査を行い、副作用による口内炎が酷い時には保護者の手作り食の差し入れが効果的であると指摘し、そのうえで各病院が子どもの食事について工夫する取り組みが必要であると報告しました。同時に、健康な子どもの食生活の実態調査を行い、子どもの生活にとっての食の重要性を打ち出しました。さらに、子どもの生活全般の調査から、就寝時間の遅延等、睡眠生活が大きく変化し、子どもの睡眠生活全体に大きな課題があることを指摘しました。子どもの食と睡眠について研究をはじめて10年以上になります。日本公衆衛生学会で子どもの生活リズムに関する内容を毎年発表していたことから、厚生労働省の「睡眠指針策定」研究班から要請があり、現在も継続して調査、研究を進めています。

子どもが子どもらしい生活をすることは当たり前ですが、障害や病気のある子どもにとって、“子どもらしい生活”をすることは難しい状況にあります。障害や病気のある子どもが普通の子どもと同じような生活を保障するための研究的な取り組みは重要であり、その必要性や具体的な方法を明確にしていくためには明確なエビデンス、いわゆる研究的な裏付けが必要です。子どもの、特別ではない、“普通の要求”を満たすため、小児看護の立場にいる教員、研究者としての取り組みが求められます。微力ですが、「子どもの生活」をキーワードに、今後も継続して研究を進めていく予定です。

# 博士号を取得するまで

平成20年３月、博士（学術）
琉球大学大学院 理工学研究科

新垣　裕治　国際学群観光産業教育研究学系観光産業専攻 教授

2008年（平成20年）３月に琉球大学理工学研究科から博士号を受けることができた。テーマは、「インド－太平洋に産するナガウニ属、*E.mathaei*、*E.oblonga*及び同属未記載種の比較研究及びこれら種の学名に関する考察」である。本テーマのナガウニの分類に関する研究を始めたのは、琉球大学理学部（生物学科）の修士課程からだった。修士論文のテーマは、「沖縄産ナガウニ（*E.mathaei*）４タイプの生態学及び生殖学的比較研究」である。この研究では沖縄産ナガウニ４タイプのサンゴ礁域における分布、環境要因（乾湿、温度、塩分濃度）への耐性、生殖時期、精子形態、染色体の比較を行い、当時、種内変異のタイプとして認識されていたこれらを種レベルでの違いであることを説明した。幾つかの発見があったが、その中で最も分かり易く基本的なものとして、４タイプで精子形態が異なることを発見したことである。今でも、顕微鏡下で精子の形態の違いを発見した時の感動を記憶している。

修士修了後、興南学園に３年間教員として、中学校と高校で理科と生物を教えていた。1992年（平成４年）に沖縄県人材育成財団から助成でインドネシアへ１年４ヵ月の留学をする機会を得た。留学と言っても、受入大学（サムラトゥランギ大学）に通学をしたのは最初の３ヵ月で、その後はインドネシアの方々を回りナガウニ類の分布調査、棘皮（きょくひ）動物（ウニ、ナマコ、ヒトデ）とサンゴの分布調査も行った。インドネシアの主な島々（セレベス、ボルネオ、ジャワ、スマトラ、イリヤンジャヤ）及び離島（ケイ、ビァック、スンバ、コモド、バリ、ニアス、ビンタン等）、今となっては赴くことができない多くの地域を調査とのことで訪問した。熱帯のサンゴ礁、マングローブの森林、ジャングル等、様々な自然を体験した。人々（部族？）、街並み（集落）、食べ物、いずれも沖縄や日本では体験できない脳裏に刻み込まれるような印象深い経験であった。

本学に就職した1994年（平成６年）以降は、クロナガウニ*E.oblonga*の記載産地であるモーリシャス（インド洋西端）を訪問し、ナガウニ類の分布調査、沖縄産ナガウニ類との交雑実験（沖縄から生体及び冷温保蔵をした配偶子を運搬）を行った。モーリシャスでは国立大学であるモーリシャス大学の実験施設を無償で提供して頂いた。また、周辺地域として、マダガスカルとセーシェルでもナガウニ類、棘皮動物やサンゴ類の調査も行った。太平洋では、父島（小笠原諸島）、フィリピン、グアム、ハワイで同上の調査及び交雑実験を行った。

また、標本調査として、ナガウニ*E.mathaei*とクロナガウニ*E.oblonga*の命名者である Blainville 博士（フランス人）の標本を保存していると思われるフランス国立自然史博物館（パリ）、ナガウニ類の多くの標本を保存しているスミソニアン自然史博物館（ワシントンD.C.）、ナガウニ類の長大なモノグラフを記した Mortensen 博士の標本を保存しているコペンハーゲン大学動物学博物館を訪問した。

これら、調査・実験により、インド・西太平洋に分布するナガウニの種類として、少なくとも５種（３種が新種）が分布し、沖縄に分布する４種の内２種は新種、ハワイに産する２種のナガウニでは１種（黒色ナガウニ）が新種であると結論づけた。また、この調査を通し、ホロタイプ（学名を記載する際に指定した標本）を探し出すことはできず、消失した可能性が非常に高いとした。この様なことをまとめたのが私の博士論文である。

博士論文を完成させるのに19年の時間を要した。この間に、太平洋やインド洋の島々、アメリカ本土、ヨーロッパの国々等、いろいろな所を訪問した。いろいろなカルチャーショックを受け、いろいろな人に会い、いろいろなものを見て、体験し、現在、専門の一つとしている観光を考える上でも非常に有益な経験ができたと思っている。途中何度も研究への情熱を失うこともあったが、その度にいろいろと励まして頂き、また、博士論文執筆へ導いて頂いた上原剛博士（琉球大学名誉教授）や琉球大学生物学科の先生方（当時）に多くのご支援を頂いた。調査で訪問した先でもいろいろな方々にご支援を頂いた。また、この調査・研究を実施する上で、沖縄県人材育成財団（当時）・宇琉麻学術研究助成・名桜大学から多額の研究助成を頂いた。これら全てが揃って、博士論文としての研究成果をまとめることができた。関わって頂いた全ての方々、機関に感謝を申し上げる次第である。

# タンマユット派の研究

平成17年１月、博士（文学）
早稲田大学大学院 文学研究科

山田　均　国際学群国際文化教育研究学系国際文化専攻 教授

わたしは平成17年に、早稲田大学から博士号をいただきました。

わたしの研究題目のタンマユット派というのは、タイ仏教教団の中の一つのセクトです。この文を読んでいらっしゃる方は、映画『王様と私』をご存知でしょうか。スコットランド美人デボラ・カーとモンゴル人の血を引く個性派ユル・ブリンナーという二人の名優の代表作となった、ハリウッドのミュージカルです。この中で描かれている「王様」のモデルとなったのが、タイの現王朝の４代目の王さまで、ラーマ４世モンクット王です。1851年の即位、といいますと日本では嘉永４年、将軍家慶の治世で、いよいよ外国船の来航が頻繁となり、攘夷の気分が高まっていた時代です。王はそれから1868年、日本の明治維新の年までの17年間を、国王として国のかじ取りに当たりました。それは、日本でも中国でも、西欧文明に対抗するための途を大勢の人が試行錯誤して、模索を重ねた時代でした。曽国藩にしろ、吉田松陰にしろ、先覚者たちが、社会の上に立つ将軍や皇帝の無知・無理解の中、命がけの活動をつづけたのです。

タイの場合はちょっと事情が異なりました。モンクット王は、専制君主として即位する前に、27年間の長きにわたって仏教僧侶として僧院生活を送っていました。その間、自由な立場を利用して、多くの外国人と交際し、宣教師とも深く対話の時間を持つことができました。交換教授も大いにやり、フランス人宣教師からはラテン語を、アメリカ人からは英語を習い、西洋文明とそのバックボーンであるキリスト教思想についても理解を深めました。王は数学や天文学にも長じ、自ら日食や月食を計算し、観測していたほどです。しかし、王の周囲には王と並ぶ知識を持ち、王を助けてくれるような先覚者は一人もいませんでした。しかし、国際事情は急を告げています。人材がないからと言って、うかうかしていたら、タイは近代化の波に乗り遅れて、西洋列強の餌食になるのは目に見えています。

即位をしたモンクット王はまさに孤軍奮闘。国のリーダーとして、また最大の知識人として、あらゆる方面に精いっぱいの力をふるいました。そうした時代に、国の精神的バックボーンとして大きな力を発揮して、仏教界をまとめたのが、王が出家時代に育てた、近代感覚を持つ弟子たちの一派「タンマユット派」だったのです。一方、人材を作るために何十人もの子供をつくり、ヨーロッパ人から教師を雇って、宮中の学校で教育しました。デボラ・カー演じるところの女性教師もその一人でした。この王子たちは、王の死後、それぞれの分野で近代のタイを作るための中心となりました。モンクット王のやった仕事の中の、最大のものが教育だったのかもしれません。

# カヌードスの乱—その全体像の構築

平成25年3月25日、博士（文学）
筑波大学 人文社会科学研究科

住江　淳司　国際学群国際文化教育研究学系国際文化専攻 教授

本研究は、1896年から1897年にかけてブラジル北東部のバイーア州カヌードスで発生した所謂「カヌードスの乱」をとりあげ、その全体像を構築することを目指した。従来の研究では、カヌードスの指導者アントニオ・コンセリェイロをカトリック教会に反抗する狂信者、あるいは共和制に反対の立場をとる王党派とみなす見解が支配的であったが、それらはいずれも偏見に基づく一面的な理解であり、カヌードスの運動の全体像を描くには至っていない。そこで本研究を筑波大学の博士号取得の学位論文としてまとめあげた。本論文では、この運動を第一部においては宗教共同体としての側面から内在的にアプローチする一方、第二部においては民衆運動という側面から共同体をとりまく社会経済的及び政治的環境をふまえ外在的に考察した。それによってカヌードスの乱という事件の全体像を浮かび上がらせることが本論文の目的である。

史料としては、従来用いられてきた文献の他に、カプチーノ派修道士の報告書、共同体の指導者が用いた説教集、医師でブラジル共和国連邦議会議員であったセザル・ザマによる共和国政府に対する請願書などを含む同時代的な記録を活用するとともに、リオ・デ・ジャネイロの陸軍省公文書館収蔵のカヌードス関係の資料をも参照した。

ブラジルにおけるカヌードス研究の歴史はかなり長く、文献も豊富であるが、事件当時においては「反カトリック的狂信主義」あるいは「反共和国的王党主義」という偏見が支配的であり、また後世の歴史家たちは逆にこれを「千年王国的メシアニズム」とみなしたり、あるいは未完の「ブルジョア革命」、さらには挫折した「共産主義革命」とみなしたりするなど。その解釈において一致をみることはなかった。筆者はカヌードス共同体の原点を千年王国論に見る点では従来の説に共鳴するところもあるが、共同体をとりまく政治や経済の状況などにも目を配り、より多様な視点から詳細かつ包括的なカヌードス像を描き出し、オリジナルな結論に達した。

本論部分を構成する六つの章では、宗主国ポルトガルにおけるカトリック信仰のあり方、事件の舞台となったブラジル・バイーア州の地理と経済、共同体の指導者コンセリェイロの人物像と共同体の組織、カトリック教会との関係、バイーア州の政治経済的状況、さらには中央政府との関係に至るまで詳細かつ包括的な考察を行った。こうして一見したところは、混沌きわまりない様相の中から、最終的には一つのカヌードス像を引き出そうとした。つまり、カヌードスを王党派の狂信者が起こした反乱であったとする伝統的な見方を、ここではカヌードスに対峙し、それを危険視した当時のブラジル支配者層の側の歪みの反映であったとみなし、その歪みの原因をあぶりだすことに成功した。こうした視点や手法は、「反逆者」やマイノリティーの研究には非常に有効であると思われる。



筑波大学にて

# 明治期の小・中学校体操科教授細目に関する研究

平成21年４月31日、博士（体育科学）
筑波大学 博乙第2443号

明治24（1891）年～明治45（1912）年－体操科教授細目からみた体育実践－

向山　貴仁　人間健康学部スポーツ健康学科 教授

「教授細目」は、明治期、大正期、昭和戦前期における学校の各教科の「教育計画」である。「教授細目」は、学校体育だけでなく全教科の「実践的側面」を窺うことのできる歴史的史料と捉えることができる。

小学校の教授細目は、「小学校教則大綱」（明治20〈1891〉年）の第二十条で「小学校長若クワ首席教員ハ小学教則ニ従ヒ其小学校ニ於テ教授スヘキ各教科ノ教授細目ヲ定ムヘシ」と作成が規定された。「小学校教則大綱」は明確な目的規定をもち、明治20年代後半の教授法書は同法を前提とした教授法が示される。さらに、「小学校教則大綱」以降の教授書には、教授細目の作成、教案の作成に関する指示が共通して認めることができる。教授細目の作成に関する第二十条の規定は公教育教育内容の普及、浸透という観点からの重要性が認められる。

また、中学校の教授細目は、「中学校教授要目」（明治35〈1902〉年）の前文において作成が規定された。さらに、教授細目は「国民学校令施行規則」（昭和16〈1941〉年）の第三十二条では「授業細目」の名称となった。教授細目は、明治期から昭和戦前期まで50年以上作成が規定された。昭和戦後期以降は「指導計画」となり、明治以降今日まで110数年、教育課程において機能し役割を担ってきた。このような歴史的過程を経てきたにも拘わらず、体育関係者の間で話題に上ることは希であり、永い間その名称や存在の認識に関心が持たれなかった史料といっても過言ではない。

本研究の動機は、教授細目の存在を平成３（1991）年、筑波大学附属中学校教育課程研究所の書架で東京高等師範学校附属中学校教授細目の「明治43（1910）年版」で知ったことであった。このことから、明治期における中学校体操科の具体的状況について多くの示唆が得られ本研究実施の契機となった。さらにその後、平成10（1998）年、筑波大学の附属中央図書館で「明治40（1907）年版」が新たに確認できた。「明治40（1907）年版」及び「明治43（1910）年版」と同時期の中学校数は、全国で287校（官立２、公立229、私立56）であり、「教授細目」も多数作成されたと推察された。しかし、これまで確認できた中学校教授細目は「明治40（1907）年版」及び「明治43（1910）年版」のみであった。附属中学校の両版は、明治後期における附属学校の体育実践の具体を把握することのできる資料であり、同時に中学校体操科教授細目の手掛かりとなる資料的意義が示唆された。

小学校教授細目の所在は中学校より遅く、国立国会図書館において「200編」を超える所蔵を確認した。明治20年代以降の小学校数は25,000校を超えるため、多くの教授細目の存在が予測される。しかし、これまで教授細目に関しては全国的な「所在」や「作成状況」等、その実際が明らかになっていなかった。当時、国立国会図書館の「200編」の教授細目にアプローチする研究者もなく、資料は手つかずの状態であったこともあり、教授細目の「所在」や「作成状況」の確認に関する研究的興味を感じた。また、体操科教授細目の検討により、初期の「体育実践」における生徒・教師・教材等に関する新たな知見が得られ、これまで以上に正確な実践的側面の状況解明に繋がると予測した。

本研究の目的は、明治期における「学校令前期」以降の明治24（1891）年から「学校体操教授要目」制定以前の明治45（1912）年までの小・中学校体操科教授細目を対象とし、「体操科教授細目からみた体育実践」の状況を明らかにすることであった。

［論文構成］

序論

第Ⅰ章　小学校教授細目の規定制定までの経緯と教授細目の構成と機能・役割

第Ⅱ章　小・中学校体操科教授細目の作成状況

第Ⅲ章　小学校体操科教授細目の参考文献

第Ⅳ章　小学校体操科教授細目の教材

第Ⅴ章　小学校体操科教授細目の「教授上の注意」

第Ⅵ章　小学校体操科教授細目の類別による比較検討

第Ⅶ章　東京高等師範学校附属中学校体操科教授細目の検討 —「明治40(1907)年版」—

第Ⅷ章　「明治43(1910)年版」東京高等師範学校附属中学校体操科教授細目の学校体操統一に果たした役割

結論

本研究は、国会図書館を中心とし都道府県立図書館、大学図書館等の施設、機関の教授細目を対象とした限定条件を持つ。しかし、教授細目作成規定への対応と体育実践の具体的状況を明らかにし、全国的状況に近い事象を実証した。また、明治期における小･中学校体操科教授細目は､学校体育の諸制度、法規、文献と体育実践を繋ぐ、教育課程の系統化と全国的統一化の役割を担ったことを明確にした。さらに、「学校令前期」以降「学校体操教授要目」制定までの「参考文献」､「教材」､「教授上の注意」､「生徒」､「教師」等の体育実践について明らかにした。以上の諸点から本研究は、「体操科教授細目からみた体育実践」として「諸制度、法規、文献」と「体育実践」との連関を実証的に示したと総括する。

# これまでの研究活動と今後の抱負

平成25年５月11日、博士（社会学）
ハワイ大学 マノア校大学院

**山里　絹子**　国際学群観光産業教育研究学系教養教育センター 准教授

ハワイは様々な国・地域からの移民やその子孫たちによって多民族社会が形成されており、移民の歴史や生活及びエスニック・人種関係を学ぶには大変興味深い場所です。私は、ハワイ大学マノア校社会学研究科修士課程及び博士課程で合計７年間社会学を勉強した後、平成24年４月に名桜大学教養教育センター専任講師として着任し、その１年後の平成25年５月に博士号（社会学）を取得しました。

私の主な研究テーマは、近現代の移民の歴史と個々の移民先での生活とそれに伴うアイデンティティの形成・変容です。社会学では、アイデンティティは、社会と個人の歴史と共に継続的に構築・再構築され、自己認識もさる事ながら「他者」との関わりの中で形成・変容していくものとされています。したがって、近現代移民とアイデンティティの形成・変容を研究するということは、移民当事者が移民の前後でどのような自己認識を持ち、どのような「他者」との遭遇・関わりを通してアイデンティティの形成・変容があったのか、また時代の移り変わりとともにそれらがどのような形態で推移していくのかに焦点を合わせて調べることにあります。

私はこれまで特にハワイ・米国本土と沖縄双方間の国・地域を跨いだ人々に焦点をあててきました。修士論文では、これまで、沖縄系移民研究でほとんど取り上げられることがなかったハワイの帰米二世に注目しました。「帰米二世」とは、米国で生まれたが、幼年期を日本で育ち、日本で教育をうけ、戦前もしくは戦後、再び帰ってきた二世のことを言います。ハワイと沖縄のふたつの場所を生きた帰米二世のライフストーリーをとおして、ハワイの沖縄系コミュニティにおける彼・彼女らの役割とアンデンティティ形成との関連性、またその社会的・歴史的変容について調べました。

博士論文では、米国統治下の沖縄において1949年から1970年までの間実施された米国留学制度に焦点をあて、米国留学がどのように沖縄出身の留学生個々人の内面及び戦後沖縄社会の形成に影響したのかを考察しました。インタビュー調査を通して、沖縄戦や皇民化教育を経験した沖縄の若者がどのようなプロセスを経て米国留学をするに至ったのか。また、留学生は留学先の社会において、どのようにアメリカ人を含む「他者」と接触・交流し、自己を形成したのか。あるいは、留学先の社会における人種・エスニック、ジェンダー、クラス（階級）などの関係の中で、自己をどのように再形成していったのか。また、米国留学という「資本」を獲得した彼らは、戦後の沖縄社会においてどのような「他者」と出会い、米国留学者としてどのような「他者」として位置づけられたのか。沖縄出身留学経験者のライフストーリーを基に、留学という形の越境経験に基づく沖縄人のアイデンティティの交渉過程について考察しました。

海外留学をめぐる学生の流動性が大きい現在、海外留学を多角的な視点から研究する意義は大きいと言えます。博士論文調査を踏まえ、平成24年11月、「琉球・沖縄の留学と社会形成」というテーマのシンポジウムを沖縄県内の琉球史研究者らと共同企画し名桜大学総合研究所において開催しました。シンポジウムでは、琉球王国時代から現在に至る沖縄の海外知識の獲得の歴史に焦点をあて、琉球・沖縄から日本・中国・米国への留学について合同研究発表を行いました。今後も、留学を歴史的連続性の中で捉え、留学のもつ普遍的価値及び社会的影響についての研究をさらに展開していきたいと願っています。最後に、これまでの研究活動と留学経験を基に、留学を志す学生や外国語を使って様々な人との交流や生活をしたいと願う学生の支援に力を注いでいきたいと思います。

# 他国や歴史に学ぶ英語教育

**与那覇恵子** 国際学群国際文化教育研究学系語学教育専攻 教授

平成16年に採用され今年で10年目となる名桜大学勤務であるが、その前は高校の英語教師として20年近くの勤務を体験してきた。高校、大学と異なる二つの職場を経験することができ、可能性に満ちた若者たちから刺激を受け続けることができることを非常に幸運なことと感謝している。

教えること一筋、教育一筋だった高校と異なり、研究活動という新しい側面は大学の魅力である。研究費をいただき、文献を読み研究することも義務の一つであるということが大変嬉しくありがたかった。今でも「論文を提出して」と要求されることはありがたく嬉しい。

専門が英語科教育ということもあり、英検講師として行ってきた講演や英語教育達人セミナーでの実践報告、英語授業のビデオ教材作成など高校での経験を踏まえ、初期の頃は授業実践研究が多かった。「ディベートを英語教育に活かす」や“Introducing Okinawa Culture material in English Classes -Its significance and how and what to introduce”（沖縄文化の教材への導入）等の論文タイトルが示す。又、高校英語教師を対象にした文科省標記事業の英語教員集中研修の講師を長年担当させていただいた経験から、現場の教員が求める研修のあり方について高校教員のアンケート調査を基に書いた。

変化したのは名護市が英語教育特区となりイマージョン教育を模索したことで小学校英語教育に関わるようになってからである。小学校英語教育先進国の韓国を２度訪問し日韓比較の研究論文が続くようになった。「英語村を通して見る韓国の英語教育」や“Investigating the Problems of Japanese Elementary School English Education”（日本の小学校英語教育問題を考察する）で問題に迫り、“Elementary School English Education-Two Influential factors found in Japan and South Korea.”（小学校英語教育：日韓比較における二つの重要要素）で日韓小学校英語教育の違いが文化的・政治社会的要素にあると指摘した。“A comparative textbook analysis-A junior high school English Language Textbook A and South Korean elementary school English Language Textbooks”（日本の中学校英語教科書と韓国の小学校英語教科書比較）“A comparative textbook analysis-South Korean English Textbooks and Eigo note Ⅰ Ⅱ.”（日韓の小学校英語教科書比較）では教材の問題を取り上げ、“A Study on English proficiency of Japanese and Korean 6th graders.”（日韓の小学生６年生の英語力比較）ではその結果としての両国の小学生の英語力を児童英検で比較した。これらの発表はちょうど日本が小学校での英語教育のあり方を模索していたこともありJALT（全国語学教育学会）、JACET（大学英語教育学会）、Asia TEFL、JESELE（全国英語教育学会）などで毎回多くの参加者を集め、JALTではJTE（日本人教師）、ALT（外国人指導助手）で立ち見も出るほどであった。

現在は“Elementary School English Education and its Environmental Factors in U.S. occupied Okinawa 1945-1953”（米国占領下の沖縄における小学校英語教育とその環境因子）をテーマに３～４本の論文に取り組んでいる。これまでと異なり、歴史に学ぶことの大切さを感じさせられており、発表の場も英語教育史学会やアメリカ学会、JSA（日本研究学会）と異なってきている。これからの新しい出会いや発見が楽しみである。

# 日本ルーラルナーシング学会第２回学術集会を開催して

吉川千恵子　人間健康学部看護学科 元教授（学術集会大会長）

2006年４月、人間健康学部スポーツ健康学科開設２年目に看護学担当教授として赴任し、学科の運営に関わりながら、2007年４月の看護学科開設に向けて準備委員として関係教職員と一連の作業に関わった多忙な時期があり、併せて日本ルーラルナーシング学会開催準備で奮闘した日々が懐かしく想起されます。2007年４月看護学科開設に伴い、看護学科教授として2011年３月まで勤務いたしました。

大学にとって「教育・研究・実践・地域貢献」は重要な課題でありますが、島嶼県である本県において、特に名桜大学が位置する北部地区において大学の果たす役割は、保健医療福祉分野で大きく期待されていることを赴任して実感いたしました。

そこで、学会開催の機会があり、看護学科開設年であったが北部地区の保健医療福祉の関係職者と大学が一体となった学会となるよう「日本ルーラルナーシング学会第２回学術集会」を、研究・実践活動を協働・共有する場として2007年６月30日～７月１日の２日間名桜大学で開催しました。筆者は本学会の設立準備委員として2005年学会発足に関わり、その後理事となり学会長を引き受けるに至りました。日本ルーラルナーシング学会の設立背景には、へき地に勤務する看護職者を対象に調査した結果、文化、健康、生活、保健、医療、福祉、社会資源、看護上の問題が明らかになり、離島・へき地に勤務する看護職者の研修・サポート体制の構築とへき地看護学の研究が急務であると考えられたこと、関係者の間で学会設立の必要性が高まったことにありました。本学会が島嶼県沖縄北部にある名桜大学で、教育・研究・人材確保の視点で、病院、診療所、訪問看護ステーション、市町村、保健所、教育機関の関係者が日ごろの実践・研究成果を発表し討論を深めたことは、時期的に大変意義があったと評価されました。県内外の看護関係者約300名の参加があり、活発に論議が展開されました。



学会テーマとプログラムの概要

１．学会テーマ「島嶼・へき地から健康への挑戦―島人が育てる看護学―」

２．鼎談「島人の健康確保の表と裏」

講師は元沖縄県伊江村村長島袋清徳氏と県立北部福祉保健所所長比嘉政昭氏。島袋氏は４期16年にわたり伊江村長として、「教育と医療に離島があってはならない」「人生の最期は島で平等に見送る」という信念を貫き、保健・医療・福祉・教育・経済に様々な政策と実行力で離島から健康へ挑戦してこられました。比嘉氏は離島を管轄する保健所の支援のあり方を示されました。

３．シンポジウムテーマ「島人の健康ニーズに応える看護職者と看護体制」

①「島嶼看護教育の現状」
植田悠紀子氏（県立長崎シーボルト大学教授）

②「島嶼地域の看護人材確保と提言」
春山　早苗氏（自治医科大学看護学部教授）

③「地域特性に応じた訪問看護活動―訪問看護ステーションの機能・役割の検討―」
村嶋　幸代氏（東京大学大学院教授）

４．実践例・遠隔討論
テーマ「遠隔看護・遠隔教育の現状と課題」
吉川　千恵子（名桜大学看護学科教授）
金城　芳秀氏（沖縄県立看護大学教授）
若松　秀俊氏（東京医科歯科大学）
の３氏の遠隔システムによる３大学間の討論。

５．ラウンド・ミーティング（分科会における発表と討論。演題数：30題）
分科会１「島嶼・へき地の看護ケア」
分科会２「島嶼・へき地の人材育成と確保」
分科会３「島嶼看護学の確立」

分科会４「島嶼看護と国際支援・遠隔看護」
分科会５「島嶼・へき地における高齢者看護」

６．エクスカーション

学術集会２日目、沖縄県北部地域を巡り、長寿の里「大宜味村現地研修」、元古宇利島診療所長山川宗一郎氏（現県立中部病院離島支援担当）による「古宇利島の保健医療」、古宇利島を巡りながら超高齢者の住む島で診療業務のみでなく、通院者の送迎や生活援助、火事が発生したときは消火活動の中心的役割をしているなど生々しい現実的な話を伺うことができました。

おわりに（感謝をこめて）

学会成功のために、大学と当時の看護学科教員と学生、スポーツ健康学科教員と学生、前メディアネットワークセンター職員には全面的にご協力いただきました。特に３大学をつなぐ遠隔シンポジウムを本学のIT技術を駆使して成功させたことは、以後日本の学会発展に寄与しております。北部地域の保健医療機関の関係者にも物心両面から支援していただきました。日本ルーラルナーシング学会第２回学術集会を名桜大学で開催できたことにあらためて感謝いたします。

名桜大学が北部地域の人材確保と学術振興の拠点となり、ますますご発展されるよう祈念いたします。









# 比較統語論：文の構造と意味解釈の相関関係

**中村浩一郎**　国際学群国際文化教育研究学系語学教育専攻 教授

私は理論言語学の中でも統語論という、文の構造（なりたち）を扱う分野で研究を進めている。現在では、日本語の文構造と意味解釈との相関関係に興味を持ち集中的に研究をしている。

例えば、「僕は村上春樹（の本）が読みたい」という文には「でも僕はよしもとばなな（の本）も読みたい」と続けることができる。しかし、この語順を変えて「村上春樹が僕は読みたい」とすると、文頭に移動された「村上春樹」が強調されて読みたいものはそれだけ、という解釈になる。

このような、目的語を文頭に移動する（かき混ぜ操作と呼ばれる）ことにより、その目的語が強調される現象は、世界の様々な言語、例えば、イタリア語、ハンガリー語、あるいは韓国語などでも見られる。こうした文の構造と意味解釈との相関関係を、カートグラフィーと呼ばれる非常に新しい研究の枠組で分析し、その内容を国際学会で発表し、また国際学会の学会誌に投稿している。その内容を簡単に紹介する。日本語の助詞「は」の意味機能を３種類：文の主題、対照主題、対照焦点に分類することを提案し、更に、日本語の副詞も文全体を修飾するもの、主語を修飾するもの、動詞を修飾するもの、の３種類に分類している。更に、主語を示すとされる助詞「が」に、先ほど述べた「村上春樹」の例のように、他を排除する働きがあることを論じている。



１．口頭発表

(1) 演題："Towards a unified analysis of Japanese adverb types and their syntactitc positions"
学会名：Fourth Anuual Tampa Workshop in Linguistics (TAW 4)
開催地：University of South Florida（アメリカ、南フロリダ大学）日時：2013年３月22日

(2) 演題："*Ga*-marked phrases act as exhaustive identificational focus"
学会名：19th International Congress of Linguists (ICL19)
開催地：University of Geneva, Switzerland（スイス、ジュネーブ大学）
日　時：2013年7月22日

２．学術論文

(1) 題名："Towards a unified analysis of Japanese adverb types and their syntactic positions"
雑誌名：Tampa Papers in Linguistics 4 45-57
掲載日時：2013年９月

(2) 題名："Three kinds of *Wa*-marked phrases and Topic- Focus articulation in Japanese"
雑誌名：Genarative Grammar in Geneva Vol.7 33-48　掲載日時：2012年５月

2014年５月26日現在、今年８月に韓国のソウルである学会で更なる研究結果を発表する機会を与えられており、研究が加速することを望みつつ、忙しいながらも充実した日々を送っている。研究成果の一部を講義で紹介し、多くの学生からの意見、コメントをもらえることも、名桜大学で勤めることの大きな喜び、励みになっている。

# 海外交流活動のふりかえり ― 国際交流という視点から ―

金城　壽子　人間健康学部看護学科 上級准教授

賞をいただいた海外交流報告はないが、海外交流を国際交流という視点について先に述べたい。国際交流は現地に赴く前衛的活動と国内で活動する後衛的活動があると考える。前衛的活動のみだけでなく、後衛的活動も含めて海外交流活動を振り返る。

私の国際交流体験は、ICNイスラエル大会参加、ハワイ大学で学んだフィジカルアセスメントコース、ICM神戸大会参加、ボストンベスイスラエル病院における看護研修、JICAスリランカ看護教育プロジェクト活動などがある。最近の交流活動から振り返ってみると、前任校、長野県佐久市にある佐久大学で経験したUMAP による短期在外研究者との交流である。

UMAP（University Mobility in Asia and the Pacific）は、高等教育分野におけるアジア太平洋地域の大学間交流、学生交流を通じて、地域内の学術研究協力の推進と教育の質を高めることをめざしている。そのUMAPを通じて佐久大学は、タイセントルイス大学准教授であるA氏を短期在外研究者として受け入れた。専門分野は母性看護学・助産学で、期間は2009 年５月の１ヶ月であった。カウンターパート（受け入れ担当者）は専門領域が共通する教員４名がその任に当たった。A先生は彼女にとって便利がよい留学生活環境として、殆ど私達の研究室ですごした。１ヶ月の短い滞在期間であったが、滞在期間中の交流活動は、地域母子保健活動への参加、地域助産師との交流、共同研究の推進、講義などを通じた教育活動への参加などであった

彼女からタイセントルイス大学看護学部の学士課程における助産教育カリキュラムが紹介された。学生の15％？は男子学生でその学生らも助産師の資格を得られる情報もあった。また、母国語と外国語（英語）による看護系の文献講読があり、看護と語学学習の両面が意図的に学べるカリキュラムが構築されていることも知ることができ、学生への刺激となった。同時に、一教員としても羨ましさを感じた。

聴講した学生は、講義内容からタイの母子保健の特徴を表している政策に関心を持って、聴講した内容や英語資料を振り返り学習内容を整理していた。その講義内容は『A Guest from Thailand』と題して月刊誌“病院経営（高橋、2009）”に投稿していた。学生の了承を得て報告書の資料として掲載させていただいた。引用した内容は、タイ国で取り組まれている“モデルマザー”事業が、母子保健事業を向上させた現状が述べられている箇所を抜粋し、講義内容の一部分として紹介したものである（佐久大学看護研究雑誌、2010）。

研究活動においては、両国の妊娠期、産褥期にある対象のうつ症状と関連要因に関する共同研究を推進した。その研究成果は日本では日本看護科学学会、国外ではタイセントルイス大学における「First academy Meeting, Bangkok Thai（2010）」に招かれ、研究途中の成果報告を口演した。自国だけでなく近隣の国の学生を含む年間に修士学生40名を育成する教育状況に驚きとともにタイの看護職育成の量と質に差し迫るものを覚えた。また、2011年に第３回日中韓看護学会で、さらに昨年本学に就職した直後に「The 3rd World Academy of Nursing Science（2013）」で、いずれも韓国で開催された学会で共同研究の内容を示説発表した。

もう一人の共同研究者であるB先生は、副学長を務めながら、毎年日本に来られ、修士や学士の学生に対し英語で教鞭をとられ、タイの看護事情、タイの大学との交流プログラムを紹介していた。又、ASEAN諸国におけるJICA保健人材プログラムへの参画など日本以外の海外活動もみられる。開学20周年を機に大学提携をして頂き、地元沖縄でも彼女らと今後も交流を続けていけたらと願う。



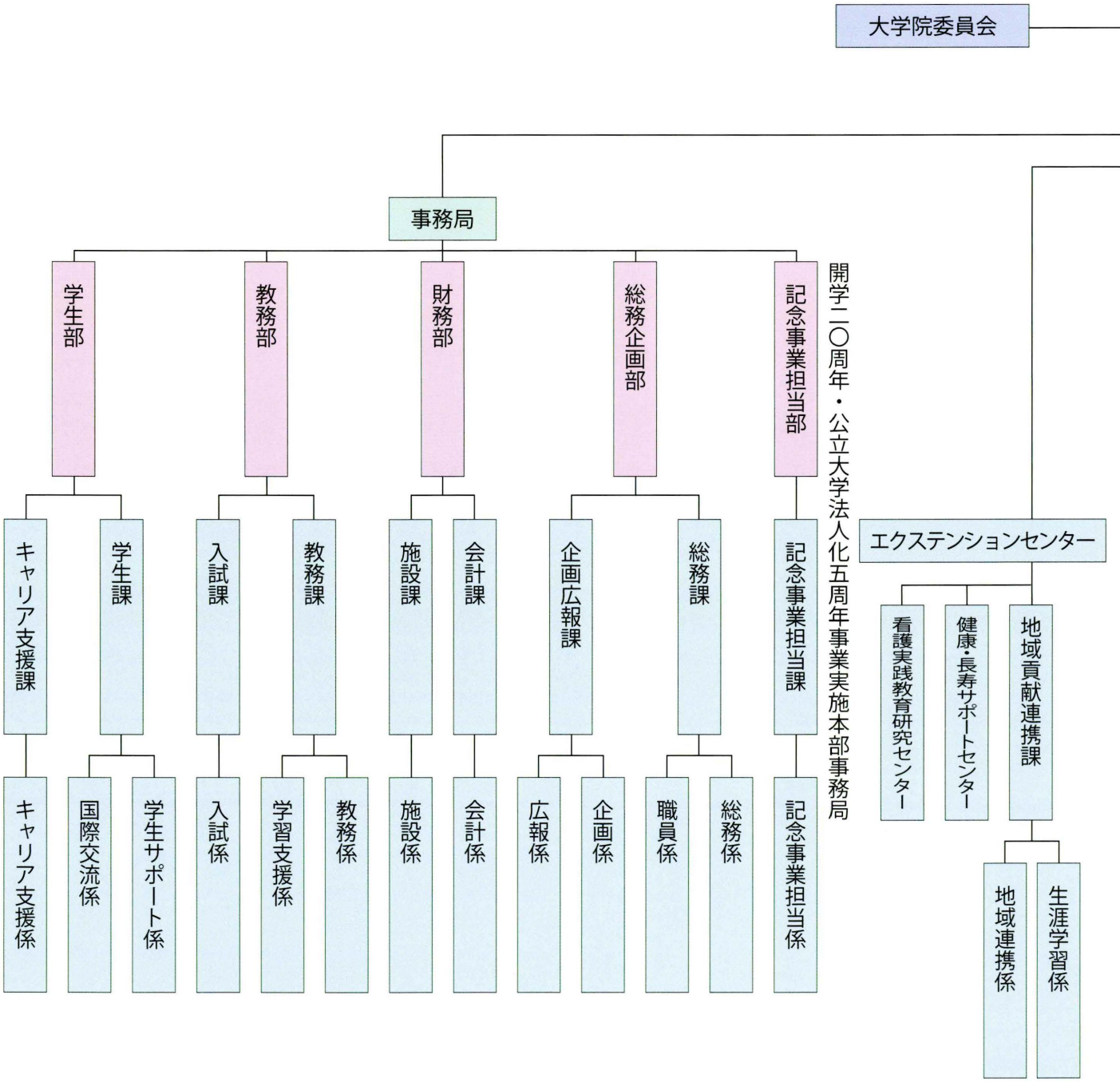
# 8章

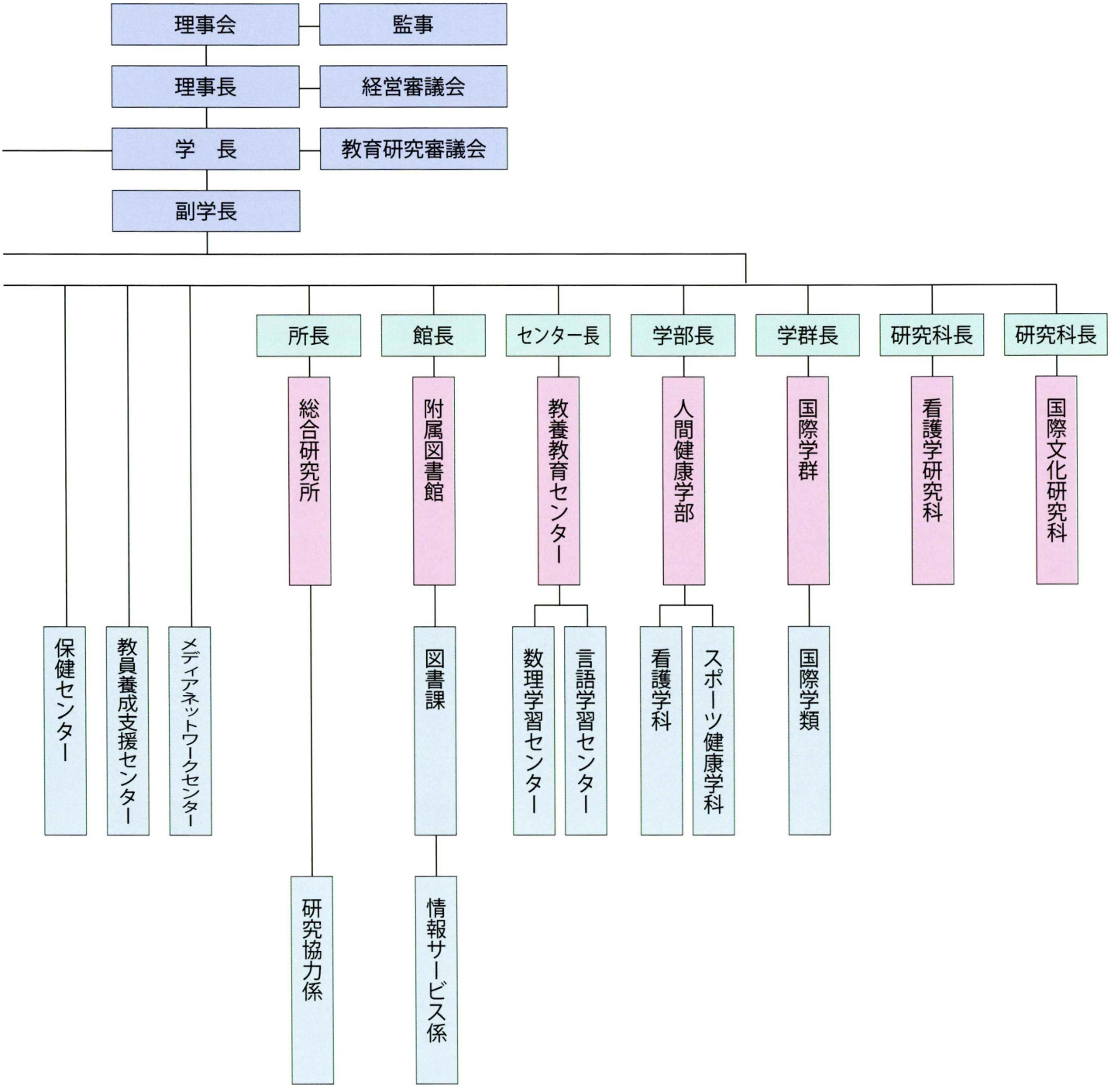
# 資料



MEIO
名桜大学概要
1994
平成7年度
名桜大学概要
名桜大学概要
名桜大学概要
名桜大学概要
名桜大学概要
名桜大学概要
名桜大学概要
2007-2008
大学概要
Meio University
2008-2009
大学概要
大学概要 2011-2012
大学概要 2013-2014
公立大学法人
名桜大学
MEIO UNIVERSITY

# 公立大学法人名桜大学 組織図（平成26年度）




理事会
監事
理事長
経営審議会
学　長
教育研究審議会
副学長
保健センター
教員養成支援センター
メディアネットワークセンター
所長
総合研究所
研究協力係
館長
附属図書館
図書課
情報サービス係
センター長
教養教育センター
数理学習センター
言語学習センター
学部長
人間健康学部
看護学科
スポーツ健康学科
学群長
国際学群
国際学類
研究科長
看護学研究科
研究科長
国際文化研究科

# 教員名簿（平成26年10月1日現在）

学　　長　山里　勝己
副 学 長　金城やす子

## 国際学群

### 国際文化教育研究学系

教　　授　シャイヤステ ファロック
教　　授　住江　淳司
教　　授　渡慶次正則
教　　授　中村浩一郎
教　　授　山田　　均
教　　授　与那覇恵子
教　　授　李　　鎭榮
上級准教授　板山　勝樹
上級准教授　上江洲　基
上級准教授　小嶋　洋輔
上級准教授　小番　　達
上級准教授　菅野　敦志
上級准教授　高嶺　　司
上級准教授　照屋　　理
上級准教授　ノーマン フィーウェル
准 教 授　上原なつき
准 教 授　屋良健一郎
助　　教　メーガン クックルマン

### 経営情報教育研究学系

教　　授　アリ、ファテヘルアリム F.
教　　授　木村　堅一
教　　授　金城　　亮
教　　授　佐久本功達
教　　授　田邊　勝義
教　　授　中里　　収
教　　授　宮平　栄治
上級准教授　アラスーン、ピーター M.
上級准教授　伊藤　祥子
上級准教授　大城真理子
上級准教授　大城　　渡
上級准教授　天願　　健
上級准教授　仲尾次洋子
上級准教授　林　　優子
准 教 授　大城美樹雄
助　　教　上門　　要

### 観光産業教育研究学系

教　　授　新垣　裕治
教　　授　田代　　豊
教　　授　長谷川順一郎
教　　授　朴　　在徳
上級准教授　伊良皆　啓
上級准教授　大谷健太郎
上級准教授　許　　点淑
上級准教授　宮城　敏郎
准 教 授　鈴木　富之

## 人間健康学部

### スポーツ健康学科

教　　授　小川寿美子
教　　授　奥本　　正
教　　授　嘉納　英明
教　　授　高瀬　幸一
教　　授　平識　善盛
教　　授　向山　貴仁
上級准教授　小賦　　肇
上級准教授　竹沢　昌子
上級准教授　田原　亮二
上級准教授　遠矢　英憲
上級准教授　平野　貴也
上級准教授　前川美紀子
准 教 授　石橋　千征
准 教 授　山本　　薫
准 教 授　山本　健司
助　　教　仲田　好邦
助　　教　東恩納玲代

### 看護学科

教　　授　稲垣　絹代
教　　授　金城　利雄
教　　授　金城　祥教
教　　授　小杉　忠誠
教　　授　小西　清美
教　　授　島田　友子
教　　授　鈴木　啓子
教　　授　永吉ルリ子
教　　授　横川裕美子
上級准教授　伊礼　　優
上級准教授　大城　凌子
上級准教授　金城　壽子
上級准教授　清水かおり
上級准教授　永田美和子
上級准教授　比嘉　憲枝
上級准教授　松下　聖子
准 教 授　安里　葉子
准 教 授　下地　紀靖
准 教 授　徳橋　知子
准 教 授　名城　一枝
准 教 授　平上久美子
助　　教　伊波　弘幸
助　　教　鬼頭　和子
助　　教　佐和田重信
助　　教　島袋　尚美
助　　教　玉井なおみ
助　　教　鶴巻　陽子
助　　教　仲本　優子
助　　教　西田　涼子
助　　教　八田早恵子
助　　教　八木澤良子
助　　手　長嶺絵里子
助　　手　野崎　希元
助　　手　松田めぐみ
助　　手　吉岡　　萌
臨時任用助手　金城ゆかり
臨時任用助手　新里美智子

## 教養教育センター

教　　授　高安美智子
准 教 授　山里　絹子

# 職員名簿（平成26年10月1日現在）

理 事 長　比嘉　良雄
事務局長　金城　正英

## 総務企画部

部　　長　山城　耕政

### 総務課

課　　長　池原　秀人
主　　幹　鈴木　邦治
係　　長　比嘉　一成
主　　査　山川そのみ
主　　任　浦崎　淳也
　　上運天梨恵
　　大城　亮人
係　　長　砂川　一弥
主　　任　中村　奈月
　　仲田　園子
係　　長　真栄田義竜
　　新田　繁迪

### 企画広報課

課　　長　上江洲安幸
係　　長　上間　久雄
　　比嘉　淳也
　　大濵　恭子
　　金城百合子
　　具志川伊智子

## 開学20周年・公立大学法人化5周年事業実施本部事務局

係　　長　照屋　信次
　　野原　春美

## 財務部

部　　長　仲村　克也

### 会計課

課　　長　根間　朋江
　　饒波　正一
　　大城佐和子
　　我那覇奈美子
　　金城　大貴

### 施設課

係　　長　上江洲　剛
主　　査　兼次千恵美
　　國吉　憲昭
　　長山　竜也
　　仲田　東史
　　比嘉　義典
　　具志堅興清

## 教務部

部　　長　中里　　収

### 教務課

課　　長　喜瀬　直樹
主　　任　諸見里安晴
　　又吉　寛子
　　山川　源太
　　又吉　和江
　　諸喜田裕子
係　　長　新里　晴美
主　　任　玉城　正貴
　　儀部　　毅
　　金井　智樹
　　中村　香織
　　金城真樹子

### 入試課

課　　長　大城　　洋
係　　長　市原　　修
主　　任　新垣　直美
　　松浦　大輔
　　宮城奈々子
　　奥濱　眞吏
　　神元　　敦
　　米須　義秀

### 教員養成支援センター

　　新城　匡之
　　上江洲若菜

## 学生部

部　　長　渡具知　伸

### 学生課

課　　長　荻堂　盛淳
主　　幹　中山　登偉
係　　長　松田　　勇
　　具志川大輔
　　比嘉美香子
　　大城　　拓
　　津嘉山淳子
　　伊佐 正 アンドレス

### 保健センター

　　金井　絹代
　　與儀百合弥

### キャリア支援課

課　　長　上原　康成
主　　任　神山　利昭
　　新川　悦子
　　比嘉真恵美
　　屋嘉　義和

## 教養教育センター

　　仲榮真由香

### 言語学習センター

　　大城　咲枝

### 数理学習センター

　　大城　真樹

## 図書館

### 図書課

参　　与　又吉　　純
課　　長　赤嶺　達也
係　　長　神谷　順子
　　松田　弥生
　　城間　重臣
　　青山　朋恵
　　知念　啓子
　　比嘉　能正
　　中村　奈巳
　　比嘉　枝美
　　岸本　裕光

## 総合研究所

主　　任　大城　章紀
　　宮城　知佳
講　　師　森川千鶴子
助　　教　上地　直美
　　東江　五子
　　幸地　美香

## エクステンションセンター

参　　与　嘉手苅　健

### 地域連携支援課

課　　長　比嘉　辰己
　　比嘉　　力
主　　任　遠越　享子

# 理事・監事・経営審議会委員・教育研究審議会委員

2014（平成26）年度

## 理事

比嘉　良雄　公立大学法人名桜大学理事長
山里　勝己　名桜大学学長（副理事長）
金城やす子　名桜大学副学長
高良　文雄　本部町長
親川　　敬　名護市副市長
岸本　能子　名護市各種団体女性代表ネットワーク協議会会長

## 監事

玉城　辰彦　弁護士法人てぃだ法律事務所代表社員
城間　　貞　城間公認会計士事務所所長

## 経営審議会委員

比嘉　良雄　公立大学法人名桜大学理事長（議長）
山里　勝己　名桜大学学長
佐久本功達　名桜大学国際学群長
稲垣　絹代　名桜大学人間健康学部長
金城　正英　名桜大学事務局長
大門　達也　名桜大学同窓会長
荻堂　盛秀　名桜大学後援会長
比嘉　克雄　北部広域市町村圏事務組合事務局長
比嘉　幹郎　ザ・テラスホテルズ特別顧問・名桜大学名誉客員教授
宮里　好一　医療法人タピック沖縄リハビリテーション病院理事長

## 教育研究審議会委員

山里　勝己　名桜大学学長（議長）
佐久本功達　名桜大学国際学群長
稲垣　絹代　名桜大学人間健康学部長
住江　淳司　名桜大学附属図書館長
田邊　勝義　名桜大学総合研究所長
新垣　裕治　名桜大学国際文化研究科長
小西　清美　名桜大学看護学科研究科長
木村　堅一　教養教育センター長
金城やす子　名桜大学副学長
高瀬　幸一　名桜大学人間健康学部教授



# 名誉学長・名誉客員教授・名誉教授・客員教授

## 名誉学長

第１号　東江　康治
第２号　瀬名波榮喜

## 名誉客員教授

第１号　外間　守善
第２号　島袋　嘉昌
第３号　比嘉　幹郎
第４号　平　　恒次

## 名誉教授

第１号　伊江　朝章
第２号　古波倉正偉
第３号　外間　完和
第４号　平敷　浩邦
第５号　島袋　　哲
第６号　山里　將晃
第７号　宮平　　進
第８号　小谷　達男
第９号　上江洲　均
第10号　東江　平之
第11号　上間　隆則
第12号　山里　　清
第13号　瀬名波榮喜
第14号　屋比久　浩
第15号　宮城　真宏
第16号　芝野　治郎
第17号　安井　祐一
第18号　新城　敏男
第19号　山端　清英
第20号　石川　清治
第21号　内間　直仁
第22号　西平　守孝
第23号　竹内　伸也
第24号　杉本　英夫
第25号　久手堅憲一
第26号　ガイエル,ティモシーC.
第27号　シーキンス,ドナルドM.
第28号　清水　則之
第29号　吉川　安一
第30号　眞喜屋尚美
第31号　高宮城　繁
第32号　仲地　　清
第33号　中村　誠司
第34号　上間　　篤
第35号　宮里　　捷
第36号　レイサム,キャロラインC.

## 客員教授

小和田　恆
川嶋　辰彦
山谷　正己
西平　守孝
竹内　伸也
朴　　在鎬
船戸　高樹

# 歴代役員 1994▶1995年度

## 1994（平成６）年度

### 理事

東江　康治　学長（理事長）
阿部　充夫　放送大学学園理事長
稲嶺　惠一　㈱りゅうせき代表取締役会長
小谷　達男　立教大学教授
崎間　　晃　㈱琉球銀行代表取締役会長
尚　　弘子　放送大学沖縄ビデオ学習センター長
砂川　榮右　事務局長
瀬名波榮喜　学部長
比嘉　茂政　恩納村長
比嘉　鉄也　名護市長
比嘉　幹郎　ブセナリゾート㈱代表取締役社長

### 監事

島袋　利治　名護市収入役
高嶺　善包　㈱高嶺経営研究所代表取締役社長

### 評議員

東江　康治　学長
安里　　進　名護市議会議長
伊江　朝章　図書館長
浮島　明進　名護市観光協会会長（オリオンビール副社長）
荻堂　盛秀　名護市商工会会長
喜納　安武　本部高等学校長
金城　龍生　北部地区小・中学校校長会会長
古波倉正偉　経営情報学科教授
小濱　　哲　観光産業学科長
沢　　恒雄　経営情報学科長
島袋　義久　国頭地区市町村教育長協会会長（大宜味村教育長）
新垣　誠福　名桜大学教育・研究奨励基金北部地区期成会会長（北部法人会会長）
新城　繁正　北部市町村会会長（大宜味村長）
砂川　榮右　事務局長
瀬名波榮喜　学部長
比嘉　茂政　恩納村長
比嘉　敏雄　名護市教育長
比嘉　幹郎　ブセナリゾート㈱代表取締役社長
平敷　浩邦　国際文化学科長
外間　守善　法政大学教授
宮城　里子　名護市議会議員
森川　　豊　国頭地区ＰＴＡ連合会会長（オリオンビール工場長）
山内　晴子　北部地区連合婦人会会長
山里　　清　琉球大学教授
山城　　正　北部市町村議会議長会会長（今帰仁村議会議長）
吉元　嘉正　名護市助役

## 1995（平成７）年度

### 理事

東江　康治　学長（理事長）
阿部　充夫　放送大学学園理事長
稲嶺　惠一　㈱りゅうせき代表取締役会長
小谷　達男　名桜大学教授
崎間　　晃　㈱琉球銀行代表取締役会長
尚　　弘子　放送大学沖縄地域学習センター長
砂川　榮右　事務局長
瀬名波榮喜　学部長
比嘉　茂政　恩納村長
比嘉　鉄也　名護市長
比嘉　幹郎　ブセナリゾート㈱代表取締役社長

### 監事

島袋　利治　名護市収入役
高嶺　善包　㈱高嶺経営研究所代表取締役社長

### 評議員

東江　康治　学長
安里　　進　名護市議会議員
伊江　朝章　図書館長
浮島　明進　名護市観光協会会長（オリオンビール副社長）
荻堂　盛秀　名護市商工会会長
喜納　安武　前本部高等学校長
金城　龍生　北部地区小・中学校校長会会長
古波倉正偉　経営情報学科教授
小濱　　哲　観光産業学科長
沢　　恒雄　名桜大学教授
島袋　義久　国頭地区市町村教育長協会会長（大宜味村教育長）
新垣　誠福　名桜大学教育・研究奨励基金北部地区期成会会長（北部法人会会長）
新城　繁正　前大宜味村長
砂川　榮右　事務局長
瀬名波榮喜　学部長
比嘉　茂政　恩納村長
比嘉　敏雄　名護市教育長
比嘉　幹郎　ブセナリゾート㈱代表取締役社長
平敷　浩邦　名桜大学教授
外間　守善　法政大学教授
宮城　里子　名護市議会議員
森川　　豊　国頭地区ＰＴＡ連合会会長（オリオンビール工場長）
山内　晴子　北部地区連合婦人会会長
山里　　清　琉球大学教授
山城　　正　今帰仁村議会議員
吉元　嘉正　前名護市助役

# 歴代役員 1996▶1999年度

## ■1996（平成８）年度

### 理事

東江　康治　名桜大学長（理事長）
新垣　誠福　新垣産業㈱代表取締役社長
稲嶺　惠一　㈱りゅうせき代表取締役会長
岸本　建男　名護市助役
小谷　達男　名桜大学教授
尚　　弘子　放送大学沖縄地域学習センター長
瀬名波榮喜　名桜大学国際学部長
比嘉　茂政　恩納村長
比嘉　鉄也　名護市長
比嘉　幹郎　ブセナリゾート㈱代表取締役社長
嶺井　政治　沖縄電力㈱代表取締役会長

### 監事

島袋　利治　名護市収入役
高嶺　善包　㈱高嶺経営研究所代表取締役社長

### 評議員

東江　康治　名桜大学長
安里　　進　名護市議会議員
伊江　朝章　名桜大学附属図書館長
浮島　明進　名護市観光協会会長
　　（オリオンビール㈱副社長）
荻堂　盛秀　名護市商工会会長
我喜屋宗弘　名護市議会議長
岸本　建男　名護市助役
古波倉正偉　名桜大学教授
芝野　治郎　名桜大学教授
砂川　榮右　学校法人名護総合学園（名桜大学）事務局長
瀬名波榮喜　名桜大学国際学部長
高多　清在　名桜大学教授
玉城　正則　北部地区小・中学校校長会会長
仲原　　弘　北部市町村会会長
比嘉　茂政　恩納村長
比嘉　敏雄　名護市教育長
比嘉　幹郎　ブセナリゾート㈱代表取締役社長
外間　守善　元法政大学教授
又吉　宗慶　名護高等学校長
宮城　里子　名護市議会議員
宮平　安徳　北部市町村議会議長会会長
森川　　豊　国頭地区ＰＴＡ連合会会長
　　（オリオンビール㈱専務取締役）
安井　祐一　名桜大学教授
山内　晴子　北部地区連合婦人会会長

## ■1997（平成９）年

### 理事

東江　康治　名桜大学長（理事長）
新垣　誠福　新垣産業㈱代表取締役社長
稲嶺　惠一　㈱りゅうせき代表取締役会長
岸本　建男　名護市助役
小谷　達男　名桜大学教授
尚　　弘子　放送大学沖縄地域学習センター長
瀬名波榮喜　名桜大学国際学部長
仲井眞弘多　沖縄電力㈱代表取締役社長
比嘉　茂政　恩納村長
比嘉　鉄也　名護市長
比嘉　幹郎　ブセナリゾート㈱代表取締役社長

### 監事

島袋　利治　名護市収入役
高嶺　善包　㈱高嶺経営研究所代表取締役社長

### 評議員

東江　康治　名桜大学長
安里　　進　名護市議会議員
新垣　誠福　新垣産業㈱代表取締役社長
伊江　朝章　名桜大学附属図書館長
浮島　明進　㈶名護市観光協会理事長
　　（オリオンビール㈱副社長）
上間　博安　北部市町村会会長
運天　富三　国頭地区中学校校長会会長
荻堂　盛秀　名護市商工会会長
我喜屋宗弘　名護市議会議長
岸本　建男　名護市助役
古波倉正偉　名桜大学教授
芝野　治郎　名桜大学教授
砂川　榮右　学校法人名護総合学園（名桜大学）事務局長
瀬名波榮喜　名桜大学国際学部長
高多　清在　名桜大学教授
西島　一將　前国頭地区市町村教育長会会長
比嘉　茂政　恩納村長
比嘉　敏雄　名護市教育長
比嘉　幹郎　ブセナリゾート㈱代表取締役社長
外間　守善　元法政大学教授
宮城　保繁　名護高等学校長
宮城　里子　名護市議会議員
宮平　安徳　前北部市町村議会議長会会長
森川　　豊　国頭地区ＰＴＡ連合会会長
　　（オリオンビール㈱専務取締役）
安井　祐一　名桜大学教授
山内　晴子　北部地区連合婦人会会長

## ■1998（平成10）年度

### 理事

東江　康治　名桜大学長（理事長）
新垣　誠福　新垣産業㈱代表取締役会長
岸本　建男　名護市長
小谷　達男　名桜大学教授
尚　　弘子　放送大学沖縄学習センター長
瀬名波榮喜　名桜大学副学長
仲井眞弘多　沖縄電力㈱代表取締役社長
比嘉　茂政　恩納村長
比嘉　鉄也　前名護市長
比嘉　幹郎　ブセナリゾート㈱代表取締役社長
外間　守善　沖縄学研究所長

### 監事

島袋　利治　名護市収入役
高嶺　善包　㈱高嶺経営研究所代表取締役社長

### 評議員

東江　康治　名護総合学園理事長・名桜大学長
新垣　誠福　新垣産業㈱代表取締役会長
伊集　盛久　北部市町村議会議長会長・東村議会議長
上江洲　均　名桜大学国際文化学科長
浮島　明進　㈶名護市観光協会理事長
　　オリオンビール㈱常勤相談役
上間　博安　北部市町村会長・今帰仁村長
荻堂　盛秀　名護市商工会長・名桜大学後援会長
我喜屋宗弘　名護市議会議長
小濱　　哲　名桜大学観光産業学科長
重原　　保　海上保安庁慶佐次ロラン・事務所C局技術官
　　（名桜大学卒業生）
芝野　治郎　名桜大学附属図書館長
白井　晴男　名桜大学経営情報学科長
砂川　寛昭　名桜大学事務局長
瀬名波榮喜　名桜大学副学長
豊元佐知子　名桜大学職員（名桜大学卒業生）
仲田　和夫　国頭地区教育長会長・金武町教育長
比嘉　茂政　恩納村長
比嘉　敏雄　名護市教育長
比嘉　幹郎　ブセナリゾート㈱代表取締役社長
外間　守善　沖縄学研究所長
松田　憲和　名護高等学校長
宮城　愛子　名桜大学後援会副会長・浦添総合病院薬局長
宮城　里子　名護市議会議員
森川　　豊　国頭地区ＰＴＡ連合会長
　　オリオンビール㈱常勤相談役
屋比久　浩　名桜大学国際文化学科教授
山内　晴子　北部地区連合婦人会長

## ■1999（平成11）年度

### 理事

東江　康治　名桜大学長（理事長）
新垣　誠福　新垣産業㈱代表取締役会長
岸本　建男　名護市長
小谷　達男　名桜大学教授
尚　　弘子　放送大学沖縄学習センター所長
瀬名波榮喜　名桜大学副学長
仲井眞弘多　沖縄電力㈱代表取締役社長
比嘉　茂政　沖縄県出納長
比嘉　鉄也　前名護市長
比嘉　幹郎　ブセナリゾート㈱代表取締役社長
外間　守善　沖縄学研究所長

### 監事

島袋　利治　名護市収入役
高嶺　善包　㈱高嶺経営研究所代表取締役社長

### 評議員

東江　康治　名護総合学園理事長・名桜大学長
新垣　誠福　新垣産業㈱代表取締役会長
伊集　盛久　東村議会議長
上江洲　均　名桜大学国際文化学科長
浮島　明進　㈶名護市観光協会理事長
　　オリオンビール㈱常勤相談役
上間　博安　北部市町村会長・今帰仁村長
荻堂　盛秀　名護市商工会長・名桜大学後援会長
小濱　　哲　名桜大学観光産業学科長
重原　　保　海上保安庁石垣市海上保安部灯台課
　　（名桜大学卒業生）
芝野　治郎　名桜大学附属図書館長
島袋　吉和　名護市議会議長
白井　晴男　名桜大学経営情報学科長
砂川　寛昭　名桜大学事務局長
瀬名波榮喜　名桜大学副学長
豊元佐知子　名桜大学職員（名桜大学卒業生）
仲田　和夫　前金武町教育長
比嘉　茂政　沖縄県出納長
比嘉　敏雄　前名護市教育長
比嘉　幹郎　ブセナリゾート㈱代表取締役社長
外間　守善　沖縄学研究所長
松田　憲和　名護高等学校長
宮城　愛子　名桜大学後援会副会長・浦添総合病院薬剤部長
宮城　里子　名護市議会議員
森川　　豊　国頭地区ＰＴＡ連合会長
　　オリオンビール㈱常勤相談役
屋比久　浩　名桜大学国際文化学科教授
山内　晴子　北部地区連合婦人会長

### 顧問

阿部　充夫　東京国立博物館長
稲嶺　恵一　沖縄県知事
崎間　　晃　㈱琉球銀行代表取締役相談役

# 歴代役員 2000▶2003年度

## ■2000（平成12）年度

### 理事

東江　平之　名桜大学長
東江　康治　理事長
新垣　誠福　新垣産業㈱代表取締役会長
上間　博安　今帰仁村長
岸本　建男　名護市長
瀬名波榮喜　名桜大学国際文化学科教授
仲田　和弘　沖縄電力㈱取締役資材部長
比嘉　鉄也　前名護市長
比嘉　幹郎　ブセナリゾート㈱代表取締役社長
外間　守善　沖縄学研究所長
山里　將晃　名桜大学名誉教授

### 監事

崎濱　秀則　本部町収入役
高嶺　善包　監査法人太田昭和センチュリー沖縄事務所代表社員

### 評議員

東江　平之　名桜大学長
新垣　誠福　新垣産業㈱代表取締役会長
宇江喜達也　琉球新報㈱北部支社（本学卒業生）
上江洲安幸　名桜大学職員（本学卒業生）
上間　博安　今帰仁村長
浮島　明進　オリオンビール㈱常勤相談役
　㈶名護市観光協会理事長
荻堂　盛秀　名護市商工会長・名桜大学後援会長
重原　　保　海上保安庁石垣海上保安部（本学卒業生）
島袋　吉和　名護市議会議長
白井　晴男　名桜大学経営情報学科長
新城　敏男　名桜大学国際文化学科長
砂川　寛昭　名桜大学事務局長
瀬名波榮喜　名桜大学国際文化学科教授
照屋　全吉　北部市町村議会議長会会長
仲地　　清　名桜大学附属図書館長
中村　　明　名護高等学校長
生見　哲郎　名桜大学観光産業学科長
比嘉　幹郎　ブセナリゾート㈱代表取締役社長
外間　守善　沖縄学研究所長
松川　　守　名護市商工会イベント放送局（本学卒業生）
森川　　豊　オリオンビール㈱常勤相談役
　国頭地区ＰＴＡ連合会会長
屋比久　浩　名桜大学副学長
山内　晴子　北部地区連合婦人会長
山里　全用　名護市教育長

### 顧問

阿部　充夫　㈶放送大学教育振興会理事長
稲嶺　惠一　沖縄県知事
崎間　　晃　㈱琉球銀行相談役

## ■2001（平成13）年度

### 理事

東江　平之　名桜大学長
新垣　誠福　新垣産業㈱代表取締役会長
岸本　建男　名護市長
瀬名波榮喜　名桜大学国際文化研究科長
仲田　和弘　沖縄電力㈱常務取締役
比嘉　鉄也　理事長
比嘉　幹郎　ブセナリゾート㈱代表取締役社長
外間　守善　沖縄学研究所長
宮城　　茂　東村長
屋比久　浩　名桜大学副学長
山里　將晃　名桜大学名誉教授

### 監事

崎濱　秀則　本部町収入役
高嶺　善包　新日本監査法人沖縄事務所代表社員

### 評議員

東江　平之　名桜大学長
新垣　誠福　新垣産業㈱代表取締役会長
宇江喜達也　琉球新報㈱北部支社報道部記者（本学卒業生）
上江洲安幸　名桜大学職員（本学卒業生）
浮島　明進　オリオンビール㈱顧問
　㈶名護市観光協会理事長
荻堂　盛秀　名護市商工会長・名桜大学後援会長
垣花　郁夫　名護市国際交流会館館長
重原　　保　海上保安庁石垣海上保安部運用係長
　（本学卒業生）
島袋　吉和　名護市議会議長
芝野　治郎　名桜大学経営情報学科長
新垣　敏男　名桜大学国際文化学科長
砂川　寛昭　名桜大学事務局長
瀬名波榮喜　名桜大学国際文化研究科長
照屋　全吉　金武町議会議員
仲地　　清　名桜大学附属図書館長
中村　　明　名護高等学校長
生見　哲郎　名桜大学観光産業学科長
比嘉　幹郎　ブセナリゾート㈱代表取締役社長
外間　守善　沖縄学研究所長
松川　　守　創育進学塾英語専任講師
宮城　愛子　浦添総合病院薬剤師
宮城　　茂　東村長
森川　　豊　オリオンビール㈱顧問
　沖縄県海洋深層水開発協同組合副理事長
屋比久　浩　名桜大学副学長
山内　晴子　北部地区連合婦人顧問
山里　全用　名護市教育長

### 顧問

阿部　充夫　㈶放送大学教育振興会理事長
稲嶺　惠一　沖縄県知事
崎間　　晃　㈱琉球銀行相談役

## 2002（平成14）年度

### 理事

東江　平之　名桜大学長
荻堂　盛秀　名護市商工会会長
岸本　建男　名護市長
瀬名波榮喜　名桜大学大学院国際文化研究科長
仲田　和弘　沖縄電力㈱常務取締役
仲泊　弘次　㈱東開発代表取締役会長
比嘉　鉄也　学校法人名護総合学園理事長
外間　守善　沖縄学研究所長
前田　裕継　㈱屋部土建代表取締役会長
宮城　　茂　北部市町村会会長
屋比久　浩　名桜大学副学長

### 監事

崎濱　秀則　本部町収入役
高嶺　善包　新日本監査法人沖縄事務所代表社員

### 評議員

東江　平之　名桜大学長
新垣　誠福　新垣産業㈱代表取締役会長
上江洲安幸　名桜大学職員（本学卒業生）
浮島　明進　㈶名護市観光協会理事長
荻堂　盛秀　名護市商工会会長・名桜大学後援会長
垣花　郁夫　名護市国際交流会館館長
岸本　　吏　沖縄三菱電機販売㈱（本学卒業生）
岸本　恵光　本部町観光協会会長
岸本　正治　名護高等学校長
重原　　保　海上保安庁来島海峡海上交通センター技術員（本学卒業生）
芝野　治郎　名桜大学経営情報学科長
島袋　吉和　名護市議会議長
砂川　寛昭　名桜大学参与
瀬名波榮喜　名桜大学大学院国際文化研究科長
平良　芳一　名桜大学総務企画部長
仲里幸一郎　名護市役所職員（本学卒業生）
仲泊　弘次　㈱東開発代表取締役会長
中山　　哲　名護市役所職員（本学卒業生）
比嘉　幹郎　ブセナリゾート㈱代表取締役社長
普久原アントニオ　㈱CSKシステムズ沖縄（本学卒業生）
平識　善盛　名桜大学観光産業学科長
宮城　　茂　北部市町村会会長
森川　　豊　オリオンビール㈱顧問
屋比久　浩　名桜大学副学長
山里　全用　名護市教育長
山端　清英　名桜大学国際文化学科長

### 顧問

阿部　充夫　㈶放送大学教育振興会理事長
稲嶺　恵一　沖縄県知事
崎間　　晃　㈱琉球銀行顧問

## 2003（平成15）年度

### 理事

比嘉　鉄也　学校法人名護総合学園理事長
安田　晃次　名桜大学学長
荻堂　盛秀　名護市商工会会長・名桜大学後援会会長
岸本　建男　名護市長
瀬名波榮喜　名桜大学国際学部国際文化学科教授
仲田　和弘　沖縄電力㈱常務取締役
仲泊　弘次　㈱東開発代表取締役会長
　名桜大学協力会会長
森谷伊三男　公認会計士・税理士　森谷事務所所長
前田　裕継　㈱屋部土建代表取締役会長
　名桜大学同窓会顧問
宮城　　茂　東村長・北部市町村会会長
屋比久　浩　名桜大学国際学部国際文化学科教授

### 監事

崎濱　秀則　本部町収入役
高嶺　善包　新日本監査法人沖縄事務所代表社員

### 評議員

東江　平之　前名桜大学学長
新垣　誠福　新垣産業㈱代表取締役会長
上江洲安幸　名桜大学職員（本学卒業生）
浮島　明進　オリオンビール㈱顧問
　㈶名護市観光協会理事長
荻堂　盛秀　名護市商工会会長・名桜大学後援会会長
垣花　郁夫　元名護市国際交流会館館長
垣花　勝行　名桜大学事務局長事務取扱い
岸本　　吏　沖縄三菱電機販売㈱（本学卒業生）
岸本　恵光　本部町観光協会会長
岸本　正治　名護高等学校長
重原　　保　海上保安庁来島海峡海上交通センター（本学卒業生）
芝野　治郎　名桜大学大学院国際文化研究科長
島袋　吉和　名護市議会議員
瀬名波榮喜　名桜大学国際学部国際文化学科教授
平良　芳一　名桜大学総務企画部長
仲里幸一郎　名護市企画部市長室まちおこし係（本学卒業生）
仲泊　弘次　㈱東開発代表取締役会長
　名桜大学協力会会長
中山　　哲　名護市企画部振興対策室（本学卒業生）
比嘉　幹郎　ブセナリゾート㈱代表取締役社長
普久原アントニオ　本学卒業生
平識　善盛　名桜大学国際学部観光産業学科長
宮城　　茂　東村長・北部市町村会会長
森川　　豊　オリオンビール㈱顧問
　沖縄県海洋深層水開発協同組合副理事長
屋比久　浩　名桜大学国際学部国際文化学科教授
山里　全用　名護市教育長
山端　清英　名桜大学国際学部国際文化学科長

### 顧問

阿部　充夫　㈶放送大学教育振興会理事長
稲嶺　恵一　沖縄県知事
崎間　　晃　㈱琉球銀行顧問

# 歴代役員 2004▶2007年度

## ■2004（平成16）年度

### 理事

比嘉　鉄也　学校法人名護総合学園理事長
安田　晃次　名桜大学学長
荻堂　盛秀　名護市商工会会長・名桜大学後援会会長
岸本　建男　名護市長
瀬名波榮喜　名桜大学名誉教授
仲田　和弘　沖縄電力㈱代表取締役副社長
仲泊　弘次　㈱東開発代表取締役会長
　　名桜大学協力会会長
生見　哲郎　名桜大学副学長
前田　裕継　㈱屋部土建代表取締役会長
　　名桜大学同窓会顧問
宮城　　茂　東村長・北部市町村会会長
森谷伊三男　公認会計士・税理士　森谷事務所

### 監事

玉城　辰彦　弁護士法人てぃだ法律事務所代表社員
屋良　宣廣　宜野座村収入役

### 評議員

伊佐　若子　名護高等学校教諭（本学卒業生）
上江洲安幸　名桜大学職員（本学卒業生）
浮島　明進　㈶名護市観光協会理事長
荻堂　盛秀　名護市商工会会長・名桜大学後援会会長
垣花　勝行　名桜大学学務部長
神山　正樹　㈱東開発（本学卒業生）
岸本　　吏　㈱沖縄三菱電機販売（本学卒業生）
岸本　恵光　沖縄県議会議員
金城　真紀　本部家具（本学卒業生）
芝野　治郎　名桜大学大学院国際文化研究科長
島袋　吉和　名護市議会議員
末松　文信　名護市助役
平良　芳一　名桜大学総務企画部長（事務局長事務取扱）
仲里幸一郎　名護市役所（本学卒業生）
仲泊　弘次　㈱東開発代表取締役会長
　　名桜大学協力会会長
中山　　哲　名護市役所（本学卒業生）
生見　哲郎　名桜大学副学長
比嘉　幹郎　ブセナリゾート㈱代表取締役社長
比嘉　依子　本学卒業生
普久原アントニオ
　　第46回米州開発銀行年次総会沖縄開発
　　実行委員会（本学卒業生）
平識　善盛　名桜大学国際学部観光産業学科教授
宮城　　茂　東村長・北部市町村会会長
宮平　英治　名桜大学国際学部経営情報学科長
安田　晃次　名桜大学学長
山里　全用　前名護市教育長
山端　清英　名桜大学国際学部国際文化学科教授

### 顧問

阿部　充夫　㈶放送大学教育振興会理事長
崎間　　晃　㈱琉球銀行相談役

## ■2005（平成17）年度

### 理事

比嘉　鉄也　学校法人名護総合学園理事長
安田　晃次　名桜大学学長
生見　哲郎　名桜大学国際学部教授
仲泊　弘次　㈱東開発代表取締役会長
　　名桜大学協力会会長
荻堂　盛秀　名護市商工会会長・名桜大学後援会会長
宮城　　茂　東村長・北部市町村会会長
岸本　建男　名護市長
瀬名波榮喜　名桜大学名誉教授
森谷伊三男　公認会計士・税理士　森谷事務所
仲田　和弘　沖縄電力㈱代表取締役副社長
前田　裕継　㈱屋部土建代表取締役会長
　　名桜大学同窓会顧問

### 監事

屋良　宣廣　前宜野座村収入役
玉城　辰彦　弁護士法人てぃだ法律事務所代表社員

### 評議員

安田　晃次　名桜大学長
平識　善盛　名桜大学人間健康学部スポーツ健康学科長
垣花　勝行　名桜大学学務部長（大学事務局長事務取扱い）
生見　哲郎　名桜大学国際学部観光産業学科教授
上江洲　基　名桜大学国際学部国際文化学科長（助教授）
清水　則之　名桜大学国際学部経営情報学科長（教授）
李　　鎭榮　名桜大学国際学部観光産業学科長（教授）
屋嘉　義和　学校法人名護総合学園総務企画部長
　　（法人事務局長事務取扱い）
上江洲　剛　名桜大学職員（本学卒業生）
上江洲安幸　名桜大学職員（本学卒業生）
倉岡　大樹　ディスカバーウエディング代表（本学卒業生）
仲里幸一郎　名護市役所職員（本学卒業生）
中山　　哲　名護市役所職員（本学卒業生）
新里　哲佳　琉球ジャスコ㈱（本学卒業生）
神山　正樹　フードセンター魚鉄（本学卒業生）
大城和香子　名護市役所職員（本学卒業生）
金城　真紀　アウトレットショップファニチャーココ店長
　　（本学卒業生）
岸本　恵光　沖縄県議会議員
宮城　　茂　東村長・北部市町村会会長
末松　文信　名護市助役
比嘉　幹郎　ブセナリゾート㈱代表取締役社長
山里　全用　前名護市教育長
島袋　吉和　名護市議会議員
仲泊　弘次　㈱東開発代表取締役会長
　　名桜大学協力会会長
荻堂　盛秀　名護市商工会会長・名桜大学後援会会長
浮島　明進　㈶名護市観光協会理事長

### 顧問

崎間　　晃　㈱琉球銀行相談役

## ■2006（平成18）年度

### 理事

| | |
|---|---|
| 比嘉　鉄也 | 学校法人名護総合学園理事長 |
| 瀬名波榮喜 | 名桜大学長 |
| 石川　清治 | 名桜大学人間健康学部長 |
| 荻堂　盛秀 | 名護市商工会会長・名桜大学後援会会長 |
| 仲泊　弘次 | ㈱東開発代表取締役会長<br>名桜大学協力会会長 |
| 宮城　　茂 | 東村長・北部市町村会会長 |
| 内間　直仁 | 名桜大学国際学部長 |
| 島袋　吉和 | 名護市長 |
| 仲田　和弘 | 沖縄電力㈱代表取締役副社長 |
| 前田　裕継 | ㈱屋部土建代表取締役会長 |
| 森谷伊三男 | 公認会計士・税理士　森谷事務所 |

### 監事

| | |
|---|---|
| 玉城　辰彦 | 弁護士法人てぃだ法律事務所代表社員 |
| 仲間　正直 | 金武町収入役 |

### 評議員

| | |
|---|---|
| 瀬名波榮喜 | 名桜大学長 |
| 内間　直仁 | 名桜大学国際学部長 |
| 石川　清治 | 名桜大学人間健康学部長 |
| 上江洲　基 | 名桜大学国際学部･国際文化学科長（助教授） |
| 清水　則之 | 名桜大学国際学部・経営情報学科長（教授） |
| 新垣　裕治 | 名桜大学国際学部・観光産業学科長（教授） |
| 平識　善盛 | 名桜大学人間健康学部・スポーツ健康学科長（教授） |
| 屋嘉　義和 | 総務企画部長（法人事務局長事務取扱い） |
| 上江洲安幸 | 名桜大学職員 |
| 上江洲　剛 | 名桜大学職員 |
| 倉岡　大樹 | ディスカバーウエディング代表 |
| 仲里幸一郎 | 名護市職員 |
| 中山　　哲 | 名護市職員 |
| 新里　哲佳 | 琉球ジャスコ㈱ |
| 神山　正樹 | フードセンター魚鉄 |
| 大城和香子 | 名護市職員（特定非営利活動法人NDA） |
| 金城　真紀 | 家事手伝い |
| 宮城　　茂 | 東村長・北部市町村会会長 |
| 儀武　　剛 | 金武町長・北部振興会会長 |
| 荻堂　盛秀 | 名護市商工会会長・名桜大学後援会会長 |
| 比嘉　幹郎 | ブセナリゾート㈱代表取締役社長 |
| 仲泊　弘次 | ㈱東開発代表取締役会長<br>名桜大学協力会会長 |
| 末松　文信 | 名護市助役 |
| 稲嶺　　進 | 名護市教育長 |
| 並里　康文 | ㈱EM研究機構特別代表 |
| 浮島　明進 | ㈶名護市観光協会理事長 |

### 顧問

| | |
|---|---|
| 崎間　　晃 | ㈱琉球銀行相談役 |

## ■2007（平成19）年度

### 理事

| | |
|---|---|
| 比嘉　鉄也 | 学校法人名護総合学園理事長 |
| 瀬名波榮喜 | 名桜大学長 |
| 石川　清治 | 名桜大学人間健康学部長 |
| 仲泊　弘次 | ㈱東開発代表取締役会長・名桜大学協力会長 |
| 荻堂　盛秀 | 名護市商工会長・名桜大学後援会長 |
| 宮城　　茂 | 前東村長・北部市町村会会長 |
| 島袋　吉和 | 名護市長 |
| 内間　直仁 | 名桜大学国際学部長・国際学群長 |
| 森谷伊三男 | 森谷公認会計士事務所所長 |
| 仲田　和弘 | 沖縄電力㈱副社長 |
| 前田　裕継 | ㈱屋部土建代表取締役会長<br>名桜大学同窓会顧問 |

### 監事

| | |
|---|---|
| 仲間　正直 | 医療法人ほくと会北部病院常務理事 |
| 玉城　辰彦 | 弁護士法人てぃだ法律事務所代表社員 |

### 評議員

| | |
|---|---|
| 瀬名波榮喜 | 名桜大学長 |
| 内間　直仁 | 名桜大学国際学群長・国際学部長 |
| 石川　清治 | 名桜大学人間健康学部長 |
| 上江洲　基 | 名桜大学国際学部・国際文化学科長 |
| 清水　則之 | 名桜大学国際学部・経営情報学科長 |
| 新垣　裕治 | 名桜大学国際学部・観光産業学科長 |
| 平識　善盛 | 名桜大学教務部長 |
| 屋嘉　義和 | 名桜大学法人事務部長 |
| 上江洲　剛 | 名桜大学事務職員（第一期卒業生） |
| 上江洲安幸 | 名桜大学事務職員（第三期卒業生） |
| 倉岡　大樹 | ディスカバーウエディング代表（第五期卒業生） |
| 仲里幸一郎 | 名護市役所職員（第一期卒業生） |
| 中山　　哲 | 名護市役所職員（第一期卒業生） |
| 新里　哲佳 | 琉球ジャスコ㈱（第一期卒業生） |
| 神山　正樹 | フードセンター魚鉄（第四期卒業生） |
| 大城和香子 | 名護市役所職員（第三期卒業生） |
| 金城　真紀 | 日本生命（第一期卒業生） |
| 宮城　　茂 | 前東村長・北部市町村会会長 |
| 荻堂　盛秀 | 名護市商工会長・名桜大学後援会長 |
| 仲泊　弘次 | ㈱東開発代表取締役会長・名桜大学協力会長 |
| 末松　文信 | 名護市副市長 |
| 儀武　　剛 | 金武町長・北部市町村会長 |
| 比嘉　幹郎 | ブセナリゾート㈱代表取締役社長 |
| 浮島　明進 | ㈶名護市観光協会理事長 |
| 並里　康文 | 前㈱EM研究機構特別代表 |
| 稲嶺　　進 | 名護市教育長 |

### 顧問

| | |
|---|---|
| 阿部　充夫 | ㈶放送大学教育振興会会長 |
| 稲嶺　惠一 | ㈱りゅうせき参与 |
| 崎間　　晃 | ㈱琉球銀行相談役 |

# 歴代役員 2008▶2011年度

## ■2008（平成20）年度

### 理事

比嘉　鉄也　学校法人名護総合学園理事長
瀬名波榮喜　名桜大学長
西平　守孝　名桜大学国際学群長
柳　　敏晴　名桜大学人間健康学部長
荻堂　盛秀　名護市商工会長・名桜大学後援会長
儀武　　剛　金武町長・北部市町村会会長
島袋　吉和　名護市長
仲泊　弘次　㈱東開発代表取締役会長・名桜大学協力会長
森谷伊三男　森谷公認会計士事務所所長
仲田　和弘　沖縄電力㈱副社長
前田　裕継　㈱屋部土建代表取締役会長
　　名桜大学同窓会顧問

### 監事

仲間　正直　医療法人ほくと会北部病院常務理事
玉城　辰彦　弁護士法人てぃだ法律事務所代表社員

### 評議員

瀬名波榮喜　名桜大学長
西平　守孝　名桜大学国際学群長
柳　　敏晴　名桜大学人間健康学部長
ガイエル，ティモシーC.
　　名桜大学大学院国際文化研究科長
知念　一郎　名桜大学事務局長
仲地　　清　名桜大学総合研究所長
平識　善盛　名桜大学教務部長
屋嘉　義和　名桜大学法人事務部長
上江洲　剛　名桜大学事務職員（第一期卒業生）
上江洲安幸　名桜大学事務職員（第三期卒業生）
倉岡　大樹　ディスカバーウエディング代表（第五期卒業生）
仲里幸一郎　名護市役所職員（第一期卒業生）
中山　　哲　名護市役所職員（第一期卒業生）
新里　哲佳　琉球ジャスコ㈱（第一期卒業生）
神山　正樹　フードセンター魚鉄（第四期卒業生）
大城和香子　名護市役所職員（第三期卒業生）
金城　真紀　日本生命（第一期卒業生）
宮城　　茂　前東村長・前北部市町村会会長
荻堂　盛秀　名護市商工会長・名桜大学後援会長
仲泊　弘次　㈱東開発代表取締役会長・名桜大学協力会長
末松　文信　名護市副市長
儀武　　剛　金武町長・北部市町村会長
比嘉　幹郎　ブセナリゾート㈱代表取締役社長
浮島　明進　㈶名護市観光協会理事長
島袋　義久　大宜味村長・北部振興会会長
稲嶺　　進　名護市教育長

### 顧問

阿部　充夫　㈶放送大学教育振興会会長
稲嶺　惠一　㈱りゅうせき参与
崎間　　晃　㈱琉球銀行相談役

## ■2009（平成21）年度

### 理事

瀬名波榮喜　名桜大学長
清水　則之　名桜大学国際学群長
柳　　敏晴　名桜大学人間健康学部長
荻堂　盛秀　名護市商工会長・名桜大学後援会長
儀武　　剛　金武町長・北部市町村会会長
比嘉　鉄也　学校法人名護総合学園理事長
島袋　吉和　名護市長
仲泊　弘次　㈱東開発代表取締役会長・名桜大学協力会長
森谷伊三男　森谷公認会計士事務所所長
仲田　和弘　沖縄電力㈱副社長
前田　裕継　㈱屋部土建代表取締役会長
　　名桜大学同窓会顧問

### 監事

仲間　正直　医療法人ほくと会北部病院常務理事
玉城　辰彦　弁護士法人てぃだ法律事務所代表社員

### 評議員

瀬名波榮喜　名桜大学長
清水　則之　名桜大学国際学群長
柳　　敏晴　名桜大学人間健康学部長
ガイエル，ティモシーC.
　　名桜大学大学院国際文化研究科長
屋嘉　義和　名桜大学事務局長
新垣　裕治　名桜大学総合研究所長
平識　善盛　名桜大学教務部長
金城　正英　名桜大学事務局次長
上江洲　剛　名桜大学事務職員（第一期卒業生）
上江洲安幸　名桜大学事務職員（第三期卒業生）
倉岡　大樹　ディスカバーウエディング代表（第五期卒業生）
仲里幸一郎　名護市役所職員（第一期卒業生）
伊禮　夏子　（第一期卒業生）
新里　哲佳　琉球ジャスコ㈱（第一期卒業生）
神山　正樹　フードセンター魚鉄（第四期卒業生）
大城和香子　名護市役所職員（第三期卒業生）
金城　真紀　日本生命（第一期卒業生）
宮城　　茂　前東村長・前北部市町村会長
荻堂　盛秀　名護市商工会長・名桜大学後援会長
仲泊　弘次　㈱東開発代表取締役会長・名桜大学協力会長
末松　文信　名護市副市長
儀武　　剛　金武町長・北部市町村会長
比嘉　幹郎　ブセナリゾート㈱代表取締役社長
浮島　明進　㈶名護市観光協会顧問
島袋　義久　大宜味村長・北部振興会会長
比嘉　惠一　名護市教育長

### 顧問

阿部　充夫　㈶放送大学教育振興会会長
稲嶺　惠一　㈱りゅうせき参与
崎間　　晃　㈱琉球銀行相談役

## ■2010（平成22）年度

### 理事

| | |
|---|---|
| 嘉数　　啓 | 公立大学法人名桜大学理事長 |
| 瀬名波榮喜 | 名桜大学学長（副理事長） |
| 清水　則之 | 名桜大学国際学群長 |
| 柳　　敏晴 | 名桜大学人間健康学部長 |
| 幸喜　徳子 | 沖縄石油ガス㈱代表取締役社長 |
| 親川　　敬 | 名護市副市長 |

### 監事

| | |
|---|---|
| 玉城　辰彦 | 弁護士法人てぃだ法律事務所代表社員 |
| 城間　　貞 | 城間公認会計士事務所所長 |

### 経営審議会委員

| | |
|---|---|
| 嘉数　　啓 | 公立大学法人名桜大学理事長（議長） |
| 瀬名波榮喜 | 名桜大学学長 |
| 清水　則之 | 名桜大学国際学群長 |
| 柳　　敏晴 | 名桜大学人間健康学部長 |
| 屋嘉　義和 | 名桜大学事務局長 |
| 仲里幸一郎 | 名桜大学同窓会長 |
| 荻堂　盛秀 | 名桜大学後援会長 |
| 前田　裕子 | ㈱前田産業代表取締役社長 |
| 比嘉　幹郎 | ブセナリゾート㈱代表取締役社長 |
| 比嘉　恵一 | 名護市教育長 |

### 教育研究審議会委員

| | |
|---|---|
| 瀬名波榮喜 | 名桜大学学長（議長） |
| 清水　則之 | 名桜大学国際学群長 |
| 柳　　敏晴 | 名桜大学人間健康学部長 |
| 高宮城　繁 | 名桜大学附属図書館長 |
| 新垣　裕治 | 名桜大学総合研究所長 |
| 仲地　　清 | 名桜大学大学院国際文化研究科長 |
| 平識　善盛 | 名桜大学教務部長 |
| 木村　堅一 | 名桜大学国際学群教授 |
| 金城やす子 | 名桜大学人間健康学部教授 |
| 高安美智子 | 北部地区高等学校長会会長 |

## ■2011（平成23）年度

### 理事

| | |
|---|---|
| 嘉数　　啓 | 公立大学法人名桜大学理事長 |
| 瀬名波榮喜 | 名桜大学学長（副理事長） |
| 金城　　亮 | 名桜大学国際学群長 |
| 金城　祥教 | 名桜大学人間健康学部長 |
| 幸喜　徳子 | 沖縄石油ガス㈱代表取締役社長 |
| 親川　　啓 | 名護市副市長 |

### 監事

| | |
|---|---|
| 玉城　辰彦 | 弁護士法人てぃだ法律事務所代表社員 |
| 城間　　貞 | 城間公認会計士事務所所長 |

### 経営審議会委員

| | |
|---|---|
| 嘉数　　啓 | 公立大学法人名桜大学理事長（議長） |
| 瀬名波榮喜 | 名桜大学学長 |
| 金城　　亮 | 名桜大学国際学群長 |
| 金城　祥教 | 名桜大学人間健康学部長 |
| 屋嘉　義和 | 名桜大学事務局長 |
| 仲里幸一郎 | 名桜大学同窓会長 |
| 荻堂　盛秀 | 名桜大学後援会長 |
| 前田　裕子 | ㈱前田産業代表取締役社長 |
| 比嘉　幹郎 | ザ・テラスホテルズ特別顧問 |
| 比嘉　恵一 | 名護市教育長 |

### 教育研究審議会委員

| | |
|---|---|
| 瀬名波榮喜 | 名桜大学学長（議長） |
| 金城　　亮 | 名桜大学国際学群長 |
| 金城　祥教 | 名桜大学人間健康学部長 |
| 高宮城　繁 | 名桜大学附属図書館長 |
| 小川寿美子 | 名桜大学総合研究所長 |
| 仲地　　清 | 名桜大学国際文化研究科長 |
| 佐久本功達 | 名桜大学教務部長 |
| 木村　堅一 | 名桜大学国際学群教授 |
| 向山　貴仁 | 名桜大学人間健康学部教授 |
| 高安美智子 | 北部地区高等学校長会会長 |

# 歴代役員 2012▶2013年度

## ■2012（平成24）年度

### 理事

| | |
|---|---|
| 比嘉　佑典 | 公立大学法人名桜大学理事長 |
| 瀬名波榮喜 | 名桜大学学長（副理事長） |
| 金城　　亮 | 名桜大学国際学群長 |
| 金城　祥教 | 名桜大学人間健康学部長 |
| 高良　文雄 | 本部町長 |
| 親川　　敬 | 名護市副市長 |

### 監事

| | |
|---|---|
| 玉城　辰彦 | 弁護士法人てぃだ法律事務所代表社員 |
| 城間　　貞 | 城間公認会計士事務所所長 |

### 経営審議会委員

| | |
|---|---|
| 比嘉　佑典 | 公立大学法人名桜大学理事長（議長） |
| 瀬名波榮喜 | 名桜大学学長 |
| 金城　　亮 | 名桜大学国際学群長 |
| 金城　祥教 | 名桜大学人間健康学部長 |
| 金城　正英 | 名桜大学事務局長 |
| 仲里幸一郎 | 名桜大学同窓会長 |
| 荻堂　盛秀 | 名桜大学後援会長 |
| 嘉手苅　健 | 北部広域市町村圏事務組合事務局長 |
| 比嘉　幹郎 | ザ・テラスホテルズ特別顧問<br>名桜大学名誉客員教授 |
| 比嘉　恵一 | 前名護市教育長 |

### 教育研究審議会委員

| | |
|---|---|
| 瀬名波榮喜 | 名桜大学学長（議長） |
| 金城　　亮 | 名桜大学国際学群長 |
| 金城　祥教 | 名桜大学人間健康学部長 |
| 住江　淳司 | 名桜大学附属図書館長 |
| 小川寿美子 | 名桜大学総合研究所長 |
| 仲地　　清 | 名桜大学国際文化研究科長 |
| 佐久本功達 | 名桜大学教務部長 |
| 渡具知　伸 | 名桜大学学生部長 |
| 木村　堅一 | 名桜大学国際学群教授 |
| 鈴木　啓子 | 名桜大学人間健康学部教授 |

## ■2013（平成25）年度

### 理事

| | |
|---|---|
| 比嘉　佑典 | 公立大学法人名桜大学理事長 |
| 瀬名波榮喜 | 名桜大学学長（副理事長） |
| 金城　　亮 | 名桜大学国際学群長 |
| 金城　祥教 | 名桜大学人間健康学部長 |
| 高良　文雄 | 本部町長 |
| 親川　　敬 | 名護市副市長 |

### 監事

| | |
|---|---|
| 玉城　辰彦 | 弁護士法人てぃだ法律事務所代表社員 |
| 城間　　貞 | 城間公認会計士事務所所長 |

### 経営審議会委員

| | |
|---|---|
| 比嘉　佑典 | 公立大学法人名桜大学理事長（議長） |
| 瀬名波榮喜 | 名桜大学学長 |
| 金城　　亮 | 名桜大学国際学群長 |
| 金城　祥教 | 名桜大学人間健康学部長 |
| 金城　正英 | 名桜大学事務局長 |
| 仲里幸一郎 | 前名桜大学同窓会長 |
| 荻堂　盛秀 | 名桜大学後援会長 |
| 比嘉　克雄 | 北部広域市町村圏事務組合事務局長 |
| 比嘉　幹郎 | ザ・テラスホテルズ特別顧問<br>名桜大学名誉客員教授 |
| 比嘉　恵一 | 前名護市教育長 |

### 教育研究審議会委員

| | |
|---|---|
| 瀬名波榮喜 | 名桜大学学長（議長） |
| 山里　勝己 | 名桜大学国際文化研究科長 |
| 稲垣　絹代 | 名桜大学看護学研究科長 |
| 金城　　亮 | 名桜大学国際学群長 |
| 金城　祥教 | 名桜大学人間健康学部長 |
| 住江　淳司 | 名桜大学附属図書館長 |
| 金城やす子 | 名桜大学総合研究所長 |
| 渡具知　伸 | 名桜大学学生部長 |
| 木村　堅一 | 名桜大学国際学群教授 |
| 高瀬　幸一 | 名桜大学人間健康学部教授 |

# 後援会 歴代役員

| 年　度 | 会　長 | 副会長 | | 幹　事<br>(事務局長) |
|---|---|---|---|---|
| 平成9 | 岸本　建男 | 伊志嶺朝次 | 東江扶美子 | 砂川　寛昭 |
| 平成10 | 荻堂　盛秀 | 宮城　愛子 | 東江扶美子 | 砂川　寛昭 |
| 平成11 | 荻堂　盛秀 | 宮城　愛子 | 東盛　良雄 | 砂川　寛昭 |
| 平成12 | 荻堂　盛秀 | 仲尾　茂治 | 島袋　重信 | 砂川　寛昭 |
| 平成13 | 荻堂　盛秀 | 仲尾　茂治 | 島袋　重信 | |
| 平成14 | 荻堂　盛秀 | 島袋　重信 | | 屋嘉　義和 |
| 平成15 | 荻堂　盛秀 | 岸本　敏孝 | 野中　正信 | 屋嘉　義和 |
| 平成16 | 荻堂　盛秀 | 岸本　敏孝 | 野中　正信 | 屋嘉　義和 |
| 平成17 | 荻堂　盛秀 | 野中　正信 | 金城　吉樹 | 屋嘉　義和 |
| 平成18 | 荻堂　盛秀 | 照屋　林雄 | 具志堅奈美子 | 屋嘉　義和 |
| 平成19 | 荻堂　盛秀 | 照屋　林雄 | 具志堅奈美子 | 屋嘉　義和 |
| 平成20 | 荻堂　盛秀 | —— | —— | 屋嘉　義和 |
| 平成21 | 荻堂　盛秀 | —— | —— | 屋嘉　義和 |
| 平成22 | 荻堂　盛秀 | —— | —— | 屋嘉　義和 |
| 平成23 | 荻堂　盛秀 | 兼本　　章 | 大兼　康弘 | 屋嘉　義和 |
| 平成24 | 荻堂　盛秀 | —— | —— | 屋嘉　義和 |
| 平成25 | 荻堂　盛秀 | 國吉　　明 | 中村英一郎 | 屋嘉　義和 |
| 平成26 | 荻堂　盛秀 | 國吉　　明 | 中村英一郎 | 金城　正英 |



# 同窓会 歴代役員

| 年　度 | 会　長 | 副会長 | | |
|---|---|---|---|---|
| 平成14・15 | 仲里幸一郎 | 譜久原アントニオ | 森根　　愛 | 倉岡　大樹 |
| 平成16・17 | 仲里幸一郎 | 金城　真紀 | 森根　　愛 | 倉岡　大樹 |
| 平成18・19 | 仲里幸一郎 | 金城　真紀 | 森根　　愛 | 倉岡　大樹 |
| 平成20・21 | 仲里幸一郎 | 金城　真紀 | 森根　　愛 | 倉岡　大樹 |
| 平成22・23 | 仲里幸一郎 | 金城　真紀 | 森根　　愛 | 倉岡　大樹 |
| 平成24・25 | 大門　達也 | 大城　貴博 | 森根　　愛 | 八幡　智之 |

# 入学志願状況

## 年度別全学科入学志願状況

| 年度 | 学科名 | 国際文化学科 | | | 経営情報学科 | | | 観光産業学科 | | | スポーツ健康学科 | | | 合計 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 性別 | 男 | 女 | 計 | 男 | 女 | 計 | 男 | 女 | 計 | 男 | 女 | 計 | 男 | 女 | 計 |
| 平成17 | 募集人員 | | | 115 | | | 115 | | | 115 | | | 95 | | | 440 |
| | 志願者 | 124 | 86 | 210 | 120 | 41 | 161 | 195 | 76 | 271 | 169 | 74 | 243 | 608 | 277 | 885 |
| | 合格者 | 99 | 64 | 163 | 108 | 33 | 141 | 173 | 61 | 234 | 80 | 45 | 125 | 460 | 203 | 663 |
| | 入学者 | 81 | 46 | 127 | 86 | 24 | 110 | 136 | 43 | 179 | 68 | 34 | 102 | 371 | 147 | 518 |
| 平成18 | 募集人員 | | | 115 | | | 115 | | | 115 | | | 95 | | | 440 |
| | 志願者 | 79 | 68 | 147 | 124 | 40 | 164 | 223 | 59 | 282 | 117 | 63 | 180 | 543 | 230 | 773 |
| | 合格者 | 70 | 63 | 133 | 107 | 38 | 145 | 118 | 50 | 168 | 106 | 60 | 166 | 401 | 211 | 612 |
| | 入学者 | 58 | 47 | 105 | 96 | 30 | 126 | 112 | 45 | 157 | 69 | 46 | 115 | 335 | 168 | 503 |

| 年度 | 学科名 | 国際学群 | | | スポーツ健康学科 | | | 看護学科 | | | 合計 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 性別 | 男 | 女 | 計 | 男 | 女 | 計 | 男 | 女 | 計 | 男 | 女 | 計 |
| 平成19 | 募集人員 | | | 345 | | | 95 | | | 80 | | | 520 |
| | 志願者 | 240 | 105 | 345 | 77 | 68 | 145 | 47 | 197 | 244 | 364 | 370 | 734 |
| | 合格者 | 224 | 99 | 323 | 73 | 61 | 134 | 20 | 86 | 106 | 317 | 246 | 563 |
| | 入学者 | 193 | 79 | 272 | 56 | 45 | 101 | 19 | 75 | 94 | 268 | 199 | 467 |
| 平成20 | 募集人員 | | | 345 | | | 95 | | | 80 | | | 520 |
| | 志願者 | 225 | 81 | 306 | 103 | 38 | 141 | 38 | 174 | 212 | 366 | 293 | 659 |
| | 合格者 | 188 | 73 | 261 | 95 | 37 | 132 | 23 | 109 | 132 | 306 | 219 | 525 |
| | 入学者 | 165 | 61 | 226 | 75 | 32 | 107 | 16 | 74 | 90 | 256 | 167 | 423 |
| 平成21 | 募集人員 | | | 280 | | | 95 | | | 80 | | | 455 |
| | 志願者 | 144 | 66 | 210 | 120 | 39 | 159 | 26 | 152 | 178 | 290 | 257 | 547 |
| | 合格者 | 133 | 65 | 198 | 109 | 39 | 148 | 17 | 123 | 140 | 259 | 227 | 486 |
| | 入学者 | 112 | 53 | 165 | 95 | 30 | 125 | 16 | 72 | 88 | 223 | 155 | 378 |
| 平成22 | 募集人員 | | | 280 | | | 95 | | | 80 | | | 455 |
| | 志願者 | 217 | 218 | 435 | 155 | 84 | 239 | 123 | 441 | 564 | 495 | 743 | 1,238 |
| | 合格者 | 188 | 179 | 367 | 79 | 60 | 139 | 22 | 107 | 129 | 289 | 346 | 635 |
| | 入学者 | 152 | 118 | 270 | 68 | 42 | 110 | 17 | 72 | 89 | 237 | 232 | 469 |
| 平成23 | 募集人員 | | | 280 | | | 95 | | | 80 | | | 455 |
| | 志願者 | 569 | 575 | 1,144 | 293 | 215 | 508 | 79 | 416 | 495 | 941 | 1,206 | 2,147 |
| | 合格者 | 183 | 235 | 418 | 93 | 78 | 171 | 14 | 81 | 95 | 290 | 394 | 684 |
| | 入学者 | 140 | 168 | 308 | 62 | 42 | 104 | 12 | 71 | 83 | 214 | 281 | 495 |
| 平成24 | 募集人員 | | | 280 | | | 95 | | | 80 | | | 455 |
| | 志願者 | 736 | 656 | 1,392 | 335 | 186 | 521 | 88 | 375 | 463 | 1,159 | 1,217 | 2,376 |
| | 合格者 | 185 | 229 | 414 | 63 | 50 | 113 | 18 | 77 | 95 | 266 | 356 | 622 |
| | 入学者 | 142 | 166 | 308 | 55 | 46 | 101 | 16 | 65 | 81 | 213 | 277 | 490 |
| 平成25 | 募集人員 | | | 280 | | | 95 | | | 80 | | | 455 |
| | 志願者 | 400 | 481 | 881 | 281 | 147 | 428 | 59 | 232 | 291 | 740 | 860 | 1,600 |
| | 合格者 | 176 | 230 | 406 | 57 | 53 | 110 | 14 | 82 | 96 | 247 | 365 | 612 |
| | 入学者 | 130 | 172 | 302 | 48 | 49 | 97 | 13 | 74 | 87 | 191 | 295 | 486 |
| 平成26 | 募集人員 | | | 280 | | | 95 | | | 80 | | | 455 |
| | 志願者 | 466 | 521 | 987 | 259 | 136 | 395 | 77 | 286 | 363 | 802 | 943 | 1,745 |
| | 合格者 | 174 | 230 | 404 | 70 | 43 | 113 | 21 | 73 | 94 | 265 | 346 | 611 |
| | 入学者 | 132 | 165 | 297 | 67 | 40 | 107 | 21 | 64 | 85 | 220 | 269 | 489 |

## 都道府県別全学科入学志願者数 ※出身校の所在都道府県を、学生の出身都道府県とした。

| 都道府県名／年度 | | H17 | | H18 | | H19 | | H20 | | H21 | | H22 | | H23 | | H24 | | H25 | | H26 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 志願者 | 入学者 | 志願者 | 入学者 | 志願者 | 入学者 | 志願者 | 入学者 | 志願者 | 入学者 | 志願者 | 入学者 | 志願者 | 入学者 | 志願者 | 入学者 | 志願者 | 入学者 | 志願者 | 入学者 |
| | 北海道 | 2 | 1 | 4 | 2 | 3 | 2 | 4 | 3 | 5 | 1 | 6 | 1 | 32 | 8 | 49 | 10 | 41 | 13 | 30 | 11 |
| 東北 | 青森 | | | 1 | | | | | | | | | | 2 | | 10 | 4 | 7 | 3 | 6 | 2 |
| | 岩手 | | | 4 | | | | | | | | 4 | 1 | 16 | 6 | 25 | 3 | 15 | 7 | 16 | 9 |
| | 宮城 | 3 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 2 | 1 | 1 | | | | 4 | 1 | 9 | | 2 | | 7 | |
| | 秋田 | | | | | | | | | 1 | | | | 1 | | 2 | 2 | 3 | 2 | 6 | 2 |
| | 山形 | 1 | 1 | 5 | 3 | | | | | | | | | 5 | | 15 | 1 | 3 | | 4 | 1 |
| | 福島 | 3 | 1 | | | 1 | 1 | | | 3 | 2 | | | 18 | 2 | 17 | 2 | 6 | 3 | 7 | 2 |
| 関東 | 茨城 | 1 | 1 | 4 | 2 | 2 | 2 | 2 | | 4 | 3 | | | 33 | 4 | 54 | 10 | 35 | 7 | 38 | 8 |
| | 栃木 | 1 | 1 | 1 | | 2 | | 5 | 1 | 1 | | 1 | | 36 | 2 | 25 | 1 | 11 | 1 | 19 | 2 |
| | 群馬 | | | 1 | | 2 | 2 | 3 | 3 | 1 | 1 | 1 | | 19 | 2 | 12 | 3 | 7 | 1 | 6 | 1 |
| | 埼玉 | 5 | 4 | 3 | 2 | 2 | | 4 | 1 | 3 | 2 | 1 | | 13 | | 6 | | 4 | 1 | 9 | 2 |
| | 千葉 | 4 | 3 | 1 | 1 | 4 | 2 | 1 | 1 | 1 | | 1 | 1 | 6 | 1 | 6 | 1 | 5 | | 11 | 3 |
| | 東京 | 20 | 11 | 13 | 7 | 14 | 7 | 11 | 6 | 5 | 4 | 6 | 1 | 14 | 3 | 17 | 7 | 13 | 3 | 16 | 4 |
| | 神奈川 | 7 | 4 | 3 | 2 | 6 | 3 | 6 | 1 | 1 | 1 | 2 | 1 | 2 | | 6 | | 2 | | 7 | 2 |
| 甲信越 | 新潟 | 2 | | 5 | 2 | 1 | | 2 | 2 | 3 | 1 | 1 | | 13 | | 15 | 3 | 9 | 2 | 12 | 2 |
| | 山梨 | 3 | 1 | 1 | | 1 | 1 | 1 | | 1 | | | | 6 | | 7 | | 5 | 1 | 5 | 1 |
| | 長野 | 4 | 3 | 3 | 2 | 2 | 2 | | | 1 | | | | 10 | 4 | 13 | | 7 | 3 | 1 | |
| 東海 | 岐阜 | 1 | 1 | 1 | | | | 1 | 1 | | | | | 11 | 1 | 9 | 2 | 8 | 3 | 9 | 3 |
| | 静岡 | 1 | | 7 | 1 | 2 | | 2 | 2 | | | 11 | 2 | 40 | 8 | 43 | 11 | 19 | 7 | 29 | 14 |
| | 愛知 | 5 | 2 | 2 | | 6 | 3 | 1 | | 3 | 1 | 27 | 2 | 54 | 6 | 49 | 8 | 40 | 9 | 28 | 7 |
| | 三重 | 2 | 1 | | | 3 | 2 | 1 | | 3 | | 1 | | 12 | 1 | 7 | 2 | 12 | 4 | 4 | |
| 北陸 | 富山 | 1 | 1 | 2 | 1 | | | 1 | | | | | | 9 | 2 | 12 | 3 | 7 | | 2 | |
| | 石川 | | | | | | | | | 1 | 1 | 2 | | 11 | 1 | 6 | 1 | 3 | 1 | 4 | 3 |
| | 福井 | | | | | | | | | | | | | 18 | 5 | 6 | 2 | 10 | 6 | 8 | |
| 近畿 | 滋賀 | 3 | 2 | | | | | 1 | 1 | | | 4 | 1 | 9 | | 5 | 1 | 3 | 1 | 1 | |
| | 京都 | 4 | 3 | 3 | 2 | 2 | 1 | 4 | 2 | 1 | 1 | 3 | 1 | 24 | 5 | 15 | 1 | 22 | 7 | 12 | 3 |
| | 大阪 | 7 | 4 | 4 | 2 | 9 | 4 | 4 | 3 | 2 | 1 | 8 | 5 | 27 | 5 | 27 | 4 | 12 | 3 | 28 | 6 |
| | 兵庫 | | | 1 | | | | 3 | 1 | 2 | 1 | 7 | | 60 | 10 | 47 | 7 | 29 | 9 | 30 | 9 |
| | 奈良 | | | 1 | 1 | | | | | 2 | 1 | | | 8 | 2 | 4 | 1 | 1 | | 6 | 1 |
| | 和歌山 | | | 1 | 1 | 2 | | 1 | 1 | | | 4 | 1 | 33 | | 18 | | 17 | 2 | 19 | 1 |
| 中国 | 鳥取 | 2 | 1 | | | | | | | | | 1 | | 9 | 1 | 8 | 4 | 4 | 1 | 4 | 2 |
| | 島根 | 1 | | | | 3 | 2 | | | 1 | 1 | | | 8 | 3 | 15 | 4 | 3 | | 8 | 3 |
| | 岡山 | 2 | 1 | 4 | 1 | | | 1 | | | | 3 | 3 | 50 | 11 | 50 | 9 | 20 | 8 | 26 | 4 |
| | 広島 | 8 | 4 | 2 | 2 | 4 | 2 | | | | | 4 | 1 | 56 | 13 | 84 | 10 | 45 | 9 | 33 | 5 |
| | 山口 | 2 | | | | 1 | 1 | 2 | 1 | 2 | 1 | 3 | | 9 | 4 | 17 | 1 | 6 | 3 | 7 | 2 |
| 四国 | 徳島 | | | | | | | 1 | 1 | | | 1 | | 13 | 2 | 16 | 2 | 10 | 2 | 9 | 3 |
| | 香川 | | | 3 | 1 | 1 | 1 | | | | | | | 8 | 1 | 13 | | 1 | 1 | 12 | 2 |
| | 愛媛 | | | 1 | | 1 | 1 | 2 | 1 | 1 | 1 | 4 | 2 | 35 | 7 | 31 | 5 | 12 | 3 | 23 | 9 |
| | 高知 | | | 1 | | 1 | 1 | | | | | 1 | | 3 | 1 | 2 | 1 | 6 | | 5 | 2 |
| 九州 | 福岡 | 23 | 12 | 16 | 6 | 13 | 6 | 11 | 3 | 10 | 9 | 22 | 10 | 132 | 20 | 134 | 18 | 114 | 27 | 135 | 22 |
| | 佐賀 | 2 | 1 | 2 | | 3 | 1 | 3 | 1 | | | 7 | 1 | 18 | 2 | 32 | 5 | 24 | 8 | 24 | 1 |
| | 長崎 | 1 | | 3 | 1 | | | 1 | 1 | 5 | 4 | 20 | 4 | 103 | 17 | 157 | 18 | 89 | 19 | 75 | 15 |
| | 熊本 | 4 | 4 | 8 | 6 | 8 | 5 | 4 | 2 | 2 | | 12 | 4 | 46 | 14 | 88 | 23 | 48 | 13 | 38 | 7 |
| | 大分 | 3 | 3 | 2 | | | | | | 1 | | 3 | 1 | 89 | 16 | 113 | 17 | 68 | 18 | 84 | 24 |
| | 宮崎 | 2 | 2 | 5 | 2 | 1 | | | | 3 | 2 | 45 | 9 | 89 | 19 | 91 | 12 | 60 | 20 | 74 | 16 |
| | 鹿児島 | 17 | 8 | 18 | 11 | 8 | 4 | 18 | 10 | 15 | 6 | 36 | 15 | 157 | 35 | 216 | 46 | 101 | 37 | 128 | 31 |
| | 沖縄 | 679 | 391 | 628 | 436 | 597 | 396 | 546 | 367 | 451 | 326 | 967 | 390 | 741 | 243 | 748 | 219 | 603 | 211 | 651 | 236 |
| | 大学検定 | 7 | 5 | 4 | 4 | 3 | 1 | | | 5 | 3 | 5 | 2 | 5 | 1 | 2 | | 1 | | 4 | 1 |
| | 外国 | 48 | 37 | 1 | 1 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 1 | 8 | 7 | 2 | 1 | 4 | 3 | 13 | 4 | 14 | 4 |
| | その他 | 4 | 3 | 3 | | 23 | 11 | 8 | 4 | 4 | 3 | 6 | 3 | 28 | 5 | 19 | 3 | 14 | 3 | 11 | 1 |
| 合計 | | 885 | 518 | 773 | 503 | 734 | 467 | 659 | 423 | 547 | 378 | 1,238 | 469 | 2,147 | 495 | 2,376 | 490 | 1,600 | 486 | 1,745 | 489 |

## 県内高等学校別全学科入学者数

| 高等学校名／年度 | H17 | H18 | H19 | H20 | H21 | H22 | H23 | H24 | H25 | H26 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 辺土名高等学校 | 4 | 2 | 5 | 8 | 4 | 6 | 5 | 5 | 1 | 3 |
| 北山高等学校 | 4 | 3 | 7 | 11 | 11 | 11 | 10 | 4 | 4 | 7 |
| 名護高等学校 | 15 | 25 | 25 | 23 | 19 | 37 | 29 | 21 | 30 | 33 |
| 本部高等学校 | 1 | 4 | 11 | 7 | 12 | 10 | 4 | 6 | 3 | 4 |
| 宜野座高等学校 | 14 | 7 | 13 | 15 | 3 | 8 | 6 | 4 | 5 | 8 |
| 石川高等学校 | 16 | 10 | 12 | 5 | 5 | 4 | 4 | 3 |  | 3 |
| 読谷高等学校 | 6 | 8 | 7 | 7 | 12 | 11 | 14 | 18 | 20 | 23 |
| 嘉手納高等学校 | 12 | 9 | 3 | 11 | 8 | 10 | 3 | 3 |  |  |
| 具志川高等学校 | 2 | 7 | 10 | 9 | 5 | 17 | 8 | 12 | 12 | 6 |
| 前原高等学校 | 11 | 23 | 13 | 11 | 3 | 13 | 4 | 4 | 3 | 4 |
| コザ高等学校 | 14 | 15 | 24 | 8 | 7 | 10 | 8 | 12 | 9 | 15 |
| 美里高等学校 | 10 | 13 | 6 | 6 | 3 | 6 | 1 | 1 | 1 |  |
| 球陽高等学校 | 1 | 1 | 4 | 4 | 7 | 6 | 8 | 1 | 8 | 14 |
| 知念高等学校 | 10 | 11 | 11 | 9 | 4 | 11 | 5 | 4 | 3 | 5 |
| 与勝高等学校 | 11 | 9 | 10 | 8 | 4 | 3 |  | 1 | 5 | 3 |
| 北谷高等学校 | 9 | 16 | 13 | 15 | 6 | 5 | 1 | 1 | 2 | 1 |
| 北中城高等学校 | 10 | 11 | 9 | 5 | 12 | 6 | 1 |  |  |  |
| 普天間高等学校 | 16 | 8 | 8 | 3 | 2 | 12 | 9 | 11 | 15 | 19 |
| 宜野湾高等学校 | 9 | 9 | 6 | 4 | 4 | 4 | 1 | 2 | 2 | 2 |
| 浦添高等学校 | 17 | 7 | 5 | 5 | 5 | 4 | 7 | 6 | 8 | 5 |
| 陽明高等学校 | 3 | 5 | 5 | 7 | 8 | 5 | 1 | 2 | 1 | 2 |
| 那覇国際高等学校 | 3 |  | 1 | 1 | 2 | 2 | 7 | 2 | 2 | 1 |
| 那覇高等学校 | 10 | 10 | 10 | 11 | 8 | 7 | 10 | 9 | 7 | 6 |
| 首里高等学校 | 7 | 7 | 5 | 3 | 4 | 17 | 3 | 4 | 1 | 7 |
| 首里東高等学校 | 12 | 12 | 11 | 6 | 8 | 3 |  | 1 | 2 | 2 |
| 那覇西高等学校 | 11 | 17 | 14 | 12 | 17 | 8 | 14 | 6 | 12 | 5 |
| 小禄高等学校 | 12 | 9 | 6 | 15 | 8 | 2 | 4 | 5 | 4 | 6 |
| 真和志高等学校 | 4 | 2 | 2 |  | 1 |  |  |  |  |  |
| 泊高等学校 |  | 1 |  | 1 |  | 1 | 1 | 1 |  |  |
| 開邦高等学校 |  |  | 2 |  |  |  | 1 |  |  | 2 |
| 南風原高等学校 | 11 | 13 | 6 | 4 | 3 | 3 | 2 | 1 | 1 | 1 |
| 豊見城高等学校 | 5 | 4 | 7 | 6 | 13 | 4 | 3 |  |  |  |
| 豊見城南高等学校 | 7 | 10 | 2 | 7 | 4 | 5 |  |  | 1 |  |
| 向陽高等学校 | 1 |  | 2 | 5 |  | 6 | 5 | 9 | 5 | 11 |
| 西原高等学校 | 6 | 6 | 14 | 9 | 1 | 10 | 6 | 7 | 2 | 2 |
| 糸満高等学校 | 1 | 26 | 7 | 16 | 5 | 6 | 6 | 7 | 5 | 3 |

| 高等学校名／年度 | H17 | H18 | H19 | H20 | H21 | H22 | H23 | H24 | H25 | H26 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 久米島高等学校 | 1 | 2 | 1 | 1 | | | 1 | 2 | 1 | |
| 宮古高等学校 | 3 | 3 | 3 | 7 | 10 | | | 1 | | 2 |
| 八重山高等学校 | 3 | 1 | 3 | 2 | 1 | 3 | 3 | 4 | 2 | 5 |
| 伊良部高等学校 | 3 | 3 | | | 2 | 2 | | 1 | | 1 |
| 沖縄尚学高等学校 | 10 | 4 | 8 | 1 | 1 | 7 | 2 | 2 | 2 | 1 |
| 興南高等学校 | 15 | 9 | 7 | 8 | 12 | 12 | 3 | 1 | 5 | 4 |
| 沖縄女子短期大学附属 | | 1 | 2 | | | | | | | |
| 昭和薬科大付属 | 1 | | 1 | | | | | | 1 | 1 |
| 名護商業高等学校 | 5 | 5 | 7 | 11 | 8 | | | | | |
| 具志川商業高等学校 | 4 | 13 | 4 | 7 | 1 | 5 | 2 | 3 | 1 | 1 |
| 中部商業高等学校 | 6 | 9 | 6 | 10 | 12 | 7 | 3 | 1 | 1 | 1 |
| 浦添商業高等学校 | 11 | 7 | 12 | 9 | 8 | 13 | 9 | 3 | 2 | 2 |
| 那覇商業高等学校 | 6 | 5 | 2 | 4 | 10 | 6 | 7 | 1 | 3 | 1 |
| 南部商業高等学校 | 5 | 5 | 7 | 1 | 1 | 7 | 1 | | 1 | |
| 北部工業高等学校 | 3 | 3 | 5 | 1 | 4 | 1 | | | | |
| 美来工科(中部工業)高等学校 | 6 | 7 | 6 | 6 | 6 | 4 | 6 | 3 | 1 | 4 |
| 美里工業高等学校 | 3 | 8 | 3 | 2 | 2 | 1 | | | | |
| 沖縄工業高等学校 | 3 | 4 | 6 | 3 | 4 | 4 | | 1 | | |
| 浦添工業高等学校 | 3 | 3 | | | 3 | 6 | 2 | 2 | 1 | |
| 那覇工業高等学校 | 1 | | 1 | | | 3 | | | | |
| 南部工業高等学校 | 1 | | 1 | 1 | | | 1 | | | |
| 宮古工業高等学校 | 1 | | | | | 1 | | | | |
| 名護商工高等学校 | | | | | | 15 | 6 | 9 | 3 | 7 |
| 八重山商工高等学校 | 1 | 2 | 1 | 2 | 3 | 5 | 1 | | 2 | |
| 北部農林高等学校 | 3 | 7 | 6 | 3 | 8 | 7 | 3 | 6 | 4 | 2 |
| 中部農林高等学校 | 2 | 2 | 3 | 4 | 4 | 2 | 1 | 4 | 6 | 1 |
| 南部農林高等学校 | 2 | 2 | 1 | | | | | | 1 | |
| 宮古農林高等学校 | | 1 | | | 1 | | | | | |
| 八重山農林高等学校 | | 1 | | | 2 | | | | | |
| 沖縄水産高等学校 | 1 | 4 | 3 | 4 | 2 | 3 | 1 | 1 | | |
| 翔南高等学校 | 2 | 3 | | | 1 | | | | | |
| 沖縄工業高等専門学校 | | | | | 1 | | | | | |
| 八洲学園国際高等学校 | 1 | 2 | | 3 | 1 | 2 | | | | |
| 国立沖縄海上技術学校 | | | | | | | | | | |
| 沖縄カトリック高等学校 | | | | | | | | 1 | | |
| その他 | | | | | | | | | | |
| 合計 | 391 | 436 | 395 | 367 | 326 | 390 | 243 | 219 | 211 | 236 |

# 在籍状況

## 学部・学群

| 学部学科 | | 年度 | H6 | H7 | H8 | H9 | H10 | H11 | H12 | H13 | H14 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 国際学部 | 国際文化 | 男 | 68 | 144 | 207 | 279 | 289 | 299 | 276 | 260 | 259 |
| | | 女 | 59 | 114 | 185 | 249 | 272 | 267 | 255 | 218 | 206 |
| | | 計 | 127 | 258 | 392 | 528 | 561 | 566 | 531 | 478 | 465 |
| | 経営情報 | 男 | 93 | 185 | 279 | 382 | 393 | 413 | 423 | 418 | 466 |
| | | 女 | 35 | 80 | 126 | 162 | 169 | 177 | 170 | 160 | 139 |
| | | 計 | 128 | 265 | 405 | 544 | 562 | 590 | 593 | 578 | 605 |
| | 観光産業 | 男 | 82 | 174 | 257 | 355 | 365 | 374 | 373 | 351 | 360 |
| | | 女 | 46 | 94 | 139 | 173 | 168 | 169 | 162 | 175 | 177 |
| | | 計 | 128 | 268 | 396 | 528 | 533 | 543 | 535 | 526 | 537 |
| | 小　計 | 男 | 243 | 503 | 743 | 1016 | 1047 | 1086 | 1072 | 1029 | 1085 |
| | | 女 | 140 | 288 | 450 | 584 | 609 | 613 | 587 | 553 | 522 |
| | | 計 | 383 | 791 | 1193 | 1600 | 1656 | 1699 | 1659 | 1582 | 1607 |
| 国際学群 | 国際学類 | 男 | — | — | — | — | — | — | — | — | — |
| | | 女 | — | — | — | — | — | — | — | — | — |
| | | 計 | — | — | — | — | — | — | — | — | — |
| 人間健康学部 | スポーツ健康 | 男 | — | — | — | — | — | — | — | — | — |
| | | 女 | — | — | — | — | — | — | — | — | — |
| | | 計 | — | — | — | — | — | — | — | — | — |
| | 看　護 | 男 | — | — | — | — | — | — | — | — | — |
| | | 女 | — | — | — | — | — | — | — | — | — |
| | | 計 | — | — | — | — | — | — | — | — | — |
| | 小　計 | 男 | — | — | — | — | — | — | — | — | — |
| | | 女 | — | — | — | — | — | — | — | — | — |
| | | 計 | — | — | — | — | — | — | — | — | — |
| 合　計 | | 男 | 243 | 503 | 743 | 1016 | 1047 | 1086 | 1072 | 1029 | 1085 |
| | | 女 | 140 | 288 | 450 | 584 | 609 | 613 | 587 | 553 | 522 |
| | | 計 | 383 | 791 | 1193 | 1600 | 1656 | 1699 | 1659 | 1582 | 1607 |

## 大学院

| 研究科 | 専攻 | 領域・分野 ＼ 年度 | | H13 | H14 | H15 | H16 | H17 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 国際文化 | 国際文化システム | 言語文化 | 男 | 7 | 10 | 9 | 3 | 2 |
| | | | 女 | 7 | 10 | 13 | 5 | 2 |
| | | | 計 | 14 | 20 | 22 | 8 | 4 |
| | | 社会制度政策 | 男 | 3 | 4 | 3 | 4 | 3 |
| | | | 女 | 2 | 4 | 6 | 4 | 2 |
| | | | 計 | 5 | 8 | 9 | 8 | 5 |
| | | 経営情報 | 男 | 3 | 6 | 8 | 8 | 5 |
| | | | 女 | 1 | 5 | 5 | 3 | 1 |
| | | | 計 | 4 | 11 | 13 | 11 | 6 |
| | | 観光環境 | 男 | 3 | 4 | 7 | 10 | 6 |
| | | | 女 | 2 | 5 | 4 | 3 | 4 |
| | | | 計 | 5 | 9 | 11 | 13 | 10 |
| | | 人間健康科学 | 男 | — | — | — | — | — |
| | | | 女 | — | — | — | — | — |
| | | | 計 | — | — | — | — | — |
| | | 小　計 | 男 | 16 | 24 | 27 | 25 | 16 |
| | | | 女 | 12 | 24 | 28 | 15 | 9 |
| | | | 計 | 28 | 48 | 55 | 40 | 25 |
| 看護学 | 看護学 | 基礎看護学 | 男 | — | — | — | — | — |
| | | | 女 | — | — | — | — | — |
| | | | 計 | — | — | — | — | — |
| | | 看護学教育 | 男 | — | — | — | — | — |
| | | | 女 | — | — | — | — | — |
| | | | 計 | — | — | — | — | — |
| | | 地域住宅看護学 | 男 | — | — | — | — | — |
| | | | 女 | — | — | — | — | — |
| | | | 計 | — | — | — | — | — |
| | | 高齢者リハビリテーション看護学 | 男 | — | — | — | — | — |
| | | | 女 | — | — | — | — | — |
| | | | 計 | — | — | — | — | — |
| | | 母性看護学 | 男 | — | — | — | — | — |
| | | | 女 | — | — | — | — | — |
| | | | 計 | — | — | — | — | — |
| | | 小児看護学 | 男 | — | — | — | — | — |
| | | | 女 | — | — | — | — | — |
| | | | 計 | — | — | — | — | — |
| | | 精神看護学 | 男 | — | — | — | — | — |
| | | | 女 | — | — | — | — | — |
| | | | 計 | — | — | — | — | — |
| | | 小　計 | 男 | — | — | — | — | — |
| | | | 女 | — | — | — | — | — |
| | | | 計 | — | — | — | — | — |
| 合　計 | | | 男 | 16 | 24 | 27 | 25 | 16 |
| | | | 女 | 12 | 24 | 28 | 15 | 9 |
| | | | 計 | 28 | 48 | 55 | 40 | 25 |

| H15 | | H16 | | H17 | | H18 | | H19 | | H20 | | H21 | | H22 | | H23 | | H24 | | H25 | | H26 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 |
| 計 | | 計 | | 計 | | 計 | | 計 | | 計 | | 計 | | 計 | | 計 | | 計 | | 計 | | 計 | |
| 241 | 220 | 244 | 207 | 266 | 216 | 262 | 205 | 192 | 136 | 138 | 79 | 77 | 43 | 27 | 10 | 12 | 2 | 4 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 461 | | 451 | | 482 | | 467 | | 328 | | 217 | | 120 | | 37 | | 14 | | 4 | | 0 | | 0 | |
| 450 | 109 | 418 | 103 | 402 | 101 | 381 | 104 | 273 | 77 | 173 | 49 | 103 | 25 | 19 | 6 | 5 | 1 | 2 | 1 | 1 | 0 | 1 | 0 |
| 559 | | 521 | | 503 | | 485 | | 350 | | 222 | | 128 | | 25 | | 6 | | 3 | | 1 | | 1 | |
| 361 | 172 | 403 | 179 | 465 | 183 | 489 | 193 | 378 | 135 | 252 | 84 | 139 | 47 | 39 | 8 | 14 | 2 | 5 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 |
| 533 | | 582 | | 648 | | 682 | | 513 | | 336 | | 186 | | 47 | | 16 | | 5 | | 1 | | 0 | |
| 1052 | 501 | 1065 | 489 | 1133 | 500 | 1132 | 502 | 843 | 348 | 563 | 212 | 319 | 115 | 85 | 24 | 31 | 5 | 11 | 1 | 2 | 0 | 1 | 0 |
| 1553 | | 1554 | | 1633 | | 1634 | | 1191 | | 775 | | 434 | | 109 | | 36 | | 12 | | 2 | | 1 | |
| — | — | — | — | — | — | — | — | 193 | 79 | 355 | 138 | 453 | 197 | 607 | 326 | 592 | 428 | 583 | 531 | 581 | 640 | 587 | 699 |
| — | | — | | — | | — | | 272 | | 493 | | 650 | | 933 | | 1020 | | 1114 | | 1221 | | 1286 | |
| — | — | — | — | 68 | 34 | 135 | 79 | 198 | 138 | 273 | 170 | 294 | 158 | 288 | 152 | 299 | 154 | 277 | 167 | 239 | 187 | 234 | 185 |
| — | | — | | 102 | | 214 | | 336 | | 443 | | 452 | | 440 | | 453 | | 444 | | 426 | | 419 | |
| — | — | — | — | — | — | — | — | 19 | 75 | 32 | 149 | 46 | 221 | 62 | 292 | 60 | 298 | 61 | 290 | 65 | 301 | 69 | 288 |
| — | | — | | — | | — | | 94 | | 181 | | 267 | | 354 | | 358 | | 351 | | 366 | | 357 | |
| — | — | — | — | 68 | 34 | 135 | 79 | 217 | 213 | 305 | 319 | 340 | 379 | 350 | 444 | 359 | 452 | 338 | 457 | 304 | 488 | 303 | 473 |
| — | | — | | 102 | | 214 | | 430 | | 624 | | 719 | | 794 | | 811 | | 795 | | 792 | | 776 | |
| 1052 | 501 | 1065 | 489 | 1201 | 534 | 1267 | 581 | 1253 | 640 | 1223 | 669 | 1112 | 691 | 1042 | 794 | 982 | 885 | 932 | 989 | 887 | 1128 | 891 | 1172 |
| 1553 | | 1554 | | 1735 | | 1848 | | 1893 | | 1892 | | 1803 | | 1836 | | 1867 | | 1921 | | 2015 | | 2063 | |

| H18 | | H19 | | H20 | | H21 | | H22 | | H23 | | H24 | | H25 | | H26 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 |
| 計 | | 計 | | 計 | | 計 | | 計 | | 計 | | 計 | | 計 | | 計 | |
| 2 | 1 | 3 | 2 | 6 | 3 | 5 | 2 | 1 | 2 | 0 | 3 | 1 | 3 | 1 | 2 | 0 | 2 |
| 3 | | 5 | | 9 | | 7 | | 3 | | 3 | | 4 | | 3 | | 2 | |
| 4 | 1 | 3 | 1 | 1 | 2 | 1 | 2 | 2 | 4 | 3 | 2 | 2 | 0 | 2 | 0 | 2 | 0 |
| 5 | | 4 | | 3 | | 3 | | 6 | | 5 | | 2 | | 2 | | 2 | |
| 3 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 3 | 0 | 3 | 0 | 1 | 0 | 2 | 1 | 4 | 2 |
| 3 | | 1 | | 0 | | 1 | | 3 | | 3 | | 1 | | 3 | | 6 | |
| 2 | 2 | 3 | 0 | 2 | 0 | 2 | 0 | 3 | 0 | 2 | 0 | 1 | 0 | 2 | 2 | 2 | 2 |
| 4 | | 3 | | 2 | | 2 | | 3 | | 2 | | 1 | | 4 | | 4 | |
| — | — | — | — | — | — | — | — | 0 | 1 | 1 | 1 | 2 | 0 | 1 | 0 | 0 | 2 |
| — | | — | | — | | — | | 1 | | 2 | | 2 | | 1 | | 2 | |
| 11 | 4 | 10 | 3 | 9 | 5 | 9 | 4 | 9 | 7 | 9 | 6 | 7 | 3 | 8 | 5 | 8 | 8 |
| 15 | | 13 | | 14 | | 13 | | 16 | | 15 | | 10 | | 13 | | 16 | |
| — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| — | | — | | — | | — | | — | | 1 | | 1 | | 0 | | 0 | |
| — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 0 | 3 | 0 | 5 | 0 | 4 | 0 | 4 |
| — | | — | | — | | — | | — | | 3 | | 5 | | 4 | | 4 | |
| — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 0 | 1 | 0 | 2 | 1 | 2 | 1 | 3 |
| — | | — | | — | | — | | — | | 1 | | 2 | | 3 | | 4 | |
| — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 2 |
| — | | — | | — | | — | | — | | 0 | | 0 | | 0 | | 3 | |
| — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 |
| — | | — | | — | | — | | — | | 0 | | 1 | | 1 | | 0 | |
| — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 2 |
| — | | — | | — | | — | | — | | 0 | | 0 | | 1 | | 2 | |
| — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 0 | 1 | 1 | 2 | 1 | 2 | 2 | 1 |
| — | | — | | — | | — | | — | | 1 | | 3 | | 3 | | 3 | |
| — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 1 | 5 | 2 | 10 | 2 | 10 | 4 | 12 |
| — | | — | | — | | — | | — | | 6 | | 12 | | 12 | | 16 | |
| 11 | 4 | 10 | 3 | 9 | 5 | 9 | 4 | 9 | 7 | 10 | 11 | 9 | 13 | 10 | 15 | 12 | 20 |
| 15 | | 13 | | 14 | | 13 | | 16 | | 21 | | 22 | | 25 | | 32 | |

# 卒業者数（平成26年５月1日現在）

## ■学部・学群

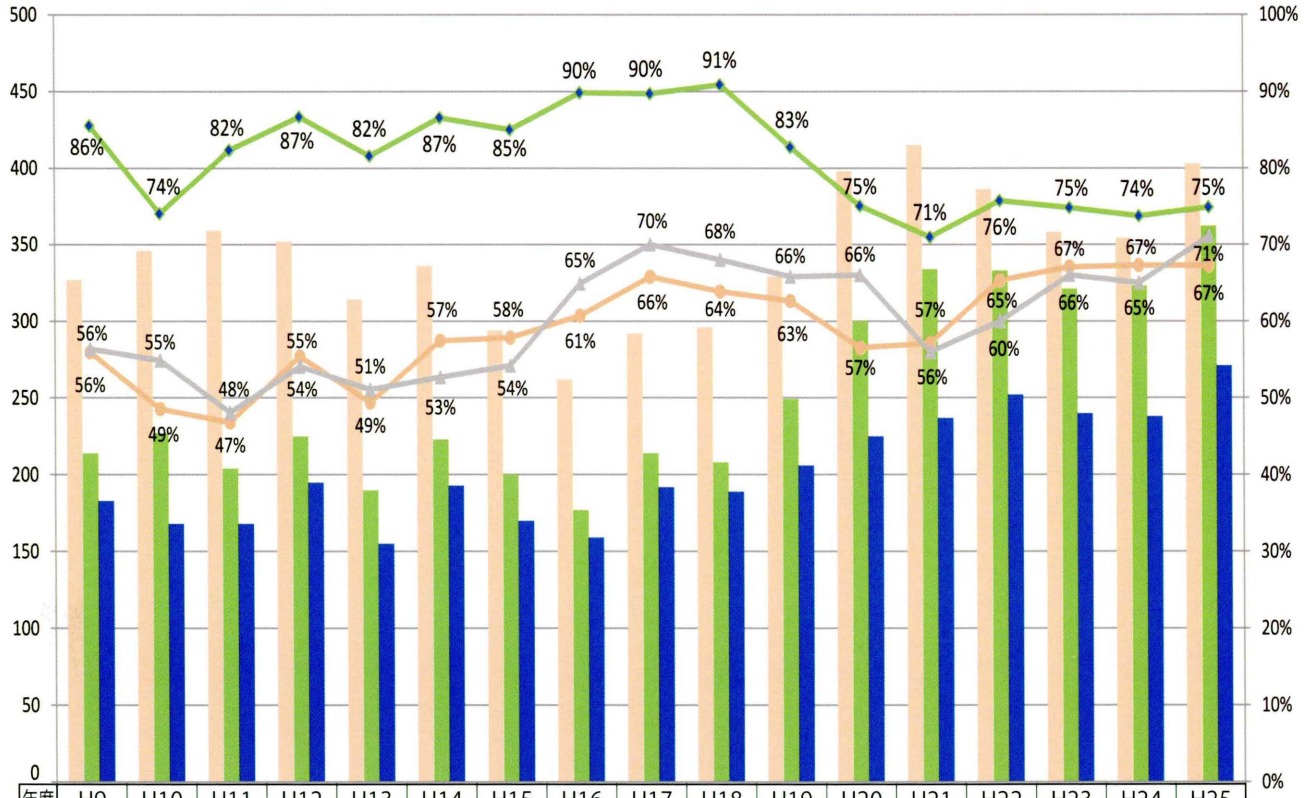
| 卒業年度 | H9~13 | H14 | H15 | H16 | H17 | H18 | H19 | H20 | H21 | H22 | H23 | H24 | H25 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 国際学部 | 1734 | 361 | 304 | 281 | 303 | 313 | 347 | 290 | 301 | 45 | 19 | 8 | 0 |
| 内留学生 | 62 | 5 | 2 | 14 | 16 | 7 | 12 | 15 | 5 | 2 | 1 | 0 | 0 |
| 学部累計 | 1734 | 2095 | 2399 | 2680 | 2983 | 3296 | 3643 | 3933 | 4234 | 4279 | 4298 | 4306 | 4306 |
| 内留学生 | 62 | 67 | 69 | 83 | 99 | 106 | 118 | 133 | 138 | 140 | 141 | 141 | 141 |
| 国際学群 | | | | | | | | | | 182 | 162 | 163 | 199 |
| 内留学生 | | | | | | | | | | 4 | 10 | 9 | 12 |
| 学群累計 | | | | | | | | | | 182 | 344 | 507 | 706 |
| スポーツ健康学科 | | | | | | | | 108 | 114 | 80 | 90 | 106 | 93 |
| 看護学科 | | | | | | | | | | 79 | 87 | 77 | 93 |
| 全学合計 | 1734 | 361 | 304 | 281 | 303 | 313 | 347 | 398 | 415 | 386 | 358 | 354 | 400 |
| 内留学生 | 62 | 5 | 2 | 14 | 16 | 7 | 12 | 15 | 5 | 6 | 11 | 9 | 12 |
| 全学累計 | 1734 | 2095 | 2399 | 2680 | 2983 | 3296 | 3643 | 4041 | 4456 | 4842 | 5200 | 5554 | 5939 |
| 内留学生 | 62 | 67 | 69 | 83 | 99 | 106 | 118 | 133 | 138 | 144 | 155 | 164 | 176 |



## ■修士課程修了者数

| 修了年度 | | H14 | H15 | H16 | H17 | H18 | H19 | H20 | H21 | H22 | H23 | H24 | H25 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 国際文化研究科 | 男 | 10 | 11 | 13 | 9 | 2 | 4 | 4 | 0 | 4 | 3 | 4 | 0 | 2 | 4 | 5 | 3 | 2 | 2 | 2 | 1 |
| | 女 | 4 | 13 | 9 | 9 | 2 | 4 | 4 | 0 | 4 | 3 | 4 | 0 | 2 | 4 | 5 | 3 | 2 | 2 | 2 | 1 |
| | 計 | 14 | 24 | 22 | 11 | 8 | 4 | 7 | 4 | 6 | 8 | 4 | 3 |
| 内留学生 | 男 | 0 | 5 | 4 | 2 | 1 | 2 | 3 | 0 | 2 | 2 | 2 | 0 | 2 | 2 | 3 | 1 | 1 | 2 | 1 | 0 |
| | 女 | 0 | 6 | 5 | 1 | 2 | 3 | 0 | 2 | 2 | 2 | 0 | 2 | 2 | 3 | 1 | 1 | 2 | 1 | 0 |
| | 計 | 0 | 11 | 9 | 3 | 3 | 3 | 4 | 2 | 4 | 4 | 3 | 1 |
| 累計 | 男 | 10 | 21 | 34 | 43 | 47 | 51 | 55 | 59 | 61 | 66 | 68 | 70 |
| | 女 | 4 | 17 | 26 | 28 | 32 | 32 | 35 | 35 | 39 | 42 | 44 | 45 |
| | 計 | 14 | 38 | 60 | 71 | 79 | 83 | 90 | 94 | 100 | 108 | 112 | 115 |
| 内留学生 | 男 | 0 | 5 | 9 | 11 | 12 | 15 | 17 | 19 | 21 | 24 | 25 | 26 |
| | 女 | 0 | 6 | 11 | 12 | 14 | 14 | 16 | 16 | 18 | 19 | 21 | 21 |
| | 計 | 0 | 11 | 20 | 23 | 26 | 29 | 33 | 35 | 39 | 43 | 46 | 47 |
| 看護学研究科 | 男 | | | | | | | | | | | 1 | 0 |
| | 女 | | | | | | | | | | | 3 | 4 |
| | 計 | | | | | | | | | | | 4 | 4 |
| 累計 | 男 | | | | | | | | | | | 1 | 1 |
| | 女 | | | | | | | | | | | 3 | 7 |
| | 計 | | | | | | | | | | | 4 | 8 |

# 卒業者就職内定状況




| 年度 | H9 | H10 | H11 | H12 | H13 | H14 | H15 | H16 | H17 | H18 | H19 | H20 | H21 | H22 | H23 | H24 | H25 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| A | 327 | 346 | 359 | 352 | 314 | 336 | 294 | 262 | 292 | 296 | 329 | 398 | 415 | 386 | 358 | 354 | 403 |
| B | 214 | 227 | 204 | 225 | 190 | 223 | 200 | 177 | 214 | 208 | 249 | 300 | 334 | 333 | 321 | 323 | 362 |
| C | 183 | 168 | 168 | 195 | 155 | 193 | 170 | 159 | 192 | 189 | 206 | 225 | 237 | 252 | 240 | 238 | 271 |
| D | 86% | 74% | 82% | 87% | 82% | 87% | 85% | 90% | 90% | 91% | 83% | 75% | 71% | 76% | 75% | 74% | 75% |
| E | 56% | 49% | 47% | 55% | 49% | 57% | 58% | 61% | 66% | 64% | 63% | 57% | 57% | 65% | 67% | 67% | 67% |
| F | 56% | 55% | 48% | 54% | 51% | 53% | 54% | 65% | 70% | 68% | 66% | 66% | 56% | 60% | 66% | 65% | 71% |

※３月卒業者で算出
※算出方法：内定者÷就職希望者×100＝内定率（%）　小数点第１位で四捨五入
※県内大学卒者の就職率は、沖縄労働局「新規学卒者の就職内定状況」(各年３月末現在)より出典

A 卒業者数
B 就職希望者数
C 内定者
D 内定率(%)
E 卒業者に対する内定率
F 県内大学卒者の就職率

# 開学20周年・公立大学法人化５周年記念事業

## 記念イベント

**1** 特別対談「ゆるやかな歩みで」

よしもとばなな 作家 ×ブルース・ベイリー 日本ロレックス社長

日　時：2014年４月16日（水）

場　所：名桜大学多目的ホール

**2** 特別講演「夢を求めて～東京ディズニーリゾート　バリアフリーの取り組み～」

野口浩一 ㈱オリエンタルランドCS推進グループバリアフリープロデューサー

日　時：2014年７月２日（水）

場　所：名桜大学多目的ホール

**3** 音 楽 祭『やわらかな空気に包まれて』

～音の中に感じる「平和・自由・進歩」～

海勢頭愛 バイオリニスト、大城松健 ギタリスト、沖縄・名護ジュニアコーラス

日　時：2014年10月25日（土）

場　所：名桜大学多目的ホール

**4** 交流協定大学国際シンポジウム「21世紀グローバル人材の育成について」

日　時：2014年11月29日（土）14：00 ～ 16：30

場　所：名桜大学多目的ホール

第１部：基調講演「グローバル人材の育成」

基調講演者：瀬名波榮喜 名桜大学名誉学長

第２部：シンポジウム「21世紀グローバル人材の育成」

コーディネーター：山里勝己 名桜大学学長

シンポジスト：Dr.シン・イルヒ 啓明大学総長

シンポジスト：Dra.ベレニッセ・キンザーニ・ジョルダォン ロンドリーナ州立大学長

シンポジスト：Dr.エドルマン ウィリアム サウスイースト・ミズリー州立大学長代理 大学教務担当副学長

**5** 万国津梁交流シンポジウム

日　時：2015年１月（予定）

場　所：名桜大学多目的ホール

**6** 記念講演会「真の国際人を目指すために（仮題）」

日　時：2015年１月15日（木）16：30 ～

場　所：名桜大学学生会館SAKURAUM

講　師：ピーター・フランクル 数学者、大道芸人

## 1 特別対談「ゆるやかな歩みで」

よしもとばなな氏 作家 × ブルース・ベイリー氏 日本ロレックス社長

2014年4月16日、作家のよしもとばなな氏と日本ロレックス社長のブルース・ベイリー氏による特別対談が開催されました。会場には、学生・地域の方々をはじめ約280人が集まりました。

ベイリー氏がよしもと氏に質問したことは、大学時代について。よしもと氏は、大学に進学したものの、あまり通わなかったが「お金や時間を心配せず、思う存分いろいろなことを考えられたことが、一番大きかった。貴重な４年間だったと今でも思う」と振り返りました。また、よしもと氏は、これから社会に出る学生に、自分の考えがはっきりしていることが大事だと強調し、「周りの意見に合わせるだけでなく、今自分が、どこまで、何をするべきか、また『誰にも嘘をつかない自分自身ならどうするか？』というところまで、考えておくことが良いのではないかと思う」とアドバイスを送りました。一方、ベイリー氏は経営者の立場で、「（会社を運営するには）大きな目標がなければならない。皆が同じ目標に向かうこと。仕事は一人ではできないですから」と話した上で、サンフランシスコのゴールデンゲートブリッジを例に挙げ、「（この橋の）創設者がいなくなった今も、これまでと同じように存在し続けるには、様々な人々が携わらなければならない。それは会社も同じです。人は社会の中でそれぞれ役割があります。様々な職業、人がいて成り立ちます」と話しました。ベイリー氏の“それぞれの役割”について、よしもと氏は「向き・不向きについて考え、得意なジャンルに特化することを念頭に置き取り組むこと。自分にできないことは、必ず他の方ができます。自分にできることを一生懸命に取り組めば、分担してくれている方に対する敬意になるのではないでしょうか。皆が自分の持ち場に満足して、うまく成り立っている状態が理想だと思います」と掘り下げました。

作家としての喜びや作品のテーマについては、「作品が人と人を結び付けるきっかけとなったときが一番嬉しい」と、顔をほころばせました。また、「『人生の中の小さなところから気づくこと』をテーマに、書き続けてきました。そのことが、何度も読み続けている人には伝わってきている印象があります。（作家は）20、30年仕事だなと思います。すぐには結果が出ない仕事ですね」と述べました。

引き続き、フロアとの質疑応答が行われました。仕事をする上で工夫・大事にしていることについて、よしもと氏とベイリー氏は「締め切りを守りつつ、中途半端な形で世に出さないこと」と共に同じ答えを述べ、徹底したこだわりを語りました。

対談終了後、同会場にてよしもと氏によるサイン会が開催されました。学生をはじめ地域住民の熱烈なファンが参加し、長蛇の列をなしていましたが、よしもと氏はサインしながら始終笑顔でファンとの会話を楽しんでいました。

## 2 特別講演「夢を求めて～東京ディズニーリゾート　バリアフリーの取り組み～」

野口浩一氏 ㈱オリエンタルランドCS推進グループバリアフリープロデューサー

2014年７月２日、株式会社オリエンタルランドの野口浩一氏による特別講演が開催されました。

講演では、野口氏から東京ディズニーリゾートにおけるバリアフリー、ユニバーサルデザイン、共用品についてお話いただきました。「障がいを持った人々の目線に立ち、各障がい特性に対応した情報提供の仕方」、「テーマパークのイメージ（ストーリー性、テーマ性）を遵守した施策」等、ゲストに楽しんでいただくための工夫や仕組み作りについて、紹介されました。

続いて行われた質疑応答では、本学の学生から多くの質問があがりました。たとえば、(障がい者に対する)場内アナウンスの工夫については、「『車椅子の方』ではなく『車椅子を利用の方』等、言葉遣いに気を配っています」とのことでした。また、障がいがある方から寄せられるアイテムの改善の要望については、「ディズニーの世界観から逸脱しないよう、バランスの取れた要望品を作ります」等、各質問に対し丁寧に回答していました。



## 3 音楽祭『やわらかな空気に包まれて』～音の中に感じる「平和・自由・進歩」～

海勢頭愛氏 バイオリニスト、大城松健氏 ギタリスト、沖縄・名護ジュニアコーラス

2014年10月25日、音楽祭「『やわらかな空気に包まれて』～音の中に感じる『平和・自由・進歩』」～が開催されました。ゲストに、バイオリニストの海勢頭愛氏、ギタリストの大城松健氏、沖縄・名護ジュニアコーラスをお迎えしました。曲目は以下の通りでした。

バイオリン独奏

| | |
|---|---|
| 無伴奏パルティータ第３番より プレリュード | 作曲 J.Sバッハ |
| 無伴奏ソナタより 第３楽章ラルゴ | 作曲 J.Sバッハ |
| 無伴奏ソナタより 第４楽章アレグロアッサイ | 作曲 J.Sバッハ |

ギター独奏

| | |
|---|---|
| スペイン舞曲 第５番アンダルーサ | 作曲 E.グラナドス |
| ラグリマ | 作曲 F.タレガ |
| アルハンブラの想い出 | 作曲 F.タレガ |

バイオリン・ギター二重奏

| | |
|---|---|
| カンタービレ | 作曲 N.パガニーニ |
| チェントーネ ソナタ | 作曲 N.パガニーニ |

アリア　作曲 J.Sバッハ
うりずん　作曲 海勢頭 豊
セレナーデ　作曲 F.シューベルト

合　唱

Jupiter　作詞 内藤 里永子、作曲 G.ホルスト、編曲 横山 潤子
ふるさと　作詞 高野 辰之、作曲 岡野 貞一、編曲 横山 潤子
うたおう　作詞 みなづき みのり、作曲 千原 英喜
Hymn to Freedom　作詞 Harriette Hamilton、作曲 Oscar Peterson
六月の子守唄　作詞 山里 勝己、作曲 中村 透
つながるいのち
作詞・作曲 下地 なを美、編曲 照屋 岳史、合唱版編曲 富澤 裕

全体合唱・合奏

月桃　作詞・作曲 海勢頭 豊

## 4 交流協定大学国際シンポジウム「21世紀グローバル人材の育成について」

教育再生実行会議においては、今日の社会の多様な場面でグローバル化が進む中、「大学は教育内容と教育環境の国際化を徹底的に進め世界で活躍できるグローバル・リーダーの育成、グローバルな視点をもって地域社会の活性化を担う人材を育成する」という必要性が提言されています。一方、本学は、開学時より教育目標として「国際社会で貢献できる人材の育成」を掲げてきました。本学は、これまでに海外28大学と交流協定を締結し、多くの留学生の受け入れ及び学生の派遣を行ってきました。今後もグローバル人材の育成を一層推進するため、開学20周年・公立大学法人化５周年を契機に、海外交流協定大学の学長等を招聘し、「21世紀グローバル人材の育成」について国際シンポジウムを開催しました。

第１部：基調講演「グローバル人材の育成」
基 調 講 演 者：瀬名波榮喜　名桜大学名誉学長

第２部：シンポジウム「21世紀グローバル人材の育成」
コーディネーター：山里勝己　名桜大学学長
シンポジスト：Dr. シン・イルヒ　啓明大学総長
シンポジスト：Dra.ベレニッセ・キンザーニ・ジョルダォン
ロンドリーナ州立大学学長
シンポジスト：Dr.エドルマン ウィリアム
サウスイースト・ミズリー州立大学学長代理
大学教務担当副学長

# 開学20周年・公立大学法人化5周年記念募金 寄附者一覧

## 個人

### 3万円未満

赤嶺依里乃
東江　平之
東江　廣允
安里　昌泰
東江　康治
安里　葉子
安達　一成
阿波根昌美
新川　悦子
新田　繁迪
池味喜美子
池田　　治
石田　正博
市原　　修
市山　繁範
伊藤勇一郎
稲村　好彦
今井　正則
岩松　敏幸
上木　義一
上江洲　剛
上原　朗渡
宇榮原宗誠
上原　　喬
上原　　満
宇榮原宗輝
上間　　智
上間　敏信
内田　友子
浦崎　淳也
大門　達也
大久保俊也
大重　教子
大城　章紀
大城佐和子
大城　友子
大城　直人
大城　　拓
大城真理子
大西　春二
大嶺　幸輝
岡田みゆき
奥田　悦次
尾坂　謙二
小野　一徳
親川　　保
嘉数　　昇
垣花　弘子
梶川　謙二
嘉手納良弘
加藤　清光
加藤　　良
金井　智樹
兼次千恵美
兼島　　哲
金田　好弘
神山　利昭
狩俣　忠雄
川合　　慎
川津　千歳
川村　義晴
神崎　義光
金城　邦明
金城　壽子
金城真樹子
金城　　稔
具志川大輔
具志川昌清
熊谷　孝宏
桑江　良政
幸喜　雪子
呉我　恵子
小口　貞雄
小杉　利孝
小谷　千寿
後藤　浩治
小沼　　徹
小林　一夫
小室　　靖
小室　龍一
米須　義秀
小山　義之
佐川　　誠
佐々木栄二
佐藤　　敦
塩田　洋明
塩生　浩明
粱田　徹也
島　　史生
島袋　尚美
庄田　康夫
城間　重臣
新里　晴美
新城　知聖
菅沼　康雄
鈴木　　忍
鈴木　　剛
鈴木　英夫
鈴木　裕司
砂川　一弥
砂川　祐子
勢理客智之
高砂　正元
髙橋　　要
髙森　政行
竹内くみこ
竹下　敏也
武島　幸男
玉井なおみ
玉城　　洋
玉城　正貴
玉木　律子
知念　真榮
津嘉山淳子
津田　尚美
土屋　幸一
常藤　宗良
津波古哲也
照屋　信次
當山　清光
遠越　享子
渡嘉敷直子
渡久地米子
泊　伝一郎
友利　　修
仲井　　太
長島　道男
中島ゆかり
長田喜美子
長田　恒吉
長浜　直樹
仲間　常夫
中村英一郎
中村　達志
中村　奈月
仲本　兼弘
仲本まゆみ
中山　裕章
永吉ルリ子
名城　一枝
波平　　武
新崎　哲弘
新納　政幸
西川　忠一
西間庭悦美
野崎　　康
饒波　正一
野村　宗徳
長谷川　靖
畠山　修一
原　　隆昭
比嘉　一成
比嘉　　保
比嘉　照朗
比嘉　啓文
比嘉　政信
比嘉　　勝
比嘉　良彦
樋口　達哉
樋口美貴子
比屋根勇雄
平井祥一郎
平城　　強
平田　嗣義
平野　壽一
平上久美子
福原　識貞
藤本千加子
冨名腰朝春
平識　善盛
堀　　敏夫
米田留美子
馬上　孝夫
牧野ひろみ
政田　龍助
又吉　　稔
松下　雄二
松田　　勇
松田　智夫
松田　弥生
松田　吉生
三浦　朋秀
三岡　憲弘
貢　　廣沢
満野　清司
宮城　真光
宮城そのみ
味吉　　博
村上　直美
望月　春雄
持留　一郎
森　　安美
諸隈　正文
諸見里安晴
安田　慶人
山川　　勇
山崎　直記
山里　絹子
山下　浩二
山下　哲夫
山城　　存
山城　達雄
山城　　豊
屋良健一郎
横塚　　保
吉永　　泉
よしもとばなな
與那嶺辰男
渡部　和男
渡邉　浩和

平成26年11月25日現在。名称は50音順に記載

## 3万円以上～10万円未満

赤嶺　達也　　片井　利明　　佐久本功達　　竹沢　昌子　　仲村　善文　　森　直樹
ｱﾗｽｰﾝ･ﾋﾟｰﾀｰ　　嘉手苅　健　　澤田　和男　　田邊　勝義　　中山　登偉　　屋嘉　義和
池原　秀人　　嘉納　英明　　ｼｬｲﾔｽﾃﾌｧﾛｯｸ　　知念　栄　　根間　朋江　　山崎　巴
石丸　博光　　喜瀬　直樹　　島田　友子　　樋高　純郎　　朴　在徳　　山城　耕政
板山　勝樹　　木村　堅一　　助川　健一　　天願　健　　比嘉　辰己　　和田　耕三
稲垣　絹代　　金城　亮　　鈴木　啓子　　中里　収　　久野　壮
上原　康成　　金城　利雄　　鈴木　卓　　仲宗根盛義　　藤本　勝徳
内村　良二　　金城　正英　　鈴木　信彦　　永田　馨　　前川美紀子
大城　凌子　　金城やす子　　住江　淳司　　永田美和子　　又吉　純
小川寿美子　　金城　祥教　　高安美智子　　仲村　克也　　松下　聖子
荻堂　盛淳　　小西　清美　　竹内　伸也　　中村　重雄　　望月　正吾

## 10万円以上～50万円未満

加藤　修三　　渡具知　伸　　宮城　真宏　　柳澤　武
塚田　清嗣　　橋詰　義幸　　宮里　政邦　　與那嶺　豊

## 50万円以上～100万円未満

山里　勝己

## 100万円以上

金良　道子　　瀬名波榮喜　　比嘉　良雄

## 企業・団体

| 3万円未満 | | |
|---|---|---|
| 会社名・団体名 | 役職名 | 氏　名 |
| 上間鋼材株式会社 | 代表取締役 | 上間　雅之 |
| 有限会社運天組 | 代表取締役 | 上運天景邑 |
| 株式会社沖食商事　名護支店 | 代表取締役 | 山川　盛二 |
| 沖縄ガス株式会社 | 代表取締役社長 | 宮城　　譖 |
| 株式会社沖縄設計センター | 代表取締役 | 松田　茂安 |
| 沖縄道路株式会社 | 代表取締役 | 宮里　三男 |
| 有限会社勝山シークヮーサー | 代表取締役 | 山川　良勝 |
| 株式会社国際旅行社 | 代表取締役社長 | 与座　嘉博 |
| サンシャイン名桜 | 代表者 | 玉城　浩孝 |
| 株式会社CSハウジング | 代表取締役 | 中本　益也 |
| 株式会社人材派遣センターオキナワ | 代表取締役社長 | 中村　良太 |
| 有限会社末吉電水工業 | 代表取締役 | 末吉　久志 |
| 有限会社大望エンジニアリング | 代表取締役 | 久高　秀樹 |
| 有限会社とまとコーポレイション | 代表取締役 | 金城　勇治 |
| 有限会社名護総合測量設計 | 代表取締役 | 山城　豊隆 |
| 一般社団法人日本健康倶楽部沖縄支部 | 支部長 | 吉野　公洋 |
| 万国津梁館 | 館長 | 山城　昭栄 |
| 株式会社北部観光バス | 代表取締役 | 仲泊　栄次 |
| 丸政商事株式会社 | 代表取締役 | 仲松　由清 |
| 有限会社三佳住宅 | 取締役 | 岸本　恵好 |
| みよし洋蘭 | 代表者 | 金城　康夫 |
| 有限会社名興不動産 | 代表取締役 | 仲本　興順 |
| 山内ビル | 代表者 | 山内　　昇 |
| 琉球製罐株式会社 | 代表取締役社長 | 笠置　和憲 |

平成26年11月25日現在。名称は50音順に記載

| 3万円以上～10万円未満 | | |
|---|---|---|
| 会社名・団体名 | 役職名 | 氏　名 |
| 有限会社アーバン丸富 | 代表取締役 | 長浜　宗則 |
| 株式会社東江ガス北部 | 代表取締役 | 東江　成美 |
| 株式会社アドスタッフ博報堂 | 代表取締役社長 | 山里　正光 |
| 一般社団法人アトリエみらい | 代表理事 | 東　　邦治 |
| 有限会社新川建設 | 代表取締役 | 新川　良彦 |
| 株式会社オカノ | 代表取締役社長 | 與儀　盛輝 |
| 株式会社沖産業 | 代表取締役社長 | 花城えり子 |
| 沖縄トヨタ自動車株式会社 | 代表取締役 | 野原　朝昌 |
| オキナワマリオットリゾート＆スパ | 総支配人 | 松本　公敏 |
| 沖縄明治乳業株式会社 | 代表取締役社長 | 山城　　宝 |
| 株式会社加島事務機 | 代表取締役 | 加島　一郎 |
| 株式会社近畿日本ツーリスト沖縄 | 代表取締役社長 | 福岡　　卓 |
| 株式会社国際印刷 | 代表取締役 | 大田　則政 |
| 株式会社国際ビル産業 | 代表取締役 | 上地　宏和 |
| 株式会社コンピュータ沖縄 | 代表取締役 | 名護　宏雄 |
| 株式会社佐久本工機 | 代表取締役 | 佐久本嘉幸 |
| 株式会社崎浜商店 | 代表取締役 | 崎浜　秀一 |
| ザ・テラスホテルズ株式会社 | 代表取締役社長 | 國場　幸伸 |
| 三電エネルギー推進協議会 | 代表理事 | 仲宗根勝明 |
| スタジオエース | 代表者 | 東　　邦定 |
| 株式会社第一医療器 | 代表取締役 | 嘉手納知尚 |
| 株式会社千代田ブライダルハウス | 代表取締役 | 元田　　徹 |
| 有限会社仲健工業 | 代表取締役 | 仲宗根　正 |
| なご電化 | 代表者 | 玉村　　稔 |
| 名護ロータリークラブ | 会長 | 石川　雅弘 |
| 日本総合整美株式会社 | 代表取締役 | 古川喜美男 |
| 医療法人博寿会 | 理事長 | 高石　利博 |
| 株式会社ホテルロイヤルオリオン | 代表取締役社長 | 澤岻　幾郎 |
| 株式会社前田産業 | 代表取締役社長 | 前田　裕子 |
| 有限会社丸喜緑化 | 代表取締役 | 喜屋武忠信 |
| 株式会社丸金交通 | 代表取締役 | 運天　　健 |
| 有限会社丸正工業 | 代表取締役 | 比嘉　正直 |
| 株式会社丸山不動産 | 代表取締役 | 山里　将勝 |

| | | |
|---|---|---|
| 有限会社丸良電建工業 | 社長 | 比嘉　良勝 |
| 株式会社名桜土質測量設計 | 代表取締役 | 玉城　幸博 |
| 株式会社メイクマン | 代表取締役社長 | 宮城　順一 |
| 琉球朝日放送株式会社 | 代表取締役社長 | 上間　信久 |

## 10万円以上～50万円未満

| 会社名・団体名 | 役職名 | 氏　名 |
|---|---|---|
| あけみお司法書士事務所 | 司法書士 | 金城　哲成 |
| 新垣産業株式会社 | 代表取締役 | 新垣　力太 |
| 株式会社オキジム | 代表取締役 | 新里　　勇 |
| 一般財団法人沖縄美ら島財団 | 理事長 | 花城　良廣 |
| 沖縄ツーリスト株式会社 | 代表取締役 | 東　　良和 |
| 沖縄配送株式会社 | 代表取締役 | 花城　清友 |
| 沖縄ビル管理グループ会議 | 会長 | 新垣　淑典 |
| 北沖縄ビル管理株式会社 | 代表取締役社長 | 喜世川　優 |
| 有限会社くくる | 代表取締役 | 仲程　　忠 |
| 株式会社第ジムキ文明堂 | 代表取締役 | 石川　元章 |
| 株式会社第一三興建設 | 代表取締役社長 | 山城　一三 |
| 株式会社第一三興HOLDINGS | 代表取締役 | 山城　一三 |
| 名護漁業協同組合 | 代表理事 | 古波蔵　廣 |
| 株式会社日進商会 | 代表取締役 | 大城　英幸 |
| 羽柴工業株式会社 | 代表取締役 | 岸本　正博 |
| 株式会社ピーシー | 代表取締役 | 比嘉　克己 |
| 有限会社朋友 | 代表取締役 | 岸本　正博 |
| 有限会社北部空調設備 | 取締役 | 仲里　仁榮 |
| 合資会社ヤナギ電設工業 | 代表社員 | 仲宗根智子 |
| 株式会社リウゼン | 代表取締役 | 中村　博明 |
| 株式会社琉球新報社 | 代表取締役 | 富田　詢一 |
| レンタルコスチューム　メリーハウス | 代表者 | 比嘉千恵子 |

平成26年11月25日現在。名称は50音順に記載

## 50万円以上～100万円未満

| 会社名・団体名 | 役職名 | 氏　名 |
|---|---|---|
| 株式会社沖成ガード | 代表取締役社長 | 東江　正寛 |
| 昭和化学工業株式会社 | 代表取締役社長 | 比嘉　克己 |
| 大同火災海上保険株式会社 | 代表取締役社長 | 上間　　優 |
| 有限会社北勝建設 | 代表取締役 | 新里　勝則 |
| 「比嘉良雄氏名桜大学理事長就任激励」並びに<br>「名桜大学創立20周年記念資金造成ゴルフ大会」発起人会 | 発起人代表 | 新垣　誠福 |
| 琉球セメント株式会社 | 代表取締役社長 | 西村　　聰 |
| レキオファーマ株式会社 | 代表取締役 | 奥　キヌ子 |

## 100万円以上～300万円未満

| 会社名・団体名 | 役職名 | 氏　名 |
|---|---|---|
| 株式会社沖縄海邦銀行 | 代表取締役頭取 | 上地　英由 |
| 沖縄電力株式会社 | 代表取締役社長 | 大嶺　　滿 |
| 株式会社東開発 | 代表取締役社長 | 仲泊　栄次 |
| 北部建築設計協会 | 会長 | 佐久川守仁 |
| 名桜大学協力会 | 会長 | 仲泊　弘次 |
| 株式会社屋部土建 | 代表取締役社長 | 津波　達也 |
| やんばる物産株式会社 | 代表取締役 | 荻堂　盛秀 |
| 医療法人琉心会 | 理事長 | 島袋　茂照 |

## 300万円以上

| 会社名・団体名 | 役職名 | 氏　名 |
|---|---|---|
| 株式会社沖縄銀行 | 代表取締役頭取 | 玉城　義昭 |
| 名桜大学後援会 | 会長 | 荻堂　盛秀 |
| 株式会社琉球銀行 | 頭取 | 金城　棟啓 |

# 教育研究奨励基金、その他特定・一般寄附金 寄附者一覧

平成17年度～平成26年11月25日現在。名称は50音順に記載

安里　祥徳
新崎　康博
生見　哲郎
石川　清治
株式会社上門工業
上江洲　均
浦崎　政子
桜儀会
大山　　哲
岡村　禎浩
株式会社沖成ガード
沖縄ペプシビバレッジ株式会社
沖縄県立農林学校同窓会
荻堂　秀子
沖縄関ヶ原石材
沖縄ツーリスト株式会社
垣花　勝行
株式会社カヌチャベイ
金秀グループ
岸本　幸久
株式会社儀保砕石
久保田照子
佐久原和美
杉本　英夫
スタジオエースグループ
瀬名波榮喜
知念　一郎
知花　裕昇
株式会社千代田ブライダルハウス
有限会社ツナミ組
名護記念クリニック
西平　守孝
ビエン.S.P.パンガニバン
比嘉　丈芳
比嘉　富子
比屋根　勉
福島　秀世
医療法人ほくと会
前川美津子
有限会社新家
宮里　政邦
株式会社名桜キャンパスサポート
名桜大学教職員一同
名桜大学県出身子弟を支援する会
名桜大学後援会
名桜大学同窓会
名桜大学硬式野球部後援会
名桜大学硬式野球部ＯＢ会
名桜大学硬式野球部協力会
名桜大学10期卒業パーティー実行委員
メディエ株式会社藤田和子
メリーハウスグループ
屋嘉　義和
安井　健二
株式会社山浩商事
屋宮　隆道
屋良　朝一
やんばる物産株式会社
吉川千恵子
琉球ぶくぶく茶あけしのの会
医療法人琉心会
ワールドクィーン沖縄



# 年表

| 年 | 出来事 |
|---|---|
| 1991年 | 7月　学校法人名護総合学園設立準備委員会発起人会発足 |
| | 学校法人名護総合学園設立準備事務局設置 |
| 1992年 | 4月　学校法人名護総合学園設立基本構想申請（文部省へ） |
| | 7月　名桜大学設置基本構想申請 |
| | 10月　第一次審査　文部省（大学設置・学校法人審議会） |
| 1993年 | 6月　第二次審査　文部省（大学設置・学校法人審議会） |
| | 9月　現地調査実施　文部省（大学設置・学校法人審議会） |
| | 12月　学校法人名護総合学園寄附行為認可（文部大臣） |
| 1994年 | 4月　名桜大学開学　第１回入学式 |
| 1995年 | 4月　開学記念式典 |
| 1996年 | 4月　名桜大学総合研究所設立 |
| 1997年 | 10月　名桜大学後援会設立 |
| | 11月　名桜大学完成記念植樹 |
| 1998年 | 3月　第１回卒業式 |
| 1999年 | 4月　沖縄県植樹祭 |
| | 6月　多目的ホール完成 |
| | 7月　開学５周年式典 |
| 2000年 | 6月　名桜大学大学院国際文化研究科設置認可申請 |
| | 12月　名桜大学大学院国際文化研究科設置認可 |
| 2001年 | 4月　名桜大学大学院国際文化研究科開設 |
| 2002年 | 2月　名桜大学同窓会設立 |
| 2003年 | 3月　名桜大学大学院国際文化研究科第１期生修了 |
| 2004年 | 9月　名桜大学人間健康学部設置認可申請 |
| | 10月　北部生涯学習推進センター完成 |
| | 12月　開学10周年記念式典 |
| 2005年 | 1月　名桜大学人間健康学部設置認可（文部科学大臣） |
| | 4月　名桜大学人間健康学部スポーツ健康学科開設 |
| 2006年 | 6月　名桜大学人間健康学部看護学科設置認可申請 |
| | 7月　名桜大学国際学群国際学類設置認可届出 |
| | 9月　名桜大学国際学群国際学類設置認可（文部科学大臣） |
| | 11月　名桜大学人間健康学部看護学科設置認可（文部科学大臣） |
| 2007年 | 4月　名桜大学国際学群国際学類開設 |
| | 名桜大学人間健康学部看護学科開設 |
| 2009年 | 12月　北部広域市町村圏事務組合より「公立大学法人名桜大学」設立認可申請（沖縄県へ） |
| | 学校法人名護総合学園より設置者変更認可申請および学校法人解散認可申請（文部科学省へ） |

| 年 | 出来事 |
| --- | --- |
| 2010年 | 3月　公立大学法人名桜大学設立認可（沖縄県知事） |
| | 学校法人の設置者変更および解散認可（文部科学大臣） |
| | 4月　公立大学法人名桜大学開設 |
| | 5月　名桜大学大学院看護学研究科設置認可申請 |
| | 10月　名桜大学大学院看護学研究科設置認可（文部科学大臣） |
| 2011年 | 4月　名桜大学大学院看護学研究科開設 |
| 2014年 | 12月　開学20周年、公立大学法人化５周年式典 |

# 編集後記

名桜大学開学20周年・公立大学法人５周年記念事業の一つとして記念誌『名桜大学20年史』発刊が計画され、部会が組織されたのは2013（平成25）年２月のことであった。学系・学科、部局などから選出された教職員、そして本学開学10周年記念誌『名桜大学10年史』作成でお世話になった新星出版にこの度も加わっていただき、基本的に毎月第３月曜日を定例として２年弱の間、都合21回の部会をもった。

部会では、『名桜大学10年史』の内容を一部補完するかたちをとりつつ、公立大学法人化に至る経緯を含め、本学の開学から現在までの20年間の歩みをわかりやすく示すという編集方針のもと、まず目次案策定のための検討、修正を重ねた。ある程度目次案が固定化された段階から学内外の執筆者、インタビュー対象者の選定と依頼、写真資料の収集を行った。この間も細部の確認、調整を繰り返し、数度の校正作業を経て、発刊の運びとなった。

ここ山原の地に公設民営の私立大学として産声を上げ、公立大学として新たな生を受けた名桜大学は国際社会と地域からの期待に応え得る“成人”となった。その成長の過程と今後の更なる飛躍は本記念誌に収められた文章と写真から容易に看取できるものと思う。

最後に、ご多忙の中、ご寄稿くださった方々、インタビューに応じてくださった方々など本記念誌編集へのご理解、ご協力を賜った関係者各位に心より感謝申し上げる次第である。

記念誌部会 副部会長 小番　達







## 記念誌部会メンバー

**部　会　長**：住江　淳司（附属図書館長）

**部　会　員**：吉川　安一（本学名誉教授）

小番　　達（国際学群国際文化教育研究学系）

田邊　勝義（国際学群経営情報教育研究学系）

許　　点淑（国際学群観光産業教育研究学系）

花城　洋子（人間健康学部スポーツ健康学科／第１回～第12回部会　退職の為）

平野　貴也（人間健康学部スポーツ健康学科／第13回～第21回部会）

清水かおり（人間健康学部看護学科）

**記念誌班員**：垣花　勝行（総務企画部嘱託員／第１回～第２回　退職の為）

比嘉　辰巳（附属図書館／第１回～第２回　異動の為）

赤嶺　達也（附属図書館／第３回～第21回）

池原　秀人（総務企画部総務課）

上江洲安幸（総務企画部企画広報課）

**オブザーバー**：又吉　　純（附属図書館）

神谷　順子（附属図書館）

照屋　信次（開学20周年・公立大学法人化５周年事業実施本部事務局）







# 名桜大学20年史

公立大学法人化５周年記念

2014（平成26）年12月21日発行

編　集　名桜大学開学20周年・公立大学法人化５周年
記念事業　記念誌部会

発　行　公立大学法人名桜大学
〒905-8585
沖縄県名護市為又1220-1
TEL（0980）-51-1100
FAX（0980）-52-4640

印　刷　新星出版株式会社
TEL（098）-866-0741